

奇譚クラブ

1959年 6月号



読者座談会 『女体緊縛美について』語る
懸賞入選作品 「黄昏の牧神」 香椎隆彦

奇譚クラブ

昭和三十四年六月号

6

奇譚クラブ

昭和三十四年五月二十日印刷
昭和三十四年六月一日發行
昭和三十一年四月二十日第三
次郵便物認可
六月号(第十三卷第八号)
(毎月一回一日発行)

定價二百円

THE KITAN CLUB

Published Monthly By Tenseisaya

Osaka Japan



IBM. 2805

奇譚クラブ臨時増刊

SADO持集

集大成!

オニ集

誌面狭しと溢れ出る むせ返るような女体悦虐美!!



麗美 巻頭口絵 (二十四点)

四馬孝傑作画集

- ☆密質倉庫
- ☆悪魔のような女
- ☆春美の受難記・四点
- ☆新品第一号
- ☆嫉妬の鬼
- ☆地下室の苦行
- ☆苦悶
- ☆吊し責め
- ☆黒目鏡の女
- ☆アクロの訓練
- ☆捕われた商品
- ☆乳房責め
- ☆人間フープ
- ☆檻 禁
- ☆奴隷船
- ☆妙な吊責
- ☆雨中の引越
- ☆奈落のリハーサル
- ☆鼻責めテスト
- ☆犬の訓練
- ☆女体脱馬
- ☆役ながし

南村俊平戯画 猪大人の御乱行 (目次裏)
強制女体洗腸機

興趣尽きぬ読物内容

私の責画 責めの美人と皮革について

緊縛フオトと緊縛モデル夜話

奇譚クラブの旧号並にKK通信より見た本誌の緊縛フオトと緊縛モデルについて語る

黎明期の女体緊縛フオト

曙光期の緊縛モデルとフオト

桃色のベールに包まれて

破つた日記帳 ゆうべ見た夢

後手と高手小手による緊縛美の考察

口絵に於ける緊縛フオトの充実

本誌百号突破記念

懸賞原稿募集

本誌の通刊第百号を突破したのを機会に左記の通り懸賞原稿を募集いたします。何卒奮って御応募下さるようお願いいたします。尚、募集規定には、従来と違って大いに幅を持たせましたので、御自由な気持で御執筆下さい。誌上の匿名及び無名の投稿も結構です。(この際は誌上で連絡いたします。)

○賞金

佳作 三千元 若干篇
優作 五千元 若干篇
秀作 一万円 若干篇

種目 小説、創作、告白、手記、体験、等

枚数 三十枚乃至五十枚程度(四百字詰) 但し多少の増減は差支ありません。締切 当分の間特別に定めません。先に到着の分より漸次選考の上、入選作は最近号より掲載いたします。

投稿 「読者原稿」と区別するため、応募原稿の第一頁に「懸賞原稿」と書いて下さい。

発表 入選決定の分は、それぞれ賞金の送付を以て報告します。誌上では入選作の掲載を以て発表にかえます。用紙 二百字詰又は四百字詰原稿用紙を用い第五種開封便(百瓦につき八円)にて御送付願います。

読者原稿募集

【創作】異色ある題材を提げて立つ野心ある読者の投稿をお待ちします。枚数は三十枚迄、未発表の作品に限ります。採用篇は本誌五カ月以上掲載します。

【体験告白手記】読者皆様の偏りなき真実の叫びを募ります。枚数は三十枚程度採用篇には本誌三カ月以上掲載します。

【映画、雑誌】通信 映画や雑誌の中で特に興味をお持ちになった事項についての通信をお待ちします。掲載は必ず明記して下さい。掲載の分には本誌二カ月乃至三カ月分贈呈します。

【私のイメージ】熱烈奔放なイメージをどしどしぶっ放して下さい。どんな荒唐無稽なものでも奇抜なものでも結構です。採用分には、本誌二カ月分贈呈します。

【アイデア】将来本誌にて企画すべき事項につき詳細に、採用の分には本誌四カ月分以上贈呈します。

【レポート】新聞記事(週刊誌を含む)の切り抜き或は見聞等、皆様の特に興味をお持ちの事項につきお知らせ下さい。掲載篇には本誌二カ月分贈呈します。

【読者通信】編集者、執筆者、投稿者等への通信、前号の批評、希望、感想、思い出話、読者相互の呼び掛け、応答或は編集や雑誌のあり方等について忌憚なきお便りをどしどしお寄せ下さい。つとめて誌上に発表いたします。但し、読者交歓室は都合により当分の間中止いたします。

○本誌月極購読料○

一月分 一冊 (送料共) 二百円
三月分 三冊 (送料共) 六百円
半年分 六冊 (送料共) 千二百円
一年分 十二冊 (送料共) 二千四百円

本誌は一切書店売りは致しませんので、購読希望の方は、直接発行所へお申込み下さい。荷造送料は全部こちらで負担いたします。故、誌代のみお送り下さい。半年分御申込の方は景品として手札型写真三枚、一年分お申込の方は景品としてヤキビ本型写真三枚を贈呈いたします。

奇譚クラブ 第十三巻第八号

定価二百円

六月号

昭和三十四年五月二十日印刷

昭和三十四年六月一日発行

編集印刷兼発行人 吉田 天 星 社

大阪市阿倍野郵便局私書箱第十四号

電話 天下茶屋 三六〇七番

御送金は振替、為替、現金書留、切手代用(八円切手にて)割増等どんな方法でも結構です。送り先は必ず指書ではつきりお書き願います。尚、振替用紙御入用の方は八円切手封入の上お申込み下さい。お送りいたします。

◎第一集を遥かにしのぐ妖美の殿堂、嗜虐の極致!!◎

「S特第二集」について

昨年夏発行しました「サド特集号」は、絵画写真を豊富に收容の上、皆さまの要望に応えました為、発売後日ならずして全部売切れという好評を博しました。其の後、第二集発刊の督促を受けておりましたが、資料蒐集のため半歳を経て、やっと今回発刊の運びとなった次第であります。

收容しました絵画写真は、全部緊縛ものを網羅して、マニア諸氏の御期待に応えたばかりでなく、内容や紙質、印刷等に於ても、第一集を断然凌ぐ威容を誇るに足るものとなりました。必ずや、第一集以上の出足を以て、忽ちのうちに市場から姿を消すことと信じます。四馬孝氏描くところの責面一枚、或は新人モデル嬢の緊縛ポーズ一葉にしてもマニアにとつても、又と得難い貴重なコレクションとなることでしょう。印刷部数は極めて僅少です。売切れにならない中、今すぐ発行所までお申込み下さい。御注文次第厳重包装の上急送申し上げます。
(「サド特集号」第一集)は売切れになりましたので在庫しておりません。

絢爛グラビヤ写真(百九葉)

被縛女体特選集

○仇姿黄八丈……………絹川文代

○縄さばき……………浜本喜美
三木敬子

○挑発の笑み……………絹川文代

○被 襲……………花坂道子

○深海魚……………田中芳代

○哀れなる賓客……………絹川文代

○豊 胸……………愛川悦子

○絹布と絹肌……………田中芳代

○飾り人形……………大塚啓子

○台上的贅……………絹川文代

○若妻の秘美……………花坊道子

○白い若鮎……………田中芳代

○麗 囚……………絹川文代

○三面鏡……………愛川悦子

本誌の独壇場! 潑刺とした新人モデルの艶姿を結集した他誌では絶対に見ることの出来ない縛りフォートの快心作。この二十四頁百九枚のグラビヤ緊縛写真だけでも、十分マニアを堪能させて余りある豪華さです。是非、このS特第二集のフォートをお見逃しなく。

△吊られた白鳥 △緊縛による一表情
△荒縄による緊縛感のスポット
△緊縛女体の一表情、猿ぐつわ五態
△曇後雨

第一期黄金時代のモデル陣

△被虐女体の研究 △縛られた女の美しさ
(二女連縛について) △野外の責場撮影にて
△悦慮に哭く △新しいモデル嬢の活躍
△女が縛られるまで △責め写真のアルバム
△悦慮に咽ぶ

○勃興期へ向う緊縛フォート

△屈伏への過程 △悦慮に悶える △縄抜け
△初めて縛られて △痛いと思ったとき
△私の好きな縛られ方 △或る手紙に寄せて

○緊縛フォートに關しての研究

△緊縛の構成と責めのアイデア
△野外縛りの記録 △モデル女のみぞひずむ
△緊縛モデルの素顔
△緊縛フォートと緊縛モデル夜話後記

限定版 S A D O 特集号 第二集

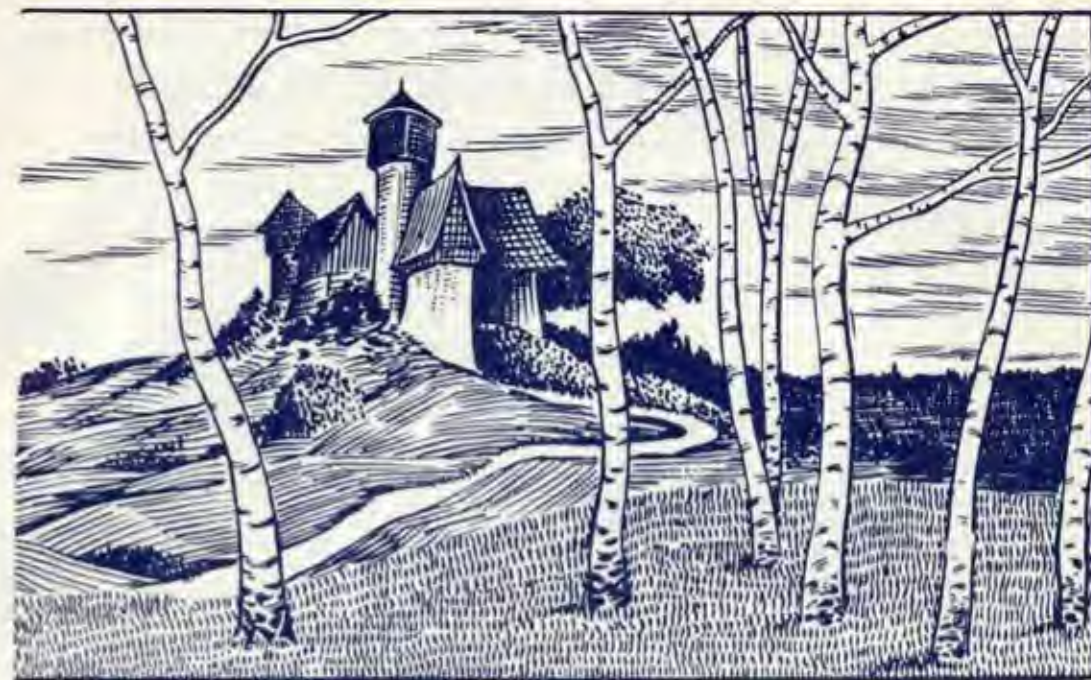
定 価 三百五十円 (送共)

—お申込は—

大阪市阿倍野郵便局私書函第十四号

天 星 社

振替口座大阪五〇〇四二番



奇譚クラブ 復刊第四十四号 目次

口絵	特写真	映画に現れた緊縛シーン	東映映画「黄金くも」	大映映画「空飛ぶ若武者」	白蛇の通り道か？	嫌でも踊らせてやる!!
巻頭	四馬孝傑作集					
縛り絵	結婚ブームに因んで					
椅子のある風景						
映画に現れた緊縛シーン						
東映映画「黄金くも」						
大映映画「空飛ぶ若武者」						
白蛇の通り道か？						
嫌でも踊らせてやる!!						
四馬孝傑作集						

お仕置をめぐる一考察	人形哀詩 お七の火あぶり	本誌百号突破記念懸賞募集原稿入選作品	黄昏の牧神	相撲雑記 (その二)	奇妙な事件	マゾヒズム百景	原作・檻の中にて	乗馬ズボンシリーズ落穂集(その四)	緊縛女優ベスト・テン
近藤 一	由茂 23		香推 隆彦 26	津田 進 41	碓井 新太郎 42	馬場 好男 44	近藤 一 46	藤山 秀結 64	増田 義彦 72

「緊縛フォトアラベスク」のインプレッション	「緊縛フォト・アラベスク」を観て	「私の見かた」	アフ・レボ 新聞切抜通信	未来幻想マゾ小説「家畜人ヤブー」	緊縛映画スナツブシリーズ・山百合の巻	松竹作品紹介「女肌地獄」	映画通信 今月の縛られた女優達	創作僧堂	告白 自分をハダカにする	「新稿」ある夢想家の手帳から	体験記 パー「ナナ」の人々(第八回)	話の肩籠	臨時増刊「SADO特集号第二集」特に	和装被縛姿態美に対する所感	本誌百号突破記念懸賞募集原稿入選作品	「悪魔の逆襲」(乳房に火をつけるな・第三回)	第一回読者座談会	「女体緊縛美について」語る	読者通信
難波 武夫 74	武田源之助 77	藤本 仙次 78	沼 正三 80	牧 高志 96	河崎 晴夫 103	植村 奏 106	松井 頼子 116	沼 正三 126	南 時夫 132	辻村 隆 140	牧 高志 146	藤本 仙次 148							

〔新版〕女体緊縛フオト オンパレード

R組 百花撰 大手札判 (印画紙9×13 横)

各組一組 (全部送料共)

一組一枚	一〇〇円
五組五枚	四〇〇円
十組十枚	七五〇円
二十組二十枚	一四〇〇円
三十組三十枚	二〇〇〇円
四十組四十枚	二五〇〇円
五十組五十枚	三〇〇〇円
六十組六十枚	三五〇〇円
七十組七十枚	四〇〇〇円

R1	柔肌に強烈な荒縄 (須川令子)
R2	海浜に於ける緊縛 (蘇千恵子)
R3	床間の飾り物 (佐賀美智子)
R4	高手小手猿ぐつわ (花坂道子)
R5	海老責しぼり (蘇千恵子)
R6	後手猿ぐつわ (須川令子)
R7	後手足しぼり (村田那美子)
R8	鏡に映った後手 (伊吹真佐子)
R9	股間しぼり (須川令子)
R10	鎖しぼり晒責 (蘇千恵子)

R11	股間しぼり正面 (伊吹真佐子)
R12	女学生制服しぼり (須川令子)
R13	尻立後手しぼり (蘇千恵子)
R14	開股しぼり (川辺砂登子)
R15	猿ぐつわの魅力 (伊吹真佐子)
R16	トイレでの縛り (須川令子)
R17	立木野外しぼり (村田那美子)
R18	緊縛横臥 (厚狭春江)
R19	足場椅子セメ (伊吹真佐子)
R20	いたぶり (春日ルミと伊吹)
R21	帆立しぼり (蘇千恵子)
R22	強烈な椅子セメ (伊吹真佐子)
R23	梯子責め (佐賀美智子)
R24	逆さ本吊りセメ (伊吹真佐子)
R25	後手吊りセメ (同右)
R26	股間しぼり後手 (中塚文子)
R27	逆エビ責め (伊吹真佐子)
R28	高手小手しぼり (加賀利江子)
R29	変型足手しぼり (蘇千恵子)
R30	松樹後手しぼり (村田那美子)
R31	くさりセメ (伊吹真佐子)
R32	薄羅の後手緊縛 (加賀利江子)

R33	股間タテしぼり (中塚文子)
R34	首縄股間しぼり (坂口利子)
R35	手足逆吊り (伊吹真佐子)
R36	和服の後手しぼり (藤田節子)
R37	仰向全裸悦責 (川端多奈子)
R38	後手首縄シメ (加賀利江子)
R39	乳房下しぼり (村田那美子)
R40	肉体美への折檻 (伊吹真佐子)
R41	お灸セメ (春日、伊吹二嬢)
R42	後手猿ぐつわ (蘇千恵子)
R43	松樹縛り晒責 (村田那美子)
R44	コルセット縛り (中塚文子)
R45	股間しぼり (同右)
R46	手と足と緊縛 (蘇千恵子)
R47	後手しぼり (加賀利江子)
R48	御開帳 (蘇千恵子)
R49	くさりセメ (川端多奈子)
R50	折檻の魅力 (須川令子)
R51	全裸の股間しぼり (愛川悦子)
R52	逆立の折檻 (大塚啓子)
R53	開股椅子セメ正面 (同右)
R54	振袖の緊縛 (花坂道子)
R55	腰元の吊り責 (村井知可子)
R56	ヌードしぼり (愛川悦子)
R57	本縄しぼり (同右)
R58	股間しぼり (田中芳代)
R59	落花生縄の緊縛 (同右)
R60	樹間のハリツケ (川辺砂登子)
R61	帆立舟のセメ (益田房子)

R72	逆エビ責め (愛川悦子)
R73	変形全裸股間縛 (同右)
R74	ヌード縛り (花坂道子)
R75	全裸横臥緊縛 (同右)
R76	ビクニツク (村田那美子)
R77	ハイヒール (蘇千恵子)
R78	湖畔の宿にて (須川令子)
R79	尻立逆しぼり (同右)
R80	下着の色模様 (同右)
R81	目隠し開股縛り (大塚啓子)
R82	後手高手小手 (田中芳代)
R83	乳房しぼり (愛川悦子)
R84	開股ベツド縛り (花坂道子)
R85	全裸床柱縛り (愛川悦子)
R86	亀ノ甲縛り (蘇千恵子)
R87	ヌード股間縛り (愛川悦子)
R88	全裸乱れ髪 (大塚啓子)
R89	ガソジガラメ (川辺砂登子)
R90	贅責責め (愛川悦子)
R91	後手股間しぼり (中塚文子)
R92	腹部丸出し猿轡 (伊吹真佐子)
R93	破れたシユミーズ (坂口利子)
R94	女学生のしぼり (須川令子)
R95	仰向開股しぼり (蘇千恵子)
R96	乳房くさりセメ (川辺砂登子)
R97	野外バンド責め (村田那美子)
R98	トイレ正面排泄縛 (中塚文子)
R99	開股正面いじめ (伊吹真佐子)
R100	乳房搾りセメ (佐賀美智子)

結婚ブームに因んで

縛られた花嫁御寮

滝 れい子・画



△特写真真△

椅子のある風景
(一)





(モデル 愛川悦子)

△特写真真△

椅子のある風景 (二)





(モデル 愛川悦子)

映画に現れた緊縛シーン



東映 「黄金ぐも」



大映 「空飛ぶ若武者」

＜提供＞田辺啓二

白蛇の通り道か？

四馬孝・画



嫌でも踊らせてやる！

四馬 孝・画



新しい文献研究誌

奇	譚	ク	ラ	ブ
---	---	---	---	---

1959年 6月号

(第十三卷 第八号 通刊第百二十四号)





お仕置をめぐる一考察

＝ 意義について ＝

近 藤

一

凡ゆる事象に就いて、原因から導かれたものを結果と呼ぶならば、因果応報は正に世の理りでありましょう。そしてこの因果律が、おしおきの世界をも強く支配していると云い得ると思います。「おしおき」という語の響きには、胸に浸み徹るようないじらしい或る種の納得が、きまってまつわりついているからです。

私は「おしおき」という概念の中に、二つの異なったニュアンスを汲み取っています。一つは「懲しめ」であり、一つは「見せしめ」ですが、いずれの場合も、たとえ単なる口実に過ぎないものにせよ「おしおき」の実行には、それ相応の理由が必要で、そこに諦観とか服従とかの納得が生まれて来るのです。

「おしおき」のうち、前者は観念的には反抗の余地がある関係のものを指します。例えば親と子、夫と妻、兄と妹、恋人同志のように、本来自然には平等であるべき個人が協同生活の必要から、云わば任意に承服した秩序によるものです。任意というのは、この生活秩序を好まない場合、親族関係を消滅できなくても別個の生活を営める訳ですし、まして合わせものは離れものですから、選択の自由が可能だという意味です。そしてこの場合の「おしおき」は「折檻」であり「懲罰」である訳です。

(註、法律上の「懲戒」はおしおきのうちにはいりませんから、今は除外して考えています)

これに反して、「おしおき」のうち「見せしめ」の場合は



反抗の余地が全然ありません。絶対服従の關係に於いて反抗を考へることは既に惡となります。國家と國民との關係は、本來その存立が、全く一方的な統治と服屬の秩序の上に在つて、この關係に基く「おしおき」は國民をやめることができない以上、避けられない強制のものなのです。

(註、國籍離脱の自由とか近代行政學上の理論に就いては、暫く措くことにします。)

云うまでもなく、公權力を發動して治者が被治者に科する「おしおき」は「刑罰」であり「処刑」を指す訳です。

右のような「おしおき」の二つの異なったニュアンスは、伝統的な用語の中に見出だすことができると思います。積極的に選択し、或いは消極的に離脱しない生活秩序に在つては「おしおきする」「おしおきされる」關係なのです。この力關係は、その基盤である生活秩序が承認されている限り、二種の主体間の地位の逆転を考へる余地は無いものと思います。一般にする者はアクティヴであり、される者はパッシヴでしょうが、その逆もあり得ますし、いずれがイニシアティヴを振るかとは別個の問題です。他方、國家權力に対する服従は、「おしおきになる」という表現を以て代表されます。この場合、する者はお上であつて、權力機構の背後にあるもの、執政者何某を超越した存在なのですから、個人は只なるだけの者なのです。

「おしおき」の語源が何処にあるのか私は知りません。調べてみたいとは思いましたが調べませんでした。よく「お仕置

き(きは無くても可)」という字を書きます。私も使いましたが、この字が何故使われたのか分りません。また「処刑」と書いて「おしおき」と読ませることも多いようです。内容は刑罰の執行であつても「おしおき」の方がずっと感覚に訴える烈しさを持っているように思います。

「おしおき」という言葉には二義を認めることができると思います。一つは罰そのものを指し、もう一つは罰を行うことを謂うのです。「おしおきする」とか「される」とか、或いは「おしおきになる」と云う場合は、いろいろ考えてみましたが、いずれも罰を行うことを意味していると思います。

罰にはその前提として罪が必要です。罪も無いのに罰を受けることは、たとえマゾヒストでも耐えられないでしょう。否、マゾヒストであれば尚のこと耐えられない筈です。

(註、マゾヒストと罪の意識に就いては、改めて考察したいと思います。)

罪ある故に罰ありとする因果の法則に従えば、罰を受ける者は必ず罪があるのです。罪の事實の有無は当事者にとって重大な問題です。然しそのようなことは第三者の納得とは何の關係もありません。判定者の誤った判断、恣意、或る場合にはホンの気まぐれでもよいのです。とにかく罪を認定しなければ、罪が無ければ罰は無いのです。狂者の害を罰と呼ぶことはできないからです。

罪には無実の罪と有実の罪があります。有実の罪について、その悪性の程度に応じた罰を科することが治者に対して期待される合理的な權力作用ですが、現実はなかなか期待通りの



合理性を示さないものです。人間の所為に完全を求め得ないことは歴史の教える処でもあるのです。

「おしおき」の前提として、まず、罪の事実の有無が判断の対象になります。極めてプリミティヴな方法としては、告げ口があります。告発もこの類だと思います。これを判断の資料とするに当っての限界は大切です。無制限に「おしおき」の根拠とすることは確かに不合理でしょうし、危険であると云われます。尤もなことです。

そこで、自白の役割が注目される訳です。「自白は証拠の王」とさえ云われ、白状を求めて囚われ人を責め問う方法が必然に産み出されて来ました。この拷問は真実の発見を志向してなされるに留まらず、或る場合には何らかの政策的な、又は利己的な意図の下に、故意に無実の自白を創り上げるために使われることになります。人の力には限りがあります。心身の責め苦に耐えられず自白をするか、正常な機能を喪うか結果は二者択一です。

このような非情にはノーマルな理性が必らず反撥します。人と人との間で拷問が行われた事実が明るみに出れば必らず指弾を受けます。眉をひそめ、批判を抱懐するのが人間というものです。然し公権力は別です。指弾することはできません。批判を加えた処で応えてくれる相手ではないのです。何処その親分と呼ばれる御用聞が痛めつけるのではなく、また同心何某、与力何某が糾問するのでもなく、彼等の手にした十手に表象されるお上が拷問するのです。宗教裁判は神や仏の審判なのです。警察制度における巡査の職務執行は、司

法巡査何某のものでなく、警察官の一員としての行動ですから、原則としてその氏名を告げないものなのです。国家権力を分担する人と、国家権力に服すべき人とが、単なる個人対個人の組合わせでない処に拷問が生じ、それを容認する余地が生まれるのです。丁度、憲兵や特高警察が苛烈な拷問を敢えてしながら、忠君愛国を疑わなかったように、そしてそれが忠実な職務として容認され、信頼されていたように。

自白を証拠とする限りでは、罪の認定に客観的な合理性を求めている訳ですが、その素地から裁判が産み出されて来ます。これは判定者の力の強大なもの程威力を示すものです。当事者は必らずしも納得すると限りません。どちらかと云えば納得できない場合が多い筈です。然し第三者は納得します。その根拠は理知や打算などによる第三者の価値判断が許容するというより「お上のお裁き」という点にあるのです。私的救済が悪であれば「お上のお裁き」は次善を許さない唯一絶対のものなのです。被治者は只管恐懼して「お裁き」をお受けする外はない訳です。

公権力に基く「おしおき」には、死刑とそれ以外の刑罰との二種が認められると思いますが、普通「おしおき」という場合には死刑を指しているようです。いずれにせよ、処刑の意味の「おしおき」は、タリオの思想を排除しても、大きな肉体的苦痛を囚人に与えるものですから苛酷な「見せしめ」を正当な公権作用として認容させるためにも「お裁き」の課程に於いて罪を確定することは不可避の要請であったと思



ます。

これに反して懲罰の意味の「おしおき」には「お裁き」の課程が必要とされません。任意な生活秩序に於ける私的な行為ですから、公権作用との抵触は容認されなくなり、現在では躰けを中心とした意味に於てのみ存在することになっています。躰けは広い意味の教育ですから、社会生活に於ける重要性は、文化社会になればなる程に増すものです。そして今日の社会では体罰が残されている稀少な分野です。親と子、先生と生徒がその典型として考えられますが、彼が彼女に対し、夫が妻に対し躰けをする必要を私は認めますし、そしてそれらの男性と女性の関係をも、私は「お裁き」を不要とする「おしおき」の範疇に属するものとします。

罪の認定に裁判を必要としないのは、「おしおき」をする者の判定が絶対のものだからです。そしてその判定には服さなければいけないという心理の中に「おしおき」をされる者が在るからです。この分野の服従は、強い信頼関係に基礎を置いています。この信頼関係が崩壊する時、可能性に過ぎなかった反抗が現実のものとなる訳です。そしてこの信頼関係の中心は、云うまでもないことですが、正に愛情と尊敬なのです。

批判力の未熟な子供達は、尊敬する大人の云う処に従って端的に悪を捨て善を採ります。

女性の優しさは、愛する男性の好まざる処を去って好む処に就こうと努めます。そしてその努力を支え、育む作用を「おしおき」が果すのだと私は思います。

愛する子供への「おしおき」には将来の希望や夢があり、愛する女性への「おしおき」には現在の大きな欲びがあります。

こういうような女性への観方は強い非難を受けるかも知れません。恐らく男性のエゴイズムとして女性からの指弾があるでしょう。私もこれを男性のエゴイズムとして卒直に認めたいと思います。そしてこの男性のエゴイズムを助長するものこそ、女性のみが持つ貞淑な寛容と忍耐であり、その基礎をなす、控えめで強い愛情であると私は確信しています。

罪ありて罰を受くること至極当然とは云いながら、この因果律の具現には、そこはかたない冷厳を感じます。この応報は罪ある人自身も合理として認容するでしょうし、まして第三者の正義感には容易に合致する筈です。

然し罪を得た身はみじめです。襲い来るものは身も世もない屈辱の嵐です。人には感情があり、プライドがある以上、真善美への憧憬が強ければ強いだけに、罪の確定は辱しめとなります。罪とは包み隠すべきことであると学校で教えられました。罪とは悪であり、罪を犯した身は醜いものであって人の持つプライドは、それ故に、魂と肉の許容するギリギリの限度まで拷問に堪え忍んでまで罪を包み隠そうとするのです。

無実の罪のみじめさは云うも愚かです。日夜宮々として築き上げた真善美への努力が一挙に覆えられて偽悪醜の結果と置き換えられてしまう屈辱は筆舌に尽くせないものです。強



制への激しい反抗は却って誤判を抽き出してしまいかも知れず、と云って必死の否定も苛烈な糾問の前には、肉体の屈服が精神の圧伏を導いて事実を枉げてしまおうでしょう。そして一旦罪を自認する事態に及べば、公権力による擬制は再び覆えし得ぬ真実となり、罰の執行に当って、納得し得ない納得を社会から強要されるのです。誤判による無実の罪は、しかし、潜在的な事象です。顕在すれば社会正義が見逃さず、何分かの救済の要が必らず叫ばれますから、誤った「お裁き」は云わば不運なのです。

これに較べ、治者の政策的な考慮や、恣意や気まぐれに因る「作られた罪」はどうでしょうか。これも確かに不運には違いありません。然し判断の誤りと異なり、この場合には反証の挙げようがないのです。誤判は、結果として不運なのですが、特殊な意図に基いた事態は裁判の当初から不運なのです。裁判という課程は「おしおき」を正当な権力作用として、納得を醸成させる必要からか、もしくは単なる形式の遊戯に過ぎないものなのです。犠牲！そうです。これこそ正しく犠牲なのです。犠牲者が特殊な意図の対象に選ばれたということ、或る場合にはその選定が全くの偶然であるということとが不運なのです。罰の前提に罪があったのではなく、罰するため罪が設けられたのです。

真実罪を犯した者も、或いは又、強権に依って擬制された者も、「おしおき」と決まると残された救いは唯一つ、世の同情ばかりです。直接には何の影響も結果しない無形の力が最大の救いなのです。「おしおき」を恨むことはできません

ん。それは面接した判定者の背後にある超人間的な存在の所為であって、判定者自身がどうすることもできない力なのですから、恨むなら吾身を恨み、自らの不運を歎くばかりなのです。そこに罪と罰との間の因果律について、いじらしい納得が生じ、神妙となって表われます。悪びれず静かに眼を閉じて、顔蒼ざめて唇を噛み、項垂れてしおしおと曳かれて行くのです。神妙と同情は概ね比例していたように思われます。「おしおき」される身も「おしおき」になる身も、いじらしい納得は同列で、只前者では他からの同情など必要としない強い信頼関係が根底に横たわっているのです。

私の、いや、私の友人の話に少し触れてみようと思います。彼は（彼と呼ぶからには勿論男性ですが）彼と相愛の仲にある女性を、屢々おしおきます。その時の彼女は必らず罪を犯しています。愛する者の愚かしさからか、彼女はあつ白く柔らかな両手を素直に背へ廻しながらヒクヒクと小刻みに顫えます。しかし彼女は健康な心理の持主であって、大人しさや淑やかさを越えた悦虐の境地は未知なのです。或る日いきなりの乱暴に彼女は悲鳴を上げました。

「何をしたの？私に罪があつて？」

「あるよ。大ありだ。君が好きだからさ。」

そうです。愛しい女性というものが、相愛の二人だけの間では、それ自身立派に罪を構成するということを彼女も遂に認めたのでした。

— 人形哀詩 —

お七の火あぶり

由 茂 滋



をし、帰ってホッとした処を出向いたお役人に捕えられ「今日、只今、火焙りの刑を執り行う」との厳つい御達示。

ほんにそう申せば今日は瓦版で江戸市中、隅なく知れ渡った私の処刑の日で御座いました。うかつなことで御笑い遊ばすな……。

「よい、よい。そのなりでかまわぬ。何んの白装束など不要と申すもの。さあ、今生のお別れはいいかのう?」

雨に打たれては……と思ひ、つい、あられもなくからげた裾。お恥しい次第で御座います。「成る程、この絶世の美女をナ。おのおの方、全く以て惜しう御座らぬか。まして

それは雨上りの

日のことで御座いました。わたくしが放火の罪に問われ、悪いことは

知りつつ、せめてものお別れにと人目を忍んで墓詣を……いえ、追っ

け私が参上する十萬億土に御挨拶傍らにと、お寺詣り

を、今となつて喚めくことも万々あるまいとは思ふが念の爲めじや。」と白布で猿轡をかまされ、追われるように縄尻を執られたので御座

いました。江戸市中の引廻し——品川沖を鈴ヶ森へ……。

「おーい、来た、来たッ。お七さんだ。」

「まあ……お可哀そうに。」「あれが今に灰になるんだとよ。え? お天道様も近頃は、お慈悲がなさ過ぎるじやねえかってんだッ。」

「コレ、コレ、町人共。静かに致さぬか。それッ、そのお七とやらに、柱をとくと見させるッ。あの礎柱に身ぐるみ縛りつけて焙の中に焚べるのじや……。」

わたくしは、すっかり落着きを取り戻していました。決して女々しく泣き叫んでは居りませぬ。——やがて柱が大勢の人の手で地上

火焙りなどとは、ちと酷……。などと仰言つて頂く中を、下役人に両の腕を後ろに廻わされ、後手首をしっかりと縛り上げられたので御座います。

「ホウ、かほどまで柔らかい両の手が……むごいことで、わしらのせいでは御座んせんよ。お上の御達示で御座るテ。」

罪人を乗せる裸馬が、あちらに用意されたよう御座います。



に横たえられると、私の両手首に改めて火縄用の縄がくくりつけられ、あまたの観衆の面前で柱を背にするように仰向けに寝かされ、

よう。突如、青い矢来の垣をかき分けるようにして、一人の男が走り寄ったので御座います。

「御奉行さま直々のお許るしを得て参つたる者。しばらく、しばらく……。」
何ん人の教主で御座いましたでしょうか。

帯の下、足、そして両の腕を一文字にひらいて横木に、しっかりと縛りつけられたので御座います。

「用意が出来ましたで御座りまする。」

「ウム、柱を立てませいッ……。」

ぐっと地平面が下ったと思うと、フワリと身体が浮いて白木造りの磔柱は地上、真直ぐに高々と立てられ、同時にドッと観衆のどよめきが挙りました。

すると、これはどうした事でし



それは一世一代の女の火焙りの最期を絵筆に託し、後世への語り草にせんものと、或るお齡を召した浮世絵師だったので御座います。
「しばらくとあれば、あれなる娘の姿態を如何ようにも替えてつかわすぞ。」

「有難き仕合せ。恐れながら女の猿轡は成仏には如何にも不憫で御座ります。目かくしの程がお慈悲かと心得えますが……。」

「成程。しからば猿轡は取脱し、

目かくしをしてつかわせ。」

もとより、わたくしはこのようにして、乙女の生涯を終えるのが、かねての本願で御座いました。絵師の手で後世に伝わるなどは思ひもかけぬ喜びで御座います。

「このように首をうなだれては……、いや、胸をそらしてくの字形に、悶える女の姿態と云うものは……などと申されて——。」

どうぞ心ゆくまで、縛りつけられた女の哀れな姿を存分にお描き取り下さいまし。

「コリヤ、絵師。も早や時刻で御座るぞ。即刻、あれに控えて居ろう。」

いよいよ、火焔りの時刻が迫ったようで御座います。非人の一人が、粗朶に火をつけるため火打石を鳴らしたと思う間に、パチパチと足下に音が次第に高くなって、ムツとする



ろか、緋縮

緋の湯文字

までも……。

もう白足袋

の先きは感

覚がなくな

ったようで

御座いま

す。

「何んとマ

ア、酷いじ

やねえか。

それに、あ

の狂人めい

た絵師のザ

マは一体、



煙が……。そして、わたくしを焼く熱い焔が一齐にパッと燃え上ったようで御座います。

プツリと足を縛った縄が焼切れました。巻き起った風のためで御座いましょう、私の下半身を覆っていた裾が捲り上がり、鹿の子の長襦袢はお

何んだ。また飛び出して来やがったッ。」

「寅さん、あんたの出る幕じやない。ここは狂人どもの世界なんだよ。それよか、たつた独りで成仏するお七さんの冥福を祈っておやり。それが何よりの供養なんだよ。ああ、もう、お七さんの身体はすっかり見えなくなってしまった。南無阿弥陀仏、南無阿弥陀仏……。」

人形の作者、演出の何ん人かは識らず。知るはただ江戸は小伝馬町絵草紙屋の版元のみか……。

本誌百号突破記念懸賞募集原稿入選作品

黄昏の牧神

香 椎 隆 彦

パリ占領ドイツ軍司令部の情報将校フランツ・ミット大尉は十二月、パリに着任した。冬のパリは暗い。暗く冷めたい霧に埋まった灰色の日々ばかりがつづく。永遠の優雅と魅惑をたたえた都は、まるで敗戦の喪に服しているようだった。

フランツ・シュミット大尉は深い青い眼差し、金髪の乱れがちな広い額、無口に結ばれた唇などに思索的な知性の翳のある青年将校だった。当時パリの市民は、ドイツ軍将校の宿泊のために、強制的に部屋を提供させられていた。フランツが入ったのは、ヴァンセンヌの森に近い、引退した舞台俳優モーリス・デコラン家の二階である。フランツはよく、司令部に出勤する前に、朝霧に包まれて、この森を散策した。そのとき彼の丈高い、がっしりした背には、なぜ

か深い孤独の影が色濃く落ちている。

彼は浮き浮きとした感情をなによりも好まなかった。彼は幼いきから戦乱の巷で育っている。それは戦火に追われて右往左往する悲惨な世界で、血臭のたちこめる明日の命は知れぬ残酷な人間屠殺の世界だった。その世界で息づまるような緊張感を抱いて育った彼は、いつのまにか平凡で浮薄な雰囲気を受けつけない人間になっている。彼は毎日きちんと司令部とデユラン家を往復していた。他のドイツ将兵のように夜毎酒と女と享楽を求めて盛り場をさまようこともなければ、戦勝におごった乱痴気騒ぎとは、勿論縁のない人間だった。彼がパリに着任してまもなく、ノエルがきた。喪に服するかにみえたパリも、ノエルともなればやはり生き生きと美しい。繁

華街にはカフェのざわめきが洩れ、自動車はネオンの下を泳いで流れる。着飾った男女がセーヌ河岸をそぞろ歩き、ナイトクラブやキヤバレーも客で一杯だ。しかしフランスはこのノエルの歓楽の夜にさえも、どこへも出かけなかった。

この孤独な思索的で端正な生活を送る青年将校が、デュラン家の人々に好感をもたれたのは、当然だろう。デュラン家にはモーリスの他に二人の娘がいた。長女の二十才になる黒髪のパリジエヌ、シモーヌとまだ十三才になったばかりの少女ソニアで、映画女優だった母はもう亡くなっている。冬のパリの空の下、父と二人の娘は静かな森蔭の家でひっそりと暮らしていた。

少女ソニアはフランスに彼の少年時代の恋を思い出させた。彼は少年のとき、叔父の家に引きとられて、栗色の髪の少女召使と恋に落ちた。それは僅かに戦火を逃れることのできた平穏な期間だったが、しかしそのころから彼の血には荒々しく煮えたぎる暗い情熱が芽生えていた。彼はその少女を愛しながら、どうしても彼女を優しくあつかえなかった。彼はその少女を郊外のブランミンの樹の下で鞭打ったことを忘れない。春の夜、星明りの美しい木蔭で、少女のすんなりした脚は、フランスの打ちふる小枝をタクトとして、妖しく躍った。愛の衝撃はそのとき初めて彼の全身を貫いたのだが、戦乱の巷で育ち、いつか暗い情熱を身につけた彼には、恋さえもむごくなければならなかったのだ。

この暗い情熱と一見端正にみえる孤独とは深く結びついている。その後、彼はいく人かの女を知り、恋も重ねた。けれどもどの女も彼の愛のむごさに耐えかねて離れていったのだ。苦い悔恨だけが残り彼を苦しめた。愛は孤独となる。そしてどの女も彼の孤独の愛を

満たしてはくれなかったのだ。平凡な、浮薄な社会生活を受けつけず、暗い情熱と孤独の愛を抱いた彼が、しだいに自分から求めて深い孤独に沈潜し、軍人となって幼い日から育った戦乱の巷におもむこうとしたのは、自然のなりゆきだった。

☆

大悔^{レゾネ}日の夕刻のことだ。フランスが司令部から帰宅すると自室のドアの下に、一通の薔薇色の封筒が差し入れてあった。細い女文字で彼の名が記されてあったが、差出人の名はない。開けてみるとそれは「侯爵邸」からのパーティの招待券だ。彼は侯爵邸というクラブもキヤバレーも知らない。心あたりはなににもないが、ふと彼は彼の暗い情熱を知っている女がパリにきたのではないかと感じた。彼は過去に交渉のあった何人かの女を思い浮かべてみた。そのうちの誰かが、このパリにきて「侯爵邸」を開いたか、その店に働いているのではないか。そう思いついたとき、彼の閉ざされた孤独の胸は、雨を受ける湖面のように、我にもあらずざわめくようだった。そして彼は直感した。この「侯爵邸」とは、フランス中世の貴族、ド・サド侯爵にあやかっつけられたものではないだろうか……と。

場所は、ヴァンセンヌの森とはパリ市街を間に挟んで反対側にあるブローニーの森近くだった。指定された時刻、夜八時、彼は多少のためらいを抱きながらも、でかけていった。パリには雪が降りしきっていた。

……異常に冴えていながら全体として熱つぽく昂奮した空気。侯爵邸のサロンに入った彼をひたひたと包みこんだのは、特異なその



青白い月世男にあってこそふさわしく思える空気だった。サロンにはシャンデリアがミラーボールのようにきらきらと輝いていたが、その光線は大そう弱く暗い。暗い室内のテーブルにばらまかれた人影は立体感のない影絵のようだった。黒い影から、声だけが生ま生ましくざわめいて宙にとびかよう雰囲気は、妙な現実遊離感をさそった。客席のテーブルに囲まれたフロアでは一条のスポットライトを浴びて一人の女が官能的なシャンソンを歌っている。まだシヨールは開始されていない。《侯爵邸》は彼が直感したとおりの特殊な秘密クラブだった。鉄柵をめぐらせた富豪の邸宅のように黒々と堂々と夜に沈みきった建物で、ネオン一つなく、雪の夜、森に包まれて森閑としている。フランスは招待状を寄越した見覚えのある女がいないかとあたりを注意してみまわした。だが、彼に近づいてくる人影はなく、ボーイがワインの注文にきただけで、テーブルの人影達はあまり動かない。

だが、彼はふと眼を光らせた。その眼はフロアで歌っている黒衣の女にあてられたまま動かなかった。暗い影を曳いた女だった。体の線を際立たせた衣裳は真黒で、背に流れる長い髪も黒く、底深い光をきらめかせる瞳も黒く暗い。黒い容姿から整ってはいるが絶望の恋の歌を官能的に歌う、やや苦しみに歪んだような白い顔が浮かびでて、細そりした優雅な白い指が美しく伸び縮みして豊かな表情を発散した。人違いか、と彼は一瞬疑った。しかしそうではなかった。彼は女の黒い瞳が情感をこめて、真直ぐに自分に注がれていると知ったとき、疑いを捨てた。思いがけなくもその女は見覚えがあり、それはシモーヌ・デュランだったのだ。

△この夕暮れに私はあなたの声を望み

あなたの青い瞳にであうことを望む。

けれども、あなたの沈黙は破ることができない。

私は自分の孤独の上にいつわりの微笑を浮かべ

自分の内部で歌う死ぬほど淋しいアダジオにきき入る。▽

.....

シモーヌは歌い終ると、真直ぐにフランツのところに来た。薔薇色の招待状は彼女からのものだを知るのに手間はかからなかった。

しかし彼女はこうしてフランツの秘密の情熱を知ったのか。

「とうとう、ここで会うことができた」

とシモーヌは夢みるようにいい

「やはり、ここへいらっしやった！」

と呟くように重ねていったのだ。

問い返す必要はなかった。こことは侯爵邸のことだ。だが、フランツは彼女の本心を見極めるようにじっとみつめていたが、一呼吸

の後、低い声で押し切るように訊ね返した。

「ここで？」

「おわかりになって？」

シモーヌは視線をそらさずに彼の強い眼差しを受けとめた。微妙な感情の交流が、その見つめ合う視線を通じて流れあった。それは

二人の心の乾いた砂丘に打ちよせる漣波のように、ひたひたとしみついていった。二人はシャンパンを開けて乾杯をした。

「サルート……」

二つのグラスはそっと触れあい、二人の声も合った。サロンは突然いっそう暗くなり、フロアだけが際立って明るくなった。まもなく

くシヨーの開始だと知った二人は、同じ側の椅子に坐って肩を寄せあった。シモーヌはフランツがデュラン家に現われた最初の日に、すでに、△わたしは、あの人のものだ▽と胸を震わせたといった。彼女は鋭い感覚で初対面するとき、早くも彼の本質を見抜いていたのだ。けれども彼は少しも気づかなかった。それは悲しく苦しかったと彼女は告白した。

……そして、悲鳴と鞭音と音楽が反響するうちにサディスティクなシヨーが高調していったとき、彼はシモーヌが感情の昂ぶりを押さえきれずに、彼の腕の中で小鹿のように体を震わせながら、「あっ、あっ」と声を洩らしているのに気づいたのだった。

「シモーヌ、あなたはそれが好きなのか！」

彼は突きあげられるような衝動にかられて彼女の細そりした頸に唇をあてた。シモーヌの眼が熱ばんだ光をたたえて彼を求めた。シヨーは華やかに鞭音を高鳴らせ、ヴィオロンの弦は狂熱のように場内を蔽いつくした……

☆

その夜、彼はシモーヌを車で送って帰った。彼女は階下の部屋にいったん入ったが、まもなく青い寝巻着に着かえて、足を忍ばせて二階にあがってきた。沈黙と物いわぬ抱擁の後、彼はふいにこういつた。

「衣裳をとって、体をみせてもらおうか」

シモーヌはちよつととまどったようだった。が、さすがに羞恥に頬を上気させながらも寝巻着の紐に指をかけた。繊細な指先はしなうって衣裳は足許に崩れた。フランツはウイスキーを咽頭に放りこん

で立った。シモーヌの剥きだしになった上体は震え、その白い胸は誇らかにあえいだ。白い魅惑的な獲物はいまみずから猟銃の照準に躍りこんだのだ。彼は均斉のとれた体をそらせ気味に立ちつくすシモーヌの周りをゆっくりとまわった。彼の眼は、獲物の価値を見定める獵人のように輝いていた。だが、彼は不意に彼女の柔らかな腕をつかむと乱暴に引き寄せた。白い肌理こまかな肌は滑らかで、しっとりした水々しさはまるで掌に吸いつくようだった。

「寒いのか」

彼は慄えている彼女にささやいた。

「いいえ」

彼女は頭を振った。その細そりした声も弦を弾くように震えていた。

そのとき、彼は突然背にまわした掌に力をこめて、やわらかな背肌をつねりあげた。

「むつ……」と唇の奥に呻きが洩れ、体が悶えた。

だが、シモーヌは逃げなかった。戦慄が彼女の背を走ったが、それは歎びのおのきだ。フランクの指はさらにとろろを変えて爪を背肌埋めた。彼女は椅子の背に手をかけ、すんなりした脚をふんばって痛苦に耐え、崩れようとする体をささえた。

……胸をかきむしるような切なさか彼をとらえたのは、そのときだ。それは愛の切なさといってもいい。しかし彼の愛の表現はむごかった。彼は荒々しく彼女を長椅子に突きとばした。

「よし、やってやる、たっぷり悶えさせてやる！」

シモーヌは長椅子にのけぞって小さく叫んだ。

「口をしばって！」

「わかってる。脚もだ」

緘口のタオルをかませようとすると、甘い香りのあえぎが彼にかかった。

「シモーヌ。お前は《侯爵邸》でいく度こうされたのだ」

「初めて、あなたが初めて……」

後の声はタオルになかば消された。上体を長椅子にもたせかけ、うつ伏せに倒れている白い姿態を見下したフランクは、革帯をはずした。軍装の幅広い黒革バンドだ。それは黒蛇のように孤を画いてシモーヌにからみついていた。彼女の優美な肢体はしなやかに躍りはじめた。

しかしフランクの鞭は途中でなぜかためらった。そのとき彼の青い瞳は放心したように黒い窓に投げられたようだった。冬のパリの夜は深い。黒い窓硝子にさらさらと白い雪が触れあっていた。放心する彼の脳裏をよぎったのは、恋しては離れていった愛の女達ではなかったろうか。いままた彼は一人のパリジェヌを愛しはじめている。いく度か重ねた愛のように、同じように、変りなくそれは始まった。この恋も短いだろう。しかしこん度はシモーヌが彼の愛のむごさに耐えかねて離れるだろうということではなかった。遠からず彼は自分が戦場で死ぬのだと感じていた。そしてこれはおそらく彼の最後の恋となるのだと、このとき彼は予感したのだ。根拠のない予感ではない。彼は情報将校だった。戦局はドイツ側にまだ有利だったが、彼が入手できる秘密情報によれば、戦線は明らかに停滞している。これは不吉であった。

その夜からシモーヌは夜更けになると愛を求めて二階に忍んでく

るようになった。彼女は部屋に入ってくると、黙ったままフランツの折檻をまっている。彼が孤独にふけったり軍務について思案しているときなど、彼女はいつまでもそっと待ちつづけた。それから彼が彼女をまねくと、黒い瞳に情熱の炎を燃えたたせて衣裳を脱いでいった。一枚脱ぐごとに着ているときには痩せてみえるシモーヌの見事に均齊のとれた、過不足のない美しい肉付きの肢体が次々と現われてきた。

そんな夜ごと、彼はシモーヌを、ときには壁にむかって立たせ、ときには飾電燈に吊し、長椅子や床に転して黒革をぬく。シモーヌは仰向けに鞭を逃げるかと思うとうつ伏せに反転し、痛みを避けようとする本能とそれを欲する本能とが交互にあらがって、その優美な体はあられもなく跳ねまわるのだ。転々と悶える体はやがて熱を帯び桜色にそめあげられて汗ばむ。彼は鞭を置く。悶え疲れたシモーヌはぐったりと打ち伏している。いつのまにか絨口のタオルはとれて、火のような息が珊瑚色の唇を洩れている。

ある夜、彼はその彼女の体を引きずって隣室のシャワーの下に連れていった。冷水が痛みと熱にうづく体へ激しく叩きつかり、あつ、あつ……と彼女は息をのんで体をエビのように屈曲した。

「冷めたいのか？」

「はい。……すてき。」

シモーヌは叩きつける水にむせびながら、懸命に愛人を見上げて微笑もうとしていた。

けれども、勿論これは毎夜とはいかなかった。父デュランが家にいるとき、客があるとき、昔の思い出にひたって眠らぬときなど、

彼女は階下を抜け出せなかった。彼は娘が歌手になることにも反対だったし、生活のために、ときにはキャバレーなどで歌うことを許さざるをえなくなっても、決して娘を野放しにはしない厳格な父だった。しかも老デュランは、口には出さないが、ドイツ軍人を頭から嫌っていた。フランツ・シュミット大尉はいくらか違っていたとしても、ドイツ軍人に変りはない。シモーヌはそれを知っていたので、いっそうフランツとの関係に注意しなければならなかった。彼女は父を愛していた。恋人を愛していた。そしてどちらも失いたくなかったのだ。

「つらいわ」

とシモーヌはフランツの腕の中で溜息をついた。フランツはこういって慰めた。

「ぼくも満足なのじゃない」

「嬉しい。でも、許して。そのかわりあなたの傍にいられるとき……」

と彼女は甘くためらった。

「そのときには、どうなの？」

「……いじめて愛して。あなたが満足できるようにして！」

彼女は押し出すようにそっくり切ると、真赤になって、彼のがっしりした胸に顔を埋めた。

しかし初めのうちはそれでよかったのではないか。彼女はフランツに会うまで、女としても鞭に対しても未経験だったのだ。なんといっても、彼女はまだ荒い野性的な愛責に耐えられるほど苦痛には馴れていなかった。控えめさが彼女の美と健康を保つために必要だったのだ。

☆

春の陽がパリにかえってきたころ、シモーヌはいよいよ美しくなってきた。美は恋を知って成熟し、愛に磨かれるのだ。そして彼女は馴育されてきた。牧神と妖精は愛にたわむれる。パリの街々は陽気さをとり戻し、公園にも舗道にも子供達の明るい声が満ちていた。フランツとシモーヌは、ときどき肩を寄せあって春の舗道を散



歩した。陽気な明るさのさきがけとなるのは、いつも子供達だ。「こんな楽しい情景は、ぼくの少年時代には少しもなかった。」フランツはある日、リマクサンブル公園の噴水のほとりで、シモーヌにいった。彼の表情には微笑が浮かんでいた。けれどもシモーヌは微笑に隠されそうなフランツの淋しい視線を見逃さなかった。

開

「おしごとが済んだら早く帰っていらして」

彼女は優しくいたわるようにいった。

「そうだ、一日も早く帰ってくる」

フランツは事務連絡のため、ベルリンへ出張することになっていた。戦局は容易なものでなくなっている。ダンケルクは停止し、アフリカ戦線も固着、そしてロシア戦線の泥濘と寒気の戦場は、遂に後退を余儀なくされている。フランス全土には、津波のように抵抗運動が燃えさかっていた。フランツは何時前線へとばされるかわからない、と考えていた。勿論、死をこぼみはしない。ただ、もうほんの少し時間を与えてほしかった。

フランツが感じた不吉な予想は、彼が出張から帰任した日に、身近かな事件として現われた。彼がパリに帰ったその日、モーリス・デュランはドイツ憲兵隊に逮捕されたのだ。それは彼が帰宅するほんの三十分ほど前の出来事だった。ソニアは泣き、シモーヌは真青な顔で、彼が入って行くと、はっとしたように棒立ちになった。

「どうしよう、どうしたらいいの！」

と彼女は泣かんばかりに唇をかみしめた。

「待ち給え。なにかの間違いかも知れない。きっとそうだ。ぼくが調べてこよう。」

彼は彼女達を慰めて直ちに憲兵隊司令部にいった。姉妹の眼が祈るように彼の背にひたと注がれていた。結果は、しかしいかんともしがたかった。彼は反独運動に参加していたのだ。しかもパリ十三地区のレジスタンス組織の有力メンバーだった。フランツの不吉な予想はすぐ足許で裏書きされたのだ。野火のように燃えひろがる抵抗運動は、老モーリスをまで巻き込んだ。彼は焦燥と困惑を抱いて帰宅した。

彼は待ち構えた姉妹に、父は反独活動によって逮捕されたものであること、困難なことだが、なんとか釈放の努力をつづけるから、あまり心配をしないようにと告げた。焦燥はドイツ軍の事態が容易ならざるところに追い込まれたという認識から生じたもので、困惑は、明らかに敵となった人間を釈放させなければならぬ立場に立たされたというところに生じた。皮肉なことであった。彼が老デュランを釈放させるということは、とりもなおさず、彼自身を追いつめるということにはかならなかった。

ソニアはちよつと彼を憎む眼をみせた。それはフランツに象徴されるドイツ軍、父を苦しめるドイツ軍を憎む眼だった。しかしソニアも、こういうシモーヌの言葉に憎悪の光を消した。

「頼れるのはあなただけです。おねがい。どんなことでもします」とシモーヌはいったのだ。

「落着いて。」

とフランツはいった。しかしそれは彼自身にもむけられた言葉ではなかったろうか。

この父の逮捕以来、デュラン家の姉妹は彼にいつそうこまやかな態度で接するようになった。実際、彼女達にとって頼れるものはフランツだけだった。彼はときどき憲兵司令部へ行って父の様子をきいてきてやった。面会についても取計らった。しかし老デュランは固く沈黙を守り、彼を釈放または減刑するチャンスはなかなかこない。

一方、老デュランの逮捕によって、シモーヌを直接拘束する人間はいなくなった。彼女は大胆に彼の部屋にきた。ソニアは早く眠ってしまったので、二人はなんの気兼ねもなく愛の時間をもてるようになった。けれどもフランツは愛が満たされるようになればなるだけ、焦立ちを強く感じるのだった。貴重な愛。それを乱すものへの反感。そしてその気持の乱れはシモーヌにむけられる。彼女もそんなフランツに気づいて彼を傷つけまいとした。

だが、ときに激しく焦立ち、ときに深いいたわりを示すフランツも、ソニアに対しては常に優しくなかった。彼は父がわり兄がわりになってソニアの面倒をみた。少女はなににも知らないのだ。淋しげな明るさをもつソニアだが、この少女に戦慄の苦汁を飲ませることはで

きない。自分と同じ暗い孤独の道をたどらせることは避けねばならない。この優しい心遣いを示すフランツにソニアもよくなつた。だが、少女は子供ではなかった。なにも知らなかったのは、かえってフランツの方ではなかったか。

その日は終日生暖かい曇り日で、夜、雨になった。シモーヌは長椅子に横臥しフランツは窓辺の椅子にいた。ラジオからは珍らしく静かな音楽が流れ、そは降る雨の音がだぶって、ロマネスクだった。そのときシモーヌはふと自責の念を覚えるように呟いた。

「パパに悪いわ」

呟いてしまった後で、彼女はあつと思った。しかし、遅かった。窓辺の椅子にいたフランツは、その声に弾じかれるように立ちあがった。

「シモーヌ、お前までが！」

彼は絶句して、ようやくつづけた。

「シモーヌ、それは別問題じゃあないのか。ぼくも努力はしているのだ。なぜ、この部屋にいるときくらい。ぼく達の愛について考えないのか。ぼく達の愛はそれほど片手間な弱いものなのか。」

「おう、フランツ。決してそんな意味でいったのじゃないわ。幸福なのよ。幸福すぎるので、いつてしまったのよ」

「幸福すぎる?!……」

「いいえ。ごめん。ごめんなさい」

シモーヌはあわてて素直にあやまった。

「いいんだ。あやまることはない。それは無理のないことだよ。しかし……」

「そうだわ。いけなかったわ。ね、こらしめを受けなければ」

「こらしめ？」

「はい。愛の……」

シモーヌはひたむきな眼差しでフランツをみつめ、長椅子から転りおりた。彼女は紫のキヤミソールにペティコートという恰好で、手足に細い鎖をかけられていた。フランツは彼女の思いを感動とともに理解し、受けとめた。シモーヌは二人の愛を一瞬なりとも忘れ冒瀆した懲しめを受けなければ、といったのだ。彼が足のいましめをゆるめてやると、彼女は観念したようにうなだれた。かつて二人は階下で愛責をおこなったことはない。けれどもシモーヌは△下へ行くのだ△というフランツの言葉にもさからわなかった。老デュラソがいけないといってもソニアは寝室で眠っている。そこでは苦しみの声をあげることはできない。しかしそれも愛の懲しめのためだと思えばこらえねばならないだろう。

だが、階下におりたフランツが、さらに居間を通り抜けてテラスから小さな裏庭に出るように指示すると、彼女はさすがにうろたえてあらがった。

「だめ。そこはみられます」

「だれがみる？」

「かんにんして！」

「なぜだ？、パリは眠っている。」

彼は強くない切るとテラスの硝子扉を押しあけて、暗い雨の庭へシモーヌを追いやった。

庭には金属製のブランコがたっている。それはシモーヌもソニアも幼ないころ遊びたわむれた玩具だ。彼はそこへシモーヌを立たせままくりつけた。雨は激しくなり、容赦なく降りたけつて、たち

まち彼女の薄物も透き通らせ、肌に密着させた。

だが、次の行為に移ろうとしたとき、テラスの扉が風にあふられて大きな音をたて、思わずふりむいた彼とシモーヌは、そこに呆然と立ちつくすソニアをみたのだ。彼はずきんと鈍い手応えのある衝撃を受けた。

「ソニア！」とシモーヌは叫んだ。

少女はその声をきくと、白い寝巻着のまま、弾かれるようにシモーヌのところへ駆けよって抱きついた。

「シモーヌ、どうしたの？ どうしていじめられているの！」

と少女は震える声でかきくどいた。

「そうじゃないの。いじめられているのじゃあないのよ。わたしがフランツさんにおねがいたことよ」

「ああ、シモーヌ、ひどい！」

ソニアは不意にシモーヌを突き放すと、すっくりと立った。フランツはそのとき、はっと眼をみはった。真直ぐに立ったソニアは急に大きくみえた。ふと大人びた姿とみえたのだ。彼女はフランツにとびかかり、すがりついた。

「ひどい。あたしだって！」

「ソニア。……」

「知っているの。知っているのよ。あたしだって、あたしも苦しめて！」

「ソニア、ばかなことをいうのじゃない」

「だめ。して頂戴。あたしだって、そうしてほしいのよ」

フランツはなお少女を押しつけようとしたが、シモーヌはこの言葉をきくと、なぜか彼に悲しみの瞳を投げた。この悲しみはなんだ

ったろう。彼女はそして意外にもこういったのだった。

「おねがい。一緒にしてやって。いいの。……」

……やがて彼はソニアをシモーヌと抱きあわせるようにブランコにくくりつけた。彼は力をこめてブランコを押した。

「あっ」とソニアは不安定感に悶えて声をあげた。だがフランツは大きくブランコを揺すりつづけた。二人の姉妹は揺れ揺れた。春雷がとどろいて、眩めく斜光線が暗黒の夜を走り、揺れる姉妹を浮かびあがらせる。彼はしばらく暗い眼差しで半円を画く二人をみつめていたが、突然鞭を握りしめると、シモーヌの突きだされた臀を鋭く叩きあげた。

絶叫が押さええがたくシモーヌの咽頭をほとばしった。

鞭の打撃にブランコの反動がからみあうと強烈な痛みを弾き返すのだった。しかし彼はためらわなかった。悶え叫ぶシモーヌ。雨を切ってからみつく鞭。暗黒を切りさく雷光。ソニアはシモーヌの苦悶を全身で感じとって慄えている。……彼の荒々しい血は久しぶりに暗い情熱をたかく燃えあがらせようとうずいた。

シモーヌは完成されなければならぬ。シモーヌとおれは、愛の姿勢を完成しなければならぬのだ。

それにしてもこの雨の夜の庭にシモーヌが投げかけた悲しみの瞳はなんだったのか。彼女は知っていたに違いない。妹にも自分と同じ被虐を喜び欲する血がすでに流れていることを。そしてこのときそのソニアはフランツにゆだねる決心をしたのではなかったか。……

☆

初夏がきた。彼らは休暇を利用して自動車旅行にでた。行先は南

仏海岸だった。そこには、ノワイユ伯爵夫人の所有にかかる別荘がある。ノワイユ伯爵夫人とは、シモーヌが歌手として働いている「侯爵邸」の持ち主である。彼らがこの旅行を思いついたのは愛のためだった。一刻でも彼らは愛の夢にひたり、愛を華やかに飾りたかった。フランスは、この休暇が、多分パリでの最後の休暇になるだろうと考えていた。自由に大胆に彼らは愛の時を持ちたかった。ソニアは学校の都合で、少し遅れて到着する予定だった。

別荘は蒼い海を見下す景勝の断崖の上にある。高い苔むした石垣が邸内の自由を守っていた。庭園は海を向うに置いて夢みるように美しかった。樹木も花壇も池も噴水も華やかに豪華である。ことに夜、青い月光に照らされて、奇怪な野獣の彫刻が点々と置かれた庭の情景は幻想をさそった。開け放った窓から潮っぽい微風が流れて、花々の甘い匂いをはこんだ。ここは、わたし達だけの世界ね。とシモーヌはいい、そうだ、ぼく達だけだ。とフランスも呟いた。

到着した夜、二人はさっそく夜露に濡れた林間を散策した。二人は……フランスはテニスズボンとシャツだけ、シモーヌは素肌の上に白いガウンをはおっただけの軽装だった。なんという身の軽さだった事だろう。彼らは少しは立止り、巨木の影で抱擁し、手をつなぎあい、駆けっこをした。フランスはシモーヌを断崖の危い足場の上でつねった。砂丘でガウンを剥ぎとって叩いた。空気はいくらか肌寒かったが、月光は明るく冴えかえって、波は岸辺の砂丘にうち伏したシモーヌの体を洗った。そして、夜半近く別荘に戻った二人は、満ちたりた愛の思いと疲労に、ぐっすりと眠ったのだった。

土曜日の午後の恋人はソニアを迎えかたがたカンヌまで車をとば

して買物と見物をした。食料品から雑誌や衣類まで。数種類の鎖と鞭は愛のためだ。なかでも高価な買物はライカのカメラだった。途中、咽喉が乾いたので入ったレストランで、シモーヌは

「ソニアを好き？」

と羞しげにそっと訊ねた。この可憐な嫉妬はフランスを微笑ました。

その夜は新鮮だった。成熟した魅惑的なシモーヌとまだ少女らしいすんなりしたソニアとがデュエットを組むと、非常に複雑な妖しい陰影が加わるのだった。姉妹を背中合せに結びつけたり、支えあわせたりすると、奇妙な苦しみの曲線が画きだされる。一方の体が苦しむと片方までその悶えが通じるのだった。彼はたがいに相手を叩きあわせたり、髪を結びあわせて食卓の用意をさせた。ちよつとしたたがいの動作のくい違いで姉妹は悲鳴をあげたり、倒れたりしなければならなかった。

翌日、フランスはカメラを持ちだした。恋はフィルムに記録され、愛の回想として残るだろう。被写体は無論シモーヌだったが、フランスの助手となるソニアも、しばしばガウンを剥がれて被写体になりだされた。シモーヌは、白い肌へひしひしと喰いこむように銀鎖をまとって、香りのよい花壇に埋まった。曲りくねった樹の枝に這いあがらねばならなかった。波に濡れた姉妹を木立の中に立たせると、木の間を洩れる金色の光が、生ふ毛に美しく反映した。

それから彼は「庭園狩獵」に姉妹を追いたてた。庭園の大理石の野獣の彫刻にシモーヌの伸びやかな肢体は後手にくくられて背をになわせた。青銅のライオンの首に後手と足を結んで体をたわませたシモーヌは、人間首輪だった。鹿の角にシモーヌとソニアは角飾り

として縛りつけられ、ジラフの首にシモーヌを逆吊りにしようとするフランツを、ソニアは写した。

そして夕暮れどき、フランツはきらきらと夕陽を受けて美しく噴出する庭園の噴水の上にシモーヌを立たせた。彼女は噴きあがる水に絶えまなく下方から叩かれつづけた。冷水は射すような疼痛をあたえ、縛られた腕を上方にあげ鎖にまかれた女神は、容赦のない水の打撃にぶるぶると震えた。器具も鞭もなかったがこの苦しみは激しいものだった。彼はソニアを台にして、あらゆる角度からシヤツターを切った。遂に耐えがたくシモーヌが蹲まってしまうまで……しかし彼女は蹲くまでもなお、噴きあがる水の打撃から逃げようとはしなかった。懸命に苦痛に耐えるシモーヌの姿には、愛のみが宿っている。愛の不思議さ、その胸をうつ強さ！ 彼はソニアにバスの用意をいいつけると、噴水に駆けあがってシモーヌを抱き下した。

「シモーヌ！」

彼は崩れようとするシモーヌを抱いた。しかし水を離しても抱きしめても震えは止まらなかった。

「好き……」

と彼女は顔を閉じたまま青い唇をあえがせていった。

「寒い。とても寒い。ぶって。ぶってあたためて！」

彼は彼女の体を柔らかい花壇に転がして大蓮の茎をとった。鞭打の音は明るい春の夕陽の彼方に消え、やがて花壇が乱れた……。

最後の朝、フランツが目覚めたときシモーヌはいなかった。どこへ行ったのかと名を呼びつづけるとシモーヌとソニアは青い薄布をまとった姿で手をつなぎあい、深くたちこめた霧の中から妖精のよ



うに現われた。二人の足首には昨夜のままの足輪がかかり、鎖を引いていた。

☆

果して、それは最後の饗宴であった。パリへ帰ったフランツ・シ

ユミット大尉を持っていたのは、敗色の濃い東部戦線への転属命令である。六カ月前——というよりシモーヌ・デュランを知らぬ彼だったなら、むしろみずから求めて最前線に出ただろう。けれども彼はシモーヌを知り恋の魅惑を掌中にしていた。パリに残された彼の時間は、後三日間、僅かに七十二時間だった。短かった六カ月の恋に否応なく一つの結末がつこうとしている。彼がパリにきたとき喪に服しているかにみえた都は、夏を迎えパリ解放の近いことを知って、いま再び甦えろうとしていた。それはフランスの立場と全く逆だった。

しかし、このとき予期しない事件がさらに二人の愛を大きく揺すぶったのだ。シモーヌが反独行為の嫌疑を受けてゲシュタポに逮捕された。フランスの受けた打撃は激しかった。これこそはなにかの間違いであった。いや、なにかの間違いでなければならなかった。彼は直ちにゲシュタポに抗議した。例えドイツ軍人であってもゲシュタポに抗議するということは非常に危険であった。そしてゲシュタポはこのフランスの抗議を冷めたく一蹴したのだった。

「証拠はあるのか？」

「ばかな。そんなものが必要と思うのかね。密告者があったのだ。後は本人からききだすまでのことだ。」

フランスの心に得体の知れない怒りと絶望が熱湯のように注ぎかかった。密告者、それはだれだ。しかしゲシュタポでその名を教えるわけがなかった。時間も残り少ない。素手で密告者を探しだして事実の有無を確かめることは不可能だった。パリの街は深く底の知れぬ不気味な迷路に思われた。密告者がわからないなら、その他の手段でシモーヌを釈放させなければならぬ。上級課長に請願した

が、たった一人の女のために彼はなんの手も打ってくれなかった。戦局の重大なときにそのようなことを依頼するだけでも言語同断だった。しかもシモーヌにとって不幸なことは、彼女の父が有力な反独活動者であることだ。フランスはゲシュタポに知人がいることを思い出して出かけていった。知人は彼の来訪を歓迎した。けれどもシモーヌを無条件で釈放できる権力は持っていなかった。

「反証をあげることができるかね」

とゲシュタポの知人はいった。

「それができるなら、なんとか手を打ってみよう」

「反証……」

フランスは息をのんだ。彼女が反独行為をしたという虚偽の申し立てなら、どのようにでも作りあげることができるだろう。しかしなにもしなかったことは、証拠づけられないではないか！

しかし混乱と絶望の底から一条の希望をみつけたのはこのときゲシュタポの知人を訪ねたからだった。押しひしがれた絶望を抱いて知人と別れ、パリの街にさまよい出たフランスは、とある街角で、ふと、彼女が反独活動をしなかったという証明より一歩進んで、彼女はドイツ協力者だと証明することならではないか、と思いついたのだ。積極的なドイツ協力者は少なくとも反独活動者という容疑をはらすポイントとなるだろう。最も積極的な協力者とするには、彼女を密告者、情報提供者とすればよい。これならいくらでも作成することができた。彼は情報将校であった。彼はシモーヌ・デュランからしばしば情報を提供されたとすることができ、申告の証明は彼自身がつけることも可能だ。こうすれば、モーリス・デュランが反独活動者であったことも逆用できる。娘は父から情報を深る

ことができた筈だ。……

それにしても彼がパリを出発する時は迫っていた。少くとも十二時間以内にその申告を書きあげ、ゲシュタポの知人に渡してシモーヌを釈放させなければ、彼女と別れの言葉さえかわせないのだった。このことに関する限りソニアはなんの役にもたない。彼はじりじりと時間に追いつめられながら、夜を徹して申告書作成にペンを走らせた。時間は意外に長くかかった。ソニアは終始青ざめた顔で机にむかうフランツを見守って眠らなかつた。夜明け前の白明の時が訪れ、陽がのぼり、窓から初夏の陽光があざやかに流れこむ。最後の朝がヴァンセンヌの森にきた。彼はようやくペンを置いた。

「ソニア、待っておいで。シモーヌはきっと帰ってくる」

彼は少女に告げると司令部に車をとばした。上級課長に証明のサインをもらうためである。課長は証明を拒まなかつた。が、ベルリンとの電話連絡中で、サインをするのに随分手間どった。

司令部を出たのは、正午に近かつた。彼はシモーヌに別れの言葉をかけることを、殆んど諦めた。これからゲシュタポに出頭し知人にこの書類を渡しても、書類は検討され釈放許可証が書かれ、それは係員から看守へと伝えられて、ようやく留置場の鍵がかけられるのだ。シモーヌが釈放されるのは、うまくいっても夜、遅ければ明日以後にならぬとも限らない。しかしフランツは後三時間には軍用列車でパリを離れている筈だった。

その日は正午過ぎからパリは豪雨に襲われた。強風にあふられた雨は激しく舗道に叩きつかった、空を黒々と埋めた雲は不気味に渦まいた。

ゲシュタポの本部にいったフランツは、頼みの綱である書類を知人の手にゆだねた。知人は好意的にそれを受けとって、必ず釈放されるだろう。しかしその前に彼女と面会するかね、といった。これはフランツには思いもかけない吉報だった。

「いうまいと思っていたが、今日ばかりはパリを去らねばならないのだ。ありがとう」

「そうか、君も行くのか！」

と知人は深い声でいい、留置場へ電話をしたが、まもなく困惑した表情を浮かべていった。

「取調べ中なのだ。暫らく待ってくれないか。」

「暫らく？　しかしほくにはもう待つ時間はないんだ！」

「話すことはできないが、構わないかね。」

「勿論構わない。一眼だけでもいい！」

フランツは叫ぶようにいった。

ゲシュタポの取調べとは拷問にはかならなかつた。彼は知人に案内されて取調べ室へまわった。くれぐれも声をだすなよ、と念を押されてフランツは、分っている。と答えた。知人が連れていったのは鉄格子の中の通称スポーツルームと呼ばれる特別室だった。それは青白い熱気のこもる苦悶の部屋である。そこにはさまざまな拘束器具が揃っていた。鞭と拘束、苦痛と涙と汗、悶えと悲叫、そして容疑者は許しを哀願し屈服するのだった。

彼らは特別室を一眼で見下せる中二階にいった。そのときスポーツルームには四人の女が苦痛に悶えていた。雌猫のように柔らかい女、野性的な情熱を感じさせる肢体の女、豊満だがよく緊まった肉付きの女と、いずれも若い美しい女達だったが、彼女達は衣服を剥

がれ、革の眼隠しをされて苦しみのたうっていた。視野がないという不安、どこから責められたか分からない不安。そして苦しむ女達は同室のもののだれをも知ることができないのだった。連絡はとれない。

フランツの眼は△ピンポン台▽と呼ばれる鉄製の細長い台に仰臥した女にあてられた。その視線はまるで矢のように彼女の白い肌に突きささり、吸いこまれた。彼女の頭上に伸ばされた両腕は二カ所を鉄バンドで固定されている。拘束はたったそれだけだ。が、数分間隔で腕をとめた鉄バンドには自動的に電流が流れた。そして電流が瞬間的に襲うたびに、彼女の白い肢体は、腕をのぞいては自由であるだけに、はげしく踊りあがり、よじれ、のたうち、乱れ、むなしく空を蹴って跳ねあがった。彼女は夢ともうつとも知れぬ苦悶に漂っているの、おのれの成熟した美しい肢体が、あらんかぎりの妖しい踊りを展開していることを知らない。

「シモーヌ……」と彼は小さく呟いた。彼の驚きに見開られた眼は、ひとりでに溢れてくる涙をとどめえなかった。電流が流れ、絶叫とともに跳ねあがるシモーヌは、そのたびに全身を荒々しく浪打たせながら、絶えだえにこう呼びつづけているのだった。

フランツ。助けてよ、フランツ！

その午後、ゲシュタポの本部を後髪を曳かれる思いで豪雨の降りたけるパリ市街に出たフランツが、旅装をととのえるためデュラン家に引き返す途中、ヴァンセンヌの森で抵抗運動者のピストルに倒されたというところで幕は閉じられるべきだろうか。フランツ・シユミット大尉の死体を発見したのは、帰りを待ちわびて電話をかけ

に外出したソニアだった。おりからの豪雨のためピストルの発射音も聞かれず、犯人も不明だった。死体は雨に洗われ、血の痕もどめていなかった。ソニアは泣きながらフランツをかき抱いた。額に乱れた金髪をかきあげると、彼の眠るような顔には微笑みが浮かんでいた。シモーヌに会えた喜びの微笑だったろうか。それとも、既に完全な孤独に入った安息の喜びだったろうか。ソニアの頬を伝う涙は、雨に濡れて、それとは見分けられなかった。

……だが、戦争の非情さはそれだけにとどまらなかったのだ。シモーヌは釈放された。ドイツ軍は敗退する。パリ解放。そして、最後の悲劇。パリ解放のどよめきが渦巻くとき、シモーヌ・デュランは身に覚えのないドイツ協力者の烙印を押され、街路に引きずり出されると、あつというまに熱狂した群衆に衣服をむしりとられた。そうして、彼女は侮蔑と怒りにまみれた罵声を浴びながら大通りの群衆の中を、こずかれて、引き廻されたのだった。彼女が対独協力者とみなされたのは、不幸にもフランツが彼女を釈放させるために書いた、あの愛が書かせた虚偽の申告書のためである。

その夜、哀れなシモーヌはセーヌ河に身を投げて死んだ。

絵画のアイデア募集

本誌の口絵(写真を含めて)並に代理部の分譲写真、或は「画帖」「写真帖」などのアイデアを広く皆さまから募集いたします。内容はどんなものでも結構です。採用の分には、原画、若くは引伸写真画帖、アルバムを贈呈の外、優秀なるプランは本誌に掲載の上、編集用のフォトを贈呈いたします。出来るだけ詳細なる説明及び出来れば略面の添布をお願いします。

(編集部)

相撲雑記

(その二)

津 田 進

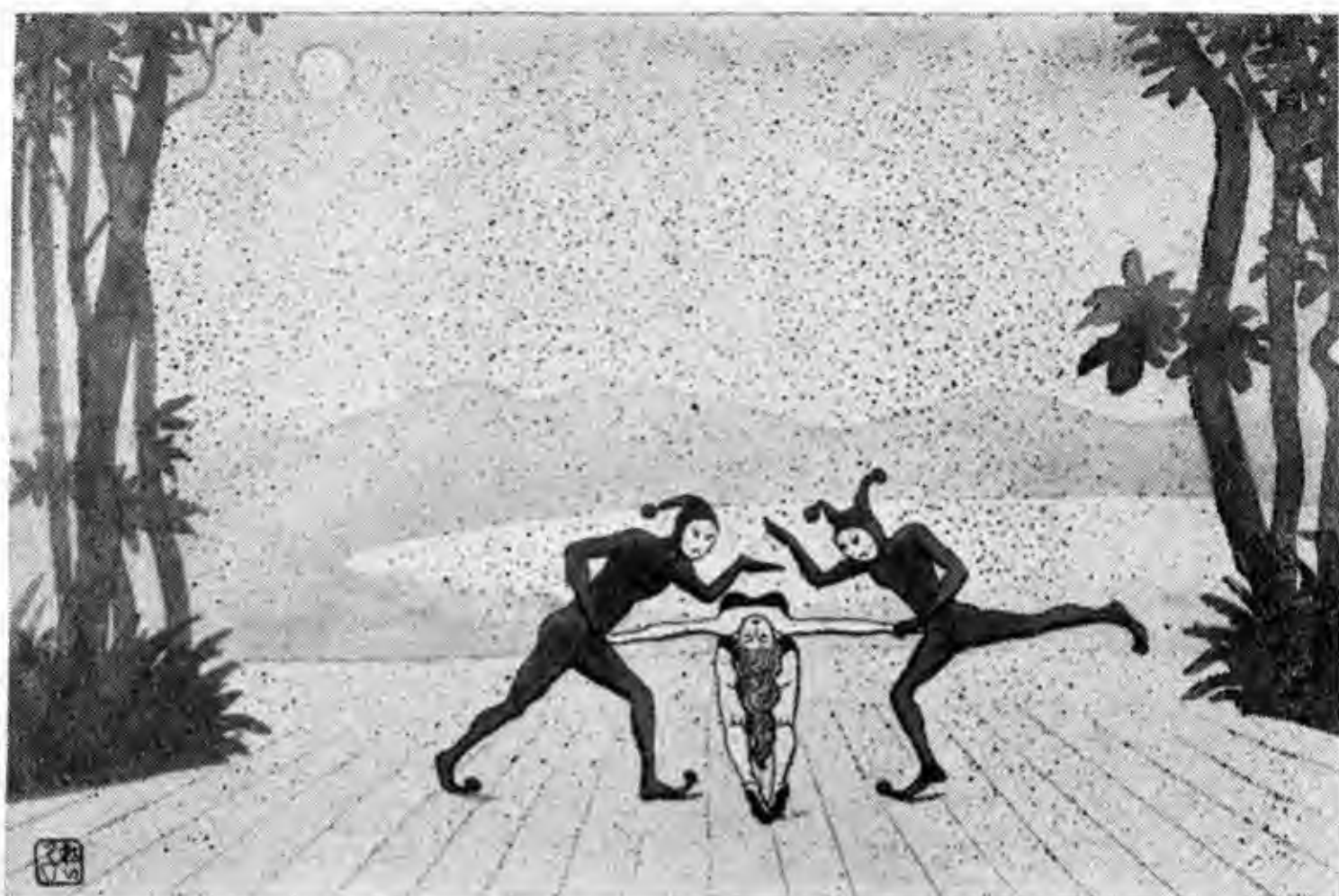
幸い、二月号に拙文を載せて頂いたが、その後気付いた事柄を若干補足して述べさせて頂く事としたい。新弟子に対するスパルタ式鍛成法は、此の他にも四本柱に縛られ(荒ナワで)たり、寒中というのに水を頭からぶっ掛けたりしたもので、又かつての男女ノ川等の横綱連も新弟子時代竹のヘラで顔を叩かれたり、下駄で叩かれたり、荒ナワを丸めた箒で尻が赤いのを通り過ぎて青くなる迄叩かれたと云う。現在でも「相撲」雑誌を見ると、三根山は海軍の精神注入棒見たいな棒で若い者をやって居るし、花籠部屋では箒を使って居る。出羽ノ海部屋ではステッキと共に弓の折れを使ったと云う。流石は厳格を最も極めた大部屋だけの事がある。此の弓の洗礼を受けない者は誰一人なく、かつての名力士がその効果により次々と誕生した事を思う時、今

日の民主主義とは云え、世の多くの青少年と共に余りにも弱卒化した今日の力士達を見て、昔の郷愁を感じるのは私一人ではあるまい。寒中でも十両以下は足袋を履かせて貰えず、浴衣一枚で火鉢にも寄ることも許されず、唯一の楽しみたる食事のチャンコ鍋も、新弟子達の番が廻ってくる頃には汁ばかりで魚も肉も無い。兄弟子達が美味そうに食べるのを横目で見乍ら給仕をさせられる。此の様なしきたりは今でも残されて居るものがあり春場所に出番を待つ若い力士が寒さに堪らず同輩の背中にしがみついて居たのを見た事がある。しかし全ては、口惜しければ強くなれ、と云う出世を目指しての愛の仕方である。新序、序ノ口、序二段三段目幕下となるが、序ノ口、序二段が最も厳しく鍛えられる。力士(十両以上)にはこうした三人の弟子が従って頭の先から足の先迄も洗うのである。

又、便所掃除もさせられる。であるから此の時代には丸々と肥って入門した若者達も稽古の鍛成の他に雑用に酷使されて一時はぐっとやせてしまう。

入門は昔は今の如く協会が行わず部屋の親方の許に直接入ったので、その時は親方や兄弟子によって、今の協会検査より更に厳格に、丁度、昔の壮丁検査と同じく行われた部屋も有ったらしい。そして入門後は直ぐ入浴させて、親方や兄弟子がその体格をよく観察した上、本人の得意とさせる技へ向けるのを考えたと云う。襦は直接巻くのであるが、かつての近藤日出造著の「相撲部屋」と云うマンガの探訪記を見ると、弟子の渡す小布を襦の下に入れて巻いたと云う。しかし、現在では見当らないばかりか、便所に入って弟子に襦を解かせ、用便中外で待たせて、後、呼入れて中で直ぐ巻かせる力士が有った。これも力士のエチケツトが失われたというより、ドライになった故であろうか。そう云えば仕度部屋に、女性達が殺倒しても平氣と云う力士が多くなった様だ。

(完)



奇妙な事件

碓井新 郎

E・Sミュージックの上村支配人は、今日もぼんやりと舞台を眺めていた。

どうも今踊っているキャサリン・周（彼女は香港の欧亜混血娘で父は白人、母は中国人の踊子だった）が、もう一つ人氣が湧かないのである。

若さといい、肢体といい、美貌の点からいっても申し分ない筈だが、といささか不服顔である。蒼白い位にすぎ透った肌は

少し肥り気味ではあるが、それが又、エキゾチックなバタ臭いエロチシズムをふりまいているのではないか……。

席を立って事務室へ戻ると、電話で何処へか呼び出しを掛けて、そそくさと出支度をすると、裏口から出ていった。

E・Sミュージックの、その月の演し物は『ミステリー読本』でキャサリン得意の持役であり、見せ場は第六景のハ誘拐Vの場であった。

扨て、今日八日目の舞台、その第六景の場を見てみよう。

舞台は、上手、下手にシルエットで立木繁味を現わし、遠見に湖、白い月、青一色の夜景である。

十人余りのヌードが一通り踊ったあと、スポットが中央に当てられ、スポットからキヤサリンが紫のビーズで飾られたキラキラと光るビキニスタイルでセリ上る。

彼女が宜ろしく踊り唄うのはお定りの通り進行した。歌の切れ目より悪魔のスタイルで（例の耳の大きい三角の角、眼だけ出した黒づくめの扮装）上手からコメディアンA、下手からB、Cが何時もの通り出てくる。

Aは黄金色の美しい縄、Bが絹の透明なスカーフ、Cは矢張り黄金色の縄、短いのを二本持ってグロ味な振りで現れた。

上村支配人の眼が異様に輝き出し

たのは、この時である。これも何時もの如くBがキヤサリンの背後へ廻ると、彼女のルージュで恰好よく整えられた唇を、黒い手袋で包まれた掌でピタリと閉ぎ彼女の頭を包え込んだ。ぐんと後へ反った彼女の上体から、両手

がもだえ乍らBの黒い手袋の手を振り払おうとする。Aが女の左手を、Cが右手を取り、十字の見得の様になって音楽に合せ、上手へ五歩、下手へ五歩、キヤサリンを中心に四人がよろけるように動くのも連日通りだ。



ところが、舞台の彼女はオヤツと感じた。

今日はどうも変だ。何時もよりキツク皆の手が口と両手を攪んでいる。踊りの科が上手過ぎる。案の状、彼女には見えなかったが、彼女の背後でBが客席へニヤリと笑いながら、

ピンポン球を見せると、紅唇をこじ開け、あッという間もなくキヤサリンの口中へネジ込まれてしまった。スカーフが彼女にとっては生れて始めての恐ろしいキツさで結ばれたのだ。それだけではない、AとCは、スツと彼女に近寄ると、Cの持った黄金色の縄が、手首を痺れさすほどキツく縛ってしまった。だが、順序は平常と一向に変わりが無い。

キヤサリンは舞台が馴れてきたので、ぼつぼつふざけ出してきたのかと思ひ乍ら、手順通り後向くと足を開き、Bに白い喉を抑えられ、A、Cに支えられつつ客席に苦悶の表情を弓なりになって見せ、金髪が床を撫でるまで反り返ったが、今日はなんと苦しい事だと思った。

パツとドラムが鳴り変ると、彼女は上手へ走り出す。Aは長い黄金色の縄をしごく、Cと一緒に一線に引張り、Aが彼女の周囲を一廻りして、胸へ一巻き絞るや、キヤサリンは下手へ逃げ出し、Cが同じ様に乳房の下方を一巻きして、A、Cが引張ると、美しい生物はライトに浮き出て、黄金の線に支えられながら又左右に動き、もがく科が続く。

やがてBは、彼女の足を押え、黄金の縄は伸びやかな白い足を、これも芝居を忘れたキ

ツさで喰い込んだ。

後は何時もの通り胸の縄が締め直され、Aが頭、Bが腰、Cは足首を持つとエプロンステージを一廻りして、下手へ入ると同時に暗転になった。

此処で上村ボスはニヤリと快心の笑みを浮かべ、ハンカチで汗を拭き急にソワソワし出したが、直ぐドッカと坐り直した。ところへ、裏方がアタフタやってきて、

「大変です。すぐ楽屋へ来て下さい。」

と息せききって言う。二人が大急ぎで奈落を通り抜けた。と、小道具の陰から大トランクを抱えた三人の男が、楽屋番に

「衣裳をつくろいに出すよ」

と声を掛け、片目をつぶって会釈し乍ら、

黒ナンバーに乗って走り去った。

勿論、読者諸氏には先刻御推察通り、楽屋の隅ではコメディアンが三人が、だらしない眠り続けており、キヤサリン・周の行方が判らないと大騒ぎになった。

新聞記者と警察が間もなく前後して狭い階段を上下したのは、いうまでもない。夕刊に謎の失踪、美しき踊子誘拐、

と書き立てられた。

彼女が翌朝、身動き出来ぬ姿に縛り上げられ、猿轡を咬まされてボートに横たわり、橋桁につながれているのを発見したときは、一層新聞は、この猟奇的事件をセンセイシヨナ

ルに書き立てた。

キヤサリンは日本話が殆んど判らぬ事と、最後まで眼隠くしをされ、耳に綿をつめられていたため、犯人は遂に挙らなかった。

然し、新聞という新聞がこの事件を興味的に大きく取扱ったため、一躍、E・S・ミュージックの第六景が呼び物となり、連日押すな押すなの大入りを続けた。

三人の不良ダンス教師、上村ボス、楽屋番の兄ちゃん四人だけが素知らぬ顔で顔の下をなぞ、それぞれに、何にかに満足している風であった。

☆ ☆ ☆ ☆ ☆

マゾヒズム百景

馬場好男

第二十景 或る電車内で

用事で私は山手線の高田の馬場から国電に乗った。或る日曜日の午後十時頃の事、電車は新宿を過ぎ渋谷に着いた。此の時間に、此の辺でのいわゆる内廻り線と云うのは、乗客が、カラ空気になる処らしく、全く閑散とし

て端の方に坐った私の横に一人、前の席には一人が坐っているきりで、ドアの向う側にも数人の乗客がいるだけであった。みんな眠そうな姿で、轟々と走る音を黙々と聞いているかの様にして電車はえびす駅に……そして此処へ一人の女性が乗って来て私の前の空いている席に、もう一人坐っている人と少し離れ

て坐つたのである。私は此の女性が入って来た瞬間から、ハッとしたのであるが全く美しい女性だった。二十二、三だろうか、細おもての白い顔で、髪は何という形かしらないが品よくパーマがかけられている。大きく開いた胸にネックレス、黒味の洋服も身体にぴったりとして、綺麗な女体の線を描き、スカートはショートの脚線の又、美しいことは、正に天下一品なのだ。私は見て見ぬふりで、いとも無難作に脚をくんで週刊誌をひろげた、その

女性を盗み見て、胸がときめき始めてしまった。美しい顔の横にイヤリング、衿からのぞく胸の肌の白さ、その白さに負けず艶をもつてすんなりと伸びた形のいい脚、そのつま先、靴にしても、装身具にしても、とにかく一寸のスキもない美しさである。此の女性の身体全体が、全く優雅と云う文字がピッタリとする程、その感じがにじみ出ているのである。

私はタメ息をつき乍ら、下を見るふりをし、此の女性のツマ先を見、脚を見、顔を眺めては再びタメ息をついたものだ。美しい！全く美しい！こんな女性の脚許にひれ伏して、踏みしめてもらえたら、私はいち早くそんな事を考え乍ら、もう真くらな外に見えた小さな灯りの横に走る明滅も目に入らず、只、この女性だけに全身の神経が集中して、思わぬ処で眼の保養をしたのであった。そして電車は此の少い乗客をのせたまま、二、三の乗り降りはあったが品川駅に着いたのである。

だが此の女性は降りようとしてない、浜松町に用事のある私も勿論降りない。停ろうとするホームには、此処では大分客が乗って来そうな程、割と多い人がいる。そして電車は、

ガタンと停車したが、そのドアの開こうとした瞬間の出来なのである。私はとにかく前の美しい女性に夢中ではいたが、私の横へと云っても二人分程あけた横の端に一人の五十近い男が坐っていたのは知っていた。頭が凄く禿げあがって、いわゆる光頭の部類に入る位の、身なりはきちんと地味な背広を着込んだ紳士だった。身体の割と大きい立派な体格でなかなか風さいのいい、人品いやからぬ恰好だが、大分アルコールを召したとみえて真赫な顔で、始終ウトウトとしていた様であったのである。

処が全くアッと思う間もない出来事が私の眼前でおこったのだ。電車が停った瞬間なのか、まだ走っていたのか、ドアがもうあいていたのか、とにかく何も判らない位の、それこそアッと思った瞬間の事だ。その男がむっくりと立上ったと思うと、電車のガタンという振動を利用したとも思えるのだが、音もなくとは変な表現だが、やわらかい綿がフワリと落ちる様に、スーと此の男はその美しい女性の前に片膝をついたと思うと、いつのまにか男の両手は女性の組んだ上の足のつま先を靴の上からそっとかかえ、「?!」無言で驚く女

性の表情が全然変らない裡に男の唇はその女性の足の甲に接吻した。アッ！私が眼をしばいた時は、もう此の男は立上っていて、乗客が乗ってくる時には車輛と車輛の連続口へサッと消えて次の車輛に移ってしまった「！」私がその男を眼で追う余裕もない瞬間の事である。

私はその女性を見ると、女性の美しく白い顔にパッと紅がさし、耳まで赫くなって組んだ脚をおろし、今、キスされた足の甲にそっと手をふれ、あたりを見廻していたのだった。然しその時は、ドッと乗客がなだれ込み大して混みもしなかったが、そんな出来事は全然しらぬ氣に、思い思いに喋り合う者、又新聞をひろげる者、腕をくむ者で俄に活気づいた。然し公衆の面前で、瞬間的にやってのけたあのハゲ頭の堂々たる(?)名演技に私はすっかり驚き、且つ眼のあたりに女性の足にキスした男性の姿に、全身に焼けつく様な熱した血の逆流するのを覚えたのであった。そして私は自分で妄想していた事を先をこされた様に感じ、訳の判らぬ後悔とも、シットとも羨望ともつかぬ感情に迷ったのである。

贗作 檻の中にて

近 藤

一

奥秩父の山荘へ通う楽しみが失せてから、どれ程になるだろう。週末ごとに積み重ねた思い出の数々が、ほろにがく胸に浮かんで来る遺瀨なさに、サデイストの俺が自分の感傷を痛切に想う。後釜が欲しい。素晴らしい女が欲しい。

湘南の街に身も心も癒やしに来た。温泉いでのの湯煙りがそうさせたのか、湯上りの快い微薫が誘われたのか、紅燈の巷に身を寄せ、絃歌を聴いた。

妓おんな！

「こんばんわア」敷居際に三ツ指を突いて、その儘の形で下げた頭を起こし、上目遣いに此方を見、大きな瞳をクリクリッと廻した可

愛らしさ。ずっと立った裾捌きにも、おきやんな明るさと、それでいて、しみじみとした情感が潤っていた。

「お待ち兼ね？ゴメンナサイネ。」

寄たせ衿許に漂う肌の香りが、驚く程に初々しい。妓と二人きりで酒を酌む。唄うこともなく、踊ることもなく、数少い言葉の遣り取りの間に盃が渡り、俺は酔った。

うち融けた寛ぎが酔いを増すのか、床柱に背を凭れさせている俺の肩へ、妓は身を寄せながら、右手の甲を左の頬へそっと当てた。

「酔ったワ、妾。貴方がいけないのヨ。」

妓の眼の縁にポウッとさした紅色は、厚化粧に何とも云いよう無く映えていた。

「苦しかったら帯を取って楽にしろよ。どうせ今夜は買切った駄だ。帰しやアしないんだから……。」

つぶらな瞳が横目で俺を睨んだ。それからクスリと肩をすぼめて笑ったようだった。

俺はピンクのような薄い色が好きだ。赤のような色は、誰にでも似合うというものでなく、概ね安っぽくなってしまふ。だがどうだ。この妓の緋緋は。余り女を知らぬ俺だが、これ程緋の長繻絆が似合う女は、そうザラにあるまいと思う。嫌味が微塵もない。

「何かしましょうヨ。」

「お前の事を、もっと聴きたいんだ。」

「？」何とも云えぬ活き活きした瞳だ。

「俺は、お前に惚れた。だから飾り気のない、素顔のままのお前のことを識りたいんだ。話してくれよ、何でも。」

「身の上話？そだね。ううん、駄目駄目。つまんない。それより何か面白いこと無アい？何かしたいこと無いの？」

「ある。あるゾ！お前を縛る。お前を後手に縛るんだ。そして、うんという思いをさせてやるんだ。面白いゾ、これは！」

俺は酔っていた。が、妓も酔っていた。

「うん、いいわ。面白いからやって。」

長繻絆に包まれた妓の躰は柔らかく、縛しめの線は、ふくよかだった。

「どうだ。逃げられるか？」

「逃げるもんですか。けど、こうやって縛られてみると、貴方は、ほんとの悪漢みたい。」

「俺は悪漢さ。これからお前を酷い目に遭わせるんだ。覚悟しろ。」

「妾が音を上げると思ふのかヨ。フン、煮るなと焼くなと勝手にしろってんだ。」

「よし。云ったナ、妓。さ、白状しろ！」

「？」

「お前の素性を洗いざらい白状しろ！」

「いやだねエ。」

「白状しないと拷問にかけるゾ！」

「いや、嫌々々々々、嫌だったら嫌っ！」

俺は銚子を一本、妓の眼の前へ、つきつけた。

「飲め！」

「飲まない。」

「飲め！ 酒責めだ。腕づくでも、飲ませるぞ！」

「酒責め結構。縛られてちや飲めないけど、飲ませて下さるなら、拷問されてもいい。介抱して下さいさるわね。」

突き出された銚子に、俺を見上げ、仰向き加減に眼をとじて、可愛く口を開いた。人肌に温かい酒を、銚子を唇に当てた儘、俺は注ぎ込んだ。ゴクゴクと、まるで水でも飲むように喉許を鳴らして、妓は無茶呑みに干した。フウッ、ふうっと深く喘ぎ、縛しめの下でふくよかな膨みが息づく。

「白状するか！もっと飲むか！」

「白状、しない。拷問、勝手に、ふうっ。」

ごくごくごく。むせそうになって、コクリと喉が鳴り、二、三滴唇から顎へ流れた。

ふう——っ。大きく息をついた。

うイッ、うイッ！立て続けに、妓の上半が俺の胸で躍った。

頬を膨らまして妓は大きく呼吸する。酒が薫った。臉をパチパチさせた。

ういっ！ びっくりしたような大きな瞳だった。我ながら呆れたと云うように、俺を見て、それからニッコリ笑った。

「もう駄目。拷問、許して、耐えられないワ。つらい、とっても降参、降参。」

「白状しないと死刑だゾ！」

「死刑、いい。殺されたっていい、いっそ。参った。磔でも、火焙りでも、我慢する。殺して、死刑に、してッ！」
妓は頻りに喘いだ。後手の儘身悶えた。

どちらかと云えば、丸顔の、小肥りの女だった。髪が生え際が揃っていた。鼻は高くはないが鼻筋が、クッキリと通っていた。細いが濃い眉、長い睫毛、パッチリと見開いた瞳、切長な眼、薄っぺらでなく、といって安っぽくもない肉感的な唇と豊かな頬。清潔な感じの頸筋。凄じ程の美人というのでは決してないが、男好きのする、温い感じの女だった。スナナリと伸びた指先のように細いけれど、すっきりした声。きびきびした立居振舞。剃ぎ取



った衣服の下に、思いもつかぬ素晴らしい裸身が、ムチムチと息づいていた。部屋を照らす螢光灯の光の中で続の肌は、つやつやと蒼白いまでに輝き、しっとり潤いを帯びたヴオリュームは絹のように細かい肌理で、緊い縛しめを吸い取るかのようなだった。

「お前は引廻しの上、縛り首だ！」裸身は項垂れて、シオシオと歩く。後手の手首を背に高く上げながらも、無理な前屈みに、首繩は喉に喰い入って行く。腿をすり合わせるように小刻みな歩行が緩漫

に部屋の中を廻る。俺は手にした縄尻で妓を打つ。

「女！ 早く歩かんか。お前の浅間しい姿を見せて歩く処は、まだまだ多いんだぞ！」

「イヤ！ ここだけにして、ね、いや。」

「駄目だっ！」

障子をあけて、思いきり妓を突き出した。横から縛られた裸身を突きとばされて、妓の躰は廊下へよろめき、無防備に頼り無く曝された。

「愚図々々するな。いいか。縛り首の大罪人に泣き言などは許さん。諸人の見せしめだ。キリキリと曳かれて歩けっ！」

肩を小突かれて二、三步進んだ処で、女は蹲ってしまった。

「ええい、立て！ 起つんだ！」

「許して、ここで、」

妓の後手が折れそうに撓って、吊り上げられた裸体が立った。項垂れて、できるだけ前屈みになって、悄然と曳かれて行く。しかも俺はそんな女の背を、縄尻の限りで力任せに突きとばし突きとばし、追い立てながら手洗所まで往き来したのだ。

幸か不幸か人影に出遭わなかった廊下の往復も、妓にしてみれば死ぬ程の屈辱であったのかも知れぬ。更けた夜気に、ひいやりと快い妓の肩や背が、俺の眼の下でヒクヒク小刻みに顫えてやまなかった。部屋へ戻って横坐りになって俯向いたまま、妓は黙っていた。

「オイ、覚悟は、いいんだらうな？」

妓は弱々しく顔を上げた。下唇を噛みしめ、眉宇に愁いをたたえジッと俺を見た。睨むという猛々しさは更になく、只、見つめていた。背筋のゾクツとするようなその美しさ！ これある哉。女を責

める悦びが絶えない所以である。

だが女にとって引廻しは余程、応えたとみえる。女は俺を恐れ、引廻しを怖れた。

「妾の体はお金で買われているんだもの、何をされても文句なんか云えた義理じゃないわ。それに、承知でとび込んだ商売だから大概の厭なことなら我慢できるんだけど、あんな酷いこと我慢できない。貴男は唯、女が憎らしいみたい。憎くて憎くてしょうがないみたいに苛めるんだもの、妾、コワイ」

縛ったまま、足首を掴んで隣りの部屋へ引摺って行き布団の上へ抛り出した。涙は澄んで温かい女だった。可愛い奴だった。

指名してお内儀が退ってから随分待った。

「今夜は、お引廻し、いやよ。ね？」

二度目だというのに、これが挨拶だった。

「これからも、もう決して、しちやいやよ。いい？……ホントに嫌なんだから……」

慌てて云い足した妓に、俺は宣告した。

「よし、引廻しは許してやろう。だが俺をこれだけ待たせた以上、無事じゃ済ませんぞ。お前は海老責めだ！」

「海老責め？どんなの？痛い？」

俺は海老責めがどんなに苛酷か、殊に女の身にとってどんなに惨虐な拷問かを、一通り話してやった。

「大丈夫かしら。妾に我慢できる？死ぬようなこと無アい？」

「どうかナ。何しろ一癖も二癖もある強情者に泥を吐かせる拷問なんだから。何だったら海老責めはやめて引廻しでもいいんだぜ。ど

うする？」

妓は項垂れた。黙って帯を解き、着物を脱いだ。淡紅色の腰のものの一つになつて、あぐらを組み、自ら両腕を背に廻した。襟足が眼にしみるようだった。噛みつきたいような裸身に、俺は思わず力を籠めて縄を捌いた。

涙まじりの哀訴や喰い縛った歯の間から絶え間なく突き上がる悲叫に聴き入りながら、そして白く輝く裸女を血の色に染め上げて行く苦悶を見つめながら、俺はアルコールを楽しんでいた。

可愛らしい足首に寄せつけられていた顔が常に戻った時、妓の首筋や脛に幾本かの赤い筋がついていた。縛られたままの手首が背の下になって盛り上った妓の胸が、喘ぐ。俺は無抵抗の女の苦しみを食うかのように暴虐を繰り返した。女は、だが、肩で弱々しく呼吸しながら、遂に意識を失わずにいた。可愛かった。

俺は女を手に入れることに決めた。

万事は金だった。

秩父の山荘を再び活用する日が迫った。一週間と見たその準備が意外に長びいて、俺が湘南へ戻ったのは十一日ぶりになった。

妓が売れっ妓という話は、強ち俺を敬遠しての云分ばかりではなさそうだった。いい体をしているし、男好きのする目鼻立ちや気さくな気性が可愛がられるのだらう。流るお内儀も、然し、万事は金だった。

誰か良い馴染客の名でも使われたのか、妓は俺の顔を見ると一瞬はっとしたように頬をこわばらせた。

「もう、あれっきりかと思つたワ。」

「悪魔払いで、せいせいしたんだろう。」

「ええ。アラ、そんな……」

正直な奴だ。

海老責がコタエて翌日は起きられず、お内儀に厭な顔をされて辛かったとか、あれ以来四、五日は体中がミリミリ痛くって泣きたい思いだったなどということを、妓は精一杯の恨みを籠めて俺の胸に訴えた。

引廻しや海老責をしない約束どおり俺は妓の裸身を逆海老に反らせた。着物を剥いで両手を背中に括り合わせてしまえば、あとは女がどう躁掻こうと俺の思いどおりにしてしまふのだ。ムチムチした四肢が思いっきり背中へ引き絞られて結び合わされ、豊かな腿が扁平につぶれてスベスベした。

「ムチでひっぱりたいやろう。」

俺がズボンのバンドを引き抜くと、女は身をよじって哀願した。

肌が資本であり生命である妓にしてみれば尤もなことだが、金を払った俺の知ることではない。然し、腹を支えにして揺籠のように揺れ続ける女を見下して、俺は別の考えが浮んだからムチ打ちは許してやった。妓は、ほっとした様子で、無理に押し曲げられた脚がツルとか、腕が抜けそうに痛いとか訴え始めた。俺は邪慳に手拭で妓の口をふさぎ、ギョッと縛った。

「む、ムムムッ、」

妓の頬は手拭に噛まれてくびれた。口の中には何も詰めなかったから声は出る筈だ。妓を、ひっくり返して仰向きにした。胸も腹部も腿もピリピリと緊張しきって、腕と膝から先の無い女の裸がグツと反り上っていた。

肌をくすぐる責具に翻られて、避ける力のない美身は身悶えし躍動しようとした。全身で笑い続けながら涙を絞り出していた。喉の奥で悲鳴をあげた。

俺は妓に迫った。自由を奪ったまま、強引に、しかし真剣に口説いた。妓の両肩を掴んでゆすりながら、妓の瞳に喰い入るように



でも今度、妾が落籍されるのは、唯お金の力に負けたただけではない。妾があの人のもものになってもいいなと自分で思ったからだ。

妾は確かにあの人のお屋敷が怖ろしい。でも、それは、あの人を恐れているのかどうか判らなくなりました。妾が恐れているのは、縛られたり苛められたりすること、あの人自体には何の悪感

みつめながら、俺はどんなに妓に惚れたかを喋った。俺がこんな仕方ではか女を愛せない男であることも、あからさまに話した。

妓は遂に黙ったまま首を縦に動かした。

☆

☆

芸者とは云うものの、不見転と隘口をきかれる妾達の体は、所詮お金の前には無力なものだ。或る場合には芸の優劣でさえ、旦那という名のパトロンに支えられるこの社会で、何の才能にも恵まれず云うならば文字通りの裸一貫、裸だけが資本という妾などが、前借りや少しばかり多いお花のために、お客様の云うまま帯を解くことは、妾が生きて行くためにどうしても必要なことではないか。こんな妾に誰がムチを振るったり、石をぶつけたりできるだろうか。

情も持っていないのではないかと迷ってしまう。

あの人は、真剣に妾が好きだと云ってくれた。拷問だなんて酷い目に遭わせて、妾を痛めつけ、苦しがつて悲鳴を上げるのを眸を輝やかせているのも、妾に対する愛情の表現だなんて云った。異常だということとはよく判る。でも、惚れた女でなければ苛める気にならないと云った言葉は嘘ではなさそうだった。

妾は本気で人から愛されたことがない。妾のお客は多いけれど、妾はいつも浮気や気まぐれや暇つぶしの相手に選ばれるだけ。売れっ娘と云われるだけに尚淋しい。妾だって人の子だもの、愛されたい希いは誰にも負けないのに……。

女の幸福ということは結局、愛情という眼に見えない紐で雁字搦めに縛り上げられることではないだろうか。四六時中、好きな人のことを想い続け、何もかも捧げつくして奉仕し、どんな無理にも抗えない境涯。そんな心境に自分からなれたなら、女は本当に幸せなのじゃないかしら。

あの人は、妾を正妻にしようとは云わなかった。でも、いいの。妾は二号さんだって、三号だっていい。あの人が妾を好きでいてくれさえしたら、どんな目に遭わされたっていい。こんなことを云うと、妾のことをバカな奴だと笑う人もあるだろう。嫌っていたあの人のものになることを、妾がお金に目眩んだせいで悪口を云われる。お金持のものになることは妾達の夢だもの、そんな気持は一かけらも無かったとは云えない。けれど決してそれだけじゃない。妾があの人への情にほだされて、あの人を好きになったのが、全部とは云えないまでも、本当の心だ。

妾はバカな女かも知れない。巧く欺かれているのかも知れない。

それならそれでいいじゃないの。今のようない不見転芸者の生活は、眼に見えない鎖で繋がれ、形の無い荒縄で締め上げられ、引き摺り廻されているのだもの、むしろ細引や鎖がキリキリ肌に喰い入って来る生活の方が、直接に皮膚や感覚に納得できてスッキリすると思う。

妾のこんな気持を心境の大きな変化と観る人もいるかも知れない。でもそれは違う。妾は自虐的気持はない。あの人を教えてくれたマゾヒズムなんかじゃない。妾は唯あの人を妾を愛してくれるから、愛情の表現として妾に加える責苦だから、じっと我慢するだけなのだ。苛められて、何が愉しいものか。愛されるのだから嬉しいのだ。

浮草のような不見転芸者の生活が妾の身にも心にもしみついてしまつて、こんな気持になつたのかも知れない。でもこんな気持は、もっともっと小さい時からあつたようだ。

妾は明るくて我慢強い娘だった。乱暴なことが好きで、自分でも呆れる程暴れ廻つた。そんな時でさえ、いつか男の人の前へ両手をついてどんな云付でも喜んできく優しい素直な女になることを考えていたものだった。今、その願いが実現しそうなのだ。妾は自分の責任で、あの人に従って行くのだ。

二号さんでもいい、玩具でもいい。妾はあの人をいい二号さんになり、いい玩具になるように一生懸命、努力しよう。妾自身のために。そして妾の生涯のいじらしい夢の為に。

ドライブというものが、これ程までに快適なものとは思ひもしなかった。いつも窮屈な着物を着て、帯だの紐だの幾重にも締めつけ

られて、頭の芯までズキズキするような日本髪のカツラをかぶって、キチンと膝を折って坐って、お酒のお相手をさせられて、精力のつく御馳走とやらを詰め込んで、挙句の果が濁った空気の狭い部屋の中で、愛してもいない異性のいうなりになって来た妾達には、嘘のような経験だった。それやア妾だって自動車に乗ったことはある。でも今日のいてたちは——黄色のジャージーに焦茶のストラックス、グレイのスプリングの襟を立て、狐色のパンプスを履いていた。今まで妾を身動きもできないように縛りつけていた殻の名残りは何一つない。頭だつてよくブラシをかけたウェーヴを茶色のリボンで抑えていた。晴々した気持はそんな処からも来るだろう。もしこれがオープンだったら、風なんか物ともしないで、妾は助手席に突っ立って、髪をなびかせ、頬を晒らせていただろう。残念なことに、車は屋根があったし、妾は立ち上れなかった。

「もう、どんなことがあったって、逃がしやアしないぜ。」

「うふん、駄目よ。そんなこと云うと、妾、きつと逃げ出しちゃうから……」

「逃げられるものか。俺に捉まったら百年目だ。いい加減に観念してしまえ。」

こうして妾の両腕は後へ廻され、革製の手錠がピッチリとかけられてしまった。だから羽織っているスプリングの腰の辺りが尖って見える筈だ。両脚も、ストラックスの裾を折り返して、裸の上の辺りに20程くらいの鎖で繋がった革の輪が嵌められた。どうも犬の頸輪かなにかで拵えたらしい。

あの人の横顔を惚れ惚れと見つめた。嫌になる程冷淡で素敵なプロフィールだった。あの人はハンドルを握りながら、何だ？というよう

うに妾を見返って、それから、お前は一体何者だい？と云うみたいなとぼけた表情をした。妾は何かしら嬉しくなっちゃって、あの人にとびつきたかったけれど、あの人のそぶりに取りつく島もなく唯、すり寄って頬をあの人ガツしりした肩にこすりつけてみただけだった。手首の自由も無い癖に、妾があの人にピッタリくっつきたい想いを邪魔している左の肩が憎らしい。

突然、あの人の右手が伸びて妾の肩を、ぐいっと引き寄せた。あつ！と云う暇もなく妾はあの人の膝に倒れかかり、厚い胸の中に凭れて斜めになってしまった。

「いやアン！」

「ばか！ グラグラするなヨ。しっかりしてなきや駄目じゃないか。」

そう云いながら廻した腕を解かなかった。妾は、すり寄って胸に抱かれてしまった。車は走り続け、妾はあの人の腕の中で大好きな島倉千代子さんの歌を口ずさんだ。口笛を吹いたり、ハミングを愉しんだ。あの人は調子を合わせて、妾の肩や胸やお腹を掌で叩いたり、指先でつついたりした。

車は、どんどん走った。幸せて雁字搦めにされたドライブだった。楽しくて只、嬉しかった。

山荘の浴室はタイル張りで、焚口は壁の向う側についている。この辺では贅沢過ぎる作りだった。妾は子供の頃の遠足のような気分がウキウキしていた。

いい湯加減に、すっかり疲れも抜けて、薄いお化粧品も気に入ってきたので、妾は化粧品を棚にしまい、手拭いを干して浴室から出

た。パンティ一枚と湯上りタオルに薄桃色の肌を包んで、あの人の云付で服を脱いでおいた居間へ行った。

妾の衣服は居間にはなかった。あの人は妙なものを、いじっていた。箱のようでもあるし、檻！そう、檻のようでもあった。丁度、畳一帖位の広さに高さは一メートル程で、下には体操の時、使うマットのような、でも、ずっと上質のものが張ってあり、上は厚い板で、周りは五寸おき位に丸い鉄の棒がついていた。まるで熊を入れてサーカスのテントの前に飾っておく檻のようだった。

「なアに？それ。」

「檻だよ。」

「何を飼うの？」

「お前をさ、お前を入れとくんだ。」

妾は、カーッととなった。恥ずかしかった。

「いやヨ、妾。」

肩を包んだタオルを前で合わせて、妾は駄々っ子のように駄をゆすった。でも咄嗟に頭の中で、檻に入れられた自分を想像していた。だから、あの人に「そんな情ない顔しないで、とにかく馴しにはいってみろヨ」と肩を叩かれると、拒み切れずに四つん這いになって、片手でタオルを抑えながら、檻の口からノソノソと匍い込んだ。中は思った程狭くはない。頭がつかえそうな感じを除けば、下は柔らかいマットだから、妾のお仕置用の檻には適当な出来栄だった。

「いつまで四つん這いになってるんだ？ケダモノじゃないんだろ？坐ってみな。」

妾は慌てて坐った。妾はそんなに胴長ではないから俯向いて坐る

と頭は檻の天井へつかえずに済んだ。背中がガチャリと音がした。

狭い中で鉄格子に手を突っ張りながら向きを変えて見ると檻の入口の格子は降りて錠がついていた。悪戯？冗談にしては酷いじゃないの。戸惑っている妾を、あの人は面白そうに見下していたが、いきなり檻はスーッと後へ動いた。車のついた檻なのだ。妾は慌てて格子につかまりながら叫んだ。

「嫌っ！許して、御免なさい。ね、出して！ねえ、やめてっ！嫌っ！いやア！」

「お前は雌だ。檻で飼われる雌だ。出して貰いたきや泣いてみな。泣いてみなヨ。」

「嫌っ！意地悪っ！ばか！」

「何とでも云え。だが、鳴かなきゃ檻から出られないゾ。」

パンティ一枚にタオルをひっかけただけの妾は、酷い冗談だとは思いつつ、恥ずかしいやら情無いやらで、まず檻から這い出すことが先決だった。他に仕様がなかった。

うえーん、うえーん、

妾は手の甲を両の眼に当てて泣き真似をした。檻から出して貰いたい一心で、あの人の云うままに、肩をゆすり身を揉んで、まるで女の子のように大きな声を張り上げて、やがて本当に涙まで出して、いつまでも鳴かされていた。

疲れちゃった。

「寒いかな？」

「ううん。」

妾は首を横に振った。お湯から上った駄で、さんざ泣き声を上げ

させられて、その上、大きなマン
トルピースの前に引据えられて石
炭をぼんぼん焚かれ、なおその上
に両脇に電気ストーブを置かれて
まるで火焙りみたいになされている
のだから寒い訳がない。唯、無性
に喉がかわいてとっても辛い。ひ
つつきそうにカラカラだ。

やっと錠をあけて貰って檻から
這い出すとすぐ細引で後手に縛ら
れた。足首に鉄の輪がつけられ四
十糎位の長さの太い鎖で両足が繋
がれてしまった。そしてあの人と
椅子を並べて腰掛けると、間もな
くこの火焙りだ。

「何か飲むか？」
「いいえ。」

妾は唾をグッと呑み込んで怯え
たが、あの人は部屋から出て行っ
た。

戻って来たあの人は二人の女のひとと一緒だった。妾はびっくりし
て跳び上った。肘かけ椅子を楯に縛られた軀を縮めようとした。
「引合わせておこう。こっちがお初ちゃん、そっちがお光ちゃん。
これからお前の身の廻りの世話をしして貰うんだ。いいね。」
「どうか、よろしく、お願い……」



妾は軽く会釈する二人にこれだ
け云って声が出なくなった。二人
とも少しの遠慮もなしに妾の縛ら
れた裸をジロジロ見る。お乳
のあたりが痺れるように疼いた。

縄で縛られたり、鎖で繋がれた
りすることが、こんなにみじめな
気持とは思わなかった。それが囚
人、悪いこと、泥棒や人殺しをす
ぐに連想させるせいか、恥ずかし
い恰好を人に見られると意識した
だけで、気を失う程にカーッとな
った。心臓がギョッと握られたよ
うで、暑いのか寒いのか分らなく
なり、只カッカッしていた。酷い
仕打と恨む余裕なんか全然ない。
妾だって自分の体に自信が無い訳
ではない。だから心のどこかには
人に見られたい気持もあった。で
も、みんなが服を着ているのに妾

一人が裸に剝がれて、罪人みたいに縛り上げられて、同性の視線に
晒し者にされるなんて、そんなみじめなことがあるだろうか。恥ず
かしくて、情無くて、死にそうだった。哭く気にもならなかった。
そのまま、もう二、三分したら、妾は縛られた儘気を失って、へ
タヘタと崩折れてしまっただろう。ガーンとした耳へ、あの人の声

がとび込んだ。

「引合せが済んだら、あとは明日だ。お前も疲れたろうから今夜はぐっすりお休み。」

「ハイ。」

妾は、かすれた声で返事をした。初子さんと光江さんが妾の縄を解いてくれた。縄目の跡をさすろうとする手を取ると、二人は妾の両の手首に鉄の輪を嵌め、両の輪を鎖で十五程程に繋いだ。

「あなた、何なの？これは——」

そう云いかけてあの人の顔を見ると、いいからお休みとでもいうように、あの人は眼で頷いた。

妾は、また檻の中へ入れられた。二人の前では恥ずかしくて、とても拒むことはできなかった。俯伏せに寝て顔だけおこし、錠がおりるのを悲しく眺めていた。

「風邪を引かれちやいかんからな、」

檻はマントルピースのすぐ前へ運ばれた。妾は火の方へ背中を向けて檻の中で丸くなった。余りの刺激に神経は痺れたようになって、睡くもなかった。

鎖の触れ合う音にドキッとしながら、妾は一晚中、寝返りを打ち続けた。

初子さんと光江さんは妾の調教師だった。この山荘の女中なのだから妾にとっても女中さんだと思ったら、大間違いだった。妾が二人の云う事をきかないと、檻から出してくれないのだ。あの人は土曜日の午後から月曜の朝までしかない。留守中は二人が先生になって妾を仕込むのだ。

「アンタは旦那様の奴隷なんだよ。自分じや、二号さんか何かのつもりだろうけど、旦那様はね、綺麗な若い女の奴隷が欲しくって、アンタを買い込んだのさ。だから、アンタは女奴隷なんだ。もとは芸者とお客が知らないが、そんなことは忘れて、早く旦那様のお気に入るような女奴隷になるんだね。」

妾は最初に、こう宣告されてしまった。勿論、妾はいろいろ抗議したり、暴れて逃げ廻ったりした。だが初子さんも光江さんも、駄目も大きいけれど力も強かった。暴れん坊の妾だったけれど、とても敵わない。それに妾を仕込む時は、いつも二人がかりだから、駄目だった。

まず、あの人を「御主人さま」と呼ばされた。そして奴隷の作法を教え込まれた。御主人さまは女奴隷の神様だったから、女奴隷は神様のどんなお云付にも絶対服従だった。次には女奴隷の芸当を仕込まれた。歩き方、お辞儀のしかたから哭き方、苛められ方まであった。二人の調教師は厳格だった。訓練はキツかったから妾は、しよっちゅう反抗した。その度に妾は組み敷かれ抑えつけられ張切った太腿に挟みつけられ、遅ましいヒップに押しつぶされてノビてしまった。

やがて妾は、二人の調教師が妾の肌に傷をつけないようにしていることを知ったから、何となくムシヤクシヤする時は、滅茶苦茶に暴れて逃げ廻ったり、意表をついて逆襲したりする。光江さんの髪の毛を、ひつつかんでズルズル引摺り廻したり、初子さんの手首を取ってエイッーと背負投げて叩きつけたりした。結局は妾が、苛め抜かれて降参しちやうのだけれど、二人の悲鳴を聞いたかと思ひ、そののを見たりすると、胸がスツとして不思議に素直な気持ちになり、

大概の云付は、きくことができた。

そのうちに妾は、初子さんと光江さんが好きになった。今の妾が住んでいる世界には、二人のほかには妾とあの人しかない。いやでも好きにならなきゃならないためだったかも知れない。或いは、日ごと夜ごとの接触が親しみを湧かせるのかも知れない。二人とも、初めの頃のように冷酷でなくなった。妾が云付通りの女奴隷になったせいかも知れないが、妾が反抗しても、ヒマシ油を吞ませておいて流腸をするようなことは、しなくなった。

あの人、来る度に眸を輝やかして妾を眺めた。厳しい調教で妾は、どんどん変わって行ったのだろう。妾は土曜日の来るのが、そして、あの人嬉しそうな顔を見るのが、たまらなく待遠しかった。

毎朝六時半、妾は檻の中で目醒まし時計のベルに起こされる。調教師が、やって来る。妾は丁寧に挨拶をして檻から出して貰う。それから八時頃まで体操。子供の頃から運動は好きだったし、中学では体操部で機械体操をカジった妾だから、この日課は楽しかった。無駄な肉が無くてピチピチしていて、必要な処には女らしくプツクリと肉が盛り上って、柔軟な躰。少し肥って来たかなと思うけれど妾は妾の躰が大好きだった。体操が済むとシャワーで汗を流して朝御飯。

十時頃から訓練。肩、背中、お尻、胸、お腹、腿などをいろんな鞭で打たれる。悲鳴や呻き声の上げ方、悶え方、哭き方など、女奴隷のふたれ方を教えられた。誰だって鞭なんかでふたれたら痛いから泣いたり叫んだりする筈なのに、あの方は賢い。打たれる時にも女らしく美しい打たれ方をしろとか、綺麗な苦しみ方があるとか云う。何か油性のものを肌に塗られるので、二人に力一杯、打たれ

ても余り痕がつかない。だけど痛い。妾は悲鳴をあげ、絶叫する。一面にぶたれるから、ずうっと肌が桃色に脹れて火照って来る。涙が出る。余りの苦痛に胃の中ものを吐いてしまったことも何度かあった。お乳をぶたれると頭の芯までズキンズキン痛くなって、すぐ気持ちが悪くなった。だからどうしても縛られた躰をくねらせてお乳を庇うようになる。厳しい訓練のお蔭で、妾はあの人喜びそうな女奴隷のふたれ方を覚えることができた。そして、鏡で見たり手を触れた感じでは、妾の肩やヒップやお腹が、以前の妾とは違う人のように、丸く逞しく張切っているのを知った。

午後は睡眠、休養、娯楽。妾は歌を歌ったり、檻の中で睡ったり初子さんや光江さんのお手伝いをさせて貰ったり、退屈して、ぼんやり考えごとをしたりした。来る日も来る日も、何も生産的なことをしないでブラブラしていた。時々二人の調教師の気まぐれから苛められてみたり、可愛がられたりした。

妾は二人の女中さん達を、「初子さま」「光江さま」と呼ばされた。恐らく妾より年の若い、働きの遅い娘達の純朴さを観て、妾は彼女達の前に跪いて自分を卑下することが少しも苦にならなかった。

彼女達が最初、事毎に冷淡で残酷で、何かあるとすぐ妾を抑えつけて、抓ったり擦ったり、ギューギュー縛り上げて長い間放っておいたり、一日中、檻にいる妾が空腹で眼を廻しそうになると、檻の前で自分達だけ食事をしたり、流腸をしたり、ヒマシ油や下剤まで飲ませたりして妾を苛め抜いたのは、みんなあの人指金だったとあの人から聞いた時は呆れて、ものが云えなかった。そして、そんなにまで正直で純朴な二人の女中さんが好きになってしまった。

一週間に二日しか、あの人に来てくれないのは、何となく物足りなくなってきた。胸のモヤモヤの原因は分っている。苦しい。妾には浮気ができない。妾は以前、芸者だったけれど、お女郎ではない。不見転芸者なら同じことだと云われるかも知れないが、違う、絶対に違う。妾はあの人以外の人を好きになれない。随分、通い詰めてくれたお客様のことで、想ってもみないもの。妾の周囲の人間と云えば、初江さんと光江さんしかない。二人とも同性なのだ。

妄執を追い払うために、妾は二人の同性から思いつき責め虐んで貰うことにした。彼女達のどちらかを対象に選ぶことは、あの人を辱かしめ、妾自身を穢すことになるから厭だった。縛られることや、ぶたれることは決して気持の良いことではない。裸にされて獣のように鬨られることは、今でも死ぬ程恥ずかしい。痛さと苦しさ、声をふり絞って悲鳴を上げ、子供のように這い廻ると、ふつつつ、背を丸め、身を悶え、呻き、狂ったように這い廻ると、ふつつつ、たぎっている邪念が拭い去るように消えて行くのだ。苛責は苦痛の極だが、女盛りで健康な妾には、あの人への操を守るためにも必要なことだったのだ。

金曜の晩、調教師は、あの人と連絡を取る。翌日からの指示を受け、女奴隷はその通りに扱われる。

土曜日。朝、檻から出て体操、シャワー、食事。それからお化粧。裸にされて牀中に油性のものを塗りつけられる。鞭の痕を残さないためだそうだけど、お蔭で妾の白い肌が、テラテラ光ってしまふ。手首は後手に合わされて革の手錠で留められ、足首も革の輪が嵌まって十種位の鎖で繋がれてしまふ。そして、犬の頸輪が妾の首

に嵌められる。これはコタえる。これが嵌められると妾の心はシュンとしぼんでしまつて、あの人に飼われている自分というものが思い知らされる。あの人や御主人様で妾が女奴隷なんだということが身にしみてよく分るのだ。一番よく攪つて音の良い鞭を、妾は口に咬えてあの人や御主人様の足許へにじり寄る。項垂れて肩から背中、胸からお腹や腿を打って貰う。痛い。脳髓までがピリピリ痺れるような戦慄を、顫えながらジッと我慢する。

それからお引廻しだ。足首は鉄の輪が嵌め替えられ四十種位の鎖が引摺られる。細縄が細い鎖で後手高手小手にされ、胸や胴まで縛られる。鎖の時は頸輪へ引っかけた手首が吊り上げられ、細縄の時は喉にくびれる程のきつい首縄がかけられる。妾は肌を白く光らせながら、あの人や御主人様の手にした鞭に追いついて歩くのだ。家の中は勿論、大抵は庭へも連れ出される。芝生や庭樹の周りを引き廻され、後には、そのまま突き倒されてしまふ。恥ずかしい。外気に直接、肌を晒される無力感。妾はお日様が眩しくて、青空が広々して、寂しかった。

お乳の形を崩さないために、ウエストの括れやヒップの張りを保つために、妾の牀に合ったブラジャアやコーセットを、あの人はいろいろ買ってくれた。あの人や御主人様の来ない日は、いつも朝から身につけさせられる。コーセットをギリギリまで締めつけておいて、どの位暴れられるか試してみたり、どの程度以上食べると戻してしまうか実験させられたり、どの位声が出るか、歌謡曲を幾つも唄ったりした。初子さんと光江さんと二人掛りで、妾が我慢しきれなくなつて呻き声を洩らすまで締め上げるのだから、屈めなくなつた妾の眼で下腹の盛り上がりが見える程だ。でも、これは余り締め過ぎる

と確かに毒だ。妾が真蒼になって、冷い汗を流してフラフラッと倒れてしまうのだから。

土曜の晩や日曜は、いろいろな拷問やお仕置にされる。妾はお転婆だから、縛られた儘、身動きもできず、ジッと放りっぱなしにされているのは辛い。それより振り廻されたり、転がり廻ってグロッキーになる方が、ずっと気持がいい。だから海老責にされると妾は反動をつけて、ゴロツと転がってしまう。丁度、脚の間へ顔を覗かせるようになってしまうので、羞恥も加わって真赫になりながら、ウンウン云って駄を揺らすのが堪らないのだ。妾の一番好きなのは木馬責。木馬の背中へ厚く皮を張って貰ったが、でも、やっぱりジーンと痛い。お尻を浮かそうにも足首の鍾りに責められるし、落ちないように力を入れていると腿が痺れる。特製の木馬だからよく揺れるけど、妾は自分から進んでグラグラゆらすのだ。この木馬に乗る者は馬の代りに鞭でぶたれるのだから何とも云えない気持になる。

吊るされるのも好きだ。妾は縛られた駄をくねらせて思いきり暴れる。時にはグルグル廻って眼が眩むことさえある。後手で吊られるより、両手を頭の上にして吊られた方がいい。脚は、余り勇ましいのも恥ずかしいから、繋いで貰う方がいいのだ。でも逆吊りは厭。暴れる処ではない。あんなことをされたら、それこそ命が無くなってしまう。いつもあの人は手拭で妾の口を覆う。これは暴れているうちに外れるようになっていく。もがいて手拭が外れると妾は滅茶苦茶に悪態をつく。あの人は妾が物を云う元氣もなくなっ

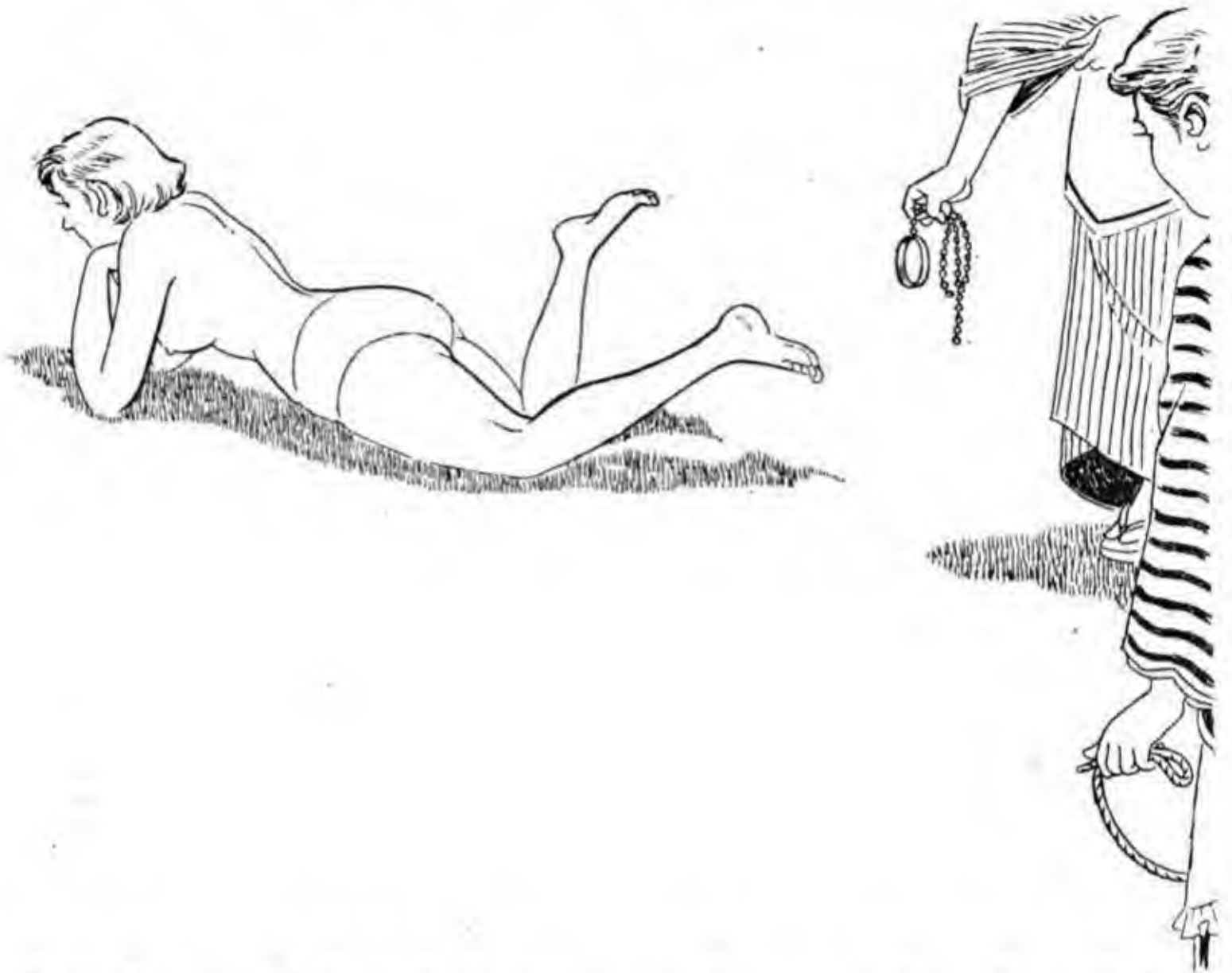
てグッタリぶらさがってしまうまで、ピシリピシリと妾を打ち据えるのだ。それが逆さに吊られた時は、ドクンドクンと全身の血が頭に

に下って妾は口がきけなくなってしまう。ぼうっとなっていたから何を云ったのか、どうされたのか記憶がない。只、苦しくて死にそうだった。

あの人が来た時は大概、二人っきりで苛めてくれる。初子さんと光江さんが妾に鞭を振ることは殆んど無い。精々、あの人の云付で抓ったり擦ったりするだけだ。あとは、あの人に手伝って、縄で縛ったり鎖をつけたり、拷問やお仕置のやりいい責具を揃え、妾を縛りつけたりする。そんな後、初子さんも光江さんも、とても冷淡で、初めて逢った時のような残酷さがピンピンと感じられる。却ってあの人のいない間の方が何彼と親切なのだ。二人とも、あの人に責められている妾が何故か知らないが無性に憎らしいのだそう。もっと苛めてやれと云う気になるのだという。妾には分らなかった。二人とも十人並の容貌だし、駄はヴォリユームがあつて均斉がとれた素敵なグラマーなのだ。むしろ妾が羨ましい程なのに。

妾は、二人が妾を好きになつていくのだと知って、びっくりした。二人とも妾が可愛いのだ。年令よりずっと若く見えて、美人じやないけど愛嬌があつて、ポツテリ肉づいて柔軟な駄をしていて、お転婆で強情っぱりで、まるで人のペットに生まれついたような妾だから、猫っ可愛がりは馴れていたけど、年下の調教師に好きになられたのには本当に驚いた。困ってしまった。二人とも妾を苛めているうちに、妾が可愛くなつてしまったのだと云う。妾にできることは、せめて二人の気の済むように苛め抜いて貰うことだけ。女の子に抱かれるなんて、思っただけでゾッとしちやう。

運動は激しいけれど、妾は充分過ぎる栄養と休養を摂って益々元



気なのだ。規則正しい日課だから健康そのもの。忙しいあの人に較べると、妾の方が強いかも知れない。だから少し位酷くシボられても丁度良いのだ。

——もっと、もっとぶって！貴女達はそんな苛め方で気が済むの？駄目々々！もっと、きつくするのよ、もっと。——

妾は、妾の頼みで鞭を振う調教師に、心の中でそう叫んでいた。

「お前はマゾヒストだ、マゾなんだ。」
あの方は妾に云った。

——嘘、嘘よ。妾はマゾなんかじゃない。ノーマルだわ。苛められることが嬉しくなんかないもの。——

「お前は縛られることが嫌いか？ぶたれることが厭か？」

——うん、厭、厭だワ。——

「お前は俺が嫌いか？」

「お前は俺が縄を手にして近寄った時、真剣に力の限り抵抗したことがあったか？俺が責め上げた時、やめてくれと泣き叫んだことがあったか？——」

「お前は奴隷扱いにされて、こんな酷い目に遭わされても、俺を恨んだことがあるか？ 憎んだことがあるか？ ここから逃げようとしたことがあるか？」

矢継早の詰問に妾は戸惑い、口籠った。

——それは、妾が貴方を愛しているからだワ。貴方が好きで好きで堪らないから、貴方に出て行けて云われても、妾は、ここに居たい。貴方がすることだから、妾は貴方の云う通りになってるんじゃないの。厭だけどジイッと我慢してるんだわ。

——「それじゃ、お前は俺の留守の間、初子や光江に何をされてるんだ？ いや、何をして貰ってるんだ？」

——それは、あの、それは……

「云ってみろ、云えるか？ 云えまい。やっぱりお前はマゾなんだ」

——違う、違うわ。あれは、貴方の為に、そうよ、貴方の為にしてるのよ。

——「俺の為？ 何故だ？」

——そうよ。妾はねえ、妾だって……。だけど、貴方は一寸しか来て下さんないんだもの。妾は健康なのよ、栄養もタップリ摂ってピチピチしてるのよ。貴方が好きで好きで、貴方だけが頼りの女なのよ。分らないの？ 妾は貴方のそばに居たい。一緒に暮らしたいの。それなのに五日間も妾はどうやって待ってたらいいの？ クタクタになるまで暴れ廻らなきゃ、気が狂っちゃうわ。思いつきり苛めて貰うのが悪い？ いけない？ 一体どうすりやいいの？

「お前は苛められて、どんな気持がする？」

——ぶたれれば痛い。縛られれば苦しいし、着物を脱がされれば恥ずかしいワ。淋しいこともあるし、悲しいこともあるし、泣きたくなっちゃうこともあるワ。——

「それだけか？ 何か変わった気持はしないか？」

——さア、分らない。でも、背中がゾクゾクすることはある。寒くなるような、カッとなっちゃって。それから、身体中が痺れたようになることもあるワ。吊られた時や磔の挙句、ノビちやった時なんか。緊く縛りつけられて、海老責なんかボートとして睡たくなっちゃう。それに、浅間しい恰好にされたり、お引廻しの時なんか、恥ずかしくって——

「それでもお前、自分をマゾだとは思わないか？」

——違う。妾は違う。マゾヒストじゃない。誰だって、女なら誰だって、こうなんだワ。——

「そうじゃない。お前は特別だ。お前はマゾだ。マゾなんだ！」

——厭、そんなこと云わないで！ 妾は、妾はそんな女じゃない。「騒ぐなっ！ お前はマゾだ。いいか、お前はマゾヒストだ。俺がマゾにしてやったのだっ！ うわっはっはっはっ、うわはは……、あっはっはっはっは……」

怖しい夢だった。ビッシヨリ汗をかいていた。

あの人の乗った車が朝霧の中へ消えて行った。月曜日の朝、女奴隷らしく、あの人の足許に跪いて素直に鞭を受ける。鞭で打たれた跡が熱いなアと感じながら、晴れ晴れとした足取りで出て行くあの人を見送ったのだ。

夢の中の、あの人の言葉が気になって体操にもミがはいらなかった。

良く晴れた日だった。

三人で朝御飯も済ませた。する事もなく何となく顔を見合わせたのが十時頃だったろうか。

「初子さま、光江さま。どうか、私を苛めて下さいませ。」

「よろし、願ひ通りタップリと苛めてつかわそう。覚悟はよいだらうナ。」

お茶目の光江さんが、妾の願ひに応えた。妾は着ているものを脱いだ。ウエストニッパも外して貰った。ピンクのナイロンパンティとブラジエアだけになった。

いきなり、妾は前にいる光江さんを強く突きとばした。後にいた初子さんが咄嗟に抑えようとして掴んだので、ブラジエアの紐がピリッと切れた。光江さんは傍にあった椅子に乗っかって一緒にひっくり返っちゃった。

妾は、さっと部屋からとび出した。パンティ一枚で家の中を走り抜けて、裸足の儘庭へ走り出た。

エイッ！

両手を上に伸ばすや、弾みをつけて、クルッと自転回を打った。両手を水平に上げて、スッと芝生の上に停止した。嬉しかった。

妾は、まだシットリと露を置いている芝生に腹匍いになった。まだ芽も出揃わない芝は、お乳やお腹や腿にチクチクした。うーんと妾は全身を伸ばしてみた。それから、その儘頬杖をついた。初子さんがどうしているかなんて考えもしないで、ぼんやり、睡いなアと思ったりした。

——妾がマゾヒスト？——

夢のことを考えていた。妾がマゾなんて困ったなア、どうしようなどと思っていた。

——あの人が妾をマゾなんかにしちやっただんた？大変だア。困ったなア。……

……うん？ 妾はあの人のマゾヒストなんだろう？いいんだヨ。だからサ、妾はあの人だけにマゾヒストでいいんだ。好きななんだもの。ワーイ、妾はマゾだ。妾はあの人のマゾなんだア——

妾は、ウワァッと大声で叫んでみたくなった。ふと、人の気配にふり向くと、初子さんと光江さんが、妾の脚に嵌める鎖のついた鉄の輪と、牀を縛るらしい使い馴れた綿ロープを手にして、妙な顔を

して立っていた。

妾は呼吸をはかって、さっと飛び起きて走り出した。裸のまま、妾は庭を逃げ廻った。

——今日は磔にしてくれないかな。足台はなしで、堅くて細い馬乗りにして、少しずつ下る位に縛りつけてくれるといいんだけど。ピシピシぶって貰って夕方まで放っという貰うように、妾はうんと暴れなきや。まだまだ提ってたまるもんか。——

庭樹の間を逃げ廻りながら、妾はこんなことを考えていた。ハアッハアッと荒い呼吸の合間に、妾は誘うように高く笑った。

「アハハハハッハッ、アハハハ、ハアッ。ねえ、磔なんか、しちや嫌よ。分った？磔は、厭よウ。アハハ、ハアッ、ハアッ。」

☆

憎らしい程可愛い女だ。

☆

☆

思いつき責め上げ、グッタリとノビたと思っても、いつの間にか、あいつの牀には精気が戻っているのだ。

あいつは愉しい女、悦虐の魔女だ。あいつのための節制で、俺は一層健康になった。

いつか、あいつはあの魔力で、あいつも知らない間に俺の妻になっちまうだろう。あいつの知らない間に奥秩父の山荘は、あいつの所有名儀になっているのだから……。

調教師達から「奥さま」と呼ばれて、あいつはどんな顔をするか。あいつの事だ、きっと俺を愉しませてくれるに違いない。くそっ！土曜日が待たしいぞ。

(終り)

ニューモデル未発表新作緊縛フォト集

ヌード初縛り

大名刺 三枚一組 二〇〇円
 ニュー・モデル 平野笑子
 略号 (みい)

全裸股間縛

大名刺 五枚一組 三〇〇円
 ニュー・モデル 岩井知子
 略号 (みは)

観念の座

大名刺 三枚一組 二〇〇円
 ニュー・モデル 平野笑子
 略号 (みほ)

開股縛くらべ

大名刺 五枚一組 三〇〇円
 ニュー・モデル 絹川文代
 略号 (みと)

実写フォト 礎

(ハリツケ) 三態 略号 (はり)
 モデル 大塚啓子 大中判印画紙焼付 三枚一組 四〇〇円

ヌード初縛

大名刺 五枚一組 三〇〇円
 ニュー・モデル 田原美佐子
 略号 (みろ)

全裸後手くらべ

大名刺 三枚一組 二〇〇円
 ニュー・モデル 平野笑子
 略号 (みに)

全裸股間縛

大名刺 五枚一組 三〇〇円
 ニュー・モデル 絹川文代
 略号 (みへ)

椅子開股縛

大名刺 三枚一組 二〇〇円
 ニュー・モデル 絹川文代
 略号 (みち)

女体緊縛フォトE組

9×13印画紙焼付

ES1 ヌード緊縛集

モデル 佐賀美智子嬢
 三枚一組 二五〇円

ES2 全裸悦虐集

モデル 須川 令子嬢
 四枚一組 三〇〇円

ES3 腎 羞

モデル 佐賀美智子嬢
 三枚一組 二五〇円

ES4 酒宴の弄者

モデル 佐賀美智子嬢
 二枚一組 二〇〇円

ES5 脱がされる娘

モデル 須川 令子嬢
 五枚一組 三五〇円

ES6 あわや寸前

モデル 佐賀美智子嬢
 二枚一組 二〇〇円

ES7 剥れたスロース

モデル 佐賀美智子嬢
 五枚一組 三五〇円

ES8 乙女のすべて

モデル 花坂 道子嬢
 七枚一組 四五〇円

ES9 女学生の縛り

モデル 須川 令子嬢
 二枚一組 二〇〇円

ES10 緊縛のベッドシーン

モデル 佐賀美智子嬢
 六枚一組 四〇〇円

新人モデル嬢新作緊縛姿態集

大手札型(9×13センチ)印画紙焼付

愛川悦子嬢の巻

六枚一組 四〇〇円

☆ベッド変型縛り(略号1)

四枚一組 三〇〇円

☆全裸強烈縛り(略号2)

四枚一組 三〇〇円

大塚啓子嬢の巻

☆股間縛り (略号3) しん3

☆全裸縛り(略号4)

五枚一組 三五〇円

田中芳代嬢の巻

☆セーラー服縛り(略号5) しん5

五枚一組 三五〇円

☆股間しばり(略号6)

四枚一組 三〇〇円

乗馬服と高倉みゆき

昨年の暮だったと思いますが、東京新聞に「よい年でした」という欄が連載され、その中の一つに高倉みゆきさんがのっていました。その欄には高倉さんの乗馬ズボン姿の写真



が大きく載せられ、「乗馬服で明け暮れ」という見出しと、川島芳子でデビューして「女間諜曉の挑戦」で今年の仕事を終るのは、乗馬服で明け、乗馬服で暮れたことになるのだ、という意味が書かれていました。きっと乗馬ズボンマニアの方ならば、誰方でも、注

乗馬ズボンシリーズ落穂集

(その四)

藤 山 秀 緒

意してお読みになったと思うのですが、その後、月刊雑誌の口絵や、グラビヤ頁などでも高倉みゆきさんの「女間諜曉の挑戦」は、よく見うけられるようになり、あの黒革のジャンパーを着、純白の乗馬ズボンに長靴をはいた勇ましい高倉さんの姿に接する機会が多

くなりました。

そしてその写真の説明には、きまって「今年の大半を乗馬ズボンをはいて過してしまっただ」と高倉さんが歎いた、と述べられています。

私はこのような記事から、いろいろな事を連想するのです。

まず第一は、本当に高倉さんは、こう云う服装が嫌いなのだろうか、という事。——それは「……と歎く」という字句から考えて、そう考えてよいのかもしれませんが。

第二には、彼女は、「川島芳子」から「挑戦」の三津井雪に扮するまでに、明憲皇太后をやったり、不如婦の浪子、その他何本かの作品に出演しているの、とても「歎く」ほど長い間乗馬服を着通して来たわけではないのにわざわざそうした表現を選んだことに、編集者たちの趣好がうかがわれることです。

第一の問題は、後で詳しく分析させていたことにして、第二の問題ですが、殊更にこういう表現を用いたことは、やはり男性の間に何か言葉に表わし難い此の種の服装への好奇心や嗜好がうかがわれるように思えてなりません。

そして第一の問題にかえるわけですが、高

倉さんにしても、大半をこの服装で過してしまっただ、と云うほど着ては居なかったのに、わざわざ此のような表現を用いて、歎いて見せたということ。この事にしても、二通りに考えられると思うのです。

普通には、本誌でも先生方が屢々述べて居られるように、乗馬服姿を、サジスチンの理想の姿としていますが、これは、その服装をしたことのない人々が観念的に作りあげた偶像のように思われてなりません。

たしかに銀の拍車と黒光りのした長靴や、腰のふくらみをきわ立たせるあの乗馬ズボンに身を固めた女性の美しさは、凛々しさと共に中性的なお色気を感じさせるものですが、だからといってその女性が、いたずらに中性的であったり、威圧的であったりした時は、むしろ嫌悪を催させると思います。

私の体験によれば、この服装は、きゆうくつで、長い間着けて居るのが甚だ苦しいものです。まず第一にあの重い長靴。——これは穿いたが最後、よほどのことがなければ脱ぐわけにはいかないし、拍車をつければ重味は更に加わって、とても歩きにくいものです。

そして、長い間には、靴の中は、むれてしまっただ、夏などは汗が流れ、靴もズボンもし

つとりとするほどです。

そして、私がいつもいつも云うあの悩ましい乗馬ズボン。これも脚部はびっちりとするきのないように仕立て、編上げかボタンで固くひきしめます。そして、大腿部から腰へかけては大胆なふくらみを持たせ、ウエストで再び固く固くしほりあげてあるのです。ですから脚部は長靴の重味と細身の仕立てのために何となく緊縛感があり、ウエストをしめるときに、ぐっ、とズボンを上へ引上げて腰をきめれば、縛りと同じようにくつきりと喰込んで、はつきり下腹部を浮き彫りにします。

——このようにズボンをきゅっと引上げると、自然に脚部も絞りあげるようになり、軽いしびれを感じます。ところが乗馬ズボン姿の醍醐味ではないでしょうか。

このように、乗馬服姿は、よそから見ると違って、一種の拘束感と緊縛感を伴いますから、服装だけとして見た時は、むしろマゾ的な要素の方が多いように思うし、女性らしい美しさもマゾヒスチンの方がよく出るのではないかと思うのです。

これを高倉みゆきさんに当嵌めて考えてみましょう。

高倉さんは、もと、和田道子の本名で東映

にいらっしやったのを、新東宝の大蔵社長が抜擢して主役をふり、新東宝のスターにしたのだときいていますが、その第一作が、これまで、本誌にもいろいろ取上げられた「戦雲アジアの女王」の川島芳子だったのですから、いわば、みゆきさんにとっては、のるかそるか、ぎりぎりの気持だったに違いありません。

そこで、いままで、しとやかで日本趣味だった高倉さんは、相当な決意で準備にかかった。——その第一が、「乗馬」だった。いままでの高倉さんからは想像もつかない「転身」だったことでしょう。

のるかそるかに追いつめられた女性が、いままでの自己を捨てて、血のにじむような乗馬訓練をうける。……此の事だけでも私には軽い心のうづきを感じさせます。

それは丁度、本誌の増刊に、載っていた口絵、四馬先生の「鞭をさげる女」の解説に、「乗馬させられる女」という註がついていて私をしびれさせたのと似ています。

高倉さんが、その後も乗馬を好きになれなかったらしいことは、雑誌などから推察出来るのですが、それは彼女の中に抜きがたいマゾの血があることを、彼女の芸風の示すそれ

と共にハッキリと表わしていると思うのです。そこで、乗馬は好きになれなかったが、何となく乗馬服だけは気にかかる——というのが高倉さんの本当のところではないでしょうか。

そして、私たちが感じる女優、高倉みゆきへの魅力は、実に此の「乗馬させられる女」としての彼女の「女性らしい倒錯」にあると申せましょう。そして、こうした彼女の魅力をいち早く発見してそれを育てようとする大蔵社長は、この道のすぐれた指導者といわなければなりません。（ただ、監督や、その他のスタッフがまだ此の真意を理解していないように思われますが、それは後に述べます）こう考えて来ると、川島芳子も、三津井雪も、企画としては面白いのに実際の出来栄が、いま一息だったことさえ容易にうなづけてまいります。

それは、彼女が、心ないスタッフのために乗馬服から来る固定観念にしばられて一方的にサジスチンとしての性格で演技をさせられていることです。

拳銃をひねっても、一向すっきりしない。会話の中に「君」とか、「……だった」というような、レスポンス記事によく見かける中性

的な調子が織込まれていても、なんとなく板につかないし、きっぱりしようとする声が割れてぎこちなく聞こえる。

こうしたことは、すべてスタッフが彼女の使い方を誤っているからだと思うのです。

川島芳子も、三津井雪も、ともに結末は「悲恋」に終わっているのに、そうした彼女をさいなむ悲しみが、テーマとして一貫していないのは、結局乗馬服への固定観念が、やさしい悲恋の女としての面を描くことをためらわせているのではないのでしょうか。

その意味でも、最後に失意の中に涙を恸えて去って行く高倉みゆきの演技が、全篇を通じて最もよい出来だったと思います。

もし高倉さんが、これをお読みになる機会があるなら、そして、大蔵さんが、これを御覧になったら、きっとこの考えに賛成して下さると思います。

大蔵さん、高倉さん、今度こう云うものをお作りになる時は、強い女にならずに、やさしい大和撫子として乗馬ズボンをはいて下さい。——その時は、もちろん縛られたり、蹴られたり、苦勞のしつづけで、最後に負傷するか、この際思い切って華々しい切腹を見せるのもよいではありませんか。そしてそのハ

ッピーエンドは、彼女の死が立派に報いられて、喜びのうちに息を引取るような形でまとめていただきたいものです。私がいつも描くような特殊なマニア向きのものでなく、苦悶も、二、三カットにして美しい切腹の光栄を描いたならば、きっと外国人にも喜ばれることでしょう。

男装の高倉みゆきの魅力——それと彼女のあのつぶらなひとみ、手足の短さ、ウラ声をおぼろげに思わせるかげりのあるセリフなどから、マゾの魅力。と断定するのは私ばかりでしょう。

○

(映画のあらすじ) 三津井雪は、北支派遣軍の特殊工作組織むらさき機関に属して、日本軍スパイ網のヒロインであった。雪の配下に赴任した岸井隆は雪の命を受けて支那側スパイで京劇のスター林晃彩に接近したが、遂に晃彩と相愛の仲になり、祖国と愛情の板ばさみに苦しみ、支那スパイ網の中心に潜入して惨死する。しかしその働きで雪は、北支派遣軍総司令官爆殺の陰謀を探知し、支那側スパイ全滅の緒をつくる。臨終の岸井から、晃彩を愛しているときかされ、ひそかに岸井に心を寄せていた雪は、

失意の身を日本へむけて帰って行く。
……これを私流に翻案して書いて見たのがこの筋書です。

死の説得

——司令部の一室(中央に雪、左右に上官が二人立っている)

「三津井君、君はあの岸井に対して全責任を負いたまえ。敵の本拠と思った処は、すにぬけのからで、しかも時限爆弾まで仕掛けられていたではないか。岸井に裏切られた。その償いとして、今夜中に岸井を消して貰いたい。」

「えっ」

「岸井の居場所を知っているのは君だけだ。」

「岸井を消すのだ!」

「しかし……機関長、岸井が潔白であると云う証拠があれば……」

「無駄だ! 今は君の潔白を証明する為にも、岸井を消して貰いたい。」

「……わかりました。岸井の全責任は私にあります。この申訳は……私、自分でつけます。機関長、少佐殿、お二人とも、御諒解のゆくような結末をきつとつけます。」

「早く行け」

「はい!」

雪は一礼してしずかに扉をあけた。彼女は室外に出ると、決心したように、革ジャンバのの前をひらいた。ネッカチーフをとると、下は男仕立のワイシャツだった。

ちぎるようにボタンを外した。ブラジャーも、コルセットも引きちぎった。乗馬ズボンのベルトをゆるめるでぐっと押し下げ、下腹部を締めつけた。ジャンパーの裏のポケットの左から拳銃を抜き取り、床に置いた。右からは守り刀が現れた。鞘を払い、刀身に白布を巻いた。……

雪は、短刀を執って流石にためらった。

……いま岸井を消せば、これまで喰い込んだ敵スパイ網との連絡は水の泡となる。しかし今となつては岸井を殺す以外に彼女のとる手段はない。ああもう一息の処なのだ。岸井を殺さないためには、彼女が自ら命を断つて上官二人を説得する他はない。

彼女は岸井も愛している。しかし、同時に自己の職務も忘れてはいないのだ。

雪は、岸井を通じて立てた敵スパイ網全滅のための作戦に、若い命をかけようとするのである。もう、一日だって上官は待ってくれない。しかし、彼女が命を捨てて頼んだなら

ば——悲壮な雪の決意。

……雪は、壁にもたれ、左手で胸から腹、腹から胸へと揉み上げ揉み下した。最後の身づくろいである。

大きく息を吸った。……静かに吐く息。

再び息を吸い込んだ彼女は、心持ち反り身になって、張りつめた左の脇腹めがけて、

「うっ……」

とばかりに刃を突立てていた。

「む、む……」

上体は前にのめったが、乗馬ズボンの両脚をふんばって壁にもたれているので、倒れるおそれはない。雪は、いま突立てた刃の冷たさを下腹に感じつつ、その感覚をかみしめるように、

「う、ううっ……」

と、短刀を更に深く突込んで行った。雪の顔は一瞬あからみ、そして蒼白にかわった。唇を噛み、頬をひきつらせたが、呻きはじつと泳えている。

深く刃が腹中へ没すると、雪は、不自由な乗馬靴、乗馬ズボン姿の立ち腹を、不思議な迄の冷静さで自ら観察した。

それは、自虐の喜びであり、他人の犠牲となって死んで行くマゾヒスティクの喜びであっ

た。

軍籍に身を置いて、女だてらに敵中ふかく入り込み、或る時は人も殺さねばならないし、女らしい身だしなみも許されず、いつも男装に身を固めて、拘束の中に生きている女スパイ。

雪にとっては、乗馬靴も、乗馬ズボンも、拘束服としての着心地を感じさせた。

そして、いま雪は、責められ、辱しめられ、愛する岸井と共に祖国を救うために自己を犠牲にして、その志を完了しようとしているのだ。

これが喜ばずにいられようか。

雪は、次第に情感の頂点へとこのぼりつめて行く。妖しいまでのなまめかしさで力をしぼり、刃を抉った。

「ハッ、ハッ、ハッ……」

肩が激しく喘ぐ。そして……。そして。

雪の苦痛の陶酔は絶頂に達した。

「ウッ、ウーッ！」

雪は悩ましく呻いて、どっと床に腰を落した。乗馬ズボンの両ヒザが、左右にはげしく泳ぐ。

「ウムウッ！ く、く、く……」

彼女は海老のように体をこごめて、一文字

に引廻した。

ぐっ！ と五、六廻引廻しただけで、鮮血は乗馬ズボンを伝って後から後から床を這った。

雪は、もっと右へ引廻そうとあせる。ぐっ、と力をこめて右へ引く。

「あ、あ、あ、く……」

彼女は、声もうわづり、泳え泳えつつも次第に喘ぎは、呻きへと変わって行く。

「ウ、ウーッ……」

雪の短刀を持った右拳が、右脇腹の下部、乗馬ズボンのベルトに接して、がっきりとまった。

一文字に切り完せたのだ。

雪は、弱る心をはげまして、立上ろうとする。……しかし、もう下肢は、ひきつって雪の意志の儘にはならないのだ。

「む、む、むうっ、うむうッ！」

彼女は、右手に刃を抑え、左手に、いま閉じた扉のハンドルを掴んで、必死に伸びあがろうとする。そして、

「ウ、ウーッ！」

必死の力をふりしぼってハンドルを握った瞬間、扉は内側へ開いて彼女は室内へ崩れて行った。

どさり、という物音、若い女の押泳えた呻き声。用談中の上官二人は、驚いてドアの前へ走り寄った。

雪が倒れている。しかも、革ジャンバーの前をくつろげ、その雪のような肌を唐紅に彩った凄惨な姿！

自決！

とっさに上官二人は顔を見合せた。

機関長は、俯伏せに倒れて喘ぐ雪の肩をつかんで抱き起こした。

雪は、激痛と斗い乍らも行儀を正そうと、不自由な乗馬服姿でのたうっている。

「三津井君！」

「ううっ、み、三津井雪……い、生命をかけてのお願い……。ま、待って……。き、岸井を、岸井を……。い、今しばらく……。いましばらくッ、ア、ア、ハッ」

雪は身悶えして深傷に堪えている。上官二人は当惑したように雪の顔を覗き込んでいる。

「お、お願いです！ い、い、いま、岸井を、岸井を殺せば、わ、私たちの……。く、苦心は……。水の泡……。せ、せめて、十、十日……。い、命にかえて、み、三津井雪の……。ち、血汐にかえて……。こ、この通り

……。お、女だてらに……。は、は、はらを、キ、キッテ、おねがい……。」

上官もあまりのことに声もありません。

「ああ、こ、こ、これほどに……。これほどにおねがいしても……。ううむ、だ、だめなのか……。き、機関長！ き、切ります……。もっと、切ります。も、もっと、もっと……。」

「ま、まだ、うう、ま、まごころが……。た、足りぬのか、こ、この通り……。」

「ああ、と激しく喘いだ雪。」

「む、む、む、うううっ！」

右脇、乗馬ズボンのベルトに接していた刃が、が、がと一匹、右のあばらへと切り込むのだ。

「アッ！」

雪は、全身をふるわせてのけぞった。

上官二人は、雪の激しいけいれんに、いまは、この女丈夫も介錯すべき時と判断した。

雪は、

「ク、ク、ク、ハッ……」

と必死に刃を振り、もえるような眸で二人を見あげている。

苦しきみぬいて初志を貫こうとする陶醉美の極致だ。

「お、お返事をーッ、ウーッ！」

何度も云って扶るのである。

二人も、いまは雪の赤心に免じて、岸井を助けるより他はなくなった。

二人の返事は雪の最後の光明であった。

雪は、ぬめぬめと乗馬ズボンを染めて溢れ出た血みどろの臓腑を、抱くようにして傷口へ押し込み押し込み、

「あ、ありがとうございます……。こ、ごさいます……。み、三津井雪……。死、死んでも、御、御恩は……。わ、わ、忘れません……。ボ、ボタンを、ボタンを、ボタンをかけて……。」

溢れ出た臓腑を腹中に収められねば、せめて革ジャンバーのボタンをかけて、見苦しくない姿で断末魔を迎えたいのである。

上官は雪を抱き起こした。

すでに彼女は介錯するまでもなかった。

雪は、悩ましくもいたましい断末魔のけいれんに入っていた。

「ボ、ボタンを、ボタンを！」

こわばる舌が叫びつづける。いまは女のだしなみ、ボタンをかけ、俯伏せに最期をとげたいのが殉国の乙女の心意気なのである。

ボタンがかけられようとしている。上官が苦痛にのけぞる上体を支え、静かに臓腑をとりあげた。

つかみ出す以上の苦しきだった。雪は脂汗にまみれた。

「ぐうっ！」

雪は激しくのたうって臓腑を抑えた。

やむなく臓腑をはみ出させた上から、革ジヤンパーの前が合わせられ、ボタンがかけられた。

どさり、どさり……。

二度、三度……。

倒錯美と自虐の極致。高倉みゆきが扮する三津井雪は、幻のように消えて行く。

散りて悔いなき

「喜美子さん、もうだめです。後は僕が引受けます。逃げて下さい！」

佐伯少尉は僅かの部下を励まし乍ら敵と戦っています。喜美子と呼ばれた女性……そうです。黒革のジヤンパーに乗馬ズボン、黒の長靴に身を固めた男装の麗人も銃銃を取って撃ちまくっているのです。

この一団は日本軍の特殊機関に属する人々。それが、彼女——魚住喜美子の摺んだ情報敵のワナと知らず、まんまとおびき出されて奇襲をうけたのでした。

喜美子は、無念さ、申訳なさに歯がみをし

ましたが、多勢に無勢では手の下しようもありません。

完全に包囲されないうちに！

いまならば逃げられる。……けれど誰かは残って応戦し、時をかせがなければならぬ。

佐伯少尉は、部下二、三名と共にここへ残って戦死し、喜美子以下二、三名に重要書類其他を持たせて逃がそうとするのでした。

でも、喜美子は逃げようとはしません。

「佐伯少尉！ あなたは大事な体です。私こそ申訳にここで死なねばなりません。私にかまわず、逃げて下さい！」

「喜美子さん！ 女性のあなたをのこして佐伯は帰れません。あなたこそ早く！」

「佐伯少尉……。魚住は、たとえいまここから生きて戻っても、この申訳には司令部で、報告が終り次第自決する覚悟です。それよりは、あなたが、生きて帰られた方がお国のためではないでしょうか。魚住喜美子に死場所を与えて下さい！」

「しかし……」

「一刻も惜しい。佐伯少尉……秘密書類を焼き、撤退して下さい。私は、どちらにしても生きては居ないつもりです。同じことなら、

敵を防いで立派に戦死したいのです。さあ、はやく！」

「喜美子さん。では佐伯は撤退します！」

「さようなら！ 魚住は、ここで女中らも切腹します。苦しみに苦しんで時をかせいでみせましょう。」

「では、……成功をいのります。」

佐伯少尉は、一、二の兵士を喜美子につけ、自分は帰りの人員をまとめて、敵の目を避けつつ撤退して行くのでした。

魚住喜美子は、佐伯一行を送り出した後、三名の部下を自ら指揮してあるだけの弾丸をうちまくりました。

敵がひるんだ時、彼女は突如白旗をかかげさせます。敵の銃撃がやみ、何やらわめく声がきこえます。

喜美子は、そばの民家にかけてあった梯子をつたって九分通りまでのぼり、革ベルトで自分の体を梯子にしばりつけるのです。

ああ、喜美子は何をしようとするのか……。敵も、あっけにとられてこの梯子を見守っている。

——彼女は、梯子に体をしばりつけ、敵の方へむき直ります。

じり、じりとつめよせる敵兵。

彼女は、いつのまにか革ジャンバーの前をひらき、シャツブラウスのボタンをはづして腹部をくつろげていました。……右手には短刀が光っています。

なめらかな中国語が彼女の唇から……。

「武運つきた女将校が、どのような最期をとげるか、語り草によく見よ！」

という意味が、りりしくひびくのです。

時をかせがねばならぬ彼女は、様々な方法で、自分を責め、のたうち、あえぎ、そして悶え死ぬ覚悟なのです。

静寂……。

そして、深い、深い息が……。

「うっ……」

短刀が一仄、革ジャンバーの内へ吸込まれるように消えると、彼女の上体が前にのめりました。

「う、ううっ！。こ、これより、ひ、ひき廻して……」

短刀は、じりじりと腹の肉を裂いて行く。

鮮血が乗馬ズボンを伝って地上へ滴っています。二人の兵士が彼女の梯子を支え、一人は万一彼女の切腹中、敵兵が辱しめるような事があったとはと銃を構えています。

梯子の上で切腹したのは、敵兵によく見え

る位置で苦悶し、時間をかせこうとする彼女の健気を作戦なのでした。

「ウー、ウー、ウウム、……ウーッ！」

一気に右脇まで掻き切った方が苦悶は少ないでしょうに、それをしないで、ずぶずぶと一分一分しごくようにして腹を割いて居るのも時をかせこうとする涙ぐましい努力なのです。

敵兵も、じりじりつめよせながら、口々にその凄惨さと倒錯的な美しさをわめきあい、銃撃はやみ、佐伯少尉一行の脱出には全く気がついていない様子。

喜美子は嬉しさに、切廻す手にも力がこもるのか、傷も深くなり、苦悶の演技も熱が加って、太モをベルトで梯子にしばりつけた不自由な姿ながら、文字通りのたうち廻って絶叫しています。

「ウーッ、ウーム、むむっ、ま、まだ、まだ……ああっ、アアッ……」

三十分はもたったでしょうか。

——彼女は、パツクリと口をあいてしまうほど腹を一文字にかき切っていました。

「ウー、ウウ……。お、おのれ……。し、し、支那兵ども……。お、女中らも……。日、日本人の……。ぞ、臓腑……。か、かき切って自決……

……さ、さいごの、さいごの苦しみ……見、見よ……見よッ！」

ううっ、と低く呻いて短刀をひきぬくや、左手は、ワナワナふるわせながら、傷口ふかく、がばと突込むのでした。

「グエーッ！……ウーッ、な、な、なに、こ、れ、し、き、にッ……」

充分に突込んだ左手が、血みどろの腸をつかんで引きづり出そうとあがく。

「……ク、ウーッ！」

ああ、血にぬめぬめと妖しく輝く臓腑……。彼女の苦悶は、もはや演技だけではありません。

「アアッ、アアッ、あ、あかき心……。か、神々も照覧あれ、い、いまこそ、は、は、は、はらわたを切りさいて、申、訳……」

引出された臓腑をつかみ、虚空をにらんで息をはづませる喜美子……。

「ええっ、ウウーっ、うううーむっ……」

激しい呻きと共に臓腑へ刃が加えられ、左手がけいれんし、必死に追う右手の短刀が、ぐっ、ぐっ、と抉っています。

敵も味方も、あまりの壮烈さに声さえ立てぬのでしょうか。

……やがて一時間近い時間がたっていました

増田 義彦 テン

正月映画で、筆者の見た範囲の縛られた女優達は丁度、十人いたので、その演技の良さ、緊縛時間の長さ、監督の演出等を加味して順位を決めてみた。

た。彼女は絶叫する声もかれ果て、虚空をつかんで断末魔のけいれんをつづけています。梯子の下には、切り取られた臓腑が這い、短刀が地中につきささって、見上げる五尺の高さには、血みどろの乗馬靴と、乗馬ズボンが断末魔にもがいて居るのです。

「魚住さん！ 一時間たちました！ もう大丈夫ですッ！」兵士が叫ぶ。

註、ここに発表した映画は、都会ではほとんど十二月封切であるが、二番館、三番館では正月映画である。

「う、ううっ、こ、こ、これで……は、本望……か、介錯を！」

「ハッ」

兵士は銃を取り涙乍らに彼女にむけます。

「すぐ、お後から参ります……御立派でした。天皇陛下の万歳を！」

「お、おお、……天、皇、陛、下……ク、ク、……ば、万歳……」

轟然一発……。

のけぞる喜美子。

彼女がのめると同時に、突然おこった銃撃、支那兵は算を乱してのがれる。再び烈しいうち合い。……数刻の後、喜美子の死を見届けた日本兵たちが、突撃を敢行して華々しく散ったことは云うまでもありません。

富士真奈美は高田浩吉の妹に扮し、兄を誘い出すため人質として捉われ、村はずれの松の太木の下で数人のやくざ達に後手に縛られ狼轡をされる。後から豆縛りの手拭で狼轡をされる時の苦しそうな表情。更に頭上の太木に鉄砲を持った男が隠れていることを兄に言葉にならない呻き声と目顔で知らせようと努力する演技。そして、兄に救われるまでの時間の長さは、一位の価値は十分である。

青山京子は、映画界に身を投じて七年目に於いて初めての縛られ役であるが、監督が伊藤大輔だけあって後手狼轡のまま逃げ廻り、果ては伊沢一郎扮する浪人者に押えつけられ、必死になって首を振り狼轡をゆるめ、恋人菊之助の名を叫ぶシーンなどは、

順位	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10
題名	妻恋道中	弁天小僧	弁天小僧	謎の南蛮太鼓	妻恋道中	捕物道中	ふり袖ざくら	七人若衆	大いに売出す	大いに売出す
女優名	富士真奈美	青山京子	近藤美恵子	山東昭子	鳳 八千代	桜町 弘子	美空ひばり	川口 のぶ	長谷川 裕見子	浜村美智子
会社名	松竹	大映	大映	東映	松竹	東映	東映	松竹	東映	松竹
猿轡後手	2	1	3	4	5	6	1	1	1	1
間時	6	2	5	1	8	7	1	3	10	7

(緊縛感)

緊縛女優ベスト

初めてとは思えぬほど
迫真の演技であった。

今後もしも引続き大映、松
竹等で時代劇に出演す
るので楽しみである。

近藤美恵子は、相変
らず美しい緊縛姿を見
せてくれる。彼女とし
ては天然色で縛られる
のは二度目であるが、

最初の「赤胴鈴之助」
では青い手拭の猿轡。

この「弁天小僧」では
赤い手拭の猿轡と、い

つも違う色の手拭を使っている。映画の猿
轡と云えば、豆紋り松葉散し、白布、黒布
と相場は決っていたのであるが、彼女は今
まで四回、猿轡をされたが通俗的な、これ
等の猿轡を使用したことがないのは、自分
の顔に似合う猿轡を意識しているのではあ
るか。

山東昭子は菊路に扮し、清国大曲戯団一
味に拐われ無理矢理、支那服を着せられ、
服と同じ緑色の布で猿轡をされ、奇術に使

う箱へ押し込められる。恐怖におののくアッ
プが数回あり、楽しませてくれる。

鳳八千代は宝塚時代、二度縛られたが、松
竹に入社して初めての縛られ役であるが、猿
轡だけで手の縛りはよく見られなかった。恋
しい浩吉の後を慕う旅の途中で、やくざ達に
取り囲まれ、松葉散しの手拭で猿轡をされ、
両手を背中中にねじまげられ引立てられる。場
面が変わると駕籠の中の猿轡のアップ。但し、
いつの間にか猿轡が白布に変わっていたのはお
かしい。

桜町弘子は、東映一の可憐な美貌の持主で
ある。その美しい顔を半ば覆う猿轡を、デビ
ュー当時から期待していたのは、あながち筆
者だけではなかったと思うが、初めてこの映
画で猿轡をされる。中村賀津雄の妹姫に扮
し、兄に縛られ、錦之助に豆紋りの猿轡をは
められる。天然色だけに、なおさら印象が強
烈であったが、惜むらくは時間が短いのと、
悪人達に縛られるのと違い錦之助兄弟では実
に優しく縛るので物足りなかった。

美空ひばりは、いかさま賭博に引っかけかり
手足を縛られた上、物置へ投げ込まれる。手
首も本当に縛られていたし、時間的にも長い
縛りであったが、男装の縛りだけに七位にと

どめた。

川口のふは、旅籠の二階で山賊に襲われ
る。一人が松葉散しの手拭で口を押えると
一人が用意の麻縄をグツとしごく。あわや
と思った時、助けが現われてしまった残念
である。一度縛られてから助けに来て欲し
かったと思っていると、直ぐ後で又もや襲
われ、今度は白布で口を押えられ捕われる。
場合が変わると、岩牢の中で後手に縛られ座
らされている。

長谷川裕見子は、人質として黒布の猿轡
をされ、肩車で拐われる。しかし、よく見
ていないと見逃してしまいそんな本当のワ
ンカット。

浜村美智子は、岩牢の中で後手縛りの数
カット。時間的には長いのだが、女性が縛
られていると云う気のしないほど魅力サッ
パリなのは何故だろうか？

以上で少し抽象的な散文だったが、結論
的に云って「弁天小僧」と「妻恋道中」は
一見の価値があると推奨して筆を置く。

×

×

×

×

(通信)

『緊縛フォト・アラベスク』のインプレッション

「緊縛フォト・アラベスク」を観て

難波武雄

限定版「特集号」の「女体緊縛フォト・アラベスク」を観て、私のささやかな感想を書いてみました。

私達縛りマニア垂涎の的であったこの写真集を手にした時の私の心の響き、高鳴りは、手の先、足の先までブルブルとふるえ、しびれさせ、まだ頁を開かないうちから、何んとも云えない緊縛感でした。が、最後の頁を見おわった時には、貴社の折角の努力作であるこの写真集が、何だか物足りない感に襲われたのです。始めに編集同人の詞に断っており

ます様に、確かに余りに変化の乏しいものが多かったことです。オーソドックスなものばかりを並び過ぎたとのことですが、それよりも同じ感じのものが貴重な頁をとり過ぎていくことです。例えば、田代嬢の表情集の如きこの表情に焦点をおかれることはよいのですが、その全部が唯、目の方向が変わっているだけで、全然同じ表情に観えるのです。それから表題は違っても中味が同じものもありました。例えば愛川嬢の「脱がされた高手小手」の様に――。折角のこのアート刷り豪華

写真集の魅力半減というところでしょう。以下、順を追って感想を述べてみますと、

一、鏡、愛川悦子嬢。

これは傑作で、この写真集のトップを飾るにふさわしい作品です。二の腕に、くびれる様にまきついた四本の縄。それに後の鏡に写っている高手小手に縛められた両手。前後の模様が、はっきりわかり、いやが上にも緊縛感を盛り上げています。後に鏡をおいたのは秀逸。

二、銘花二輪、花坂道子嬢。

花坂嬢の縛られ方は、近藤一氏の感想通りほんとに巧いの一言につきる。くずれおちんとする花の正に、そのものずばりです。併し私は後の方の「鏡台と腰巻」の方が好きです。

三、鉄鎖、諦観、大塚啓子嬢

一本の鉄鎖に縄の端が、からみついているだけで、この緊縛された表情とは何んとも、

そぐわない感じでした。一層のこと、鎖だけで全身を緊縛した方が、よかったのではないのでしょうか。物足りないものです。又「諦観」の二枚とも同じポーズなのは不用。どちらか一方を工夫してほしかった。縄のかけ方も、物足りない。

四、庭園にて 絹川文代嬢

全頁を通じて立っているヌード縛りは、これだけ。右頁の前身の縄のかけ方は、余り複雑すぎる為、緊縛感がゼロ。まだ後身の方が魅力的である。顔の表情は全然、頂けませんね。この人を、もっと責めては如何。高手小手に縛った両腕を一段と上に締めあげると面白い。

五、謎の微笑 田中芳代嬢

いまにも胸が、はだけようとしている寝巻姿は秀逸。この頁のものより、最初の見開きの頁の下に横に転がされている方が見るものをして、ぐっと迫ってくるのを感じさせる。

首縄をつけたらよかったのになあ！

六、凝視 田代悠子嬢

「田代悠子表情集その一」で、同じ縛り方の写真を六枚。唯、表情といっても、ほとんど同じもの許りで、無駄な頁だと思う。前身の縛りだけで、後身の方も見せてもらえれば

もっと感じも変っていたと思うのに——。縛りも全然、弛い。

七、裏と 表と 愛川悦子嬢

この縛りは満点である。特に高手小手に緊縛した結び目は強く完璧。この人は大体、今までどんなに強く縛られても平気な顔をしている様に見られたが、さすがに、これは苦しそう。もっと猿轡を本格的に締めれば一層感じが浮び上がったのに。見ている私まで、この人を苦しめたい衝動を感じる人である。高手小手の両腕を高く締めあげてみたい。

八、落陽の丘 絹川文代嬢

野原の立木に縛りつけられて身動き一つできない写真六枚。立木に縛りつけるのが少し手ぬるい感じがするのが残念。この中の一枚でも、ぐるぐる巻きに立木に緊縛したものが見たかった。この人の今までの写真中では、感じもよく表われていて良い。

九、ポリウームの花園 緊縛感の綾

奔放な肢体 大塚啓子嬢

大塚嬢も愛川嬢と同じ様に、幾重にも縄をかけたらい人で、この写真の五重にも縄をかけられて緊縛されている後手縛りの厳しさは実によく縛められていて痛快だ。高手小手も厳しく高く締めあげられている。顔を後へ

そらせる程、首縄をかけた表情が見たい。さすがのポリウームのある身体も、五重の縄目で観念の態。この人も、もっと責めたい衝動にかられる。「豊かな双丘」と「豊かなヒップ」のどちらか一枚は不用。

十、鏡台と腰巻 花坂道子嬢

私の一番好きなモデル嬢である。前にも述べた様に、あの何んともいえない、いじらしさ、可憐さ、その上に寂しさが加わり、この人を一度でも、ほんとに縛ってみたい欲望にかられる。六枚の写真で、太縄と細縄と二通り使っている。一番初めの右上の俯伏に縛られ、足をばたつかせて何んとか、この縄目の恥しさから逃がれんという風情。この両足も縛ったら面白い。その下のは、猿轡のない、観念して今縛られ終ったという様な感じで前においてある鏡台に前身が少し写っているのが、もっと、はつきりと全部写してもらえばなほ良かったと思う。この人は、どの写真を見ても目を閉じ伏せているのが多い中で、これだけは顔全体の表情が見られたのに残念！左頁のは、細縄で縛ってある。首縄つきで、それにも拘らず、首を前方に曲げて観念している。さては、この首縄は少しゆるめてある様ですね。鏡台に写っている太縄の束。これ

からまだ何をされるかわからない。吊し責めエビ責め、その他、諦めをもって待っているこの、か弱き花坂嬢のやわ肌に喰いつき、若き甘き、したたる様な血を吸いとうろと横わっている。どくろを巻いた蛇の様な太縄。この場面は傑作。慾を云えば、この人の向きをもう少し正面に面向けたい。四枚目のものは、

矢張り細縄で縛った先程と同じ縛り方で、畳の上に転がされているもの。前身の緊縛と鏡台に写っている後身の緊縛とのコントラストが、よい。傷々しい花坂嬢よ！ その下のは太縄で締められたもので初めと同じ縛り方。上向きに寝転がされ、両足を立てているもの。最後のものは、細縄縛りで、後身全部が写っている。猿轡も噛まされていない。細縄が憎い程、このか弱き乙女の腕に喰いこみ、胸、背をも締めつけている首縄つきのもので顔の表情がみたい。この花坂嬢には、太縄より細縄で縛めた方がよい様です。勿論、ヌードの時ですが、この六枚の写真は、縛り方を親切に前、後と巧く見せているので、縛りマニアには良き参考となるもの。

十一、奇妙な休憩 絹川文代嬢

しごきの様な細縄で縛めた五枚の写真、強く縛めている割に痛くなさそうな表情。後手

縛りも下に、だらんとおりて緊縛感がない。併し、絹川嬢の表情は今までに一番よく、妖しいまでに輝いている。特に、五枚目の床の上に転がされ、観念の眼を閉じた失神状態の写真は秀逸。

十二、猿ぐつわの表情美のいろいろ

田代悠子嬢

田代悠子表情集その二で、猿ぐつわの色々な種類を十二枚の写真で表わしたものの。縛り方も全部その儘、表情も変わらない。表情集その一と同じでつまらない場面。

十三、脱がされた高手小手 愛川悦子嬢

始めの「表と裏と」以上に堅く緊縛された写真七枚と、「表と裏と」の時と同じ縛り方（亀甲縛り）のもの三枚である。上半身、がんにがらめというところ。自由なのは両足のみ。さすがに苦しうである。もっともっと堅く縛めてやれと云いたい慾望にかられる。豊かに波うつ姿体に、それに綾なす縦しぼり私も一度、この様に縛りたいし、縛られてみたいものだ。「縛りマニア」を満喫させてくれる場面である。亀甲縛りの方が両腕が上に締めあげられていた様です。

十四、腰元受難の巻 村井知可子嬢

腰元に扮した村井嬢の吊り責めと立木縛り

の折檻。責め手も憎らしい程の人物。吊り責めの方は、表情が余り苦しそうでないので、折角の吊りも無意味に感じる。まだ立木縛りの方の刀のこじりで首をねじ曲げられている表情の方が真に迫っている。両足も縛られていて一段と巧彩をはなっている。唯、村井嬢のマスクが腰元、いや着物には損をしている様だ。

十五、豊醇 愛川悦子嬢

喰いつきたい様な乳房のポリウムを縄で極端に表わしている。二の腕にもっと多くの縄をかけた。この後身も見せてもらえばなあ……！

十六、乱れ髪三景 大塚啓子嬢

この人のは、もっと責めぬいて、その果ての乱れ髪姿を見せてほしい。平凡。

十七、姐上の美鯉 絹川文代嬢

鏡の様に磨かれた机の上にのせられた絹川嬢。ほんとに料理したい美しさを表わしている絹川嬢。異国的情緒たっぷりな作品。

以上、ざっと書き終えました。色々自分勝手なたわごとを書き、苦心惨胆して作られた、この写真集にけちをつけたことをお許し下さい。併し、誰もが、なし得なかったこの素晴らしい写真集を作られた貴社の方々に、

深く敬意を表します。今後とも、これ以上によいものを私達の目に披露して頂きたいものです。第二集以後は、画集も出されるそうですが、私としましては矢張りこの様な実在のモデルを使った写真集の方を賛成致します。画集も勿論、結構ですが、矢張り物足りない

私の見かた

武田源之助

特集号「フォト・アラベスク」を拝見し、私なりの意見を申し上げます。

写真のみの編集は、それなりにむづかしいと思いますが、先ず、見るものにとっては、映画のカットをスチールで見るような立場にあると云って、よいのではないでしょうか。

ですから、企画はシナリオ（何も物語りに限らない）を書き、コンテを作り、それに従ってカットをつなぎ合わせるという、今はやりの8ミリ映画の編集と同じ順序に従えば一応筋の通った見ごたえのあるものになるのではないかと考えるわけです。そうでなければならぬいわれもありますが、それが非常に効果的な方法の一つであるとは、確かに云えるでしょう。この特集号も通覧し乍ら、そのよ

ものがあると思うのです。若し出されるのでしたら、その比率を八対二位の割合で写真集の方に重きをおいて下さる様お願い申し上げます。では縛りマニアの方々にも宜しく、又お目にかかりましょう。

うな期待を持っていたのですが、余りスッキリとまとまっていなかったのが残念でした。勿論筋のないものを無理に、そう見ようとして、がっかりしているのですが、デイズニーの「ファンタジア」のような見方をしていけないことはないはずですが、あれは音楽によって画面を作ったのですが、これは画面からシンフォニーを感じとることになるわけです。

表紙

先ず表紙は、いつもと変わった文字の書体と配列が、亀甲縛りの正面写真を囲んでアラベスク風な序奏を感じさせる。但し、表紙裏の写真は、まずい。寝間着でなければよかったのと思う。

第一楽章

（一）鏡、フォルテで始った愛川嬢の豊かな全裸に圧倒、そのまなざしは自然と（二）花坂嬢に受けつがれ、（三）大塚嬢の鉄鎖、諦観に一つの山を作り（四）庭園にて、の絹川嬢が受けて立つ、このあたり、第一楽章としてのアタックは実に快調というべきであろう。ついで（五）田中嬢の寝間着姿でホッと息をつく着衣の気やすさ。親近感（六）田中嬢に受けつがれると少々だれてきて、同じモチーフの繰り返しで退屈を感じる。（七）ハ前期のように（八）の主題の脚が印刷のボケで全くナンセンスになっちゃった。（九）表と裏とで突然、眠りを醒されたように、愛川嬢の強烈な姿で第一テーマの伴奏がフォルテで奏でられ、アツという間に第一楽章が終る。（この終結部は、もう二頁ぐらいあった方が効果的と思う）

第二楽章

（一）絹川嬢の落陽の丘のロングショット・バックの田園？からは小鳥の声が心よく聞え、モデラート・マ・ノン・トロポという、のどかな出だし（だが、この六頁が、ロングショットばかりに終わったのは、カメラマンの大失態で、怠慢のそしりをまぬがれないと思う。殊に「くも」という見出しなどは、クローズ・アップで始めて生きてくるのに、これでは

ア ブ

新聞切抜通信

レ ポ

茨城と千葉に“暴力教官”

バットで女生徒殴る

千葉県、旭市一中（塚本一成校長）で、担任の先生が女生徒ら十数人を野球のバットで殴り、ケガをさせた事件が二十日、父兄の訴えで明るみに出た。

父兄の訴えによると、去る十八日、午前九時頃、同校三年三組教室で、理科の授業を自習時間に変え、受持ちの大木克一教諭（三一）が高校進学事務をしていたところ生徒が騒ぎ教室内が、ざわめいた。同教諭は、騒いだ加瀬勝治君（一五）を教壇の前

打撲傷を負わせた。

同校では昨年も教師が生徒を殴ったことがあり、たびかさなる暴力に父兄たちは近く学校当局に抗議するという。

大木教諭の話 進学事務が忙しかったためつい乱暴してしまい申し訳ない。

林同校教頭の話 授業をつぶして進学事務をしてはいけなと注意していた。大木君は真面目な先生で、生徒からも好かれていた。

遅れたと平手打ち

中学校の教師が、女生徒十九人を“時間に遅れた”と平手で殴った

全くナンセンス）処が突然、③ポリウームの花園にカメラは移り、大塚嬢の豊かなヒップがクローズ・アップで驚かされる。④堅縛感の綾。⑤奔放な肢体と、息もつかせずフォルテイッテモを奏で⑥⑦の花坂嬢は、変化あるポーズで美しく静かに受けて⑧絹川嬢の奇妙な休憩で第二章は終り、ホッとさせられる。

第三章 スケルツォ

⑨田代嬢の猿ぐつわの表情が、ピエロの扮装よろしく登場。人をからかったような、くすぐるような八頁は、やはりカメラの変化が乏しく、もう少しクローズ・アップを強調してアクセントをつけてはしかった。全部、前面で後手が見えないのも又、そのためか緊縛感の足りないのも物足りない。処が突然、オーケストラのトゥッティで第四章が始る。

第四章

⑩脱がされた高手小手。愛川嬢のホルセットブラジャーを、はみ出しそうな豊かな体に喰い込む縄目は、苦しそうな猿ぐつわの縦しぱり。⑪亀甲縛りと第一楽章のモチーフを再現させて、全面のクライマックスに盛り上げ⑫⑬の腰元受難の巻は場違いで迷い込んだらしいので、糊で貼りつけてしまう⑭豊醇なヌードは⑮大塚嬢に受けつがれ、均整、観念

という事件が、茨城県西茨城郡北川根中学校（村岡盛邦校長）に起り、父兄たちが「暴力教官だ」と騒ぎ出したために、二十日、県教育庁で調査をはじめた。

父兄たちの話では、先月十三日、同校三年B組担任、斎藤清栄教諭（二三）は、体操の時間に十九人の女生徒が約十五分遅れ長グツやオーバーなどを着て出席したのを怒り、一列に並ばせ「お前らは体操をやる気があるのか」ととなり、平手で殴ったという。

同校では、事件が表面化するのを恐れてかくしていたが、一部の父兄から「生徒を並べて殴るとはけしからん」と騒ぎだしたものである。県教育庁でも、十九人を他の生徒の前で殴るのは、教育上よくない。実情を調べた上で処置したいと語っている。

斎藤教諭の話 殴ったというほどではない。時間に遅れ、しかも体操に、ふさわしくない服装をしていたので注意したまでだ。

（昭和三十四年二月二十一日附）

（東京新聞）

この、教師が生徒を殴ったという記事は

紙面の中央に四段見出しで載っていた。これが男生徒なら、せいぜい二段程度の見出しであろうが、女生徒となると、ぐっとお色気のおまけがついて、取扱いが大きくなるからおもしろい。中学三年、十五歳といえ、もう一人前に近い娘である。いかに教室で騒いだからといって、そのお尻をバットでなぐるというのは、どうも、おだやかではない。

本誌の四月号に、幹本完治という人の「悪徳教師考」という手記が掲載されていたが、あれは圧巻であった。教師という職業をもつ人間の、あれほどまでにナマナマリ、真実と人間性に溢れた、（たしかに悪徳的ではあるが、人間の弱さ、かなしさというものも、よく表現されている）文章を私は今までに知らない。

この「暴力教官」の記事も裏を掘り返せば、案外に興味ある教師の人間性が、ひそんでいるかも知れない。

（提供者 藤木仙治）

屈伸と、激しい、しかも静かなフィナーレを奏でる。（これで終結となるべきなのに（国）は余計なものだから切り取るべし。殊に最後の絹川嬢の縄が、ゆるんでいるのでダラシがない。）

裏表紙の大塚嬢のフォトは、ぎっちりかかった縦、横の縄と静かな表情が、大シンフォニーの余韻を残して名残りを惜しませるもので、実に素晴らしい。

こんな見方をする読者があるということは何卒お忘れなく。無難なもの、オーソドックスなものを遊びすぎると、おっしやっています、私は決して、それだから変化に乏しいものになるとは思いません。モデルのポーズのかけ方の変化以上に、カメラの変化をつけてほしい。本文中にも書きましたように、ロングあるいはセミロングの中に、アップをうまく入れることによって、ぐっと引きつけられるように感ずることは必定です。又、アップばかりでは物足りなく、退屈になることと「アップ」ということです。第四集、予定が「表情とアップ」ということですが、この失敗を繰り返さぬよう大いに御考慮願います。

未来幻想小説

家畜人ヤブー

沼

正

三

第二十八章 狩獵場へ

一 足踏錠と肉リフト

いつのまにか、上昇機^{ノフト・リフト}の旗門の所にまで移動して来ていた遊仙窟^{フエアリ}地球別荘別荘の一室――

レイノオが手で合図すると控えていた畜童達^{イシセル}が手に手に何か持つて飛んで来た。いよいよ戸外へ出て雪上畜狩獵^{スノ・ハンティング}にゆくので、完全に身支度をさせるわけだ。アノラック姿のクララ達の背に鞆^{タヌ}(矢袋)を背負わせ、腕に鞆^{タヌ}(革の弓射具)を取り付け、……畜童達は甲斐

初めて読む方に 今から二千年後の宇宙帝国イース。女性が男性を圧倒し、貴族平民の別ある白人達の下に奴隷階級の黒人が仕え、更にその下にヤブーと称ばれる黄肌の家畜人が白人の生活を快適にする為使役受玩消費されている。科学の力は一瞬に失った肉体に現在人の想像も及ばぬ変形を加え、畜人犬、畜人馬や、矮人を作り出し、更に肉便器その他の生体家具各種を誕生させた――劣等人を家畜化し家具化し切った白人達の女権的貴族政治の世界、その精密図を描くのが、この小説の第一の狙いである。

イースの大貴族ジャンセン家の嗣女ボーリーン、その妹ドリス、その兄セシル、彼の義弟ウィリアムは、本国星カルーから

甲斐しい腰元ぶりである。

こちらを振り向いたアンナ・テラスの顔にクララは吃驚した。端正な希臘鼻の角度、優美な顎の曲線、確かに彼女の容貌だが、あの輝く肌が黄色白粉で塗り潰され、大きな緑色の眼は黒い瞳に変わっている。豊かな茶色の頭髮の代りに、左右に分けて耳隠しの雷を作ったみずら結の黒い髪……

——頭は先刻、襟から背中にもぶら下げていた仮髪つきの頭巾を冠ったのに違いない。日焼止めのクリームで化粧したのは分るけど、眼の色は？……雪眼鏡を接眼球レンズにして嵌め込んだのかしら？

無理もない想像だったが、畜童の一匹に自分のフードをかぶらされて、事情が分った。頭部から顔面までスポリと包んでしまう畜人皮の覆面帽、既製品ながら（本来は使用者の体に合せて成育させたヤブーの皮を使うのである。一六章一節）——先刻から僅かの間にレイノオが畜童に命じて客人達の顔の造作の寸法を取らせ、それに合せて修正してあるから——顔面に薄皮が暖かく密着して何の不快感もない。高山の稀薄な大気内での行動を楽にする様、頭髮の中に隠された酸素発生装置から、新鮮な空気が送られるから、息苦しさもない。みずらは耳覆を兼ねた聴音器になっている。……更に同じく畜人皮の手袋、これも肌色が変わっただけとしか思えぬ薄手の高級品だ。それに靴下、長靴、最後に腰帯から短剣が吊られる……装備は見る見る整って行く。……

馴致椅子の中で念視している鱗一郎には、——フードを冠る動作を見ながらも——ほとんど目が信ぜられなかった。談笑していたア

地球別荘に来ている。円盤で時間遊歩に出たボーリーンの墜落事故から現代の独乙美女クララは婚約者瀬部鱗一郎と共に、二千年後の地球面にやって来た。然し、彼女がジャンセン家の客人としてもてなされ、安逸の生活を享楽し得るに反して、鱗一郎はヤブーとして扱われ、畜化処置を施される。——この家畜化の過程を細かく辿るのがこの小説の第二の狙いである。

鱗一郎はクララと無理心中を試みて失敗し、家畜適性検査を受けた上、今はイースの人になり切ってウイリアムを愛する様になったクララに所有飼育される土着ヤブーとして登録され、洗礼されて彼女を神として拝むことになる。

さて、クララはボーリーンのウイリアムと共に空中列車龍巻号に乗って、中央アジアに碇泊中の飛行島「高天原」に天照大神なるアンナ・テラスを訪れ、遊仙窟別荘で雪上畜を見、アンナの慈畜主義を聞く。列車客室内の馴致椅子に吊られている鱗一郎は天の岩戸神話の真相を知った。

鱗一郎は一瞬にして去り、再び男装の天照大神になっている。その横に手力雄命や建御雷命が立っている。……と見えながら、熟視すれば目鼻立ちはアンナでありボーリーンのウイリアムである。肌は黄色く黒い頭髮をみずらに結って明らかに上代日本男性の印象を与える姿をしながら、それがイース白人であることも疑えない。……ハッと一つの真相に気付いた。

——覆面だ、これは！ 黄色人種の顔の皮と頭の皮を剥いで頭がらかぶってるんだ！

今朝、予備檻で見かけたドリスの裸体の、首から上と下とで肌の色が違うのを怪しんだことを思い出す。あれも皮を着ていたのか？——だが、何故日本の昔の神様の服装をするのだ？……アッ、そ

れとも、イース人のプキー服装の方が先で、それが古代日本へ伝わったのか？ 真似したのは古代人の方か！
何故という理由は知らず、事実だけは麟一郎も感付いた様だ。

「準備整いました」

レイノオが女主人に向かって報告した。



アンナは背いて、旗門の見える窓の方に進む。窓枠の下方に、床から上半身を伸し、頭に窓の下辺を戴く様な位置で、黒奴の半身像が浮彫されているのが、先程から目に留ってはいたのだが、驚いたことに、この像は、アンナが近づくとも自動的に上半身を前に直角に折り、顔を床にくっつけた。今迄像のあった所には抜け出した剝形が残る。

アンナは無造作にプキー靴の両足を黒い背中に揃えて乗る——と、何と部屋全体が動き出した。震動はほとんど感じないが、窓の向うの旗門が、ぐんぐん近寄って来るのだ。この遊仙窟という別荘は、山腹の洞穴の様に思えたが、どうしてこの様に建物全体が自由自在に移動できるのだろう。

旗門はテレビ塔の脚部の様な櫓になっている。その脚の下に部屋が潜り込んだと見えた所で動きが止った。アンナが背中から降りると黒奴像は元の位置へ戻ってゆく。同時に部屋の丸天井が左右に割れ始めた……遙か彼方に紺青の空に白くそそり立つスメラ山頂が仰がれた。すぐ真上には旗のはためく櫓がある。

——生きている人間ではないのだ

ろうか、この黒奴像は？

さんざん生体彫刻を見た後だけに、ヤブーでなく黒奴と見えても、その疑は持ったのだ。然しクララの注意は、天井が大きく開いた上方から斜めに降りて来た滑り台状の物体の方に向ってしまつたので、この像のことは念頭から去ってしまった。

読者諸君には私から説明しておこう。この像は正にクララの想像通り生きているのである。錠、刑に処せられた黒奴なのである。刑の執行として、生きながら足踏錠になつてゐるのである。

足踏錠 (Stepping lock) は、肉體錠とも言われ、本来はヤブー生体家具の一種である。昔は貴族の邸宅で玄関の廻転扉によく利用されたので門番錠とも言った。ヤブーを廻転扉の床下部分に下半身埋め込みにし、上半身は扉の生きた裝飾を兼ねながら、その腰関節の屈伸に廻転装置を連動させ、前に折つた上半身に四十キロ以上の負担が加重されると扉諸共、一八〇度廻転する仕掛けになつていて、この荷重として人間の体重を使う。即ち来客は、ヤブーのお辞儀した背中に乗ると屋内に送り込まれるのである。怪しい人にはお辞儀しない。無理に頭を下げさせると死ぬ。死ねば連動装置が破れるので、殺して通することもできぬ。門番にして生きた錠前を兼ねてゐるのだ (※)

※参考(一) 彼等は遂にある扉の前まで来た。そこには、一層用心をよくする為に、一人の男が、壁に嵌め込まれて長い鎖で腹を縛られていた。新らしくカルタゴに輸入されたローマの風習だつた。彼の鬚や爪は途方もなく伸びていた。そして捕えられた獣の様に、絶えず左右に身体を揺ぶっていた。彼は叫んだ。「助けて呉れ、バアルの眼よ。御慈悲だ、殺して呉れ！俺はこうして十年

の間、目の目を拝まないのだ！ おぬしの父の名において、赦して呉れ！」

同(二) コロボアスス蟻の巢の入口には兵蟻が番をしてゐる。しかも唯の門番でなく扉そのものとなつてゐるのである。即ちその兵蟻の頭部は前額所で截断した様になり、それを入口に持つてゆくと入口を一杯に塞ぐ栓の役目をする。結局この蟻は身を以て巢の入口の扉となり、これを番するのである。

——ウェルズ「生命の科学」から

この廻転扉は現在のイースの建築では廃れてしまつたが、腰関節の運動を機械に連動させる装置自体は他の方面でも使えるので、色々の応用を生んでゐる。今アンナの使つたのは建物を旗門の方へ引き寄せる仕掛けの始動挺子に連動させてあるのだ。

ところで、ヤブーでなく黒奴が使われているのは、黒奴の刑の執行なのである。黒奴刑の一種に立ちん棒 (アシック) というのがあつたことは既述した (八章二節註7) が、現在の黒奴刑法典では立位刑部門が更に六種類の刑に細分されている。いずれも横臥を禁ぜられるのだが、その中の極刑がこの錠刑で、これは不敬罪中の敬礼忘却の重罪に科せられる。

※註 煩わしいので、一二章二節の註にあげた様な刑法典の条文の引用は略するが「不敬罪」にも敬称遺脱 (奥様、旦那様を忘れる)、敬礼忘却、不作法等各種があり、これが一般白人に対する場合は軽罪、主君に対する場合は重罪になる。これは故意に白人の尊厳を冒した場合のみでなく過失による場合も罰せられる。敬礼忘却の重罪は、主君本人への欠礼は無期錠刑、主君肖像への欠礼は有期錠刑で、有期の場合は情状によって償却回数が定められ

る。(黒奴の体刑は贖罪^{しよくざい}として考えられている)。敬称遺脱は舌を増殖刑で伸ばさせ、それを毎日少しづつ、ちょん切るなど、それぞれ犯罪型に応じて刑が定まっているのである。

今の黒奴は、三年前、偶々夫婦喧嘩のあとで気を滅入らせていて御真影(アンナの肖像)への最敬礼を忘れ、それを息子に報告されて(一九章三節)錠刑五千回に処せられた。それ以来、今の場所です踏錠にされて、壁下の穴に下半身を埋めた姿勢で立ち続け、アンナの姿を見れば最敬礼して、その双のおみ足を戴いて来た。(黒奴はヤブーの様な信仰を持っているわけではないから、この作業は苦痛以外のものを意味しない。そこに贖罪的刑罰としての意味があるのだ)アンナは朝晩二度——今日の様に客を案内して増えることもあるが——プキー乗りの為この錠を使うから、刑期は大体七年、つまり、あと四年間は、彼はこうして、遊仙窟の建築の構成部品として、朝晩彼女に踏まれながら罪滅しの難行苦行を続けてゆかねばならないのだ。

幅広い滑り台状の斜面が下りて来て裾が部屋の床に届くと、待っていた様にプキー達が位置に就いて、その斜面の最下部にスキーを載せた。クララの桃色、ポーリンの紫色、ウイリアムの茶色の他に真紅の二本が並んで、いつか四匹になっているのは、アンナのプキーがあとから来たのだろう。いずれも手は縮め、脚は伸して、斜面にも拘らず背中を水平を保つ姿勢を取っている。

「上昇速度は、いかが致しましょうか？」

下に残るらしいレイノオが訊ねた。

「常速」一言答えて、アンナは自分のプキーの背中に跨った。三人

も次々に跨り乗る。プクターの背中と感じは似ている。

と、突然、周りが薄暗くなった様に感じると同時に、四匹のプキーは頭を並べたまま、斜面を何かにひかれる様にスルスル上昇し始めた。

クララ達は覆面帽のレンズを透して見ているから、その程度にか感じないのだが、もし外から見えていたら、スメラ山腹を斜面に沿って長く走る太い濃青色の光の筒を認めたであろう。今プキーを引揚げているのは青光線空間内牽引線である。昨日、円盤艇を円筒船内に収容するのに用いられた(九章一節)あの仕掛である。青光線空間の物理学は二十世紀人には説明し難いが、空間内の二点を両極として強力な牽引効果を発生する一種の電磁場を生じるので、これを利用して、物体の引揚や推進を行える。この場合、場を構成する力の線は、青光線が消えて後、細い蜘蛛の糸の様な形状で物質化してから消滅する。これが昨日、タウヌス山中で両少年の見た聖の糸(天使の髪の毛ともいう)なのである。今は陽極を中腹の狩場に設け、陰極板を各プキーに啣えさせているので、プキーは乗手諸共、狩場に引寄せられてゆく。プキーの啣える鉄片を上方から磁石で引くとも、細いロープの先を啣えさせて上で捲き揚げているとも、譬えられよう。とにかく、この青光線上昇機は、物的設備は他に必要なく、プキーの体をそのまま椅子に転用しての、巧妙なチエア・リフト設備になっている訳だ。プキー自身の登攀力を利用することも勿論可能だが、従らに登攀に疲労させるのは得策でないから、登りは生リフトとして使用するのである。

青光線の筒は下から次第に縮まってゆく。そのあとには細かい細かいエンゼル・ヘア。それに絡まれながら文字通りエンゼルの姿を

した畜童四匹が、手に手に半弓を持って飛んで追ってゆく。愛の神キユーピッド（エロス）が半弓を持物にするという古伝の由来も偲ばれよう。

「雪嶺場は二千米上よ。十五分位ありますから、その間に、スザンがスサノオと呼ばれる様になった冒険談のあらましを喋りましよう」

静かに上昇してゆく生リフトの暖かな椅子に坐して、アンナ・テラスは話し始めた。

山頂から冷たい風が颯と吹き下して来て、もうずっと下になった旗門の旭日旗をなびかせた。

二 古事記解義 (一) 大蛇退治

馴致椅子の中に手首足首で吊られた姿勢の麟一郎は、クララへの祈念に心を澄み切らせ、かくて脳波受信によって、彼女の胸の昆虫型ブローチの位置に目と耳を置いて、彼女と同様の視聴覚体験を吸収している。

今彼の視界にあるのは開けたスロープ。ほとんど無限に上方へ伸びている純白の雪面である。そして、耳にはアンナの話す声——

「……従者一人連れて円盤に乗って、連絡装置（四章一節で紹介した時間電話など）も持たずに紀元前十世紀の球面に着陸したわけなの。剣と鞭だけを頼りに……」

「随分、剛胆な女性だったんですね」ウィリアムの声には、嘆賞の響きがある。

「そう。それに武術には自信があったのよ。古石器代人狩猟に行っても、銃器なしで追い廻して——あの頃は、まだ古石器代人狩猟犬

は作られてなかったのよ（三章二節）——鞭で叩き伏せるなんて芸当のできるのは彼女だけだった……だから、原始ヤプー族位平気よ」

「凄いなア……」

「その当時のヤプン諸島は、もうヤプーが完全に住みついていて。御存じでしょうけど、王室探険隊の航時円筒船『考える葦』号が、人類文化史を探りながら過去世界へ遡って行った時、船長マイネカア卿が陛下の御内命で、純血種（ヤプー首長一族の血統。一〇章三節）の生ヤプー二匹、雄のサナミと雄のサナギとを畜化処置（ポンプ虫、皮膚強化等を指す）せずにヤプン諸島のオノゴロ島に放すという考古学的実験をやったのは、紀元前、百二十世紀、新石器時代の球面でした。それ以来、一万余りの間にその子孫がヤプン諸島全域に繁殖していたわけよ……」

——何ということだ！ もしこれが出鱈目の創作でないとしたら……

麟一郎は、聞きながら声なき驚愕を続けていた。イスパニヤをスペインと発音する英語流で、サナミ、サナギと呼ぶのが誰かは言われるまでもない。伊邪那美、伊邪那岐だ。この両神が五柱の「天つ神」の命令で淤能基呂島から日本の国を作り出したとは古事記の伝えるところ。その神々の筆頭、天之御中主神とはマイネカアをミナカと訛ったのではあるまいか。書記はこれら「天つ神」達をあるいは「形葦牙の如し」とか「可美葦牙彦舅尊」とか、「葦」に關係させて表現しているが、航時船の名を「考える葦」と聞けば思い当る。これらの神々が何故、独神であり、何故、その後の神話中に登場しないのか——彼らは航時船の乗組員だったからだ。名前が奇妙で異伝が多いのも元来、外国人の姓名だったとすれば解けるの

ではないか……だが、それにしても、日本列島原住民が実は未来世界から運ばれたヤブーの子孫だったとは！……待ってくれ、そのヤブーなるものは元来、日本人だったのを家畜化したというのではな
いか。その日本人の先祖がヤブーだとすれば、一体どっちが先だ？
鱗一郎の頭は、時間旅行の逆説に、すっかり混乱してしまった
(※)。

(※註 読者諸君は、既にヤブーが「知性猿猴」であることを説いたヒトラー畜人論を御存じである(五章三節)。そのことと、この航時船の実験とは両立しない様に思われるかも知れない。然し、そうではないのだ。それは恰も、鶏が進化論上「爬虫類の子孫」であると同時に、発生論的には「鶏が先か卵が先か」という逆説が人を悩まし得るのに似ている。生物学的には「ヤブーは類人猿の一種である」が、歴史的には「ヤブーは日本人の子孫であると同時に先祖でもある」のである。

その間にアンナの話は大分進んでしまった様である。

「……面白いことに、彼女は男と思われてしまったのよ。ヤブー族は当時、既に父権制、倒錯期に入っていて、男がズボン、女がスカートだった。だからスザンの偏剣でズボンを穿いた服装には男としか思えなかったのね。唯ひげがないのが怪しまれたもんだから、彼女は『実は姉と賭をして負けたので落した』と返事したそうよ。ヤブー共は自分達の風習から何か罰を受けて追放されたんじゃないかと疑ったらしいけど……」

——於是八百万神共議而於速須佐之男命負千位置戸亦切鬚……
神夜良比夜良比岐……

嘗て誦んじた古事記の原文が鱗一郎の頭に浮び上って来るのだっ

た。

「スザンの方も女と分つては面倒だと思ったのね。男になりますつもりで、スザン(Susan)をスザノ(Susano)にしたのよ(Oは男性名語尾)。それがヤブー共にはスサノオ(Susano)と聞えたらしくて、今ではイースでもこの名が……」

「それは貴女の御本が読まれたせいでしょう」とポーリーンの笑いがらいう声が聞えた。

——やはり、間違なく、須佐之男命のことだ。それがアンナとよばれている話手の妹！ さっき天照大神と直感したのは、こっちの幻覚でも向うの仮装でもない。この人は本当の天照大神なんだ！
ああ、俺は氣狂いになりそうだ！

鱗一郎が氣持を静めている中に、話はまた進行してしまっている。

「……その酋長を鞭で叩き伏せると、一同すっかり降参心服よ。大神と崇めてね。自分達があなたの手とも足ともなるから、オロチヨン族をやっつけて呉れと懇願するのよ」

——手名椎、足名椎に頼まれての大蛇退治の話だ……

「崇敬礼拝されて随分、良い氣持だったらしいわ……」

「未開の土人の間へ我々文明人が行けば神様扱いは当たり前だ。まして相手がヤブーで……」

「でもね、ビリー」とポーリーンの声。「彼女は自分が信仰の対象にならなかった為に試合に負けたこと(前章三節)をコンプレックスにしてたに違いないわ。だから本氣に拝まれりや嬉しかったでしょう」

「妾もそう思うわ」アンナが引き取って「それで、頼みというのを



聞いて見ると、大陸からの連中を追払ってくれというのよ。満州方面からオロチヨン族が侵入して来て、大八洲おおくしよと言われたヤブー八島の支配権を握って、八人の部将というか、酋長代理を置いてヤブー達を圧制してる事態が理解できた。スザンは、それに対して義侠心を起したのね」

「後世の為にヤブー資源を確保するという気持はなかったんでしうか」とウイリアム。

「さアね、そこまではどうかしら？ 崇められて嬉しかったから助勢した位のことかも知れないのよ。崇拜される快感というものに酔ってたに違いないかな……」

——八岐の大蛇ヤブーとは、オロチヨン族の八部将のことだったのか！

(※)

〔※付記 八岐大蛇伝説には種々の解釈が存するが、「高志の大蛇」の高志を「越」と見て、シベリヤから日本海を渡って北陸地方、敦賀方面に版図を持った部族と解する説も実際に存することを付記しておく。〕

「……そこで、女を餌に八部将を誘き寄せ、酒を飲ませておいて、一人で全部、首を切ってしまったのよ。——スザンにとっては何でもないことだったけれど、ヤブー族には彼女は文字通り守護神だったわけね。——然し、大陸にあるオロチヨンの本拠を衝く必要があるというので、朝鮮から満州へ出て、何でもオロチヨン族は興安嶺の辺りに住んでるのね。今、妾達が飛んでる下辺りかな。酋長モロク्रीモンを捕えて殺したのよ……」

——須佐之男命が朝鮮に往ったという伝説があったっけ。神功皇后の三韓征伐も、美女男装という点でこの異伝かも知れないぞ……

「どうして、そんなに詳しく分るんです」

とウイリアムは懐疑的らしい。アンナは気を悪くしたらしくもな

く、

「彼女の報告よ。想像は一つもないわ」

「じゃ、一旦帰国なさったの？」

ポーリーンの声も交る。一番聞きたいクララの声が全然入って来ないのは、聞き惚れているのだろう。

「スザンの円盤で帰って来たのは、例の従者だったのよ。妾宛のスザンの手紙を持って来たの。今迄のことを知らせて『ヤプーの管理については姉さんが正しかったことが今度良く分った。自分は原始ヤプー族の神様になって、奴等を愛護してる。姉さんも来ないか』と誘って来てね」

心なしか、アンナの声が湿った様だ。

大蛇の尾オロチの所にあつたという剣の名ムラクモムラクモノツルギ（天叢雲劍）はオロ

チヨンの酋長の名前だったのか？ ツルギといっても鞭のことなのか（※）

（※註）古代ヤプー族にとっては、スサノオの腰の鋭利な長劍ヤイバル（これは鞘の要らない刀身だけのものだった）と伸びてよく撓い、皮膚をつんざく不思議な革鞭ウツツとは、当初は区別がつかなかった。どちらも彼らに未知の靈力を秘めていた。八部将の首が次々と刎ねられた為、そのサーベルを彼らはツムガリツムガリ（頭薙）の太刀と称し、それは如意鞭の称ともなった。スサノオの十拳劍トツカンノツルギは、これである（ツムガリがツムギ、ツルギとなるのは定説）。後に鞭と劍との区別が明らかになった時、鞭に白人貴女を指すムチの語があてられたことは既に註したところだ（二六章三節）。以後ツルギは劍

のみを指すことになるのである。

「でも、鞭は結局、彼女に渡せなかったの。早速作って持たしたけど、帰りにその従者が円盤で時間漂流タイム・ドリフトを起しちゃって、戻ったのは五年後。その時はスザンの行方が分らなくなってしまっていた。円盤を使えなかった以上、その球面にいるに違いないんだけど、どう捜させても分らなかったわ……」

暫らくは、咳きせき一つない。不思議な古代のミステリーだった……

三 古事記解義 (三) 神勅と神器

「妾自身、慈善主義運動チャリティズムは結局、畜人宗教の問題に帰すると気付

き、できれば直接自分で原始ヤプー族の精神形成に干渉して見たい、と考え始めていたところでした」アンナ・テラスの声は又、話し始めた。「その矢先に、この失踪でしょ。妹の弔合戦も兼ねて、妾は熱心な古代地球探険家になったのでした……」

「そして『天照大神』が誕生したわけですね」とウイリアムの満足した様な声。

「スサノオ失跡についての手懸りは得られませんでしたの？」ポーリーンが検事長らしい関心を示して追及する。

「駄目。自分で直接ヤプー族と接触する様になって随分調べたけど。……ただね。スザンなきあとヤプー族を率いていた実力者のオ

ークニーがね、スザンの愛玩畜ベツトだった小ピッコピッコという矮人ビグミーを持っていたのよ。怪しいでしょ。調べて見ると、その家内のセスリーという

雌メスは、もとスザンが召し使っていた奴なの……スザンは原始ヤプー族に最初に神臨した時に、酋長の娘のクシナードクシナードというのを従畜に採用して以来、いつも雌ヤプーメス・ヤプーに身の廻りの世話をさせていた

らしいのね……」

——大国主命、須勢理姫、櫛名田姫のことに違いない。小ピッコとは少彦名命（一寸法師の神様）だろう……」

「どうして雌なんかに……」とポーリーンの不思議そうな声。今のイース人には、ちよっと考えられないことらしい。

「それはね、スザンは男に化けてたでしょう。だから、自分の体を召使に見られるのは仕方ないとして、実は女だということを雄ヤプー達には知られなくなかったんだと思うの。オークニーはそのセスリーと恋仲になって、スザンの秘密を知った形跡があるのよ。妾は初めから女で通して神々の世界では女の方が偉いんだ、と教えてしまったけれど、スザンの場合は男で通してた。それが女だと分ると、何しろ両性の倒錯してた時代でしょ。殊にオークニーは狡猾で兇暴だったから、女と知って、急にスザンに反逆を試みたということも想像できないじゃないか」

「……」

「奴らが妾の所有畜だったなら、その嫌疑だけでも八裂にしてやりたかったけど、他球面ヤプーは、すべて国有財産だから、余り軽率なこともできずね……ヤプー族全体に対する妾の絶対神としての立場もあるし……それにしても、妾とあんないさかいをしたばかりに、スザンが若い身空で他球面に客死したかと思うと、可哀想だね。小ピッコは、すぐ取り上げて来て妾が飼ったけど、見るごとに泣けたわ……」

アンナは鼻をつまらせている。

麟一郎の頭の中を記紀の文章が慌しく通り過ぎる。

——そうだ、あの説話には犯罪の臭がある、確かに。（※）

（※註）大国主は須佐之男から何度も殺されかかるが、須世理姫が

秘密を教えて助ける。その後、彼は姫と共謀して昼寝している須佐之男の頭髪を天井の椽に結んで逃げ出すのだ。椽に巻きつけ得る程の頭髪の豊かさは（ひげのことが書かれてないのも）女性を思わせるではないか。——大国主は唯逃げ出したただけだったろうか。白人美女スザンが髪のもで天井から吊られ、二匹のヤプーが、それを責めるサド派好みの凄惨な場面さえ考えられぬではないのだが。——なお、少彦名は「常世の国」に去ったと記されており、これは仙郷であると註されるが、実はポーリーに回収されて行った先のイース国を指すことは、言うまでもない。

「じゃ、スサノオは殺されたんですか？」とウイリアム。

「疑えね。でも、ムザムザ殺されるような女性じゃなかったし……」

「結局、行方不明の儘なんですね」

「そう。未だに謎よ」

「そのオークニーというのを放ってお置きになったの？」とポーリーンは口惜しそう。

「ううん。殺す代りに野垂死させたわ。こちらの宗教的権威を利用して一族全部追放したのよ。国有財産法には触れないように自発的退位の形式でね。退位までには色々なことがあったけど（読者は古事記を参照されつつ想像されたい）もうじき終点だから、とても話し切れないわ……」

成る程、前方に別な旗門が見えて来た。

「結論だけ言うと、穏かに首長の席を妾の従畜に譲らせたの。ニニギーといって、陛下から拝領の純血種の奴よ。……」

——出雲族から大和族への国譲りの話だ。ニニギーとは瓊瓊杵尊のことだ。……

「すると、今でもその子孫が首長で……」

「まあ、ウィリアム、有名な事実よ。邪蜜、首長家の万世一系は」初めてクララの声がして麟一郎を緊張させた。そうだ。婚約時代、彼は誇らかに日本国体を彼女に説いたのだった……。彼の感慨も知らず、アンナの声——

「そう。コトウィック嬢は、よく御存じね。それ以来、ずーっと続いている。妾が地球都督になって、国有財産法に触れずに他球面ヤプーを管理処分できるようになった時、変えても良かったんですけどね。ニニギーを遣る時に『お前、ヤプー族を治めにお行き。お前の子孫が卒先して天照大神信仰を鼓吹して奴らに妾を拝ませている間は、お前の子孫を首長にしておいてやるから』って言ってやったのを思い出して……」

——『爾皇孫就きて治めよ。行け。宝祚の隆えんこと天壤と無窮ならん……』あの神勅のことだ！

「でもヤプーとの約束なんて……」とウィリアムが突込んだ。アンナの落ち着いた声——

「実際にもね、首長家を変えない方が奴らの信仰が動揺しなくて良いの。ニニギーに渡した三つの品物が未だに首長位の象徴になっている位ですからね」

——三種の神器のことだ……

「一体、何々ですか？」と再びクララの声。好奇心に溢れている。

「一つは例のモロクーモンウツクン鞭よ。……」

「ああ、鞭ですね。それとも、スザンを記念する意味ですか」とウ

ィリアムの声が話を横取りした。

——先刻から一人が何か言うとき、もう一人も物を言うのは、恋人同志気取りなのか？

恋敵への敵愾心と失恋の意識がふと心を乱し、思念は集中を失った。忽ち手首足首の猛烈な疼痛が復活し（二五章三節）ヤプーの分際で女主人の愛情の問題に関心を持つ不遜を即座に思い知らした。麟一郎は慌ててまた念じる——

——クララ！ クララ！ 救い給え！

再びアンナの声が聞えて来た時には、もう鞭の話ではなくなっている——

「……時間電話機と小型自記函を持たせたのは、神意受領と神前報告の為よ」

「連絡を取って命令を与えてもらったの……」とポーリーン。

「初め七代程はね。それ以後の時代は、わざと放っておいたの。天照大神信仰の宗教生態学的観察をしたかったから、積極的な指令は全然しなかったのよ……」

——それが神代七代ということか？

「じゃ、電話機や自記函は……」

「ええ、案の定、神格化されたわ。電話機は立体テレビ受像面があるので鏡、自記函は形から見て勾玉——妾が髪飾りにしてるのも、それだけど（二六章三節註）似てるでしょ——、如意鞭は刀剣、そう考えられて、それぞれ神社の御神体になってるわ」

——それが三種の神器の正体なのか！ すべてアンナがヤプーに渡した道具だったのか！

聞けば聞くほど、麟一郎は呆れるばかり。だが、現に自分が二十

世紀世界から四十世紀世界へと時間旅行してる以上、この驚くべき神話の実相も、話される通り信じるほかないのだった。いや、今話されなかった神話伝説の数々も、イース文化の影響を考えれば理解のゆくものが少くないことに麟一郎は想到した。

——海幸山幸、兄弟を廻る潮盈珠、潮乾珠、神武天皇の弓に留った金鶏、皆イース科学で解けるではないか。「天盤船に乗りて飛び降りる者あり」とは何か。神武東征の途中に出た尻尾のある畜人とは何か。イース世界の事物が航時機によって逆送されていたことを知らねば、すべて荒唐であり無稽であるが、今俺はこれらの記事を全部信じる……信じないではいられないんだ。俺の耳にしたのは「天照大神」様、直き直きのお話なんだから……。

その「天照大神」の声が聞えて来た。

「お待ち遠さま、着きました」

四 黒色獺獣

クララは、プキーの背中に跨ったまま、後方をふり返って見た。

二千米上ったところらしい。スメラ山頂迄には、まだまだ険峻な道のりをうんと残しているが、ここから眺めただけでも、この飛行島「高天原」の雄大な規模を認識し、無比の絶景を賞玩するには充分だった。雪に蔽われた山麓を過ぎて、鬱蒼たる巨木の大密林、その中央の碧潭と波上に浮ぶヨット、その向うに、ぐるりと取り巻く外輪山脈の峯々、更にその向うの周辺平原は今ほ、やに包まれている……まことに絵の様な楽園風景——この楽園全体が今東に向って飛んでいるのであるか！

さて真上を見上げると、やはり大きな楼門の櫓が組み、天頂に

は黒旗が掲げている。

プキー四匹は揃ってステーションに滑り込んだ。後から半弓を捧げ持った四畜童が追って来るのが見える。青光線は、いつか消えている。蜘蛛糸の様なものがクララの頬を、なぶった。

「ポーリー。お客は貴女一人だと思ったので、受験獣は、妾の分と合わせて、二匹しか放してないのよ」今まで跨っていたプキーの背中に両足を横に開いて立ち上りながら、アンナ・テラスが口を開いた。「ですから二手に分れましょう」

他の二人と一緒にクララも立ち上った。長靴の底はピタリとプキーの背中に吸着して充分の安定感がある。

「でしたら、僕、嬢コトウィックと組みます」

ウィリアムが、すかさず申し出た。

「この人はおてんばでして……」とポーリーン。それに合わせる様に、アンナも

「そう。妾達より貴方の教授の方が嬢コトウィックの上達は早そうね」

と笑い顔で言う。この人情に通じた女傑はちゃんと二人の仲を見抜いているらしい。クララは思わず顔を、はてらせた——覆面帽の下に隠れて赤らみは見えなかったけれども。

畜童達が美しく塗り分けた半弓を一人一人に捧げ渡した。アンナが、クララとウィリアムに向って

「黒色獺獣二匹を此処で試験の為に放したのが三十分前よ。同じ方には逃げないから、一匹が東なら一匹は西へ逃げてます。妾達は東へ行くから、あなた方二人は西へ追って下さい。今日は獺犬は使いません。武器は半弓。止めは短剣。運搬犬を後で出しますから、獲

物は置いて来て構いません。仕止めても仕止めなくても、一時間後にはここに帰ること。良くって？」

テキパキというアンナの声は、先刻までとは人が変わった様に勢がよい。覆面帽の下に隠れて見えぬ肌も一際、輝きを増したことだろ
う。アンナ・テラスは万畜を慈しむ和御魂と同時に無慚な殺傷を喜ぶ荒御魂を備えているのだった。

「妾、覆眼鏡をさせて盲目畜踏乗しますわ。貴女に対してフェアでありませんもの。貴女のは盲目畜でしょう？」とポーリーンが言った。

「近視二〇ジオアトリ。まあ盲目同然にしてあるの」アンナは足の下のプキーの穿く真紅のスキーの先端を見つめながら答えた。「でも、此処は妾の獵場だから、ハンディキヤツプはあって当然よ」

「いえ、いけませんわ。第一、妾が仕止めても、賞めて貰えないでしょ？」

「まあ、雌々しいわね（イース英語では雄々しいという意味である）ついで、この間まで生人形（後出）を抱っこしていた貴女が、そんなことを言う様になったのねエ」

アデライン卿の友達としてポーリ



ーンを子供の時から知っているアンナには、彼女の張り切り方が可愛い、嬉しいらしい。畜童が紫色スキーのプキーに眼帯の様な眼覆を掛けた。プキーは俄か盲目になって、唯背中からの鍵点刺戟に反射運動をするだけになる。

「イースの一流貴族女性として——ドリスほどの達者でこそなけれ

——ポーリーンはプキーの踏乗技術には相当の修練と自信を持っている。現に、本国星の冬季別荘には盲聾雪中畜（二七章一節、眼睛と鼓膜を針で破ちたプキー）も飼育している彼女なのである。さてこそ、アンナとの競争にもハンデなしで、と斗志を燃やしたのだ。

二人はプキーの背中の上でステップを踏み始めた。と、今まで静止していたプキーが二匹とも動き出す。プキー長靴の底面先端のスパイクが鍵点を刺戟したのだ。複雑な運動には複雑なステップが要る。それは丁度、三二個の鍵点を並べたプキーの背中を鍵盤とみなして、足先でタイプライターを叩くのにも譬えられよう。（然し単純滑降の様な動作の場合は、一度刺戟で命令すれば、そのまま滑り続けることは普通のスキーと同じである。）

その辺をグルリと一周りして足慣らしすると、二人はいずれ劣らず巧妙にプキーを操りながら前後して同方向に滑り去った。新雪の上にシユプール（走跡）を残して……

茫然と見送っていたクララの耳許でウイリアムの声がした。

「さあ、クララ。僕達は、こちらへゆきましよう。プキー乗りと云ったって、貴女は唯立っていれば良いんですよ。あの二人の様な技術をもににするまでは、プキーの能力を活用した方が良いでしょう。殊に狩猟の時はね（二七章一節）このシユプールを追って見ましよう」

ウイリアムは、ステーションから、今二人の去ったのと反対の方向に延びる二本の走跡を指さした。

「このシユプールは？……熊狩りなら……」

——熊を狩るのに、スキー・シユプールを辿ったって仕様が無いじゃないの。それともこのシユプールは誰か熊を追っ掛けている人

のだというのかしら？

アンナが「黒色狩獣」といったのを——前にプキー達が雪上畜大学の狩猟学部、熊狩科卒業と聞いていたせいで（二七章一節）——

「熊」のことだと思ひ込んでいたクララは、そんな不審を起したのだが、ウイリアムは笑い出した——

「ああ、そうか。貴女は熊狩りのつもりだったんですね。クララ。違ふんですよ。今日、僕達の狙うのは『黒色狩獣』なんです。進みながら説明しましょう……」

二人の足の下にいる二匹の動物は、命ぜられた通り、その走跡を辿って滑り出した。

「クララ、『黒色狩獣』というのはですね」ウイリアムは、彼女と並んで滑る位置にプキーを移動させつつ、話し出した。「黒奴なんです。死刑の宣告を受けたことのある……」

ウイリアムは、黒奴の狩獣化の制度を説明した。要約すれば、次の様なことである——

黒奴刑法典の数百箇条の条文の半ばは苛酷な死刑であり、死刑執行の方法だけでも、数十種類が法定されている。各貴族は私有黒奴の裁判権を持ち、国有黒奴に対しては国家の官吏である検察官、裁判官が居て、毎日イース領内での死刑宣告の数は全版図では数万人に上るであろう。この生命の廉さは、一つには黒奴の旺盛な繁殖力が死刑による人口減少を充分カバーし得るからであるが、主として執行に關与する大衆のサジズム本能を發散させることで、平民の不満が内乱などに導かれたりすることのない様にしようという政策に基くと言えよう（一二章二節私刑公売の註参照）。

ところで、そういう死刑囚黒奴に対して、貴族（各自私有黒奴に

ついで、女王（国有黒奴について）は赦免権を持っている。その赦免の一番軽度の段階として各種の「僥倖恵与」という制度がある。つまり、一〇〇%の死を約束された死刑囚に対して、何%かの「ひよっとしたら」生き延びる可能性ある機会を与えてやるのである。例えば、宴会の余興などでよく行われるのだが「クレオパトラの奴隷」という遊びがある。土色の瓶のどれか一つだけは無害で、他の六つにはそれぞれ異なる苦悶をもたらす毒薬を入れておき、死刑囚にその一つを選んで服用させる。宴に在る人達はどの瓶が無害かに賭けているので、見ても仲々スリルのある余興であるが、七ツに一つの割合で死刑囚には生存の可能性が与えられたわけであり、うまく無毒の瓶を選んだものは、「幸運の黒奴」として赦免されるのだ。

さて、イース貴族に欠くことのできぬスポーツとしての狩猟は各遊星の動物という動物を探って、古石器代人にまで及んでいることは、読者も御存じのところであるが、ヤプーから作出された各種の畜人系動物も勿論その例に洩れない。矮人、釣のことは既に述べたが（一〇章三節）、畜人馬、畜人犬等もこれを野性化して獵獣として使用する。畜人馬のあの巨軀と快速、（一六章三節）ネアンデルタール・ハウンドのあの衝撃牙（三章二節）これらが、もし狩猟の対象となり獵人の征服すべきものとされる場合、どれほどのスリルをもたらすかは、想像して戴けるであろう。然し、それでも、一番面白いのは生畜人狩猟だというのが定説である。人間に酷似したその形態が「人間狩猟」的興奮を与えるからである。この場合、家畜意識があつてはいけないので、生ヤプーとして生産されても土着ヤプーは洗脳せずに（一三章五節）、獵獣としての野性を育成す

るのである。畜人馬の巨軀、畜人犬の攻撃力はないが、代りに短刀などの護身具を持たせて猛獣になぞらえる。これを「黄色獵獣」という。

然し、イース人にとっては、ヤプーは余りにも獸畜すぎる。「人間狩猟」的な味を求めるなら、真正の人類であり、半人間である黒奴の方が、ずっとその味は深い筈である。ここに「黒色獵獣」が誕生する必然性があつた。が、半人間としての人権はあるから、勝手に罪もない黒奴を獵獣には出来ない。そこで、死刑囚に対する僥倖恵与として、獵獣化するのだ。確実な死刑の執行よりは万に一つでも助かる見込みのある方がまし、と死刑を宣告せられた黒奴達は喜んで獵獣になる。

黃獸、黒獸は自然動物園の様に他の野獸野禽も棲息する大密林の獵場に放し飼にされる。四六時中、猛獸共や白人獵人やの接近を警戒して野獸並みの生活（但し食糧は給される）をせねばならぬ。他の野獸と同様、何時生命を失うかも知れないが、うまく行けば長生きできるかも知れない。つまり死刑に対する恩赦として人間の死の代りに野獸の生を与えられるわけである。

然し、生きることば生きても獵場の中で獸の生涯を終るのではたまらない。何とか昔の文化生活に、黒奴社会に戻りたい。そういう希望をもつ黒色獵獣達の為に、更に逃脱試験の機会が与えられる。これは、獵人と獵獣（黒色獵獣に限る。黄色獵獣にはそんな不平不満は許されない）との試合であつて、一定時間内に獵人が捕獲なり射殺なりに成功するか、それとも獵獣が隠れ終るなり、反撃に成功するなりするかで勝負がきまる。獵人を殺傷しても、この場合は黒奴刑法が適用されないという大変フェアな規定がある上、黒奴

はヤプーの様な白神信仰を持っていないから、反撃も思い切つてやれる。逃脱試験に合格する黒獣は実際はほとんどないのであるが、その万が一の傍倅を死物狂いで狙うのだ。

「アンナ・テラスが、二匹を試験中だといったのは、そういう黒色獣を二匹放したという意味なんです」ウイリアムは言った。

「雪上畜狩の獣である以上、勿論スキーを穿かせてあります。彼女のことですから、スキー技術も相当練習させてあるに違いありません。然し、このプキーの能力なら勿論、発見、追尾はできます。

唯、一時間ではどうですか？彼女はきつと二十四時間を黒獣共と約したのでしよう。僕らが仕止めなくとも後で自分で殺してしまうつもりで、唯お客をもてなす意味で、黒獣狩のスケジュールを組んで呉れたんですよ」

「もてなす？では妾達の遊樂の為に黒人二人の生命が（恐らく確実に）消費されるのだわ！」

「じゃ、このシユプールを辿れば……」

「そうです。居るわけです。然し、狡い動物ですからね、どんな風に潜んでるか分かりませんよ。近寄ると危険だからなるべく遠くで発見して射殺しましょう。まあ、貴女は見て下さい。僕が仕めますよ……」

恋人の前で勇気を示し得る好機を歓迎するかの様な美青年の言葉に、クララは思った。

「妾達は「最も危険な獣」(コンネルの短篇)(※)を狩りに行くのだ……」

(※参考 Richard Connell, the most Dangerous Game(1924)、世界のあらゆる獵獣を仕止めたロシア貴族ザロフ將軍は、新しい

獵獣を求めてある島を貰う。潮流の危険なところだ。わざと信号を偽り、難破した船の船員乗客を邸の客人とし、次いで賭をする。短刀を指って一時間前に出発させ、それをザロフが狩猟するのだ。逃げおぼせるか否か。必要な場合は獵犬も使って、彼は毎日この人間狩りをし、常に成功する。そしてフェアな狩猟であつて殺人ではないと広言する。「勇気と狡智と、なかならず理性と」をもった最も危険な獵獣との真剣なスポーツだというのだ。然し、あるアメリカ人が遂にこの生命の賭けに勝ち、マーカス・アウレリウスの愛読者なる人間狩猟者を殺して歸る。——かつて「風俗科学」誌にも編案が出ていたから、想い出される人もあるう。

シユプールは尾根を越えたり、雪溪を渡ったり、森林を抜けたりして一路、西へ走ってゆく。プキー達は、獵犬が臭跡を追う様に、確実にそのシユプールを辿ってゆく。素晴らしい快速である。彼らにとつても初回被踏乗の記念すべき追跡行なのだろう。

——ポーリーンはアンナ・テラスに勝てるかしら？その二人がまた獵獣と勝負してる。人獣三ツ巴なのね……

旗門の黒旗はとうに見えなくなった。もう二十分は経つていよう。

〔代理部便り〕

○分譲中の左記のものは申込者殆どなきため今後の分譲を中止いたします。「マゾヒズム画廊」(略号ろう)新版マゾフォト第一組凌辱篇(略号ま1)第二組屈伏篇(略号ま2)女体輝美の緊縛(略号こん1)女体輝美フォト(略号こん2)○マゾ関係の絵画写真の資料は相当集まりましたが申込者がありませんので今後の分譲は打ち切ります。

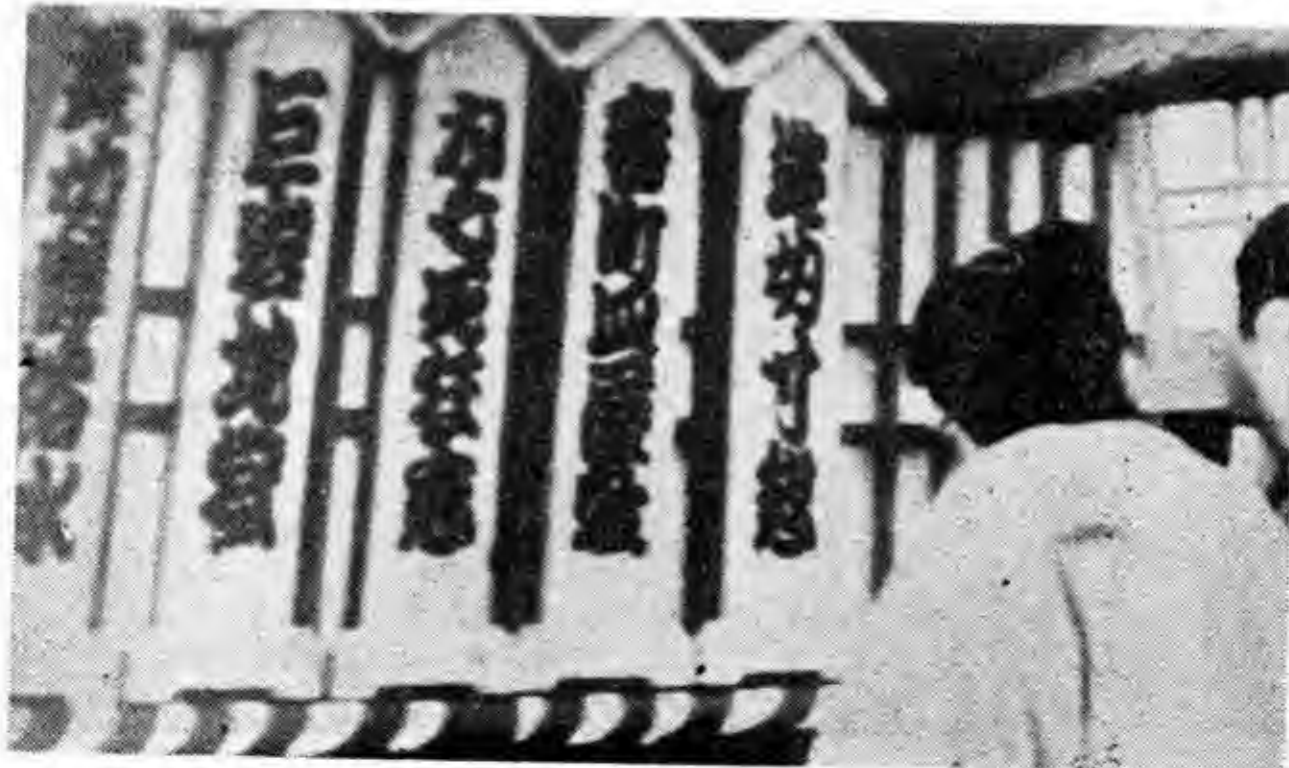


牧 高志 今席は、

これから例によって色々とお話をお願いして頂くのに丁度、恰好な女の方がお出で下さったので御紹介申し上げます。岩瀬波子さんです。岩瀬さん、人形作りをしてらっしゃるお父さんは、もう大分古くからおやりになっておられるんですか？

岩瀬 ええ……でもファッション・スタイル人形なんですよ、デパアートなどで御覧になる……。

牧 ……と云う訳で同じ等身大でも婚礼用を除くと、あとは全部近代洋髪スタイルだそうで——、まあ、関連がありそうですね。処で、今日は岩瀬さんの介添で、水島さん、佐



藤さんなどと御一緒に一つ、映画のストーリーにとらわれずにフリートードキングの形で進めてみたいと思うんですが……別に司会と改まるまでもなく、一休このお家芸の伝七捕物

緊縛映画は一ことに云うと、どうなりますかな。

水島道一郎 老舗、松竹にしては思い切った企劃だと思うネ。原作者の面々に逢って聴かないと判らないが、江戸川乱歩式だから面白い。某週刊誌はグロだと批評していたけど……。それはさて置いて、難点を云うと、出て来る女優群が去勢されてさ、全くの受身なのは弱い。凄味が効いて色気があるのは、お蝶（泉 京子）位なものだろう。

牧 これは話の中心と云うか狙ったポイントが「蠟人形」だからさ。われわれ好みから



云うと、阿片ナンぞは添え物と睨んでいるのに、劇構成がお終いまでもたつくのは、よく練れていない証拠だよ。初鼻の花嫁の誘拐失踪から始って浅草奥山の見世物——阿片の取引、つまり生人形の女を作ってその肢体の一部に阿片を隠そうとするカラフラージュ法、そのあたりが恐らくミソだとは思いますが……。僕は、この映画を見て伊藤晴雨老の助言が可なりあったものと想像してるんだが、岩瀬さん、今でも人形は使い方によっては薄気味悪いもんですか？

岩瀬 あれは映画の小道具ナンで御座いますよう。画面が動いて判っきり見えませんでしたけど、まあよく出来ていましたわ。

佐藤妙子 わたくしは当時の江戸時代の考証を頭の中に浮べながら興味深く観たんですけど、御紹介の晴雨面伯によると、もっと凄かったと云われていますね。





例えば血糊を使ったりして……。

牧 グロと云えるかどうか判らないが見世物小屋の内庭を広く取って、左右に着飾った花魁連中を——当時、高嶺の花と云ってましたネ。それを身近かに華々しく飾って景気を

あふる一方、小数の著名絵師以外には求めも求め得られない女の縛り人形を……井戸があつて燈籠があれば皿屋敷のお菊、磔柱はお七をと云った定説通りに配置して、それじゃ余んまり色気がないんで、赤い湯文字一枚に割いだヌード人形を考えた、とまあ、一種の庶民レクレーションセンターとして人気を覓めたのが、今回の地獄極楽巡りでしょうから嘴の鋭い新米子分の竹造が

「親分、何んだが薄気味悪い処デスな」と云うのは本当だったかも知れない。嘘でもいいから一度そんな小屋に入ってみたいですネ。

水島 だからさ、ここまで思い切って小道具をならべるんなら裏屋裏で只今、蠟製生人形が出来上がりました。触っちゃいかん……など云いながら生々しい女の身体に着付をやったり、後手に荒縄で縛っているシーンを入れたかったよ。こうすれば映倫から小言の一つ位は喰うかも知れないが、この映画はハクがついて大入満員御礼物さ。



佐藤 水島監督の頭を、モラルを疑うって批評されますわよ。

岩瀬 あのこと……いつか父が何処かの陳列に使うんだと云って御殿女中を着付してましたけど、映画の中で吊るされてるお菊は、お端折りのままですのネ。やっぱり裾を長く垂らすのが本当なんで御座いましょう？

牧、まあ、その方が、しっくりするでしょ



うな。火事場になる喧嘩沙汰の方は、ほったらかして、ヘヤイツ人形をバラしちまえッて子分の二三人がお菊に殺到、お菊の身体を横転させて阿片を抜き取った時、裾が乱れて緋色の長襦袢が見えましたね。人形でもあれはチョッピリ色気があって頂けましたネ。

水島 けどさ……酒井監督が竹藪に吊るした湯文字一枚の人形と一緒に、極め付け磔柱の人形まで焼くのはミスだよ。あれは当然、前に紹介しなくっちゃ……。どうもあの調子だと、その外にまだ相当数の縛り人形がありそうだ。

牧 要するにテレビ攻勢にこれからの映画は尋常沙汰じゃ駄目だと云うテストケースかも知れないが、この分だとまたまたダロ時代に逆戻りしそうだね。僕は映画館の中で遠くから観ているとそうでもないが、スクリーン近くで縛り人形や磔柱めにされようとするラストシーンは、芝居だと云いながら実の処、冷汗をかいた——つまり娘さんが、そばに誰も居ないんだナ。遠くてジッと観ている……。その癖、お化け映画だと案外、平気なんだ。縛られること自体が、まだよく判らないらしい。



岩瀬 アラ……そうでもないわ。未完成の人形を運ぶ時は手脚を縛りますのよ。ですから工場で、あたしも縛られようか知ら……っ



て思う時が……。

牧 お話が大分、高潮になりましたが、岩瀬さんの御希望は後程、尊重するとして、もっと色気話はありませんか？

佐藤 お色気と云う点から云えば割合、盛った方じゃないか知ら……。花嫁さんから始

って大詰、寸前まで花嫁さんで終るんですもの。婚礼の祝宴に緋の色を惜し気もなく出して裾を曳く芸者さんだの、湯女が立膝で爪を切ったりする情景、それに夫婦固めの盃が済んで新婦が初夜の帯を解くあたりは、戦前派のオールドファンには喜ばれそうなシーンですし、殊更に何んでもないのに色気がにじみ出た場面は、狐のお面でまぎれ込んだ伝七が、お蝶と盃を交わす時、お蝶の袖口からこぼれる緋の色など……。詳細な処に演出の気を配ってはありましたけど……。女らしい見方か知ら？

牧 どうも人形——縛り人形の話ばかり出て申訳ないが、人形に拘泥せざるを得ない理由には原作者（野村胡堂外三——小説倶楽部2月号所載）の内容が裏切った花嫁に対する人形師の復讐であるのに、映画の方は阿片の密輸事件をバックにしている。これは原作を多少、モデファインしても忠実に描写、つまり大々的に見世物小屋を中心に例の生きた女を熱燭で云々して陳列すると云った方がよかったんじゃないか。後手に縛って吊るしたり磔や湯文字一枚にして地獄の責苦を泥人形ならぬ掳った花嫁でやること自体に、裏切られた女に対する復讐が原作通りに生きて来ると思



うんだ。
でない……ちらっとこの映画を観ただけでは一体、伝七先生は阿片窟を追いつめるのか、掳らわれた花嫁を探し求めるのか、御用提灯が飛び出す頃は何が何んだか判らなくなっちゃう。



水島 僕も、そう思うネ。異例の縛り人形を出したんだから、それを押し通せばよかった。ラストシーンの釜の蠟を煮る処は大いに頂けるが、松竹が世間態を考えて阿片をかつぎ出して回避するから、つじつまが合わなくなるんだよ。それに時代劇なんだから、テレビの殺人より罪は軽いにきまっている。

牧 まあ、それはそうとして、佐藤さん、大詰の阿片密輸一味の就縛の一寸前の今云った魔屋（原作では花屋敷の近くの古寺）の花嫁娘の断末魔……と云っていいかどうか判らぬがその御感想はどうです？

佐藤 さあ……一寸、表情が堅そう。新人の方（中島淑恵）なんで御座いましょう。

水島 これが東映の長谷川裕見子だったらいけるネ。第一、この台上か料理台の上に横たわった花嫁居士はさ、牧さんの云う原作本……今読んだんだが、それに依ると催眠術をかけられたとある。そこが略されているから六兵衛が魔屋に戻って来るまで、おとなしく料理台の上に乗せられて待っていたとしたか思えない。善意に解して失心していたのかも知れん。こ奴は不自然極まるネ……。

岩瀬 だって、怖わいんでしょう。細縄で手足を縛られてるんですもの……。



水島 いや、見た処キッチリ縛ってあるよ。うだが竹造子分に助けられると直ぐ解けた。足も縛っていないナ。だから逃げ出そうと思えば後手のままでも飛び出せるんだが脚本に縛られて台上から一步もズリ落ちることが出



来ない。佐藤さんの云う堅い表情は正しく新人のせいだよ。

佐藤 ただネ、私は女らしいと感じました

のは、花嫁衣裳の長い裾が少しも乱れずに悶えた点だと思っています。再婚の方や水商売の女の人でしたら、きつと緋の蹴出しをチラつかせて大芝居をしたと思うんですけど……アラ、これは牧先生の御領分、ホホホ……。

牧 何も僕の専攻学じやありませんよ。ただ白一色の打ち掛けだから僕でも水島君でも撮るのに苦労したことは事実。スナップ甲輩があつてその割に白が飛ぶのは惜しかったね。さりとて柄物や黒紋付じや縄が融け込んで見えないだろうからやっぱり写真はむづかしいネ。

水島 一体熱燭で生きた女肌が出来るもんだらうか？ どう云う手術をして熱燭で固めるのか、大学の先生に訊いて置けばよかった。案外、原作者も監督も知らんのじゃないか？

牧 まさか着物のままでやる訳には行くまいだろうから、花嫁の衣裳を剥いで湯文字一枚にして後手に縛り、つぶさに女の身体を眺

め廻わす。そして、おもむろに湯文字を剥ぎ取って熱燭を注ぐんだらう……とは思うが、それがそのまま地獄極楽の人形に化けると云うかスリ替えられちゃ、岩瀬さんの店は大変な事になりますネ。

岩瀬 アラー嫌やだ。怖くて家へ帰られないわ。うらめしいッて……

牧 本当にあつたとしても架空話に近いネ。要するに娯楽趣味篇だな。

水島 女肌執念が足りないのかな。

牧 せいせい、岩瀬さんに頼んで作って貰うんだナ。特別縛り人形をさ……。

アハハッ……。



次号予告 『剣 姫 千 人 城』

映画

通信

今月の縛られた女優達



剣姫千人城

(新東宝)

冒頭から金剛正の妻、芳野(女優名不詳)が殿の意に添わぬため、井戸の上に吊られて竹で責められる。間に金剛正の責めが入るが、延々十分ぐらい続く。最後は、切られて井戸へ落ちるが、かなり迫力のある吊り責めであった。女優が誰かわからないため、御存知の方があれば、お知らせ下さい。

無法街の野郎ども

(東映)

ラスト近く、キヤバレーのダンサーのあけみ(佐久間良子)が、手首足首を縛られて猿ぐつわをはめられる。が、すぐ助けに来た曾根(高倉健)に助けられる。足首は

見えず、胸に綱がかけてないため手首が少し見えるだけで、わずかに助けを求めるためにドアに体をぶっつけてもがく所だけが印象に残った。

ヌード・モデル殺人事件

(新東宝)

終り近く、三ツ矢歌子が犯人に連れ出されて、ベッドの上でスリッパ一枚の姿で後手に縛られる。しかし後手首だけ。しかも、解けないのが不思議な程ゆるい縛り方とあっては減点せざるを得ない。足首も縛ってある。

弁天小僧

(大映)

青山京子のお半と、近藤美恵子のお鈴が、悪侍のために後手猿ぐつわに縛られる。ちょっと動き過ぎて目まぐるしいが、充分楽しめる。近藤美恵子が美しい。

美男城

(東映)

丘さとみの山娘朝路が、御堂主馬之介(中村錦之助)にたのまれた伊能盛政の日記を日坂城の焼けあとで深潜して、主馬之介をねらう須藤頼之助の手下にとらえられる。

山の娘なので衣裳があまり頂けないが胸に縄を二巻き、縄尻を環につなされる。主馬之助に危急を知らせようとしてつながれた縄尻を口で噛み切る。

たつまき奉行

(東映)

江戸の南町奉行所の与力、手塚久兵衛の娘、美鈴(佐久間良子)が父の行方を探すため、杉戸屋の部屋へしのび込んだ所を見つかってしまう。最初、遠景で縛られ、白い布で猿ぐつわをされて部屋から連れ出される。次いで、後手、高手小手、猿ぐつわで倉の中に入れられる。いずれも、少しのシーンしかなく、次に鞭打ちに会うわけだが、この時は、もう縄は、ほどかれていて鞭打ち(縄を使っている)は、音ばかりであった。

女肌地獄

(松竹)

終り近く、さらわれて来た花嫁、伏見恵子?がロウ人形にされるため、台の上に乗せられている。白ムクの花嫁衣裳、胸を一巻き大縄で縛られ、のがれようとして懸命にもがく。背後は写らなかつたので後手のようすはよくわからないがあれだけ身を動かしても縄はさしてゆるまない所を見ると本格的に縛ってあるのだろう。他に人形だが地獄極楽の見世物に縛られた女が多数出てくる。

追記II 唄しぐれ千両旅II

(東映)

予告編で見ただけだがお志乃(円山栄子)が縛られる。(河崎晴夫・記)

愛好者の記録

とやま・かづひこ

三十年もの間、一日として忘れることなく慕いつづけ、愛しつづけてきたモノ。恐しいまでに惹きつけて止まぬこの魅力は、一体どれから生れ出るのだろうか。
 今月もまた愛蔵のスクラップ・ブックから一、二の話題を同好の方々に御紹介したいと思うのである。

(88) 肌に咲く花

フランス人は、女性のアカを「しろい肌に咲いた花びら」と美しく表現するそうである。常識ではアカは汚いモノであろうが、憧れのひとのものとなれば、はなしは別になってくる。最近かづひこは貴重な体験をした。病み上りのK子をアパートに訪ねたとき、彼女は久方ぶりに入浴を許された由で、かづひこに背中を流してほしいと云い出した。かづひこの好みを知りつくし、いろいろの

頼みを諾いてくれる彼女は、かづひこに対しては気がおけないらしい。

二カ月の病床生活である。肌に咲いた花は、消しゴムのカスのようにアカスリの中に面白い程溜ってゆく。ここでかづひこの頭の中に、あるアイデアが浮んだ。アカスリを洗面器の中で洗う。咲いた花びらはキラキラと底に溜まる。上ずみの湯だけを捨てる。

一体、アカは何で出来ているのかは知らないが、これも又、彼女の体から出たモノ。石けんの匂いと微かな塩味、これが「花」だとは確認できないが、デリケートな感じである。人の知らぬ「秘められた喜び」を感じとって、かづひこの幸福に酔ったひととき。

(89) ゴハン粒

(前略) 昔、不美人の垂れ乳というストリップバーがいましたね。それと酒をのんだんですよ。彼女ベロンベロンになりましたね。(中略) 夜中に頸筋のあたりが冷いんですね。起きてみたらいつの間にか吐いた彼女のゲロが、頭にかかっているんです。彼女の方をみたら、これも戻って来たゴハン粒なんか髪に毛にくっついていたりしましたね。(笑) いや、とたんに興ざめましたね。(後略)

右は三月六日付、週刊紙『シンニチ』からの採取。

ゲロは、かづひこの愛するモノの一つであり、一見その不浄感は絶対だ。

この文を書いた(？)播島氏という人は、大阪温劇の支配人だそうだが、職務がら、このようなチャンスもあるうが、羨ましく限り。何といおうと、汚物愛好の趣味は案外多くの人の奥深く存在するものであろう。

ノーマルな人々は、吾々にこれを投げ与えるとき、ある種のショックを感じるものらしい。汚物はたしかに自虐、加虐の手殿として重宝なものと思う。

(90) 裏庭の花

まず次のスクラップを一読して下さい。

……大便を医者立場から調べると、有害なバイキンが何億というが、小便是胃や腸やその他の臓器を通じて出て来るうちに、蒸溜水のように清潔な水になっているから、健康者の小便是全く無害。お母さん方はそれを知らないから、子供が入浴する時にはまず前だけ洗うことを教え、後を忘れてる。いくらか紙でふいても、ウンコはお尻についていて、岸恵子さんでも、皆さんでも、現在ウ

ンコがついていない者は一人もおりません。と大変なことになりました。……

これは三月一日付の毎夕新聞にあった『奥さまの性教育』という読物の一節。

筆者、R・エンゼルという美しい女性。高名の女優さんまで引っぱり出して、面白おかしく説いている。

後門の附着物談義は、以前にも引用したことがあるが、その道の通人はこれを「後庭の花」とか、「裏庭に咲きこぼるる花」と称して珍重するという。

(91) 青草

「オール読物」二月号、松本清張氏の現代スリラー「危険な斜面」の一節

……西島卓平は、老いた身体に負担をかけずに、その望むところを執拗な方法で求めているということであった。老人は青草のような臭いを飲み、柔らかい魚肉のような部分の手触りに時間をかけ、若返りを注入しているというのだ……。

青草のような臭いを「飲み」という表現はいかにも作家らしく、美しいなかにズバリとそのものを暗示している。少しもイヤラシさのないのはさすがにうまいものだ。吾々が匂

いを求めるとき、それは鼻でかぐのではなくして、正に「呑む」のである。しかも、その匂いを青草と美化してある辺り、何ともいえない風情を感じる。

アブの表現も、このように美しくありたいと思うものである。

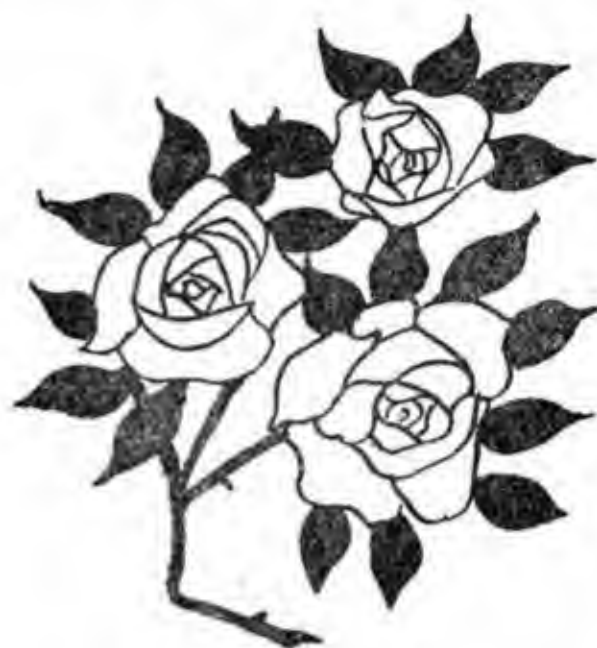
(92) ショウにて

文芸春秋発行『漫画読本』三十四年新年号一八二頁「東南アジア風流譚」の一節に

……彼女はインド人の胸のハンカチをひよいととって自分の顔をふき、乳房をふき、ついでに大事なところもふき、ひどいことにはそのままインド人の顔をふいてやった。またまた拍手喝采、弥次も賑かにとんだが、インド人も大喜び。……云々……

とある。これは筆者がパンコック旅行の際見物したショウでの話だが、その風景は仲々のものであったに違いない。多くの見物人の前で堂々とそんなことをされながら、喜んでいる客も客なら、それが、ショウのギャグになるということも面白い。

この行動には、色々の意味が含まれていて、かづひこには思えるのである。さぞよい匂いを感じたことであらう。



創作 僧 堂

榎村 奏 青木 審・画

第一章

川本次男の人生は、彼がこの世に生れでる以前に既に、父によって計画されていたのであり、彼の生来の気弱さが、それを決定しまったといっている。

仏教大学として有数の、K大学へ進んだのも、卒業と同時に、S県の××寺へ修行に行くことになったのも、すべて彼自身の意志ではない。そして、一年間の修行を終えれば、住職としておさまる寺も、配偶者になるべき女性も、ちゃんと定められていたのだ。

大学における川本は真面目な、そのため目立たない学生だった。成績は悪いほうではなかったが、講義には興味がなかった。

酒も女も知らない彼は、積極的に接近してきた学友の沢野に、その場合も気弱さから、ズルズルと度を越した交友関係になってしまった。独りになったときなど、フト、罪悪感が心を脅やかすこともあったが、沢野の能動性が、そんなものは忽ちにして粉砕した。

「雲水の修行なんて、およそ時代錯誤さ。僧堂には、旧軍隊さながらの悪循環があるだけだ。ある意味では、筋金入りの人間ができる

だろうが、俺は意義を認めないね。ただし、サド・マゾヒズムの研究材料としては、興味ある対象と云えるだろうナ。束縛と虐待に身を委ねて、それに耐えていけるのには、何か心理的な秘密があるに違いないよ。しかも、二十代の青年達だ。彼等が、禅林生活に何等の抵抗も感じないなんて、不思議だと思わないか。一定期間の修行をしなければ住職の資格が得られないというのなら、話は別だよ。それが今は、そうじゃないんだからナ。すきこのんで雲水になる奴の気がしれないよ——まあ、いいサ。おまえがいくと云う

右は三月六日付、週刊紙『シンニチ』からの採取。

ゲロは、かづひこの愛するモノの一つであり、一見その不浄感は絶対だ。

この文を書いた(?)播島氏という人は、大阪温劇の支配人だそうだが、職務がら、このようなチャンスもあるうが、羨ましき限り。

何といおうと、汚物愛好の趣味は案外多くの人の奥深く存在するものであろう。

ノーマルな人々は、吾々にこれを投げ与えるとき、ある種のショックを感じるものらしい。汚物はたしかに自虐、加虐の手殿として重宝なものと思う。

(90) 裏庭の花

まず次のスクラップを一読して下さい。

……大便を医者立場から調べると、有害なバイキンが何億といるが、小便是胃や腸やその他の臓器を通じて出て来るうちに、蒸溜水のように清潔な水になっているから、健康者の小便是全く無害。お母さん方はそれを知らないから、子供が入浴する時にはまず前だけ洗うことを教え、後を忘れていく。いくらチリ紙でふいても、ウンコはお尻についていて、岸恵子さんでも、皆さんでも、現在ウ

ンコがついていない者は一人もおりません。と大変なことになりました。……

これは三月一日付の毎夕新聞にあった『奥さまの性教育』という読物の一節。

筆者、R・エンゼルという美しい女性。高名の女優さんまで引っぱり出して、面白おかしく説いている。

後門の附着物談義は、以前にも引用したことがあるが、その道の通人はこれを「後庭の花」とか、「裏庭に咲きこぼるる花」と称して珍重するという。

(91) 青草

「オール読物」二月号、松本清張氏の現代スリラー「危険な斜面」の一節

……西島卓平は、老いた身体に負担をかけずに、その望むところを執拗な方法で求めているということであった。老人は青草のような臭いを飲み、柔らかな魚肉のような部分の手触りに時間をかけ、若返りを注入しているというのだ……

青草のような臭いを「飲み」という表現はいかにも作家らしく、美しいなかにズバリとそのものを暗示している。少しもイヤラシさのないのはさすがにうまいものだ。吾々が匂

いを求めるとき、それは鼻でかぐのではなくして、正に「呑む」のである。しかも、その匂いを青草と美化してある辺り、何ともいえない風情を感じる。

アブの表現も、このように美しくありたいと思うものである。

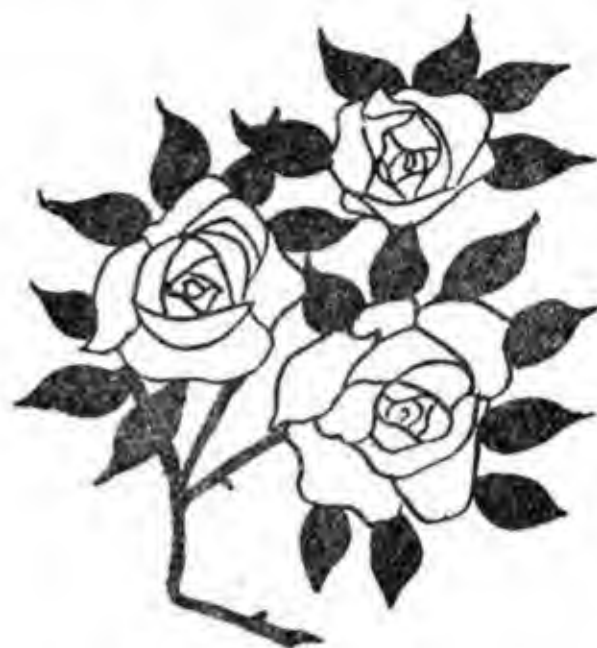
(92) ショウにて

文芸春秋発行『漫画読本』三十四年新年号一八二頁「東南アジア風流譚」の一節に

……彼女はインド人の胸のハンカチをひよいととって自分の顔をふき、乳房をふき、ついでに大事なところもふき、ひどいことにはそのままインド人の顔をふいてやった。またまた拍手喝采、弥次も賑かにとんだが、インド人も大喜び。……云々……

とある。これは筆者がバンコック旅行の際見物したショウでの話だが、その情景は仲々のものであったに違いない。多くの見物人の前で堂々とそんなことをされながら、喜んでいる客も客なら、それが、ショウのギャグになるということも面白い。

この行動には、色々の意味が含まれていると、かづひこには思えるのである。さぞよい匂いを感じたことであらう。



創作 僧 堂

楨村 奏 青木 審・画

第一章

川本次男の人生は、彼がこの世に生れでる以前に既に、父によって計画されていたのであり、彼の生来の気弱さが、それを決定しまったといっている。

仏教大学として有数の、K大学へ進んだのも、卒業と同時に、S県の××寺へ修行に行くことになったのも、すべて彼自身の意志ではない。そして、一年間の修行を終えれば、住職としておさまる寺も、配偶者になるべき女性も、ちゃんと定められていたのだ。

大学における川本は真面目な、そのため目立たない学生だった。成績は悪いほうではなかったが、講義には興味がなかった。

酒も女も知らない彼は、積極的に接近してきた学友の沢野に、その場合も気弱さから、ズルズルと度を越した交友関係になってしまった。独りになったときなど、フト、罪悪感が心を脅やかすこともあったが、沢野の能動性が、そんなものは忽ちにして粉碎した。

「雲水の修行なんて、およそ時代錯誤さ。僧堂には、旧軍隊さながらの悪循環があるだけだ。ある意味では、筋金入りの人間ができる

だろうが、俺は意義を認めないね。ただし、サド・マゾヒズムの研究材料としては、興味ある対象と云えるだろうナ。束縛と虐待に身を委ねて、それに耐えていけるのには、何か心理的な秘密があるに違いないよ。しかも、二十代の青年達だ。彼等が、禅林生活に何等の抵抗も感じないなんて、不思議だと思わないか。一定期間の修行をしなければ住職の資格が得られないというのなら、話は別だよ。それが今は、そうじゃないんだからナ。すきこのんで雲水になる奴の気がしれないよ——まあ、いいサ。おまえがいくと云う

んなら止めやしない。それに、義理やなんかもあるらしいな。フフ、おまえが雲水になって、どんな人間になっていくか、ちよっと楽しみだネ」

沢野は、いぎたなく寝そべったままで、煙草を口で抜きとる。

窓を開け放つても部屋の中には、まだ不健康な空気が濃んでいるようで川本は、いつものことながら不快さから容易に脱け出ることが出来なかった。

もう慣れっこになっている沢野は、別に気にもしないで煙草を、プカプカやっている。

「俺。帰るよ——」

川本は不意に立ち上ると、帽子を掴んだ。

彼は逃げるように廊下へでた。

それでも、「オイ。土曜にはまた来いよ」

と、沢野の声が追ってくる。「ああ」と微かに頷いて、階段を駆け下りた。

俗名、川本次男。法名、蓮丈が、墨染めの衣に網代の笠を被り、袈裟行李と、后付けといわれる二つの包みに、修行に必要な最少限度の品々を入れて振り分けにかけ、草鞋・脚絆の足ごしらえで、××寺の山門をくぐったのは四月の半ば、満開を過ぎた境内の桜が、

倦んだような色をしている曇天の日であった。

石段を登る脚がけ、だるいのは、陽気のせいばかりではない。郷里のI市まで追って来た沢野の強引さに負けて、当分はお別れになるのだからと、しつこく付き纏われ、殆んど夜を明かしてしまったために違いなかった。

頭をまるめた川本は濃い眉が一層、秀でて見え、沢野の心をいやがうえにも掻き立て、狂った者のように何かにつかれた口調にさせた。

「俺はね、諦めたつもりでいたんだ。しかし今夜のおまえを見たら、いつときでも、おまえを離すのが嫌になった！寺には衣を着た雄犬共が、うようよしっている。おまえのような美青年を、ほっておく筈がない。そうしておまえは、俺のことなんか忘れてしまいうに違いないんだ。ああ、俺は、そのことを思うと、嫉妬で気が狂いそうだ！……」

沢野は呻くように云って、川本の左手の指を激しく噛んだ。その痛みが鮮烈であればあるほど、川本は己の心がつめたく冷えていくのを、空疎な気持で感じていた。

もともと沢野に離れ難いほどの友情を感じていたわけではない川本には、掛搭（修行の

目的で僧堂に留まる）によって、負担になってきている沢野の存在から逃れることの出来るのは、確かに救いであつたのである。

しかし、それだからといって、掛搭に対する不安が排除はされず、石段を踏む彼の足はやはり重かった。

新到（新入の修行僧）到着所に入った蓮丈は、心を鎮めるべく、壁に向つて坐禅をくんだ。

軽く眼を閉じると臉の裏に、ありありと獣のように独占欲をむきだしにした、沢野の歪んだ顔が浮かんだ。

蓮丈の臉に力が入り、筋肉が神経的にピクピクと痙攣する。眉の間には深い縦皺が刻まれ、呼吸も乱れていた。

突然、カッと眼を開いた蓮丈は、壁に頭を打ちつけたい衝動にかられたが、人の来る氣配に、また坐りなおした。

古参の俊戒は、立ったままで暫く新到の若い僧を眺めていたが、やがて静かに坐り、袂の端を払うようにしてから、端然と姿勢を正した。

三十を過ぎている俊戒は、役寮（幹部）の中では、まだ若いほうで、修行僧の指導と監督に当る維那の職にあつた。肩巾が広く、上

背がすぐれ、髯の剃りあとが青々としていて、いかにも禪宗の僧らしい野性的な風貌を持っていて彼は、初めて接する新到達に、強い畏怖の念を与えずにはおかなかった。

俊戒は黙ったままで、凝々と蓮丈の顔を見詰めていた。蓮丈は、心の底まで見通すようなその視線に耐えることが出来なかった。

思わず俯向いた蓮丈の肩先に、

「苦しいか——」

と、低い俊戒の声が落ちてきた。

ハッと胸が迫って顔を上げると、俊戒は冷たいばかりの厳しい表情で、再び黙っていた。

掛搭の予備教育期間ともいうべき、且過寮

詰で、坐禪の仕方や食事作法、道場での進退を習う一週間が終ると、蓮丈は初めて僧堂に入る事が許され、単が与えられた。単とは畳一枚に押入と棚がついた広さで、坐禪はもとより、食事から睡眠まで雲水一人々々の生活一切が、そこでなされるのだ。

蓮丈の隣の単は、了覚という僧で、蓮丈よりは一カ月早く入堂していた。僧堂では、たとえ一日でも早く入った者は先輩であり、師兄と呼ばれて、それに対する師弟である後輩

は、すべてにおいて従属的な位置におかれる。それは軍隊における階級ほどに、はっきりしたものではないが、かりに師兄が無理なことを命じたとしても、師弟はそれに逆うことはできなかった。

了覚は、年齢からいっても蓮丈よりは五つ六つは上で、瘦身だが骨太の体格を持ち、蒼みを帯びた皮膚の腕にも脛にも、サラサラとした長い毛が密生していて、どこかに人を威圧するようなところが感じられた。

「よろしく、お願いします」

と蓮丈が挨拶すると、了覚はニヤリとし、それから暫くして、

「おまえ、俊戒をどう思う？」

と云った。

あまり唐突だったので、蓮丈が返答に窮している、

「まあ、いい。いまに判るサ」

と、またニヤリとした。

ヘンなことを云う人だと思い、俊戒のために何か抗議したい気持ちに、フツとなったが、別に根拠もないことに気づくと、蓮丈は己の心を怪しんだ。

雲水は、厳寒といえども足袋を履くことは許されない。シヤツも着ることはならず、薄

いじばんと、下は越中禪一枚である。もっとも、晒の六尺褌をしている者もあった。了覚もその一人だし、蓮丈が浴司（浴室担当）になったとき、俊戒もそうであるのを知った。

第二章

蓮丈が、沢野と親交をもったのは、沢野の一方的な強引さを拒みきれなかったのであり、蓮丈自身にその素質があるなどとは、考えてみたことすらなかった。しかし、男ばかりの世界である僧堂に、彼が漠然としたある期待を抱いていなかったとは云いきれない。

激しい修行の明け暮れは、蓮丈の脳裡から沢野の幻影を次第に消していったが、浴司になって、俊戒の入浴の世話をするようになってから、彼の心には不安とも恐れともつかぬ感情が果敢といはじめていた。

俊戒は不断でも寡黙のほうだったが、入浴中も、殆んど口をきいたことがない。黙々と衣を脱り、裸体になっても、全く人目を意識しない挙措は、むしろ、すがすがしく清浄でさえあった。

ザブリと浴槽を出る俊戒の、筋肉質の逞しい軀に湯の玉の光るのを、まぶしく見ながら後へ廻って背を流す用意をする。固く引き締

った筋肉は、力を入れて擦ると、快い弾力が伝わってきた。向うむきになって軽く合掌している軀は、静寂そのものだが、縫れば暖く包容してくれそうな気がして、蓮丈の胸は戦々とした。
ぐのだった。



朝の三時に床を離れてから、夜九時の開枕（かいちん）まで、雲水の生活は修行の連続だが、日中には、ときとして個人的な時間が与えられる。そんなとき、たいていの雲水達は、各

目で坐禅に励むか、衆寮にいつて机に向かった。

蓮丈も、経典を閲覧しようとして、衆寮へ入ろうとすると、了覚に袂を引かれた。

「オイ。ちよっと、外へ出ないか」

「外……？」

「外だって山内の内さ。心配いらねえよ」

「でも——縫那にみつかったら……」

「フン。俊戒か。かまやしねえ、従いてこい。さア」

師兄の命令であってみれば、それ以上は逆えない。蓮丈は、仕方なく草履を履いた。

裏山の急坂を登り、齒染の生い繁った中腹の窪地に出ると、了覚は、いきなり仰向けに寝転がり、ウウンと手足を伸ばした。

まくれた衣の裾から、毛脛が突き出し、襟元からは大きく呼吸する胸が覗いて、濃い胸毛が汗で絡みついていてる。

初夏の陽射しは、生暖い気流を沈澱させ、若葉の層が、動物の体臭のような臭いを発散していた。

蓮丈は、僧堂のほうを気にしながら、腰を下し、両手で脛を抱えるようにしていたが、そのうちに齒染の葉を揺りだした。

「蓮丈。おまえ、女を知っているか？」

「いいえ」

了覚の声が、うわずっているように思え、蓮丈は顔を見ないようにして答えた。

「童貞か——」

「……」

「蓮丈。おまえは、僧堂の生活をどう思っていた？」

「どうって……」

「ここには、若い男ばかりが集められて、不自然な禁欲を強制されている。当然、何か屈折した形で、欲望が処理されていくとは思わないか？ 俗界では、面白半分になんことを云ってるじゃアないか。フン。畜生！ そんなものは想像の産物にすぎん。俺達は、修行僧だ。確固たる目的があつて、己を苦しめているのだ！ 俗物共に何が判るか。他の寺は知らん。少くとも、ここには、そんな墮地獄な坊主は一人たりともおらんのだ。なア、そうだろう。蓮丈よ」

「そうです」

「アッハハハ……そうだ。そうなんだ。」

突然、狂ったように笑いだした了覚は、いきなりガバと跳ね起きると、衣をかなぐり捨てて、六尺禪一本の裸形になった。蓮丈が愕いて見ていると、了覚は灌木の枝をへし折り

小枝を払って、蓮丈の前に突きだした。

「蓮丈。これで俺を打ってくれ。力一杯に打ち据えてくれ！」

「なぜ——なぜそんなことをするんです？」

「わけは訊かないでくれ。おまえにも今に判ることだ。頼む。頼むから打ってくれ」

了覚は、眼に涙さえ溜めて哀願する。それだけでなくも師弟である蓮丈は、否と云えない立場にあつた。

眼をつぶるようにして、蓮丈は枝を打ち下ろした。

不気味な手ごたえと共に、パシッという、意外に高い音が鳴ると、蓮丈は殆んど反射的に枝を投げ捨てていた。

「蓮丈。続けて打て。もっと強く、力を入れて打つんだ！……」

了覚が苛立って叫ぶ。

「駄目です。私には打てません！ 勘弁してください——」

「蓮丈……」

「駄目なんです。手が、いうことをきかないんです」

「……！」

了覚の眼が一瞬、けわしくなったと思うと落ちていく枝を拾うとみるまに、自分で自分

の軀を打ちはじめた。

夢中で逃げるように坂道を駆け下りる蓮丈の耳には、その音がいつまでもついていた。

雲水には、作務（勤勞作業）も修行の一つである。流れる汗を拭いながら、薪割りに余念のなかった蓮丈は、近くの木蔭から、スツと現われた男のあつたのも、初めの中は気がつかないでいた。だから、その男が沢野であることを認めたときには、二人の間は、もうどうしようもない距離になっていた。

「もう逢わない約束じゃアなかったのか」

蓮丈は、硬い表情で云った。

「判っている……でも、来ないではいられなかったんだ！」

「……」

「川本。今度の除策（休日）はいつだ？」

「それをきいて、どうするのだ？」

「外出できるんだろ。ちよっとでいい、俺と逢ってくれ。ナ、頼む——」

「俺は、昔の身分とは違う。逢ったところで修行中には違いない。学生時代の気儘なつきあいには応じられない」

「いいんだ。逢ってさえくれれば——」

「しかし……」

「おしえてくれ。除策はいつだ？」

「本当に、逢うだけだな」

「本当だ。誓うよ」

何と云われても、逢わないことが最上の策であることは判っていた。それなのに、除策の日を教えてしまったのは、こんなところを誰かに見られたくなかったし、それに、よく話し合つて、キツパリと別れたほうがいいのだと考えたからでもあった。

打合わせておいた場所へいってみると、沢野は既に来て待っていた。

「旅館に部屋をとつてあるんだ——」

そう云つて先に立つ沢野の後から、蓮丈は黙つて歩いていった。

雲水の姿を見馴れている市の人々は、別に振り返りもしなかったが、蓮丈は絶えず人目を意識しないではいらなかった。

女中を遠ざけると沢野は、いきなり銚子を口へもっていった。

その様子を眉をひそめて眺めていた蓮丈は「あまり飲むなよ。今日は、冷静に話をしたんだから」

と膝もくすさず端然と坐った儘で云う。

「川本。俺は、お前が寺へ入ってしまったてから、夜もロクに眠れない——昼はうつつのよ

うにボンヤリしている——人間が、まるで突つてしまった。川本、察してくれ。俺には、どうしても、おまえが必要なんだ！」

「沢野。お前が必要なのは、入山以前の俺なんだ。今頃こんなことを云うのは卑怯かもしれないが、俺は最初から、お前を最高の友だとは思つてはいなかった。尊敬の無い只単なる魅力のみによる親交は俺には耐えられないんだ。それに、お前は嘲笑うだろうが、俺は今、一切の欲望を断ち切つて修行に身を投じている。頼むから、俺のことは忘れてくれ」

そう云いながら蓮丈は、そんなことの云える自分に不思議な気がしていた。確かに以前の彼は、たとえ腹で思つていても、それをズバズバ口に出して云える性格ではなかった。

「川本。やっぱり、お前、何かあったな……！」

沢野の蒼褪めた頬が引きつった。

「そうだ。そうに違いない！ お前は、誰か別の男を目標にするようになったんだ」

「バカな——」

「昔のお前は、そんなことの云える男じゃアなかった……畜生！ 相手は誰だ？ 役者が、雲水か、それとも——」

「邪推は、よせ」

「ハハハハ……。川本。お前、さっき云ったな。お前に必要なのは入山以前の俺だけだ。と。そうだ、そのとおりだ。お前が誰を尊敬しよう、そんなことはどうでもいい。俺は己の欲するままに、お前を擲えてはなさないだけだ！」

沢野の血走つた眼が据つたと思うと、次の瞬間、上体がユラリと泳いで、蓮丈を押し倒しながら転がった。

「何をやる！ よせ——」

それきり、無言のまま二人は激しくもみあつた。荒い息使いと低い呻きが、けものじみて続いた。

蓮丈は不意打を喰らつた上に、衣を着ているので如何にも不利であつた。大きな音をたてて人に気づかれてはと思うので、思いきつて抵抗ができない。やうと僅かの隙をみつけて跳ね起きたときには、彼の軀に着いているものは殆んどなかった。蓮丈は、ゆるんだ越中褌を手早く直おすと、衣を抱えて廊下にとびだした。

さすがにそこまでは追つてゆけない沢野は、

「畜生！ どうするか、覚えていろ——」

と、搾りだすような声で云つて、乱れた髪

を掻きあげた。

第三章

そのことがあってから、蓮丈は越中褌をやめて、六尺を締めるようになった。

あのような場合、このほうがいいという理由。だが、それが全部でないことは、彼の氣持を何かうしろめたくした。

もし、寺の中で六尺褌をしているのが、俊戒一人だけだったら、蓮丈には、その勇氣がなかったかもしれない。了覚や、その他にも二、三常用者のいることで、彼は自分を誤魔化すことができたのである。

十一月に入ると、朝晩は素足の冷さを感じるようになる。夜半に目覚めた蓮丈は、東司(便所)へいこうとして草履をはいた。

不測の事態が生じたのは、彼が東司の入口まで来たときである。

ピタリと蓮丈に寄り添った覆面の男は、夜目にも光る大型のナイフを胸につきつけた。「声を出すな! そのほうがおまえの為だ」押し殺した声が沢野だと判ると、蓮丈の駄から血が引いた。

「ここじやア、まずい。お互いにな。本堂へ

いこう。さア、歩け」

動顧している蓮丈は、云われるままに本堂へ連れていかれた。

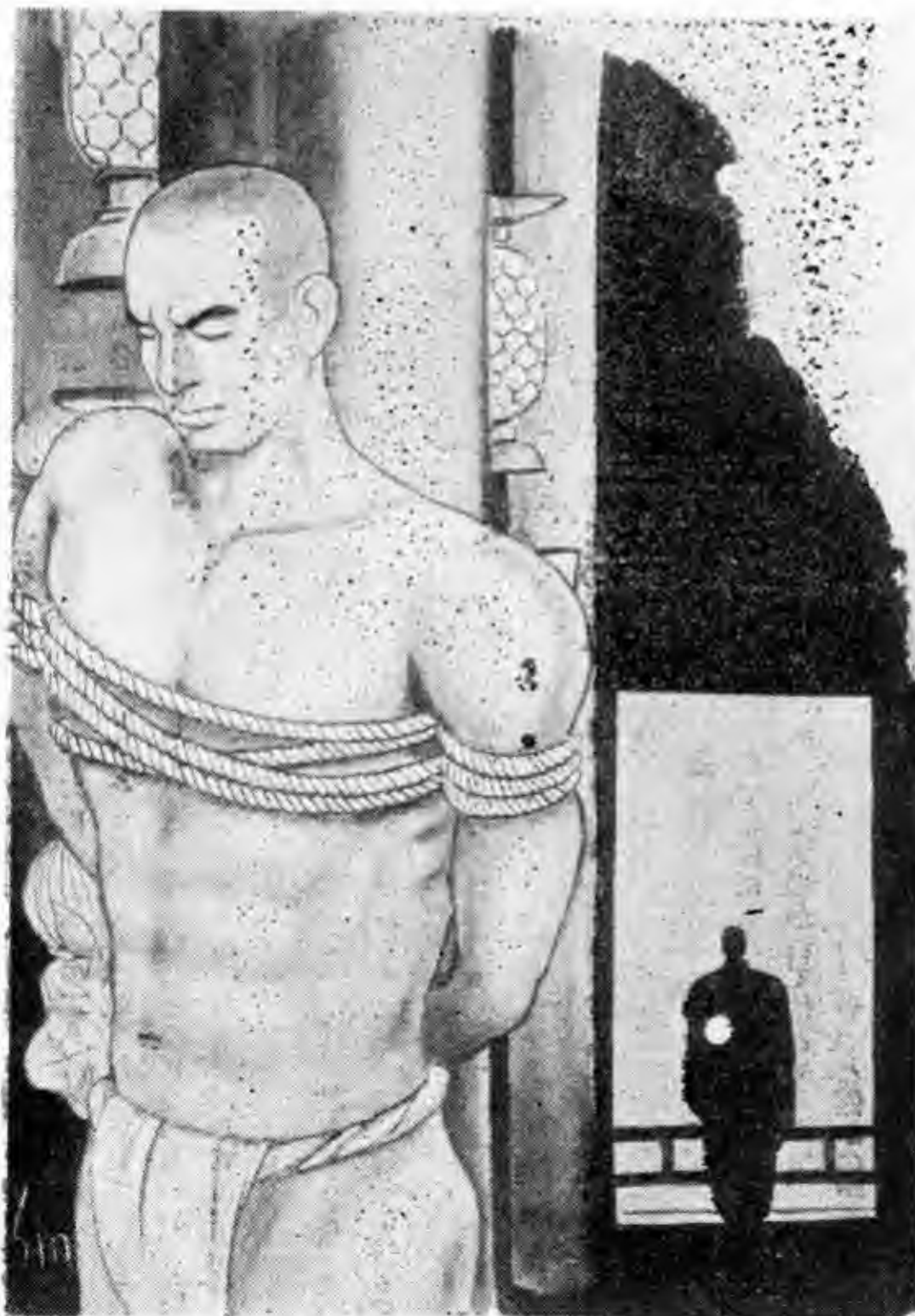
「沢野。頼むから、今夜は帰ってくれ。そのかわり、今度の除策には必ず逢うよ。おまえの希望を入れてもいい。だから、今夜は赦してくれ。こんなところを見つかったら、俺は

寺にはいらなくなる——」

「フン。おまえの尊敬している男とも一緒にいられなくなるからな」

「頼む。お願いだ。お願いだから——」

「うるさい! 可愛さあまって憎さ百倍ってナ。俺は、こないだ、見事に恥をかかされた。そのお礼に來たんだ。今更おまえが、ど



んなにうまいことを云つても、俺には聞く耳がない。男らしく観念するんだな」

なおも哀願する蓮丈をしりめ、沢野は、上衣やズボンのかくしから、幾束かのロープをとり出した。

呆然自失したようになってゐる蓮丈は、乱暴に衣を剥ぎとられ、禪一本の姿で後手に括られる。数条のロープは、腕にも胸にも喰い込み、須弥壇の前の丸柱にギリギリと縛りつけられていく。

蓮丈は、もう観念するよりほかなかった。彼は、ただ沢野が帰るまで、誰にも発見されないようにと、それだけを祈っていた。しかし、沢野の考えていたのは、もっと恐ろしいことだったのだ。

沢野は、蓮丈の禪にかけようとした手をひっ込めると、

「俺にも慈悲心はある。これ以上、恥をかかすのはやめておこう。だが、安心するのは早いぜ。俺はこれで引きあげるが、おまえはそうして縛られたままだ。少々寒いだろうが、朝になって誰かに発見されるまでの辛抱だ。幸い僧堂の朝は早い。そう永いことではないサ。じゃ、アバヨ——」

「ま、まってくれ！そんな酷いことを——沢

野。沢野……」

蓮丈は激しく身悶えしたが、大声を出すのは憚られた。

彼は死物狂いで腕き、何とかして縄を外そうとした。しかし、腕けば腕くほど、縄目は喰い込むばかりである。沢野の姿は既に消えていた。

蓮丈は、絶望で気が遠くなりそうだった。腕き疲れてグッタリとした牀に、寒さが這い回り、忘れていた尿意が襲ってきた。

（もう駄目だ！これも、みんな自業自得なのだ——）

蓮丈の頬を、血のような涙が滴った。

随分、長い時間のように感じたが、あるいは、それほどでなかったかもしれない。

懐中電燈の光が近づいてくるのを認めたとき、蓮丈は緊張のあまり牀が小刻みに揺れてきた。蓮丈の前まで来た見廻りの僧は、懐中電燈を消すと無言のまま、手さぐりで縄を解きにかかった。すぐ前に立ったときも、光線の位置で顔の見分けはつかなかったが、間近かに漂ってくる男の体臭は、俊戒のものに紛れもなかった。

俊戒はロープの仕末をすると、衣をとって蓮丈に着せかけながら、初めて口をきった。

「私は何も訊くまい。このことは、私の胸だけにおさめておく。お前は安心して、修行に精をだすがいい。判ったな。では、いきなさい」。

「はい……」

蓮丈は、暗闇の中で思わず合掌し、あたらしい涙の流れるに委せていた。

除策には、全員が外出を許可されるのではない。

蓮丈は単に残って、衣類の補修をしていた。それは自分のものばかりではない。師兄（すしん）のものは、進んで引き受けてやらねばならなかった。

了覚は、外出許可になっていたが、いくところもないのか、隣の単で脚を伸し、うまそうに煙草をふかしていた。

「蓮丈よ」

「はい——」

「お前。俊戒をどう思う？」

「貴方は、私が初めてここへ来たときにも同じことを訊かれましたね」

「そうだったかな……」

「あの方は、立派な方です」

「好き？」

「好きだなんて云っては勿体ない。私は心から尊敬しています」

「フン。やっぱりナ。そう云うだろうと思っただよ」

「……」

「お前。あの男の前歴を知らねえだろ？」

「知りません」

「彼奴は元軍人さ。それが、どういう風の吹きまわしだか、仏門に身を投じた。軍隊式の要領で、トントン拍子に役寮になる。維那たア、彼奴にうってつけの役職だ。雲水の修行が厳しいア当りめえだが、それに軍隊流の苛酷さが加わっちゃ、たまらねえ。彼奴にやア、どれだけの雲水が泣かされてるかしれやしねえんだよ」

「そんなこと、私には信じられません」

「ウフフ。おまえは美僧だからナ。彼奴も手加減をするだろうよ。だが、用心したほうがいいぜ。今後どんな無理難題をふっかけられんとも限らんからな」

「……！」

プツリと針が折れ、その先が蓮丈の指を刺した。

十二月になると、雲水達にとって最も辛い

行である水行が始まる。毎日午前三時と九時の二回行われ、十五日間続けられるのだ。

水行場は本堂の裏手にあり、十二立方メートルほどの水槽に、山から引いた清水を満たしてある。凍ってこそいないが、水温の低さは、ものの一分と手を浸けてはいられなかった。

水行は、雲水ばかりでなく役寮も参加し、寺内の僧の殆んどが行い、作法どおりに数杯の水をかぶった後は、直ちに本堂へ入って坐禅に入るのである。

若い雲水の中には、面白がっているのではないかと思われるくらい大騒ぎをして、昂奮のあまり水槽に飛込む者もいた。

役寮中の年輩者などは、さすがに牀にこたえ、早く済まして、早々に衣服を着けるが、その間にも寒さにガチガチと顫えていた。もっとも、顫えるのは生理的なもので、若い僧でも、それだけは制えることができなかった。

そうした中であって、俊成の水行だけは水際立っていた。峻烈な寒気も鋼鉄のような彼の皮膚には歯がたためように、悠揚せまらぬ態度は、一分の隙もない美事な作法をみせ、見る者の襟を正しめる厳肅さがあつた。そして隆々たる筋肉が、飛沫の中で輝かしく光る

さまは、胸のすくような豪快さだった。

裸になっただけで寒気に顫えあがつた蓮丈は、最初の一杯をかぶった瞬間、思わず呼吸が止まりそうになった。その後は、もう夢中でかぶり、我に返ったのは、本堂にいつて坐禅をくんでからであつた。それでも、まだ早朝の水行は、寒さだけに耐えればよかった。蓮丈が水行における別の苦痛を知ったのは、二回目の九時のときである。

水行場へいってみると、そこには、十数人の見物人が集まっていたのだ。彼等は、オーバーに身を包み、囁いたり笑ったりしながら、如何にも面白そうに見物していた。

それは、蓮丈には全く予期しなかったことだった。彼等の大部分は老人の男女で、檀徒であるらしく、敬虔な態度で眺めていたが、二、三人の派手な服装の若い女は、キヤア、キヤアと不謹慎な嬌声をあげていたし、カメラを持った男達は、しぶきに濡れるのもいとわず、一心にファインダーを覗いている。

蓮丈は、それらの人々を恨しげに見やり、帯に手をかけることもできずに立ち竦んでいた。他の雲水達も、その反応はさまざまであつた。ある者は天衣無縫に振舞い、勇ましく

水槽に浸ったり、カメラマンの要求に応じてポーズを作ったりしている。また、ある者は裸を拭きながら

「俺達は伊達や酔狂で、やってんじやアないんだ。面白がって見物されたり、パチパチ撮られちやア、たまんねえや。ナア……」と聞えよがしに云っていた。

「オイ。早いとこやっちやえよ。先にいってろぜ」

水行を済ませた雲水達が、その声をかけてドヤドヤといってしまうと、後には蓮丈だけが残った。見物人は、半分くらいに減っていたが、それでも、蓮丈は帯が解けなかった。

蓮丈には、衆人監視の中で、平気で裸になれる仲間が羨しかったし、殊更にそれを誇示する者の心理ときては、とうてい理解できなかった。彼にとって、人前に裸体を晒すことはもとより、たとえ尊い行であっても、寒中に水をかぶるのを見られるのは、耐え難い屈辱であった。

五、六人の役寮達が来て、サッサと衣を脱ぎ水行を始めた。彼等の多くは、年輩者でもあり、馴れてもいるからであろう。見物人などは全く意に介していないふうであった。

蓮丈は、できることなら、見物人を追っば

らってしまったかった。しかし、立入禁止の掲示を出してあるわけではないし、特別に囲いを設けてあるのでもない。いわば、参観は自由ということになっているので、雲水の身にそんな権限がないのは勿論である。

「蓮丈じやアないか。そんなところで何をしておる。もう済んだのか——？」

役寮の一人が、見咎めて云った。

「ハイ、いいえ。ただいま……」

そうし、ども、どもに答えながら、蓮丈は泣きだしそうになっていた。

「早くしなさい。もう皆済んだんだろう」

役寮が去ると、蓮丈は、あらためて四辺を見回した。見物人はあらかた散っていたが、背の高い瘦身の男が、カメラをぶらさげて、その辺を往ったり来たりしていた。その他には、三人の小学生らしい男の子がいた。

「小父さん。小父さんは、水あびないの？」

子供にそう訊かれて蓮丈はギクリとした。

「うん？ イヤ、あびるんだがネ。もう少し後から——」

「だって、もうみんな、あびちやったじやアないか」

「いや、まだ、これからの人もあるんだよ。

坊やたち、いい子だから、あっちへいっとい

で。ここにいと邪魔になるからナ」

「だって小父さんの水あび見たいんだよ」

「いけない、いけない。早く向うへいきなさいッ！」

蓮丈は、我にもなく大声を出した。子供に見られると思うと、脳がカッとなり、腹立たしさで裸が顔えてきた。

「蓮丈。お前、まだ済ましていないのか」

その声に、ハッとして振り返ると、俊成が立っていた。

「申しわけありません。ただいま……」

「おまえ、恥しいのだな」

「……！」

「お前は、他の者に比べて自意識が過剰なのだ。『心頭滅却すれば火も亦涼し』心に蟠りがあっては修行はできん。私も一緒にやるから、スッポリと脱いでしまいなさい」

「はい」

蓮丈は、絶望的な勇気を振り起こすと、衣を脱ぎ捨て、裸になった俊成に従った。

その瞬間、待ちかまえていた長身の男のカメラが、続けざまに速写するシャッターの音が聞えたが、水の冷さが忽ち、一切の思念を消し去った。

△告白▽

自分をハダカにする

(二)

松井 籟子

映画の中に責めたり責められたりする場面を探して、たのしんでいる人がある。

映画館というものは暗いものだし、つれがあってもなくても、画面からうける興奮をひとりで、ひそかに味わうには、もってこいの場所なのかもしれない。

けれど、私は家庭の中の茶の間においても、そんな感じを持つことがある。

それはテレビだ。

テレビには時代物の捕物帖などが多いから多分、好みのシーンを発見して、お腹の中で

「やってるな」と思っている人も多いだろう。

しかし映画と違って、いつ幾日に、こんな番組で、こんな場面があったと発表しても、偶然それを見た人以外には、再び見ることの出来ないものだけに、テレビの好場面というのは、あまり誌上にあらわれないのかもしれない。それに家庭の茶の間に入りこむものだけに、あまりどぎつい場面は制作者側がセーブするので、映画ほどのものはないのだろうが、映画よりも、もっと身近に感じるものだけに、もしあれば、その感銘は深いのである。

る。

最近では温泉マークが大抵テレビ付を看板にしている。大人だけにみせる深夜放送のテレビ番組があつて、すばらしいラブシーンや、悦虐の場面などやってくれたら、夫婦やアベックは喜んでみるだろうに……。スポンサーは衛生器具とか、ベッド商とか、七色のシーツといったところをつかまえばいい。

「寝室のムードを生む○○電気スタンドを……」なんていうのも使えるだろう。

ラジオと違って、テレビは音のポリウム

をさげて、画面だけみてもいられる。深夜放送で、近所迷惑ということなしに、パントマイムのラブシーンをみるのも、又たのしいのではないかと私は空想する。

ほの暗い照明の寝室で、寝ころびながらテレビをみるのは一寸オツなものだ。

特に責めの場面というのではないのに、時々ハッとするようなシーンにぶつかる。健康的なものの中から、勝手に空想の翼をひろげてたのしんでいるのは、私ひとりだけだろうか。

この一月ほどの間に、私の血をさわがせた場面をひろってみよう。

「てれび武芸帳」という時間がある。

毎回いろいろな武芸を披露するらしいが、いつも同じ時間に他に見たいものがあるのではあともさきにも一回しか見たことがない。その、たった一回見たのが「捕手小具足竹内流」というのだった。

この道に——というのは悦虐の道だが——興味を持っていると何でもないうちから、それを嗅ぎあてる何かが身にそなわってくるのだろうか——。

私は朝のラジオ版の番組予告の中から「捕手」という二字を、他の活字よりも大きく目

に入れていた。そして、ある期待をもってこの時間にダイアルを合わせた。

はたせるかな、「捕縄術」というのが出た。

やる人は二人とも男だし、稽古着姿の殺風景な様子は、真面目な武芸の公開にふさわしい。しかし、ひとりかひとりの手を後手にねじって、あつという位の短い間に、縄をかけて高手小手に縛ってしまうのだ。

縄は後手に合わせた両の手から、すぐに首へ一とかけして結び合わせた。前から見ると胸は後へ引かれて、広くはるような姿勢で、首の根元へ黒い縄が一本かっているのが、かえって幾重にも縄をかけられているより、さっぱりして、しかも動きようのないような絶体絶命を感じさせた。

乱れた衿をおしひろげて、その裸の胸へ焼けこでてもあてられるかもしれないという、想像の可能性をふくんでいた。

私は一瞬、私の頭の中でその男の胸を裸にしていた。

もう一つの縄のかけ方は「二つ菱」という方法だった。

これは後手に結んだ縄を二の腕にかけて首にかけるので、後からみると、縄によって二

つの菱形が、えがかれるのだ。

前は、やっぱり首と両腕に、一卷きずつの縄がみえるだけ。

その縄のかけ方をみせる為に、かけた人が後、前とみせるのだが、縄をかけられている方は、もう何をされても、どうにもならないという囚われ人のようなみじめさが体から、にじみ出すから妙だ。

私は又、頭の中で、その男を押し倒したりはいつくばらせたりしてしまった。

こんなことをいうと私はサジストかと思われるかもしれない。しかし、事実、目の前に縄をかけられた男の姿をみた時、私はさらに手をかして、その男を玩具にしている所を空想したのだ。

テレビというものが、あまりに目と鼻のさきにある為に、映画よりも感動が深かったのかもしれない。そんなに目近に縛られた男というものを見たことがないからかもしれない。そして、それは一寸手をのばせば、その縛られた男を押し倒せるという錯覚があったからかもしれない。

何にしても、私は私の中に、やっぱりサジズムがあるのかなと思ったものだ。

こうなると、前月書いたことは、まるで嘘

のようになってしまふ。

だから、きっと私の中には、愛する人の自由になりたいという思いと、愛する男を自分のとりこにしたいという思いとが同居しているのに違いない。

それに私は、人に惚れると火の玉のようになる女だ。



その自分の火の玉にじれて、相手にぐるぐる巻きにされて、身動き出来ないようにされてしまいたくなると思う時は被虐を願うわけだ。中の火の玉が激しく燃えるので、普通の愛撫の仕方ではその燃えさかる焰の静まりようがなくなるのだ。私の健康な肉体は疲れを知らない。だから、どんなに一生懸命男が愛

してくれても、不死鳥のように、あとからあとから求めてやまなくなる。それを静めるのは肉体的に傷つくことしかなくなってくるのだ。

ところが、そこに又問題があつて、もともと普通の男女の愛し方では満足出来ない欲求があるので、求めて、求めて、求めつくしても、その行為が、ただ普通の愛し方では心底悦びに達しないのかもしれない。どっちがさきで、どっちがあとなのか、私自身、自分の体ながらよく解らないのだ。

しかし、人を恋して、激しく燃える心を持っていることはわかる。そして、大抵の場合、どんなに男が愛してくれても、私の情熱にくらべると男の方が燃え方が少い。それは仕方がないのだ。女は恋のことだけ考えていても、お料理も出来れば、洗濯も出来る。ミシンをふみながらでも恋する男の面影をえがいていられる。しかし男は、そうはいかない。女のことばかり考えていたら、社会の中で一人前の仕事はしていけないのだ。女がミシンの手を休めて男の

声を聞こうと思って電話をかけても、男は、たまたま上役と話をしているかもしれないし、むずかしい計算に、とっくんんでいるかもしれない。「声だけ聞きたかったの」といわれても、その時すぐに「僕も……」という気持ちになれない時もある。

私は、そんな男の愛情を仕方ないと理性では思いながら、感情的にもどかしくなる。会いたくて会いたくてたまらない時には、相手にも同じ気持を要求する。出来ないと解っていないながら、要求する。勿論、それは無理だ。

そこでせめて逢った時には、しっかり、自分だけのものにして、自分の思うように愛してみたい時も出てくるのだろう。男を自分の愛情で束縛するということは、男にとって迷惑なことだと、私の智慧が教えてくれる。

私は男にとって感情的に負担にならない、いわゆる「可愛い女」になりたいのだ。それが男に愛される法だと知っている。

私は私の愛した男の前に、そういう芝居をしたくなる。そして自分の火の玉をおさえて、自分を偽って、ただ夢想の中だけで男をいじめてたのしんでいるのだ。

それが、たまたまテレビを見て、その私の本性を刺戟され、本誌の多くの読者の前に

「オラア尻っぽを出しちまうぜ」とばかり、自分の本性をあきらかにすることになってしまったのだ。

ところが、残念なことに、ここでも私は、ただ単に夢想するだけで、現実にはやってみることがないのは、私自身が縛られたいという思いと同じなのだ。

決してこれは弁解でも、欺瞞でもない。そこにも又、私の感情的贅沢さがついてまわるのだから仕方がない。

女に縛られてみたいという男は、女を縛ってみたいという男と同じようにあるだろう。けれど、私が愛することの出来る男で、しかも私を愛してくれる人でなければ、しようがないのだから、無理な望みだ。

私は一生、私の男を求めてさまよわなければならぬのかと思うと、悲しくなる。

悦虐ということを、体の奥にひそめていて、何か一つのことを深く知っている人なら、職業は何でもいい、そんなに美しくなくても、清潔な感じのする人ならいい、お金持でなくてもいい……。

私の望んでいることは、そうむずかしい注文でもないと思うのに、そういう人にめぐりあえないのは、どういうわけなのだろう。

そこで私は、ただ夢想する。テレビの男は稽古着だった。

それに近いなりの男を目の前にえがく。

洋服やYシャツより、浴衣の方がいいと思う。浴衣なら、簡単に前が開くからだ。

黒い細い紐を使おう。

男の肌が白ければ、その黒さが、よけい痛々しく感じさせるだろうし、男らしい小麦色の肌にも黒の方が、くっきりと縄をうき立たせてみせてくれるだろう。

私は二の腕と首にかけて、テレビで見た二つ菱という縄のかけ方をしてみたい。

男には乳房がないから、前へまわす縄は、あってもなくてもいいように思うのだ。

猿ぐつわを好む人がいるけれど、猿ぐつわをはめると接吻出来ないから、つまらないような気がする。

縄を胸へ廻さないかわりに、後手の縄は、しっかり柱にでもくくりつきたい。あぐらをかいた男は柱を背に、仏像のように端坐させられる。

私はきっと、そうしておいて、しばらくは何にもしないで見ているだろう。自分のとりこになった男の姿というものは、責め苛む前に、すでに満足感を与えてくれるので

はないだろうか。

私は、それからお膳をその前にはこんで、男と一緒に一杯のもう。男には、口うつしにのませてあげよう。お酒に弱い男が、顔を真赤にして苦しそうな息をはいたら、私はもっと苦しくなるまでのませてやろう。打ったりたたいたりしなくても、男を責める方法はいくつかあると思う。

もし一月に一度、私の為に一日、柱に縛られていく男があったら、あとの二十九日は、とてもいい女房になるんだがなあ……なんて思ったりしていた。

○

現実には縛るということが行われたテレビでなくても、被虐や加虐に思いをはせることがある。

普通の人が考えたら「そんなものから……」とびっくりするような何でもないシーンが私の体にひびくことがあるのを白状しよう。

毎日テレビの開局記念の番組だった。

舞台開きというのをやった。

その中で大きな太鼓をバチで打つところが写った。歌舞伎などでも幕あきと、幕が終ってからこの太鼓を打つものだが、「ドントコイ、ドントコイ」とうつのだそう。

今までこの太鼓を見たことがないわけでもないし、歌舞伎のはやしの話を聞きに行った時も目近く打ってみせてくれた。しかし、その時は何にも感じなかったのだ。

ところが、テレビでこの太鼓が大うつしになって、白っぽい細くて長い二つのバチが、はずむように太鼓の面を打つを見ていたらこのバチを人の体にあててみたくなった。或いは打たれてみたくなったというのが本当か……。

太鼓のバチというものが、こんなに細い、しなやかな感じを持っているとは思わなかったのだ。

同じ長さのものが二本あるということも、いろいろに使えると思う。

普通の太鼓のバチは短かくて太い。責め道具に使えないこともないが、人の肌を打った時に、責めるという痛さの目的は達しても、肉体のはずみに対する手ごたえに、たのしさがなくなってしまう。どうだろう。

大掃除の時に畳をたたく。

あの畳をたたくという大変、世帯じみたことにも、打つ竹の手頃さから、スポーツに似たたのしさが生れると思うのだ。

だから、人の体に苦痛を与えるのが目的ではなく、人を打ちさいなむたのしさを味わう為には、打つ方の手ごたえに、はずむ感じが伝わる方がいいような気がする。打たれる方も自分の張り切った肉が、はねかえす快さが、痛さの中に加わる方が、いいのではないだろうか。

そして、やっぱり、この太鼓のバチで打つてみたい肉体は男のゴツゴツした体ではない。背にしても、腰にしても、丸みをもった女の肉体であってこそ、この細い丸い棒で打ちつけるのにふさわしいだろう。

そうすると私は一人二役で、自分の肉体を打つてみたいことになってくる。何とも奇妙な感情だ。

加虐と被虐が入りまじって、私の頭の中で混沌としているうちに、私は私が裸にされて太鼓のかわりに太鼓の台へ、縛りつけられている姿を幻の中にえがいてしまう。

その大きな太鼓をかかえるようにして、背と腰を打つ人の方へ向け、太鼓をかかえた手は前で、しっかり縛られてしまう。足は別々に太鼓の台へくくられるのだ。

私の手は、太鼓の木の所でこすられて、グリグリと音をたてるかもしれない。太鼓の皮

の冷たさは胸をおすだろう。

そして、打ち手は太鼓をたたくように、大きなモーションをつけて、はじめはゆっくり打つ。一打ちすると、私の体はピクッと動くだろう。二た打ち、三打ち……。乳房が太鼓の面でおされて、乳首が皮にこすられて体中へ小波のような戦慄をひろげるだろう。

だんだんに早く打たれ、私の息も、だんだんに早くなる。

打ち終ると私の背は、幾条もの赤い縞でいろどられるだろう。そして、そのまま私は、さらし者のように、ぐったりと、やっぱり大太鼓をかかえさせられているだろう……。

舞台開きの太鼓から、これだけ連想をさせる私は、やっぱり異常というより他にないのだろうか。

○

もう一つテレビで感じたものがある。

これも明るい、美しい舞踊から感じたのだから、私の異常さを伝えることになるかもしれないが、私はただ、もしかしたら、大勢の読者の中には同じようなことを感じる人がいるのではないかと思うので、つい打ちあけ話をしたくなるのだ。

「羽衣の譜」という日本舞踊があった。

民話から題材をとったもので、三保の松原

の羽衣ではなく、山の中の花園へ天女が連れ立って舞いおりてきて、羽衣をおいて遊んでいるのを、男がその羽衣をかくした為、ひとりの天女が空へ舞い上れなくなる。天女は男から蓮の花の種子をもらい、それを池へまいて蓮の糸をとり、それで羽衣を織って再び天へ舞い上っていくという筋だった。

子供に見せても何の害もない、お伽話のような舞踊なのだ。

明るくて、美しくて、どこにもサジズムやマゾヒズムなんて、うかがえないものだ。

もっとも、男が天女の羽衣をかくして、天女のなげくのをたのしめばサジズムに通じるだろうけれど、この舞踊には、そんな描写もなかった。厭がる天女を無理やり家へつれて帰えるというシーンもなかった。

では、いったい私が何にそんなものを感じたかという、天女のかつらの髪の毛なのだ。

こういう時代ものでは、下げ髪のかつらというのはよく使われる。王朝ものにもあるし、珍らしくない髪の毛なのだ。

しかし大抵、普通の下げ髪は、たとえ腰のあたりまで長くたれていても、さきへいって

細くなっているのが多い。

この舞踊でも、五、六人、出てくる群舞の天女達の髪は、さきで少し細くなっていたし、長さも腰迄、長くても腿ぐらいまでの長さだった。

ところがひとりだけ、主人公をやった天女のかつらは、床につく程の長さで、黒く房々とした髪は、まるで獅々の精のかつらのように、たっぷりとたれ下っていたのだ。しかもさきへいっても細くならず、実に見事な黒髪だった。

私は、その髪を見ているうちに、奇妙なことを思いついたのだ。

この髪なら縄のかわりにして、この女を縛ってしまえるな……と――。

昔の責め絵に、髪の毛で松の木から、ぶらさげられている絵があった。

或いは女連を並べて、横にわたした丸太に女達の髪をくくりつけ、丸太を持ちあげると女達が髪の毛で吊り上げられて、目尻をあげて悲鳴をあげる。丸太をおろすと、ほっと一息つくのを又、丸太をあげるという責めがあったと、何かで読んだこともある。

しかし、そうした場合、髪は髪で、手を縛るのは別の縄を使っていた。それが、この天

女のかつらの髪ほどの、見事な髪の毛をもった女が、もしいたとしたら、その女の両手を髪の毛で縛り、さらにそのさきを松の枝にかけて、つりさげられるのではないかと私は思ったのだ。

女の着物というのは幾本もの紐を使ってあるので、裸にして縛るにはこと欠かないが、何にもなくても裸にして、尚、その女の髪の毛が、彼女を縛る道具になるのだったら興味深々として、つきないものがあるように思われるのだ。

それは髪の毛で高い所へつりさげるというのではなく、柱を背に髪の毛で、ぐるぐるまきにすることも出来そうに思えた。

髪の毛というものは、裸の皮膚にふれると痒さをあたえるものだ。縄で縛る以上の効果が、そこに生れてくるような気もする。

残念なことに私はそれ程、豊富な髪の毛をもっていない。しかし、あんなかつらがあるのなら、悦虐の為に使ってみたいように思う。

吊りさげては、かつらだから、ぬげてしまうおそれがあるだろう。

しかし、首にまきつけたり、胸にまきつけたりするぶんには、ぬげはしない。



髪の毛で、がんじがらめになった女というものを幻のようにうかべてみると、私は何だが、とても美しいように思われてならないのだ。

それにしても、何とおかしなことを考えるものよと感心されたことだろう。

どうして、こうも縛りということに関心を持つのか我ながら不思議である。

○

しかし考えてみれば、テレビを見て、こんな風な物の考え方をしたとしても、それは、すべて夢想であって、いわば架空の出来事だ。

「何だ、勝手なネツをふいて、いい気なもんだ」と思う読者があるかもしれない。

そこで私は現実にあつた話を一つ、つけ加えたい。

ただ、残念なことに、私がこの目で見たことではあるが、私自身の身に起ったことではないのだ。

戦争が終って、まだ日も浅い頃だった。

疎開さきから、もとの住家に帰ったのだが、留守の間に向う三軒両隣のうち、隣だけを残して全部、新しい住人と変っていた。

それでも一番親しくしていた隣家の人が残っていたので、近所づきあいに関することなかった。

焼けなかったのがせめてもの仕合せで、長い間、隣家に留守をたのんで、あけてあった家は掃除だけでも手間がかかり、一週間位わけなくすぎてしまった。

やっと一段落ついた頃になって、夜の静寂の中から時折、うめき声がきこえてくるのに気がついた。それが細い道を一つへだてたお向いの家からなのだ。

その家には三十すぎた芸者あがりらしい粹な奥さんと、その人よりも年の若い男の人と住んでいるらしいことは、昼間、顔をあわせで知っていた。

芸者あがりといっても、気さくな人で、隣家とは戦争中から行き来している仲らしく、私が隣家へ何かの用事で行くと来合せてい

て、一緒にお茶をのんだこともあった。

痩せぎすの美しい人で、若い御主人は闇屋だそうだが、どうしてそんな粗野な感じの男と一緒にいるのかと、不思議に思うほどだった。

その奥さんらしいうめき声に、時々、男の声がまじってきこえる。

(急病ではないかしら?)
と、私は耳をすました。

しかし、それ程親しくもないのに「どうしました?」と声をかけにくくのもためらわれて、そのまま寝てしまった。

あくる日、表を掃いていたら、若い御主人が出て来たので

「おはようございます」

と挨拶したついでに、

「奥さん、どこかお悪いんじゃないんですか?」

と、つい聞いてしまった。

すると、

「ええ、胃がいれんが持病でしてね」という返事なのだ。

「そうですか、お大切に……」

と、その場はそれですましてしまった。

しかし、それから気をつけていると、三日

に一ぺん位のわりで苦痛を訴える声が聞こえるのだ。

時には「痛い……痛アッ……」という悲鳴まで聞えることもある。

胃がいれんが持病と聞いているから、もし御主人の留守におこして苦しんでいるのならお医者さんでも呼んであげなければいけないと思って、気配をうかがっていると、男の声が聞える。

「痛いイイ……」と云いながら、何か御主人に云っているらしい奥さんの声もする。

そこで又、私の出る幕ではないと、寝間へ引きこんでしまうのだった。

ところがある晩のこと、あまりにその苦しみが異常だった。

「痛いッ、ああ……」

という声にまじって、お湯か水をあける音がする。聞えてくる所も、いつもの窓からではなく、風呂場からだった。

それでも私はまだ、よく胃が痛い時、温めると直るので、胃がいれんをおこしながらお湯に入っているのかしらとも思った。

しかし

「ヒッ!」

という声は普通ではない。

そこで先ず、お隣の奥さんの所へ相談に行つた。どうも頼まれもしないのに、それ程親しくない家へ「どうしたんです？」と云いに行くのが気恥しくてならなかったからだ。

すると、お隣の奥さんは

「いいのよ、ほっておけば……」

というのである。

「何故？」

と私が聞いても

「いいのよ、あなたが心配することないの」と、齒に絹をきせたような云い方でとりあ

わないのだ。

「でも、いつもと違うようよ」

と、私は云つた。すると隣の奥さんは

「あら、あんた知ってたの？」

という。

「胃がいれんでしよう？」

という

「ああ、そう、胃がいれん。そう、それでいいの」

何だか、どうも変な云い方なのだ。

そのうち、お向いの家の戸があく音がして

誰か出て行つた。

耳をすますと湯殿から、うめき声がしてゐる。

私は、お隣の奥さんと二人で思わず一と足二た足、お向いの家へ近づいて行つた。

湯殿は、あとから建てた建物で、家の端についていた。中でうめき声がするの、あかりがついていない。

私は思わず、お隣の奥さんと顔を見合せてしまった。

たしかに湯殿の中に人の気配が感じられ、荒い息使いさえ聞こえるのに、あかりがついていないというのは不思議だ。さっきまではたしかについていたのだ。

お隣の奥さんは湯殿の外から

「前田さん」

と、小さく呼んだ。すると中から

「ああ、奥さん、お願い。来て下さい」

という、とぎれとぎれの言葉なのだ。

私達は台所の戸をあけて中へ入つた。

手さぐりで台所の電気をつけ、湯殿の方を

すかしてみ、私は思わず

「あっ！」

と叫んでしまった。

芸妓あがりの奥さんが裸で縛られていたのだ。

その上、その湯殿は小屋のような建て方で天井がないので、梁がそのままむき出しにな

っている。その梁へ吊り下げられているのだ。

私とお隣の奥さんは、大急ぎで先ず湯殿の電気のスィッチを探して、あかりをつけた。明るい光の下に見る湯殿の光景は一瞬、私の足を、すくませる程だった。

裸で、ぐるぐる巻きにされた奥さんの体中から、赤い血が糸のように流れていた。

そればかりではない。

白い体に地図をえがいたように、紫色や茶褐色の痣があるのだ。そしてその痣の為に、よけいに肌の白い所が、きわだってみえるのか、羽二重のような皮膚は美しいといつていいのか、凄惨といつていいのか、息をのむような感動をおぼえた。

といつても、それをみつめているひまはない。

私達は二人がかりで、吊っていた縄をとき、まだ後手の縄がとけ切れない体を、かかえるように座敷へつれて行つたのだ。

寒い季節ではなかったのが、まだしもましだった。

全身にある切り傷は、糸のような赤い血を引いていても、たいして深いものではなかったが、後手の縄が、なかなかほどけない。

「すみません」

と、小さな声で云われると、自分が縄をといているのではなく、縛っているような錯覚をおこしそうだった。

やっと縄をとき、着物を着せて、切り傷にはメンソレタムをぬったり、お湯をわかつて熱いお茶をのませてあげたり、お隣の奥さんと二人でなかば夢中で世話をした。

寝床もとってあげて、シーツを敷こうとしたら、そのシーツにも、点々と血の跡らしいしみが残っているのだ。

何となくわけを聞くのが悪いような気がして、奥さんを寝かせてから、私達は又、顔を見合わせた。

何をどう云って、どう帰ってきたらいいのか、こんな場合にぶつかったことがないので、とまどってしまったのだ。出て行った御主人が帰ってくるかもしれない。帰ってきたらどうなるのか、それも解らない。

それを察したのか、その奥さんは問はず語りに話出した。

それによると、裸で湯殿へ吊ってから、水を浴びせ「寒い」というと、体中をくすぐって、そのつらさに寒いのを忘れて、しまいは汗をかく程になると、又、水をかける。

はては、かみそりで、方々をなでるように切ったあげくに

「しばらく、そうやってろ」

と云って出て行ってしまったのだそう。

「どうしてそんな……？」

つい私が尋ねてしまうと、奥さんは、そうされた原因については、一言も云わず、曖昧に言葉をにごすだけだった。

もう大丈夫だというので、お隣の奥さんと私は帰ってきたのだが、外へ出るなりお隣の奥さんが云った。

「あなたは知らないけれど、あれは癖なのよ。私もはじめは随分、驚いたわ。だって、お岩さまのような顔をして配給物をとりにきたりするんですもの。お湯殿をわざわざ建て増ししたのだって、あの体じや銭湯へ行けないからなのよ。生傷がたえないんですもの。」

私だったらとうに別れるか、逃げ出すかしてしまふけれど、それをしないのだから不思議ね。あんな目にあわされながら、自分の着物を売って、御主人の着物を新しく作ってやつたり、好きなお酒を手に入れるのに、ものものない頃の苦心たらなかったわ。そして、三日に一ぺん、縛られて、ぶたれて、けられて……。ねえ、どう思う？」

どう思うという問いに私は、さも、いやらしいというように眉をひそめて、

「随分、変った人もいるのね」

と云ったものだった。

そして実際その時には、そんな生活がただ、いやらしく思われたのだ。何かしら、みだらさを通りこした、いやらしさに思われたのだから私にとっては不思議だ。

自分の望んでいたことなのに、それを目の前に見せられ、しかも、その闇屋の御主人の野卑な顔つきを思うと、どうにも悦虐ということが美しく思われなかったのだ。

もしその御主人がすばらしい美男子だったら、私の感じ方が多少、違ったかもしれない。その頃、すでに私の体の奥底に、悦虐への希望はめざめていたのに、それがたまらなく不快なことに思えたのは、どういう心理なのだろう。

大分、時がたって、闇屋の御主人の顔を忘れた頃、私は芸妓あがりの美しい奥さんの縛られた姿だけを、絵のように思い出すことがあるようになった。そして、不快なものは消えうせて、むしろセクジュアルなものだけを感ずるようになった。

私は程なく、そこから引越したので、あの御夫婦達が今ごろどうしているか、何となくなつかしく思い出すのである。

新稿

ある夢想家の手帖から

イデオロギイ
理想と行為とは性の分野に

においては等質である

— キント —

沼 正 三



第八章 転生願望と畸形願望

人間は牛馬ウシウマとなり岩負イハネいて

牛頭馬頭ビョウマダウどもの追おいゆくところ

—— 斎藤茂吉「赤光」

理学第二巻。

畜生になつて美女に侍りたい——これを美女と獸畜（Beast）は野獸とは限らないの主題ということもできようか——この畜化倒錯者の秘願は様々の空想を生む。前章の作品の様に奴隷制度に仮託するのにも確かに良い方法である。捕虜状態、発狂状態などもある。これらを後に大願望の実例として各種の作品につき紹介するつもりであるが、総じて、これらは人間の肉体を離れないという点で、不自然でない代りに不徹底の感を免れない。

そこで、これを徹底する時に到達するのが、転身（変形）と転生（生れ代り）の両方法である。この中、前者については、人を豚にするキルケンの魔法を初めとして、希臘羅典神話系統の説話が、オヴィデウスの「変身賦」に取り上げられたものだけでも無数にあるし、その他和漢の文献も少くなく、近くは鏡花の「高野聖」

「鞭打つ女達」のミクロスは女主人から女主人へと転々しつつ、馬にされ、犬にされ、熊にされる。それは最早、アリストテレスがフイリスの前に這い、讓治がナオミを背にせんと欲した様な、一人の愛人への性的隷属からする屈辱的行動、女の支配権の象徴としての「愛の馬」などの域を越えている。ミクロスは受動的にその畜生的運命に陥っていくが、この小説自体は、能動的に畜生になりたいマゾヒストの読物として書かれていることは明らかである。こういうマゾヒストをヒルシュフェルトは畜化倒錯者と名付けた（性病

の様な古典的作品もあり、本誌上でも天泥氏の「被虐性学者の手記」(二八年一〇月号)私の訳出したシュペルヴィエルの「人耶馬耶」(二九年二月号)はいずれも馬に化してドミナに奉仕する空想を取り扱っている。資料夥多、到底一章では収まらぬから、ここでは要説せず、後者即ち畜生への生れ代りを扱ったものを見よう。

地獄、餓鬼、畜生、修羅、人間、天上の六道を輪廻するという転生の思想を支えるのは、畜生道の観念であるが、私はこの観念の成立自体に、性文化の爛熟した古代印度における畜化倒錯者の存在が「前世に畜生だったからだ」という説明を要求した為ではなかったかという仮説を立てている位で(詳しくは二八年六月号旧第六項及び翌月号六七頁参照)、非常にマゾ的空想に親しみ易い思想であることは間違いない。

畜生に生れ代ってドミナに仕える この場合、空想者のマゾヒズムを刺戟するのは、女の方でも(実は男とは知らず)畜生としか見ないという点である。男を獣にする、サディスティンである必要はない。普通の女が馬や犬を扱う時の様に……それこそが畜化倒錯者の理想ではないか。

シュペルヴィエルに「妻との再会」(La Femme retrouvée)というコントがある。シュマンという小学教師が現世に残して来た若い妻の許に戻る為、天国の掟に従って、犬に生れ代る。遂で行き逢った妻にじやれつき、裾を啜え、目に物を言わせて「あんたこそ私の飼主なのだ」と知らせ、彼女の住居に従いて行って、遂に飼って貰うことに成功する。彼は幸福だ。彼女は彼が置物であるかの様に、彼の前で平然と着物を脱ぎはしたが……。所が、ある晩、男が入って来る。妻は夫の死後、情夫を作っていたのだ。男は犬に芸を仕

込もうとするが犬は動かない。男は犬を足蹴にして押入に閉じ込めて……だが、犬のシュマンは、妻の不貞を責めようとしな。心の奥の「犬の性」が、彼女に対してやさしい目付をさせ、彼女が残りを物を喰べさせてくれることに對する感謝として、濡れた舌で彼女の手足を舐めさせるのだ。……次第に彼の精神中の人と犬とが混乱して彼は狂犬病になり、彼女を咬むことを恐れて窓から逃げ出し結局、撲殺される。……と言った話だが、飼われている犬の立場から妻を見る気持ちに基だマゾ的なものを感じる。これは人間の姿を失わずに、単に犬の形を模して這い廻る行為からは期待できぬマゾ効果である。三者関係(情人の登場)も、夫が犬の姿になっているからこそ不自然なところがないのである。

このシュペルヴィエルの作品と似た趣のある作品に戦後派、猟奇作家、香山滋氏の短篇「深海魚」がある。

ホテルに定住して贅沢に暮している美貌の未亡人がある。彼女の夫は生物学教授であつたが、深海探險中、事故で行方不明になつた。教授を探索した時、代りに発見された畸形の人間とも狐猿ともつかぬ動物を以後、夫人は亡夫の記念としてファリと名づけて飼育しているが、部屋から出すと「貴婦人の玩み物」をみようとする人目があるさいので、夫人はファリの定位置をホテルの自分の室に附属したトイレットの中とし、来客の時には必ず其処に入れることにしている。美しく富んだ彼女の愛を得ようと男達が群くが、彼女は偉丈夫だった夫の在りし日の姿を忘れない。が又、爛熟した肉体の満たされぬことからくる焦燥もある。そんな時、用を足しにトイレットに入ってファリを見つけると、彼女は胸中の鬱積をこの罪のないファリに向けて、靴を投げつけたり、氣絶するまで蹴り続けた

りして折檻するのだった。その中に亡夫の倅を偲ばせる男が、とうとう彼女の愛人となる。男はある日、彼女にファリの正体は何かを推理しつつ語る。それによると教授は深海で起った事故の時、恐しい水圧を受けて筋骨の組織が歪められ、その結果、頭だけ大きい狐猿のようになったのであって、ファリは即ち教授である、という。夫人は真相を知って驚く。然し、トイレットの戸を開けると、今の話に自己の正体を知られと悟った教授は、恥じて、水洗用の鎖で縊死している。男は教授が自殺することを予期しつつ、聞えるように語ったのである。

以上が梗概である。これだけでも非常にマゾヒスチックな印象があることが分ろう。ここには文字通りの輪廻転生はないが、ファリは（本人の人間意識にも拘らず）夫人からも周囲からも全くの畜生と扱われており、その点では、生れ代ったと言って良い。そして夫たる身が妻の愛玩動物となつて、彼女と情人との仲を見聞させられる三者関係の点でも、「妻との再会」と同じマゾ効果を示している。

尤も、香山氏はシュペルヴィエルほどに三者関係に重きを置かず、美女と獣畜という設定により多く関心している。氏が生物科学的幻想の手法を常套とし、異国的な豪奢な雰囲気を出すのを得意とすることから、氏の作品には美女と獣畜を主題とするものが甚だ多い。もう一例を挙げれば、「ナナ夫人」（二九年三月号原氏時評及び雑報二一八）では、妖美の貴婦人がサルコ（肉塊を意味するラテン語）と名付ける畸形児を飼育している。身長三尺に足らぬ矮人で、犬の様に嗅覚がきき、猫の同伴もし、番犬代りもする。最後には夫人から両眼を抉られるが、尚も夫人を慕って身を亡ぼす。……

香山氏はマゾヒストではないから、畜生化されている男性側の心理はお粗末であるが、読みつつ行間に文字を読み取る空想的読書法を心得た読者にとっては、これらの香山作品は充分、マゾ的読物となるであろう。

シュマンの犬から出発して、ファリ、サルコと来たところで、私達は、畜化空想における畸形児の意味を発見する。その外形が人間離れしていることが、これを獣畜視させ易く、従つて、マゾ的願望としての畜化空想を支え得るのだ。（畸形侏儒が古代中世において実際に家畜的飼育の対象だつたことは、後に詳述する）

その一例として、日夏由岐夫氏の「まにあ地獄」を挙げよう（附記）。独身で暮す美貌の女性が、自宅のパーティーで、ある青年に求婚され、返事を留保する。「エスー」彼女が、こう呼んでいるこの奇型児は、彼女がM夫人からひそかに贈られた玩具だった。M夫人はこれがあるサーカス団から買ひとったという。M夫人の亡夫は軍人で、その頃は戦争中だったから、彼女は未亡人になつても貞淑を尽さねばならなかった。国防婦人会の要職についていたM夫人の貞淑の秘密は、このエスだった。

……………

「私達も体面つてものを重んじなければならぬ以上、その裏で、どうしたって、トイレットみたいなものも要るわけよ。……エスはその点、人間つて云つても畜生のようなものだし、籍もなけりや、名前もない、何の権利も主張しないで、忠実に用だけ足す生きている道具みたいなものだから、とても便利。……外へ出さなくなつたって良いし、何を喰べさせても良いし、口は利かなくなつたって済むし私たちのどんな恥かしいとこ見せたって、何しろ相手が畜生なんだ

から平気だしね、こんな便利なものはないわ。お手洗所の隅に飼っておけば済むのよ……そこで、そりやあ忠実に何の用でもするの。……慣れれば放せなくなることよ。——だまされたと思って飼ってごらんなさい」『M夫人がいみじくも囁いた様に、この「生きてゐる玩具」は、彼女達のトイレ、ごみ捨てだった。彼はその境遇に甘んじていた——と云うより、そこに生甲斐を見出していた。彼は美弥子が用便をする浴室に住んでいるのだ。その片隅に、じつとくまうって、女主人が用たしに入ってくるのを一日、待っているのだ。そして食事さえ、皿もなにも使わずに、その床の上で犬のように喰べるのである。……口をきくことも、寝室と手洗場以外の場所に出る事も許されていない。一日に何回か女主人が用をたしに入ってくる時、そのときだけが、切ないランデブウの時間なのだった……』

原文には、尚、浴槽や寝台での奉仕も描かれる。美弥子は結婚の時、エスを残して邸宅を封鎖してゆくが、やがて彼の奉仕を受けに秘かに戻って来る。結婚による喜びも、畸形児を使う快楽を忘れさせることはできなかったものであった。……これが、小説の結びである。

畸形願望が畜化空想の一変形であることは、これで明らかである。尚、三者関係の外、M夫人からの贈与という準三者関係（旧第九項）が成立していることも、マゾ小説の骨法を心得たものとして、注目される点である。

享け難い人身を享けて生れながら、畜生の境遇を理想と観じ、五体揃ったこの身を畸形化しても家畜的待遇を受けたいと望む。何と恐ろしい業（わざ）だろう。正に「生身墮（キナガタハシネテリ）在（ニ）畜生道（ニ）」（「休禪師」だ。

性の重荷の岩負うて、美しい牛頭馬頭の鞭に追われるのが、私達マゾヒストの宿命なのである。誰か畜生道の思想を荒唐無稽と言うことができようか。

附記 旧第一〇項（二八年七月号）では、私は香山氏の「深海魚」のトイレの場面から、ファリが夫人の用便の後始末をしたり、水洗便器の水で渴を医したりする空想を逞しうした。日夏氏の「まにあ地獄」（初回）は、その後昭和二九年一〇月頃の風俗草紙誌に出たもので、明らかに私の右の文の空想の系列にあると思われる。で、氏の文を紹介して、私の稚拙な文の再録は省略させて貰うことにした。

第九章 畜生道の虜囚の告白

犬扱いでいいから可愛がつて下さいという位へりくだったお願いはありますまい。それでも私にとつてはそれが申し分ない地位なのです。

——シェークスピア「真夏の夜の夢」

畜化空想は、マゾヒストの胸をときめかすが、現実には変身も転生もできない。畸形児として生れ直すわけにも行かない。——そこで取られる方策は、不具化である。後天的人為的に畸形化しようというのだ。そしてこれによって畸形児Ⅱ家畜たるの実を収めようというわけである。先に訳出したマゾッホの「公妃の復讐」（二八年八月号）（再録の予定）でオルガが敵の首領マクを犬にするのでも、もし足を断って四道を強制し、手を断って舌の使用を強制したのでなければ、畜化がマゾ遊戯化して本当の復讐にはならなかったであろう。——マゾヒズムと身体傷害との関係には、他に、女主人の恣

意的な残虐行為の受忍（例えば、千一夜物語には、食事後、愛人が手を洗わなかったというだけで、その懲しめの為に両手の親指を切り落して追い出す貴婦人の話がある）もあるが、この家畜化の手段としての面も無視できない。

その好例として、初期の人間探究誌（通巻一二号）に載った性相談の投書（「私は畜生道に墜ちたのか？」）を紹介しよう。

投書者は○大生とあり、達者な文章で、幼少時からのマゾヒストとしての成長を詳述している。コプロ傾向の発達と空想と実行の程度。同性から異性への関心の転移、女子専制国空想……等、興味ある文章が続くが、割愛して、家畜化願望の記述に進もう。

『今の下宿は田園調布の西洋人の家の多い中にあるのです。私の二階の部屋から裏の家の庭がよく見えるのです。裏の家は英国人のシビリヤンの一家で、若い夫妻なのですが、メイドさんの話では貴族の家柄の出の夫人だとのこと。夫人はCさんというのですが、ジミーという犬を飼っているのです。……御主人のKさんが自動車で出かけたあと、Cさんが庭でジミーを仕込んでいます。スラリとした身長のある細面で金髪のすばらしい美人で、年は私と同じ二十才です。庭に出てくる時はよくスポーツ用のズボンとスエーターで、犬鞭を持っています。メイドさんの話では気位の高いひとらしく、英国の貴族にはよくあるのだそうですが一日中、口をきかずに用をさせることもあるそうです。ジミーをつれて散歩する時なども、ツンとすましています。……妙なことに今迄かつて欲望しなかったことを欲望するのです。……今、私の第一の望みは犬になることなのです。私の競争相手はジミーなのです。ジミーに羨望を感じずるのです。今迄の単に空想に止った欲望と違って直接行動に訴え

たいような強い衝動を感じるのです。これが恋心としたら、私は今迄恋を知らなかった。Cさんこそが初恋の人です。しかも、恋仇は主人のKさんでなく、犬のジミーなのです。「犬の恋」なのです。私はKさんには何のねたみも持ちません。KさんとジミーがどちらもCさんを愛し、愛されるように、私はKさんと並んでCさんを愛して行ける……然しジミーは邪魔です。ジミーがいては、Cさんは私を気に入ってくれないでしょう。

私のこの頃の空想は、こんなです。夜分、ねしずまった頃、忍んでいてジミーを殺してしまいます。それから暫らくしてKさんの乗る自家用車に両足を轢かれます。入院しますが、両足は膝小僧の下から切断されることになります。Kさんは私が覚悟して轢かれたとは知らず、同情して……私の生涯の生活を保障すると約束してくれます。退院後、彼の家に引き取られます。義足は両足共だから、うまく使えず、つい這って用を足すことになります。……約束があるからKさんは黙っていますが、Cさんは、この不具の日本人は不愉快だと露骨に顔に出します。私はその項を見はからってメイドさんに、実は自分がジミーを殺した。こうして四つ這の生活をする様になったのもその罰だと思おうと打明けます。すぐCさんの耳に入り、愛犬を殺されて腐っていたCさんは憎い犯人が只でさえ目障りな私だと知って復讐を志します。私を徹底的に犬にしてみようという決心です。（Kは家から出てゆくか、それとも犬を殺されたCの出す条件を呑んで家にいるか選ばず。家を出ては生きてゆけぬ身なので後者と選ぶ）。Cさんは、私が今迄ねていた部屋を出て犬小屋の中にねること、指を使わず口だけで食事をとること、口をきく代りに犬のように吠えること等々……を命じます。……食事は、お二人

の食事のテーブルの下に坐つてると、骨やパンを投げてくれるのを口で食べるのです。嬉しいことがあれば靴をなめます。……以下略」

これを引用したのは本来、本誌にふさわしい投書、と思われるからでもあるが、一つには、これを読んだ時の、分身を見出した様な喜びと驚きが忘れ難いからである。犬と便器に理想形態を見出すマゾ類型が決して珍らしくないことを今の私は安心して——それは本誌が多くのマゾヒストの発言の場となったことから得られた貴重な結論だが——言える(附記第一)。然し、当時はそうではなかった。

犬型マゾヒストに仕込まれて復員した私は、自分が畜生道に墜ちているとの自覚に悩んでいた。文献を漁って同じ悩みを持った人間が沢山いることは知ったが(次章参照)それは皆西洋人で、何か親近感が足らなかった。そんな時、この文章を読んだのである。地獄の釜の中でも、仲間を見附ければ心強い。私は自分のおちた畜生道の世界に、少くとも一人の日本人を見附けたわけだった。両足を切断されて白人美女の犬となる——ノーマルな人には奇怪極まる空想でしかあるまいが、私には胸に迫るものがあつた。……しかも、私も現実に犬を恋仇として意識したことはない(附記第二)。「ジミーが憎らしくてたまらぬ気になります。今迄はこれほど強い衝動を感じたことがない丈に心配なのです。」というこの青年は、だから私以上に、文字通り畜生道の虜囚だったと言える。

彼はこの悩みをどう解決したろう? 同誌翌月号誌上に回答があつたが、浅薄で悩みの解決には役立ちそうもないものだった。失望した彼は、どうしたろう? 本当にジミーを殺しはしなかったか? 本当にKさんの車の前に跳び込んで行って両脚を轢かれようとしたのではなかったか? 当時(昭和二六年六月頃)はまだ占領中で、ア

チラさんの車は轢き捨て御免の時勢だった。新聞には出ない事故で両脚を不具化した大学生が何処かに居はしなかったか? ……今でも、この投書記事のスクラップを読むと、私はフト、そう思わずにはいられないのである。転生、畸形といった実行不可能の空想と異って、これは実行しようとすれば、できないことはない空想だったのだから。

附記第一 河真田氏は「私のマゾヒズム断片」(二九年一〇月号)で犬願望(この人のは、膝をつかず踵を地につけて尻を上げて這うこと、模擬尻尾を使うことが特徴である)とウロラグニア(大きな氷囊の中に女の尿と共に入られて吊されたいという)を示された。その他、一々は省略するが近く黒田氏は「いざない」(三三年九月号)で、はつきり(原忠正氏における馬と長靴と鞭とに対比されるべき別個グループのマゾ象徴として)犬と便器とに対する関心を告白されたし、コプロ派の雄、とやま氏も、「愛好者の記録」(三四年二月号)で、犬空想を愛するといわれた。

——一般に犬党の方が馬党の人より便器願望に親しむのは、犬としての舌の使用が媒介するのであろうか。

附記第二 「恋仇としての犬」は刺戟的なテーマである。これについては再説する予定。

予告!!

臨時増刊号『悦特第二集』 定価三百円(送共)

五月中旬、堂々刊行、乞御期待。

書店又は発行所へ御予約下さい。発行所へお申込下さった方へは、印刷完成と共に急送申し上げます。

＜体験記＞

バー「ナナ」の人々

(第八回)

南 晴 夫



八、ミスズのこと(その四)

男の手に握られているのはそう太くないが黒く油じみたロープであった。ヨットとともに幾度か潮風にさらされてびくともしなかった麻縄をより合せたロープ。蛇の眼の男がそれを持って背後に廻って来た時、ミスズは反対的に逃げようと腰を浮せたが、すぐ又その場に引据えられた。後手を高々と首に吊りあげられているミスズは、その首縄を掴まれると、もう無力だった。

「往生ぎわの悪いねえさんだな。さあ、これからニュー・ファッションのモードってえのを着せてやるからおとなしくしてな！」

もう既に厳しく括り上げられている手首に更にロープを巻きつけて、それを二の腕から乳房の上に廻した。

「もう止めて！ 誰か！」

ミスズは、縛らせまいと不自由な身体を腕かせたがそれは何んの効果も生じなかった。

胸を一巻きする度に男はロープを力一杯締めつける。油と手垢と潮風を含んだロープは一度締められるともう緩むことはしなかった。

乳房の上下を縛られるとそれが首に廻る。普通の縄や紐と違って細目といってもロープである。胸から両脇下を通ったロープがぐるぐると首に掛けられて巻かれた時、ミスズは思わず窒息しそうになった。二巻きぐらい巻かれるとまるで首枷を嵌められた様に動けなかった。首から又二の腕へ、そこで腕を丁寧に締め上げそれを後手に連結し反対の腕へ廻しそこを縛り胸に廻す。男のこの縄さばきがどこで覚えられたものか分らなかったが、その縄は完全であった。女体の急所という急所を丹念に締め上げ少しの緩みも間隙もみせなかった。ミスズの豊かな肉体もロープとロープの間からむっちりぞいていく一個の肉塊でしかなかった。後手が高々と吊られてそれだけで半ば自由が失われているのにその後手から二の腕、胸、首と括り上げられては藻掻くすべもなかった。ロープで巻かれた胸は、キブスを嵌められた様に息苦しく、首を前後に曲

げるとどちらかの縄が締め、たちまち咽喉が詰って来た。石膏の胸像と化したミスズは素膚に受けるロープの痛みに顔をしかめて耐えた。

「どうだい、ねえさん、いいスタイルだぜ。」

「東京の女王」に立候補したらナンバーワンは間違いないぜ。」

ミスズは男を睨みつけた。

「そ、その眼が又何んともいえねえ魅力だぜ。勿体ねえくらい良い身体をしているじやないか。どうだい、身体が締まっている気分だろう？ 縛って呉れて泣いて頼む女の子もいるんだぜ。ねえさんなんかもその口じやねえのか？ いい気持そうじやねえか」

ミスズの顔をのぞき込む様に男はいった。この男は今迄もこうやって女を縛って楽しんでいたのだろうか。ミスズも何かの本でその様な男のことを読んだ気がする。

「なにが良い気持なもんか！ ひとをこんな目にあわせて。このごわごわした綱だけでも取ってよ！ 息がつまりそうじやないか。あんたはこんなこと好きなんだろうけど、わたしは痛くってたまらないんだからねえ。さ！早くほどけたら！」

むなししいとは思いつながらこう鉄火にいわず

にいられたなかった。あんな風にぼんぼんとたんかを切った手前、泣き顔は見せられなかった。しかしいくら気張ってみてもこうも惨めに荷物同然に括り上げられてはこの鉄火口調も哀れだった。それでも弱々しく屈服するのはミスズの気強さが許さなかった。同じ様に自由を失って転っている二人の少女の手前もあつた。

「あんた、私がどんな女だか知ってるの。こんなことして後で後悔するよ！」

「俺は後悔してもいいぜ。ねえさん、あまり威勢のいいことを云うと若い者が驚くじやねえか。少し黙って貰うぜ。」

少年の一人が命ぜられるままに大型のタオルを取ってミスズの鼻口を覆った。汗の臭がぶーんと鼻をついた。

「なんだ、そりやー。まあいいから何処かつねってみな！」

蛇の眼の男がにやにや笑いながら、そういうと少年はおずおずとミスズの肩口をつねった。「痛い！」とタオルの下から声を出す

と、それを待っていた様に男は怒鳴った。「馬鹿野郎！ マスクをかけてやってるんじやーないんだぞ。立派にお口がきけるじやねえか。そんなもんじやーおねえさんのお気に

入らないとよ。猿轡ってえのは、こうやるんだ。よく見ておけよ！」

少年があわててミスズの顔からタオルを取り去って下ったあと、男がミスズのおごに手を掛けぐいと顔を上げさせた。金輪際口を開けないと歯を喰いしばっていると男は、やおら吸っていた煙草をミスズの鼻の穴に吹き入るんだ。吸い込むまいと我慢したがそれも長くは続かず激しくむせんで不本意に口を開けると素速く何か押し込まれた。あわてて舌を突張って押出そうとしたが次々と突込まれ完全に舌の動きを止められ、半開きの口で激しくあえいだ。ハンケチかスカーフの様な布類を多量詰め込まれたミスズの顔は何か膨れ上がった様に見えた。

「結構入るもんだな。さて、皆様。これを吐き出せないように、この上から紐の様なもので押えておきまあす。」

男はラヂオのお料理の時間のアナウンサーの声色で、この男には珍しくおどけていった。余程の嗜虐性の持主なのであろう。半開きの唇を裂く様にバンドをかけ二重に廻し首筋で止めた。ミスズの顔は頬がバンドを境にして二つに割れ無惨に歪んでしまった。首を振って激しくもだえたが、もうどうなるもの

でもなかった。こうなつては流石のミスズも哀れな捕われの女でしかなかった。猿轡はなによりも完全な束縛を意味する。男に肩口をつねられ、痛い！と叫んだ声も今は「ア……」とか「ウ……ウ……」とかに変わり全くの無抵抗に急に羞恥が襲って来た。身につけているものといえばブラジャーとパンティだけであり、手首は背後に廻り、首まで油染みたロープを掛けられ、口には溢れる程の布きれを詰込まれ、絞り上げられた様な身体を男達の眼前に晒らすことの恥しさ。ミスズとて例の慣れ合い強盛の時の身を切る縄目も、苦しい猿轡の味も知っていたけれど、この様に暴力で抑えつけられ抵抗を踏み躪って自由を奪われたことははじめてだった。今迄どんな人間でも口先三寸でいいなりになったし、ミスズのポリウムに圧倒され身体に触れることも遠慮勝ちだった。ミスズが身体を投げ出し、でも、遠くの方からおおずと眺めている男が大半だった。それであるからこそ今迄時折は、男らしい多少野ばんな力を、を祝そかに待望していたことも確かだった。それがどうだろう、一段も二段も飛躍して男達の慰み者になつてしまっている。男に負けない様な堂々たる肉体が今はかえって彼女の無抵抗の姿を

一層凄艶なものにしていた。ひ弱な、なよなよした身体ならばその束縛の効果は薄いけれども、ミスズの様な女体には一本々々の縄目が驚くべき效用を示していた。ゴムマリを小さな箱に無理矢理に押し込んだ時のような素晴らしい緊縛感。ぐるりと取囲いた少年達は初めて見るこの異様な物体から、ものすごい刺激を感じた。

「銀座の女王も哀れな顔になっちゃったな。え？ 何んとかいったらどうだい？ いえない？ いえないのなら こうして……」

と男はミスズの髪毛をぐいと掴んで顔を下ろせない様にして、縄目の間にぶっくりと膨れ上っている膚の一部を、ブラシユでくすぐりはじめた。お腹の方から段々脇の下に移動すると、ミスズの我慢も限界に達した。無抵抗にされてくすぐられることの苦痛が如何に耐え難いものか。刷毛の先から逃れようと身をよじっても髪毛を掴れているため動くことも出来ずとうとう悲鳴を上げた。その声も口中に詰め込まれた布に吸いとられ声にならず「あ、あ、ああ、ううう……」

としかいえなかった。男は足の裏までくすぐりはじめた。油汗を流し、動物的な唸り声を発して悶えるミスズを少年達はつかれた様

に見つめていた。もう恥も外聞も何もなく男の手から逃れようと必死に不自由な身体を腕かせ、足をばたつかせていたミスズも、やがて気が遠くなりかけた。男は手を止め小気味よい眼つきでぐったりしたミスズを見た。

「いい身体をしてるくせに意気地がねえな。」

さっきみたいに威勢がよくなけりや面白くないぜ。さっきのたんかはどうしたい！」

男の言葉を耳にしてミスズは顔を上げた。

そして又気を取り直した。畜生！ こんな男なぞに負けてたまるか！

バンドで唇を裂かれ歪んだ顔を男に向け眼に精一杯の反抗を現して睨みつけた。首筋にそって吊上げられた両腕は自分の肉体の一部なのか他人のそれなのか分らなくなった。特にロープで胸からこの腕へかけて厳しく巻かれていることがミスズの上半身の自由を完全に奪っていた。

「おい！ 誰かバンドを持って来い。今度は俺と、このねえさんとの根気比べだ。」

少年の一人がズボンから細目のバンドを引抜いて渡すと男はそれを振りかぶった。ミスズは反射的に足をずらせたが、もうどうにでもしろといったかった。畜生！ いくら叩いても決して泣き声なんか出すものか！ ぴっしり！ とバンドが背に落ちた。続

いて激しく振り下ろされた。幸か不幸かロープでぐるぐる巻きにされているミスズはバンドが直接膚にあたる部分がそれだけ少い。ロープとロープに挟まれてぶっくり盛り上った膚に当る時に物凄く痛みが走るが、口に咬された布をぎりぎり噛んで必死に耐えた。背中から腰の方に向って鞭打ちが移動すると最早なんの防備もなくなった。でん部から太股に激しい痛みを感じるとさすがのミスズも不覚にも呻き声をもらした。男はそれを耳にすると一カ所を集中的に攻撃し初めた。びっし！ 赤い一筋の血の色が浮ぶ。消えようとする痛みを忘れさせまいと寸分違わぬ箇所に第二番が振り下ろされる。

痛い！ 止めて！ ヤメロ！ 畜生！

内心で叫びながら、又実際そう叫んだつもりがミスズの口からは何んの意味も通じない呻き声にしかならなかった。

「あ！ あ！ うーうー……」

痛さは彼女の決して暴れまい、呻くまいという勝気な意思をいとも簡単に踏みこじってしまっていた。ロープで締め上げられた不自由な身体をばたつかせ何んとかして鞭の下から逃れようと転げ廻った。猿轡によって強調された両の瞳を大きく見開いて耐え難い苦痛

に喘いだ。

「柄にもなく意気地が無いじゃねえか。まだ序の口なんだぜ。」

男の声を耳にしてミスズは、負けてなるものか、と内心で叫んでみたものの身体がいうことをきかなかった。

やがて男達の手によって、ミスズの身体がベッドの下に長々と横たえられた。それまで自由だった両肢にもロープがぎゅちりと巻かれた。芋虫というよりも一本の肉の棒だった。キングサイズのミスズが全身をぐるぐる巻きにされたために更に長く見えた。足首と首とをベッドの足に縛りつけられると、彼女はもう寸分の自由もなかった。下になって床に押しつけられた二の腕の縄目が耐え難かつたけれど、首と足を固定されている身にはどうすることも出来なかった。強く縛られた胸と口中に多量に押込まれた布で吐気をもよおしてきた。ベッドの足に括りつけられた首縄で窒息しそうになりこのまま死んでゆくのではないかと思われた。背に高々と吊り上げられた両手はもう全然感覚はなかった。ミスズは疲れていた。ボロ布れのように長々と縛りつけられたまま眼を閉じると意識が混濁して来た。

どの位の時の経過があつたのか。低い押殺した様な悲鳴を耳にしてミスズは、眼を開いた。眼前に二人の少女の姿があつた。背中合せに連縛された少女達の頬に痛々しい凹みを造つて猿轡が嵌められていた。眼から流れ出た涙がその布に浸み込んでいった。少年とダ

方が、勝気に身体を跳かせていたが、もう一人の娘の方はその氣力も無いのかぐったりと頸を垂れていた。

やがて別々に引離された二人の少女は向合うように座らせられて様々なポーズを取らされていた。友達が手足を背中の一箇所に縛り上げられ猿轡の下で、うーうー、唸き声をあげて苦しんでいる姿を、もう一人の少女が無理に見せつけられる。それがすむと今迄見ていた方の娘があぐらを組まされ、肩と足を一緒に縛られ引張られて海老責めにされる。失神寸前まで責められた二人の少女をそのままにして、男達は顔を見合せてニヤリ

とした。

ベッドの足に棒の様に縛り付けられたミスズは、時間が経つにつれて、全身の知覚が失われてゆくのおぼえた。縛られた腕や指を動かしてみるが、それが動いたかどうかともわ



からない程、全身がしびれているのだ。『負けるもんか』と思いつめている緊張もともすれば他人事のように遠いところの出来事であるが如き錯覚をおこしそうだった。脳の働きがバラバラになってしまいそうな幻覚を猿轡を噛みながら必死に耐えた。やがて意識が遠くなり、真暗な穴の中にすーと落ちてゆく様にミスズは氣を失った。

空が白み真夏の太陽が昇りはじめる頃、ミスズは意識を取戻した。男達はすでに居なかつた。一番電車ででも帰ってしまったのであろう。身体を起そうとしてミスズは矢張り自由のきかない自分の身体に気がついた。なんとかしてこの縄を解かなければならない。誰か助けに来るのを待っていたのではないつになるか分らない。何しろ貸別荘の様な所に人はそう来ないであろう。このまま一日も二日も縛られつばなしでいるのでは、ミスズは猛然と跳いてみた。しかし太いロープで全身を巻かれているのでは、どうすることも出来なかつた。身体を少し浮かせて周囲を見廻すと二人の少女が氣を失って倒れている。猿轡つわも手足の縄もそのまま娘達の身体を締めつけていた。ミスズは何んとかして彼女達に近づきたいと思った。両手の指先までしびれて

いるので自分で縄を解くことは不可能だ。猿轡だけははずせば齒を使って何んとか出来るかも知れない。ミスズは意を決してベッドから降りようと思った。もつとも降りるといっても縛られた身では静かに降りる事などは出来ない。ごろごろ転りながら身体に傷がつくのも覚悟の上でベッドから床にころがり落ちた。それから床の上を芋虫よろしく腰を屈げたり伸したりして必死に二人の娘に近づいていった。油汗が出て眼がくらみそうだった。ただ転っている中に猿轡が少しゆるんだ様に思え、尚も床にこすりつけていると、やっとはずれ溢れる程つめ込まれていた布きれを吐き出した。猿轡が取れただけでも随分楽になった気がしてミスズは大きく息を吸いこんだ。一人の娘の後手がもうすぐ眼の前にある。再び芋虫の運動を開始したミスズは遂に縛められた少女の後手首に顔がつくまでになった。少女を縛っているのは麻縄であって、ミスズの齒では噛み切ることはむずかしい様に思えたので結び目を口に啞えて引張ってみた。容易に



ほどけない。眼の前に結び目があるのに縛られている身の悲しさ、唯一の自由な口だけで何んとかしなければならぬ。自分のものではないながら、自分の意思の通り動いて呉れない手足がいまいしかったです。あっちこっちへ顔の向きを変えながら引張って、やっとな結び目を幾分ゆるめることに成功したミスズは、身体ごとぶっかる様にして娘にいった。

「ねえ、しっかりして！」

娘は猿轡の中で低く呻くと気がついた様に顔を向けた。少々活発な方の娘であった。

「縄を少しゆるめたから、手をこすってみて

！」
娘はミスズの眼の前で縛られた手首を動かして見せた。矢張りまだまだ駄目らしかった。「じやーもう少しゆるめてみるから、そのままじっとしていて。」

再び齒を使って麻縄を引張った。また少しゆるんだ。二、三回繰返す中にやっとな少女の手は縄を抜けた。娘が胸に掛った縄や首に廻った縄を解き、猿轡を取り去るのを見てからミスズは急にがっくりとなった。少女の手もしびれてしまっていたのか、雁字搦目にされているミスズの縄を解くのは容易なことではなかった。やっとな解き終ってから少女もぐったりとなった。ミスズもしびれた全身をすぐには起せなかったが、まだ縛られているもう一人の娘を早く自由にしてやらねばならないと思い、やっとな思いで痛む身体でその娘の側へ行った。

悪夢の様な一夜であった。あまりにも強く縛られた為に手首や首、胸、二の腕等についた縄の跡はその後容易にとれなかった。はじめは赤味をもつてしぼる様についていたそのあと、は段々黒く変じ、真夏の服装では隠すことも出来なかった。店へ出てドレスを着ていると余計目立った。

「その跡は何んだい？」

と聞かれても、なんと返事していいのかわからなかった。ミスズ自身についても、その縄目のあとを見ることはあの湘南の一夜が生々しくよみ返って厭だった。お風呂に入る時が最も神経を疲らせ、大きなバスタオルで全身を包む様にして湯につかった。外出の際は事更太い腕輪やネックレスを着けて出た。しかしこの事件を契機として、ミスズの心に微妙な変化が生じたことは、ミスズ自身も気がつかないことだった。それは人一倍気の強い、男勝りのミスズの性格を足もとからすくうに十分な程の刺激だった。今迄は女はもとより男の誰にも負けないという自負を持ち、又事実ミスズの前に現れる男性のすべてが、彼女の意のままになった。それだけに心の一角に於て強い力の出現を望んでいたミスズではあったが、その事件は彼女の期待を逸脱した想像外の力であった。この自分が暴力によって完全に自由を奪われ、多くの責めを受けたということは、それ迄のミスズの生活からは想像も出来ないことであった。もっともこの事件によってミスズの性格が急変したというのではない。前にも増して荒々しく男を手玉に取って、一緒に働く女の子達に一目も二

目も置かれる様なミスズではあったが、これも荒々しい力に征服されてしまったことの反動でもあった。

あの事件の際ミスズと共に居た高林文男とも相変らず附合っていたが、文男はミスズが受けた恥辱が自分の責任と思い込んでいるのか、前より尚頻繁に通って来た。文男の熱意と、時々あらわれるお坊ちゃん育ちの善良さにうたれ、ミスズも時折は文男の申出を受入れていたが、その中、思いつめた様な顔色で文男はミスズを一夜の宿へ誘った。

ミスズが風呂から上って部屋に帰ると、文男は落着かない様子で煙草を吸っていた。

「自分から誘ったのに意気地の無い人！」

ミスズはそう思いながらも、この余りにもお坊ちゃんお坊ちゃんした青年に少からず同情しだした。ミスズとて人一倍發育した肉体をもて余すことがある。

「あなた、何を考えているの。早くこっちにおいでなさいよ。」

「僕、なんだか悪いことしちゃったんじやないかなあー。ミスズちゃん、もう眠いんだろう。」

「何いってんのよ。私だってそんな野ボ天じ

やーないわよ。あんたが眠るっていうのなら私も寝させて頂いわ。」

文男は一瞬ためらいながらもミスズに近付いた。わずかな時の流れであった。ほてった男の身体が、つと離れた。しかしながらミスズは、自分が余りにも冷静であることを気にしていた。もとよりミスズは、文男を夢中になる程好いている訳ではなかったけれど、別に嫌いではなく、むしろ外見に比べてすてくない彼の態度に、少なからず好意を感じていた。それにあんなに自分を思いつめながら、いざという時になって何も積極的に出られない文男の態度が可哀想でもあった。それであるからこそ、自分が文男に同調出来ないことに多少とも申訳けなさを感じていた。どうも体が燃えてこなかった。人並の恋人の様に夢中になってみたかった。文男を横に見ながらミスズはふとあの湘南の一夜を思った。不思議なことにそう思っただけで、何かしらミスズの心に妙なざわめきが起った。それまでの生活には、いやその事件後に於てもまだ現実の出来事とは思われない、ミスズの身体を徹底的に吹きすさんだ暴力の嵐。ミスズ自身の意思など全く無視した大きな力。ミスズは、いった。

「私を縛って呉れない？」

文男は意を解しかねた様な顔をしてミスズを見た。

「私の手足を結えてみて頂戴。」

もう一度いった。

「縛る？ 縛るって何処を？」

「私の身体をよ。さあー早く。その腰紐でいいわ。私のもあるからみんな使ってよ。」

「変だなあー。縛るっていったって……どうやって縛るんだい。人間を縛ったことなんてないから分らないよ。」

「じれったい人ねえ。何んでもいいから縛ればいいのよ。よく映画などにあるでしょ。さあ、こうやっているから早くその紐で結えてよ！」

ミスズは少し命令的にいった。寝巻をぬいでスリッパ一枚の姿で、両手を背後に組んで後向きになって文男に差出した。

「大丈夫？ 痛くないかなあー。」

文男は腰紐をミスズの組合さった手首に巻いた。巻いただけで手首を動かせば抜ける様だった。

「駄目ねえー。もっときつく縛るのよ。そうそう絶対に解けない様にして頂戴。」

ミスズにこういわれて、文男はたるんでい

た紐を引張ってぐいぐいと締めた。手首が重くなったまま動かなくなった。手首を縛られただけでミスズは何か身体が熱くなって来た様に感じた。

「そうそうそれでいいわ。そこでしっかり結んで頂戴。それから手首を上に乗上げているから強く引張って胸を縛ってみて。お乳の上は厭よ。その上がいいわ。もっときつくよ。まだ紐があるでしょ。もっと強く締めて！」

文男は一本の紐の最後の部分に、もう一本の腰紐を縫ぎ足して、ミスズの乳房の上を三巻き程縛った。宿屋の寝巻の紐にしては長目のものであったのでそれで十分足りた。もっとも口というミスズの注文で彼は困惑した様な顔付で紐を締め、手首の紐と連結して縛り終えた。

「痛くない？ もう解こうか。腕のところなんかひどくなってるよ。」

「痛くなんかないわよ。私の縛られた姿、素敵でしょう。どお、見なおした？ 次に狼轡を嵌めて頂戴。」

「サルグツワ？」

「口を縛ることよ。私のハンドバッグの中にハンケチがあるからそれを私の口の中に詰めてそれから——何か布はないかしら。弱ったわね、ネッカチーフも持ってこなかったし……」

：仕方がないからさっきはずしておいたブラジャーがその籠の中にあるから、それで口と鼻を縛ってよ。きつく結えてもいいわ。」

文男もミスズの縛態に少なからず興味を持ってきたのか、今度は何もいわずミスズのいう通り彼女の口にハンケチを押込み、その上をぬぎすててあったブラジャーで覆った。吊紐が邪魔になったが、ゴムの部分がかえって締め易くした。縛られ狼轡を嵌められるとミスズは自ら仰向けに寝転んだ。自分の注文とはいえ、高手小手にされた上半身は痛んだ。しかしそれ以上に不思議な感情が自分を襲ってくるのが感ぜられた。湘南の夜のあれ程いまいしかった屈辱の縄目が、今は自分の冷えた気持を燃え上らせる役目をしてくれるようになってしまったことを、無意識の中にミスズは感じていた。息をする度に胸の紐が締め後手も痛んだ。完全とはいえないけれども噛んだ狼轡のために思う様な声が出なかった。ミスズは殊更身をもんで藻掻いてみせた。首を振りながら「うーうー……」と呻いてもみた。その度に文男が心配そうにミスズの顔をのぞきこみ、縛った紐をほどこうとした。ミスズは激しく首を振って厭々をしてみせた。ミスズのマゾヒストとしての芽生えであった。

(未完)



話の屑籠

辻村 隆

三月十六日の未明、兵庫県箕面市の住宅地帯、桜井で強盗殺人事件が起った。夜遅く戻って来た会社社長田中秀三郎氏（四八）が妻の道子さん（三八）と長女ヒデ子さん（一七）と茶の間で雑談していると、二人組の強盗が侵入した。三人を縛り上げた上、八畳の間に閉じこめ、初発電車まで悠々と日本酒、ウイスキーを呑み、道子さんの縄をといて、カンズメまで持って来させ、飲食している。

殺意はなかった様だが、立去る時、浴室で強盗が覆面を外したのを田中氏に見られ、咄

嗟に殺す気になった。新聞によれば、縛られて動けぬ筈の三人が、自分で紐をといて不意に姿を見せたので、あわててやったのではなからうかと云っている。数時間も縛られた儘強盗と対決していたのだから、その恐しさは思いやられるとしても、主人を殺す時、妻と長女を縛り直して眼隠迄して、二人は主人が眼前で殺されたの知らなかったと云っているから、眼隠されたのが事実か、縄をといて飛出したのが事実か、判っきり新聞だけでは判らないが、それならどうして主人だけ殺し

たのであろうか。ガス栓を開放して、一家みな殺しにするつもりなら、女二人その時、殺した方が、手が省けそうな気もする。とすると、浴室で犯人の顔を見たのは、或いは田中氏一人だけで、妻子は縛られた姿で八畳におったのかも知れない。暴行の形跡がないのがせめてもの幸せであろうが、一家の支柱を失って、何ともお気の毒な限りだ。

それにしても残忍な強盗の手口である。十
六万円奪い、酒食を朝まで供応させた上、殺

して逃亡する。こうした百害あって一利ない人間は須らく、極刑が望まれる。警職法の是非は別として、もう少し強権を発動せぬ限り、未解決事件が山積する許りだ。その数日前の城東区に起った人妻射殺事件。三月十日の住吉区の夜の女殺し——。

昨年十二月中旬の同じ住吉の新婚留守宅の訪問強盗ETC。全部、未解決事件になっている。

こうした兇悪犯が、ひとたび、神戸のドヤ街に潜み、西成の地獄谷、通称ヤマにかくれと、もう警察の手の届きかねる治外法権の地だ。殺人カスバ西成のドヤ街では赤線を追われたポン引、シケビキが、うようよと、うごめいている。百円あれば一日が結構過せる世界である。朝食が十円、昼飯が二十円、夕飯が二十円、タバコが十円、一泊の泊り賃が三十円、これで百円の日が暮れて、又明けるのである。

大阪府警では前代未聞の、未解決の新記録。捜査本部十四をおいて、対処しているが成果は挙らない。兇悪犯は日を追って殖えて行く。強権の発動が待たれるが、そのトバッチリが本誌に来ると困るので、痛しかゆしである。

× × ×

先月の座談会で、八ミリの問題が大分クローズアップされたが、東京では既に「×—28」とかいふ、サド、マゾのフィルムが市販されているそうである。編集部でも直剣に考えているそうであるが、そうなるとモデル諸嬢の緊縛の過程が生々しく描き出されて行くのと思っただけでも楽しい。近々、映画用のコンテのアイデアを募集するそうであるが、八ミリ撮影会等を計画すると面白いのではなからうか。映画シーンの縛り速報欄で慰さめていた諸賢が、自ら演出して、その腕をふるうとなると、これは、このアブの世界に一エポックを劃するの事になりかねない。

毎月克明に報告される女優の縛りシーンに私達は随分慰まられているが、所詮は物足りないものだ。東京の牧高志氏の云われる通り、緊縛映画が本誌で自主製作すると、一番に牧氏辺りのお力を借りなければならぬかも知れない。

× × ×

とやまかづひ氏の「愛好家の記録」84項に私宛の御返事があった。成程、氏の云われる様にコプロの世界に迷う者は、そうした寄生虫や病菌は苦にならぬかも知れない。その気

持は分る様な気もする。それを気にする様なれば、初めからコプロ趣味は成立たないからだ。唯、コプロ趣味でない正常な者の立場から考えた場合、本誌読者すべてがコプロ趣味でない如く、私自身コプロを敬遠しているとなると、極限された一部の共鳴はあっても、大半はそうした危惧を感じるのではないかと思うだけである。座談会のコプロ趣味の話をきいたが、ネクタールを旨酒と心得て、毎夜かかさず味わう人もあるとすれば、これは一概に否定も出来ない。

座談会での如く、細君と芸術的おまるを並べて、排泄しては如何？ とやま氏の愛好は広範囲であるが——。氏の意見を決して否定する気はなく、面白く一番に拝見させてもらっています。それはそれとしてサドの世界から些かけ離れた世界だけに、辟易するだけです。乞御諒恕。

× × ×

映画を見て縛りシーンがあった。いざそれをこの頁に書いて発表の頃には、既に三番館でも上映してしまい。気長く五五円映画の再映を待つ頃になつてゐる。新東宝の剣姫千人城しかり。弁天小僧も書いてみようと思う頃は、既に速報欄で発表済みで打遅れの始末。

最近で期待しているのは、東映映画化予定の大阪新聞連載、角田喜久雄氏の「恋慕奉行」だ。この小説は毎夕読み通したが、徹頭徹尾、責めと縛りに終始している。大衆新聞とは云え、一応地方一流新聞にしては、この小説はどうかと思われた。女房も読んでいて、「貴方のすきそうな小説ですね」と云われ苦笑したが、これを忠実に映画化すると、縛り映画の見本のようなものだ。

角田氏はストーリーよりも、場面場面の縛りや責めの叙述を執拗に追及され、これでもかこれでもかと、書き続けておられる。大伴氏の小説の伝奇物には、縛りの出て来ない小説はないと云っても過言ではない。角田氏に懇望して、本誌に氏のこの種のものを連載して貰えば、愉しみが又一つ殖える様な気がするのであるが――。

× × ×

ラジオで無着成茶氏の「山彦学校」とかでガリバー旅行記のうちの件りで馬国の話が出て来るが私は、はしなくも沼正三氏の「家畜人ヤプー」のヒントを知った。馬国では人間類をヤプー」と称し、卑しいけだものとして扱っていると聞いた。語源はこの辺りではなからうか――。

それにしても、沼氏の未来幻想小説の大労作には、満腔の敬意を表している、あの大長篇の構想、創造力は全く大したものである。

沼氏の几帳面な性格の一端として、若し送稿された文中、誤りがある事に気付かれると、何月何日発送の稿の何頁何行目の何と云う字はこの様に訂正して欲しいと云って来られるそう。それだけに、編集部として、一字一句ゆるがせ出来ず、肩がこると話していた。それだけの情熱はあつてしかるべしである。筆註されて、色々と校訂されていると、小説であると知りつつ、何だか本当の様な気がしてくるから妙である。氏の博識の賜であるうか――。

× × ×

大阪駅の専門大店に本誌が毎月販売されている。先日、その近くに約小一時間立って、その販売状態を眺めていたが仲々面白かった。

本誌を知らぬ人は、本をとり上げて、頁をめくり、そしてフォトを眺め、段々に辺りに気兼ねし始める。結局そつとおく。若い女の人何気なく取り上げて頁をめくる。ハツとした様に三、四頁めくってあわてておく。次か次からと眺めてはおかれ、仲々本誌は出な

い。会社員風の四十前後の人がスツと近附くと、内容も見ず、さつと取上げて素早く店員に金と本を渡す。受けとるとさっさと店頭から去っていった。

私の眺めていた時間中に結局売れたのは二冊であったが、二人とも内容も見ずにさつさと買ってしまった。内容を見て買ったのは一人もなかった。値段を見て止めたのが数人はあった。薄っぺらで定価は二百円、専門大店で〇〇円で売っていたが、他誌に比してたしかに高い。それでも欲しい人なら、金の多寡にかかわらず買って行く。

買った二人とも年配の紳士。

まだまだ本誌の世界は狭い様だ。狭い乍らもたのしい我が誌と云うところか――

× × ×

私も使用していた「加美の素」がインチキに近いものだったらしい。本舗側が五〇%もきけば上々だとの事で、免角、近頃の雑誌にも羊頭狗肉のものが多。映画シーンの縛りやベッドシーンでつって、表紙にリンチ手口集など書いて、嗜虐を売物にしてい乍ら、つられて買ってみると内容は空虚な、まったくの上っつらだけのもので、その点、広告もなく、知る人ぞ知ると云った本誌に、内容の充

実さを覚えるのは、良心的と賞めたたえた
い。

羊頭狗肉誌の一例を挙げてみよう。

オフィスガールの変わったリンチ四景と云う
みだしがあつて、①は六階からエレベーター
に宙吊りにされてとある。中味は……

友達の嫉妬でエレベーターの電源が切られ
宙で止ったエレベーター内で暴行される。そ
れだけの事である。②は夜の海で水責めにさ
れたハイティーン。その内容――

海浜で二人ののったボートを押す役目の娘
が浪にさらわれた。ただ、これだけのこと。

莫迦／＼しくて話にならない。題名だけで
吊って、うまく逃げてゐる典型的なものだ。

× × ×

奴隷はアメリカが本場かと思つていたら、
日本にも古来より奴隷制度があつた。古代の
奴婢がそれに当る。先日、森欧外の「山椒太
夫」を読んで見たら、これがはつきり奴隷制
度を描いている。人買いの横行した時代、安
寿と厨子王が、丹波（今の太山山のはとり）
で奴隷にされて、汐汲みとして酷使される。

折檻や、責めの細かい描写がないが、焼ゴ
テで安寿が烙印をひたいに押される個所があ
るが、観音様の加護で、仏像のひたいに烙印

が押されていた。彼等の母親も海上で人買に
騙され、暴行のあけく売り飛ばされ、盲にな
って乞食に落ちぶれている。無警察時代の昔
の暗黒時代なら、さもありなんと想像される。
有名な小説だけに、案外盲点であるが、読み
直してみると、短篇であるが、サドと奴隷生
活が生々と活写されている。一度諸賢も通読
されては如何――。

× × ×

赤線の灯は消えた筈であるが、飛田や松島
の旧赤線地帯は、地下に潜つての営業が近頃
おサカンとの事だ。噂をきいて、以前よく縛
らせた女のおつた店を訪れると、表はすっか
り変つて御座敷サロンになっている。S子は
どうしたときくと、二町程離れたスタンドの
女給に転身したとの事――。

スタンドで彼女は元気で働らいていた。一
杯のみ乍ら、そつと縛らせないとか囁いた
ら、腕を抓られた。カンバンになるまで粘つ
て近くのホテルに入る。赤線時代、その道で
有名なマゾだった彼女も、今ではそんな事も
なからうかと一緒に風呂に入ると、肌は以前
より綺麗だった。「どう、おへそが綺麗にな
ったでしょう」と云われて、彼女の形よく凹
んだへそをとくと拝見すると、うっすら桃色

づいて成程美しい。なんでもおへそに塗る高
貴薬で、東京で発売されている。V・ノンブ
リ、とか称する、オリーブ油が原料の小瓶が
五〇〇円もするのを、毎日かかさずおへそに
注入しているらしい。週刊朝日で徳川夢声と
彫刻家の朝倉文夫氏の問答有用の会話からヒ
ントを得たらしいシロモノだが、今まで気の
つかなかった無用の長物のおへそが、こうし
て、形よく凹んで、綺麗にうづをまいて沈座
していると、妙にセクシイなものに見える。

「世の中が変つたので、近頃一生懸命アクロ
をやつてゐるの。体が柔くなつて相当無理が
きくようになったわよ。もう普通縛られて
いてもお客さんが飽いてしまうものね。」S
子は浴場のタイルの上で、背を弓なりに曲げ
両手を伸ばしてタイル床に手をつけた。「こ
の曲げた頭が股まではいり迄めば一流なんで
すけど、仲々この年（二十六才）になつては
ゆうことききませんわ」

それでも美しいと思つた。少したるんだ乳
房もピンとはつて、裸の彼女を改めて見直し
たことである――。

その夜縛りはやらなかった――。

× × ×

私の以前書いた小説「拷問に笑う女」程に

ゆかなくとも、アクロバットの出来るモデルを得る事が、今の箕田氏の最大の願いでもある。以前、名古屋からストリップのアクロバット写真に添付して、モデルに使ってほしいとの手紙が舞い込み、箕田氏も再三、再四交渉したらしいが、モデル料がペラボーに高く交渉はどうやらその女——名古屋のストリップ劇場に出ているクロウトらしい——のヒモ氏が金欲しさにしきりにつり上げるので、遂々厭気がさして中止したが、ペラボーなモデル料でなかったら、アクロバット・モデルを

使つての緊縛は、本誌の誌上に燦然とした光輝と与える事と思う。

現在のモデルも皆いいが、悲しいかなシロウトだけに動きがなく、体が固い。四馬孝の挿絵にある様な、突飛でもない想像のフोटもアクロバット・モデルによって、解決すると思うのだが——。

それともサーカス団辺りの娘を何とか交渉出来ないものか、これが本誌へ残された課題となりそうだ。

× × ×

谷崎潤一郎の「鍵」が映画化される。噓かし肝心のところは全部ぬけた、毒にも薬にもならぬものが出来上る事だろう。映画をケナす気はないが、もともと映画化が無理なシロモノだけに素人考えで、そう思うだけである。「話の肩籠」が投稿途中紛失して、一回ぬけたが、郵政省はこうした紛失物にどう処置をとってくれるのだろうか。諸賢も送稿の際はなるべく書留にした方が無難そう。今月はとりとめもなかったが、肩籠にすてる話のトピックと我慢して戴こう。(この項終り)

『血紅使用切腹フोट』

大中判印画紙焼付(絹川文代)

各六枚一組 八百円

第一集 略号(によ1)

第二集 略号(によ2)

『禪美切腹』 略号(こせ)

大手札印画紙焼付(愛川悦子)

二枚一組 二五〇円

『女性自刃』 略号(ししん)

大手札印画紙焼付(愛川悦子)

三枚一組 三〇〇円

『切腹のプレイ』 略号(れい)

大手札印画紙焼付(愛川悦子)

三枚一組 三〇〇円

『豊麗切腹』 略号(ほう)

大手札印画紙焼付(愛川悦子)

三枚一組 三〇〇円

『腰元自刃』 略号(こし)

大中判印画紙(村井知可子)

六枚一組 八〇〇円

『切腹風景十二態』 略号(せふ)

大手札印画紙焼付(大塚啓子)

十二枚一組 九〇〇円

【G】組 緊縛フोट

判紙焼付 一枚一組 一五〇円
中画紙焼付 五枚五組 六〇〇円
大印画紙焼付 十枚十組 一〇〇〇円

G1	鉄鎖と柔肌	(高瀬 忍)
G2	股間縛り正面	(高瀬 忍)
G3	海老晒し	(萩千恵子)
G4	羞紅の椅子	(菅登紀子)
G5	量感の帯	(伊吹真佐子)
G6	アイデア	(萩千恵子)
G7	叫喚の森	(伊吹真佐子)
G8	全裸目隠し	(村田那美子)
G9	優すがた	(花坂道子)
G10	開股一番	(萩千恵子)

花坂道子

緊縛フोट

大中判印画紙焼付(13×18 縦)

○全裸緊縛集 略号(はな1) 八枚一組 八〇〇円

○股間縛り集 略号(はな2) 八枚一組 八〇〇円

○ヌード縛り 略号(はな3) 二枚一組 三〇〇円

○股間縛り 略号(はな4) 二枚一組 三〇〇円

臨時増刊号 『SADO 特集号第二集』

特に和装被縛姿態美に対する所感

牧 高 志

先ず本集グラビア写真集を開いて第一に感嘆することは、被縛のモデル女性群が揃って文句なしにリファインされていることである。これは決して今までのものを水準以下に評価しようという意味でなく、ここここに到れば格段の進歩（物心共に……）を遂げたものとして敬意を表するに外ならない。

人それぞれの好みに依って批評の眼も違ふであろう故、私はパンティ、シユミューズなどの洋品から遠ざかって、持前の和装被縛女性性について専ら触れてみたいと思う。その前に私なりの減らず口、毒舌は予め御かんべんの程願って置きます。

さて和装篇となると、色々な持味を多分に盛ろうとその極付を出されたものと見えて、開巻劈頭に絹川文代嬢の「仇姿黄八丈」、続いて触らば落ちん風情、花坂道子嬢の題して「被襲」と「若妻の秘美」そして最後が田中芳代嬢演ずるの「絹布と絹肌」の三篇。勿論三篇ともに甲乙をつけて優劣をきめるという筋合いではないが、私が特に異常にまで感嘆し別格と見たのは「仇姿黄八丈」の文字通りの仇姿振りであった。

この十七景一連の心憎いまでに妖艶さを泌み出させ、小町娘のおどけなさを顔半分に訴えようとさせる演出力は一休誰が担当したか、誠に非凡な力量と云わざるを得ない。絹川文代嬢は云うまでもなく近代娘である。近

視を想わせる瞳は多分に洋装分野で活性化されるであろうと思うのに、あに図らんや、豆絞りの猿轡を囓せる一瞬に於て全転、ぐっと日本調となり、決して素人の着付けとは見えぬ黒襟付の黄八丈——この方面の權威者、曾つての誌友、岸本青柳氏氏の目に止ったらさぞや飛びつくであろうこの黄八丈の柄に、実は私が感服したことを告白したい。

矢絰高島田とは別個に、黄八丈乱れ髪は下手な桃割れ以上の魅力がある。処でこの絹川文代嬢を後手に縛る縛り紐は、麻縄の方が、兎もすればたるまんとする腰紐より緊縛感は数等上であるが、総じて和服の女を縛る時は肌と着物の呼吸が合っていないと間が抜けるものだ。しかし今回の『仇姿黄八丈』は、先ず先ずの後手姿で、見ようによっては甚だ浮世絵的である。

処がこの黄八丈の裾の乱れについて大いに文句がある。由来、後手に縛られた、つまり手の自由を失った女の裾の乱れを如何に表現するか——これが云わば勝負の定めた処であつて、一朝一夕にマスターする訳には参らぬ代物である。この代物を形付けするのが、云わずもがな『着物』である以上、肌襦袢に赤い湯文字、この上に緋縮緬の長襦袢をはふり、黄八丈となる寸法そのままが、極めて自然的に緊縛女性から窺えないと価値がない。せいてはいけない。

もう一つ蛇足を加えるならば、男性が乱した裾でないことが唯一の条件となる。着物はグラマーではない故、不必要に太腿をさらけ出す湯文字の乱れ方は却って逆効果を産むものだ。襟前がはだけ、ふっくらとした両乳房左右に開かれた黄八丈の裾に、順序として長襦袢の色香が必ずある筈なのに、いきなりの赤い湯文字は、縛られた女が羞恥の挙句に出したとは、よもや思う者は居らぬであらう。

今回の絹川文代嬢は袖丈付けの合わせ長襦袢を着て白足袋なしの素足姿、粋な小紋模様の帯は兎も角として、再嘆して私が秘かに戦いたのは、床の間を背景とする立膝、片膝のポーズであった。

このポーズは和服の女に誰しもが試みんとする常道であって、撮影後は、必ず後悔することの多い姿態、しかも何故、男の人が好んでさせるのか、当のモデル嬢が解釈に苦しむ——絹川嬢の瞳もそれを訴えている——を勇敢にやったことであって、難を云えば不自然に乱れさせた裾前、但しそれら四情景の大詰めとして、古風な行燈を見つめる最後の縛られ立姿は蓋し逸品であった。以上の演出が努力的であったことは認めるとして何故、床の間の畳半帖の狭い天地にモデル嬢を押し込めたのか、秘かなる戯れ事ならいざ知らず、全く惜しまれてならない。願わくば諸々の和装女性の緊縛情景は、部屋の隅に限定すること

なく、百坪の空気を吸わせ給えと申添える次第である。

さて花咲く乙女椿に似て、ひたすらなる諦観に生きる乙女と表したい花坂道子嬢演ずるの『被襲』は太幅の白布による緊縛、松葉模様の猿轡用手拭い、そのあたりはまあまあとして伊達巻のない代り紐、果たせるかな粋な無地の長襦袢に似つかわぬシユミーズ（またはペチコートか）の開陳は、画竜点睛を缺くの喩か。せめてナイロンの裾除位はして下さいよ。処が『若妻の秘美』のおとなしの構えは、道子嬢独壇の姿態美を誇っている。余り固く縛って骨が折れてはとの遠慮さに喰い足らぬ緊縛感、当の道子嬢が一番知っているのではないだろうか。ここでつい脱ぎ忘れたら白足袋が三景見られるのは嬉しい。何故ならば白足袋の一切をこなし、両手を後手に程よく縛られるのは、和装界のキーポイントだからである。道子嬢の洋装は拝見したことはないが、この人は和服好みのように見受けられる。にも拘らずダラリとした長襦袢の無粋さは、着付けの不注意と演出に当った男性の人のミスであらう。撮ってみて、こんな物——とは一層哀れである。兎まれ前の黄八丈と共に印画の粒子を荒らだてずにカメラ技術を駆使したあたりは流石である。到底安価な35mmでキャッチ出来るものではない。若い着物姿の女性を後手に縛り上げるその過程、縛

り上げた女の姿態を心行くまで、フアインダーから窺く気持ち、僅か乍らのアクションを命ずるその優越感——この場合誰かの言葉じゃないが、易々諸々のモデルは始末に負えない。云わく云い難い反抗性が欲しい処であらう。その点から眺めると、田中芳代演ずるの『絹布と絹肌』はやはり腰巻一枚姿ではあるが不敵な面ざしを漂わせて及第点である。勿論細部については注文もある。非常に苦心したであろう処の腰巻の乱れ、敷かれ放しの布団に半裸の彼女を如何に効果的に置くか、これは予め特別の作為的行為が考えられない限り、これが精一杯であって、一見味気ないものになってしまふものである。私は許されたなら前の絹川嬢の黄八丈、花坂嬢の長襦袢、それにこの田中嬢の腰巻が一連の関係にあるとすれば、その各態は単なる被縛姿の陳列でなしに、縛られることを承知して部屋に入る絹川黄八丈女から皮切りに、次のように考えてみた。

× × ×
『今日はどうあってもそなたの美しい姿を縛り上げて絵にしたい……』

用意の麻縄が十畳に近い画伯の部屋（アトリエ？）の真ん中に放り出された。両の腕を後に廻わす。手首を縛って麻縄で胸から一締め、立って逃げ出す。そうはさせないと曳っ張る。ぐっと裾が開いて赤い下着が目にする

……白脛は緋にからんで悲しからずやである。

『なれど帯を解くも一興じや。コレ、おとなしくせぬか』

黄八丈はぐるりと脱がされた。緋縮緬の長褌の白襟口もあらわに再び両腕は後に、悲しくも己が締めたる、しごきで縛り上げられる。男はへこ帯の一端をさいて女に猿轡を。そればかりではない。いざり寄って逃げようとする女の足首を握って引いたから堪らない。もろに裾を乱して了ったのである。

『えいッしぶといアマめ。つい絵筆の折檻となりおったがこの上は……』

『師匠、この麻縄になされませ。女の猿轡はあっしの豆絞りで……』

成程、三重、四重に縛った甲斐こそあれ、女の胸の呼吸がせつなくなつて来た。『師匠、一責めなすってお描きになつちや……それじや、師匠、いいことがありますぜ。思い切つて女を湯文字一枚に剥いて、ヘッヘッヘ……玉の肌を縛り上げるんで。生弁天でさあ、高く売れますぜ。おつといけねえ、アマッ子の眼がきつうなつて来た』

縛った女をゴロリと横たえる。つい蹴飛ばしてもみた。今一度麻縄をひき絞って縛った肉の盛上りを見る。

『師匠、これです。この姿が地獄極楽の境地です……』

× × ×

とまあこういう訳になるのだが、どの道モデルになる娘さんは大変だ。映画や芝居なら初めから約束事で如何にも真実に見せ掛け、真似事で済むから気が楽であろうが、縛られた女の姿態自体に文句があり注文があるんだから、グラビヤ版の編集はそれなりに苦労されたことと思う。

兎まれKKクラブ臨時特集号が、このようにして号を重ねるにつれ飛躍的に内容が充実していく事は、何んといっても嬉しい次第で

あり、共々、新しい女体美を追究する者として特に構想、演出、撮影等、編集に至る一連の構成に携わって居られる編集部各位の、今後の御健闘をお祈りして、私の迷評を終りたいと思う。

——一九五九、三、二〇——

縛られた女体ばかり 限定版（限定番号押捺） の写真集 第一弾!! 『女体緊縛フォト・アラベスク』

限定版『特集号』の第一回刊行として企画しました最近撮影にかかる新人モデルによる緊縛写真の中から選集しました全部縛られた女体ばかりの傑作写真集であります。

直接発行所の天星社宛お申込下さい。厳重包装の上急送申し上げます。

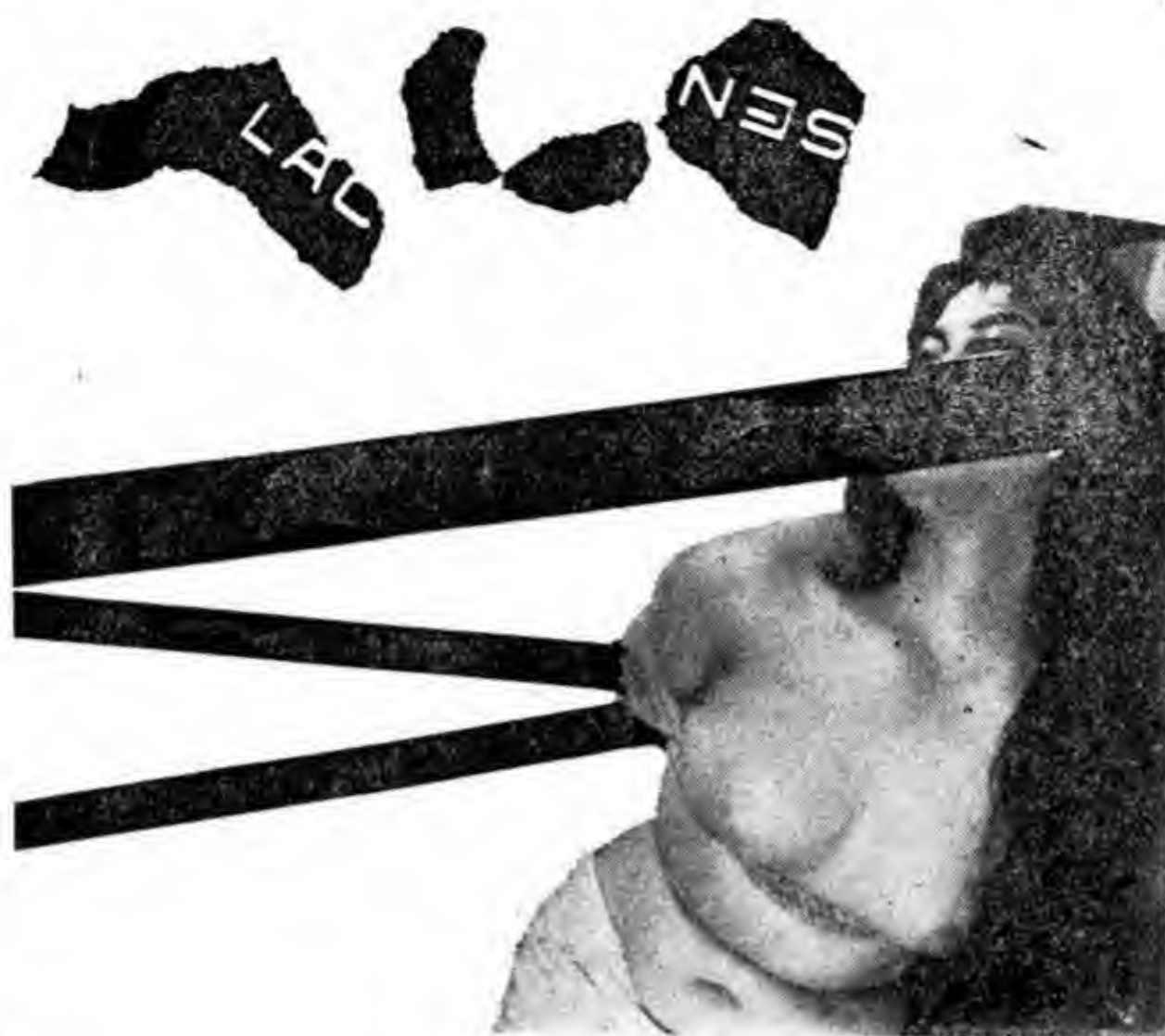
収容写真、二十六項目、七十六葉

モデル、愛川悦子、花坂道子、絹川文代、大塚啓子、村井知可子、田代悠子、田中芳代の諸嬢、全頁これ絢爛絢うが如き花の緊縛ポーズの氾濫、是非マニヤの机上に一冊をお見え下さい。注文殺到売切れ近し！

略号（あらべすく）

特価 五百円（送共）

限定版特集号は特アートによる写真版印刷で出来るだけ印画紙の焼付に近いものを狙って作成いたしました。限定版のため印刷部数が極めて僅少でありますので一切一般書店にては販売いたしておりません。御希望のお方は何卒売切れにならない中、



乳房に火をつけるな・第三回

悪鬼の逆襲

藤 木 仙 治

本誌百号突破記念懸賞募集原稿入選作品

美貌の人妻



Joyo

杉並の善福寺——東京西郊の高級住宅地である。その一劃に、銀座星島組の社長、星島大五郎の家があった。

百五十坪ばかりの庭にとりまかれた総檜造りの閑静な邸である。午後一時——

この星島家の電話が、晩春のもの憂い気配を破ってひびいた。

「——奥さま。お電話でございます」

女中の登美が、美佐の部屋の障子の外から声をかけた。この女中は、ぬけるように肌が白く、可憐な目鼻だちをしていた。年令もまだ若く、二十才を越えていない。

「どなたから？」

美佐が、ききかえす。

「北条さま……とおっしゃる、男の方ですが……」

「北条さん？」

美佐は、こくびをまげた。心当りはない。

いや、一人あった。北条哲夫——。しかし、その男は、もう大五郎のために、殺されてしまった筈だ。

「でてみるわ」

受話器を耳にあてた彼女の顔から、みるみる血の気がひいた。相手はまぎれもない北条哲夫。三年前に結婚の約束をした男である。

「——わ、わかりました。三時に渋谷道玄坂の『白樺』ですね。はい、いきます。かならず、いきます……」

はげしい胸の動悸をおさえ、声を殺して美佐はこたえた。受話器を握る手が、こきざみにふるえた。

「——ウフフフ。すっかり、おとなびた声になったな、美佐。いかにも人妻らしい口のききかただよ……」

電話のむこうで、哲夫が皮肉った。

「待っててね。くわしいお話は、お逢いしたときに——」

いまこの家にいるのは、美佐だけではなかった。登美のほかにも、女中が一人いたし、星島組の子分も、三人ほど住み込んでいた。この子分たちは、折夫の復讐を警戒した大五郎が、とくに泊りこませているのである。

電話を切ると、さっそくその子分の一人が美佐に近づいてきた。

「奥さん。いまの電話はどこからです？何話を話していたんです？」

「なんでもないわ。学校時代のお友だちからよ。同窓会の相談なの」

「氣をつけてくださいよ。奥さんはいま、怖ろしい男に狙われているんですからね。この家から外へは、絶対に出ないでくださいよ」

「ええ。大丈夫よ」

しかし、美佐の心は、もう哲夫にとんでいた。彼女は、こっそりと一室にとじこもって、和服の外出着に着かえた。

恋しさ、不安、怖れ……それらがいちどきに交錯した複雑な気持ちである。身を忍ばせて、勝手口から外へ出る。折よく通りかかったタクシーを呼びとめると、美佐は車中の人になった。

渋谷の喫茶店『白樺』——。店内はかなり広く、落着いた雰囲気

であった。やわらかい音楽が、静かに鳴っていた。

北条哲夫は、さきに来てタバコをくゆらせていた。和服姿の美佐をみたとき、彼の眼に一瞬、おどろきに似た光りが走った。

三年前の、あの可愛らしい少女の面影は、そこにはなく、しっかりと美しい人妻の物腰があったのだ。

「——ほんとうに、ほんとうに哲夫さん、生きていたのね……」

美佐はテーブルにつくと、あえぐようにいった。

「……………」

哲夫は、こたえなかった。二十二才になった筈の、若く艶やかな美佐の人妻姿を眼の前になると、彼の胸に、またあらたな、憎悪と嫉妬の激情が湧きあがったのだ。

(おのれ、大五郎のやつ!……)

監禁椅子

ちようど、その頃。

哲夫の隠れ家であり、星島大五郎に対する復讐の本拠である大森の古びた洋館の一室では——。椅子に縛りつけられている千絵子の縄を、哲夫の弟分である金次が、必死になって解いていた。

千絵子の巧みな誘惑に負けた金次の、これは哲夫に対する裏切りであった。

「早くしてよ、金次さん——」

千絵子は、裸の肩をゆすってせかせる。その豊満な体重に、坐らされている椅子がきしんだ。

「あわてると、なおさらダメなんだ。哲兄貴はまた、バカに嚴重に縛ったもんだな」

「胸に喰いこんで、息もできないほどよ。ちくしょう! ひどい男だわ。哲夫のやつ!」

「もう少しだから、動かずに、じっとしていなよ」

「あつ、バカ。肩なぞさすって縄がとけるのッ!」

「なんてえ、きれいな肌なんだ。喰いつきてえ……」

「それはあとでね。いまはここから逃げだすことが先よ。早くしないと、哲夫のやつが帰ってくるわよ」

ついに縄が解けた。

パンティ一枚だけの千絵子の華身が、よろよろと椅子から立ちあがった。白くふくよかな胸に、紫色の縄目の痕が、縞模様のように、くっきりとシミついている。さすがに千絵子は、その胸を両手でおおった。

「なにか、着るもの貸して。この格好じゃ、逃げられやしないわ」

「ここには女ものなんてないけど、あんたはグラマーだから、おれのシャツやズボンで、まにあいそうだな」

「あんたのシャツ? 気持わるいな」

「ぜいたくいってる場合じゃねえよ」

金次のシャツとズボンを身につけた千絵子は、それでもやっと生き心地にかえった。

そして二人は、手をとりあって、この洋館から、脱出するのだ。

それから、およそ三十分後——。

(おや?……)

北条哲夫は、この部屋のドアをあけた時、一瞬にして、その異変をさとした。

(しまった! 千絵子に逃げられた!)

哲夫は、愕然とした。

千絵子を縛りつけておいた椅子が、横倒しにころがり、解かれた縄が黒蛇のように床の上にくねっていた。

そして、見張りをしている筈の金次の姿が、どこにもないのだ。

「なにをそんなにおどろいているの?」

哲夫の背後で、美佐がいった。渋谷の喫茶店から、まっすぐにこ

こへつれてきたのだ。

もちろん、これは、大五郎へ復讐するための、千絵子につぐ、二人目の誘拐であった。

「お前より先にここへきていたお客さんが、おれの留守のあいだに消えてしまったのさ」

あの固い縄が、一人で解ける筈はなかった。裸の千絵子が、一人で外へ逃げられるわけはなかった。

(くそッ、金次のやつ！)

哲夫は、敏感に金次の裏切りをさとった。

金次が女にはまったく弱い男だということを、彼は前から知っていた。見張りを金次にまかせたことを、哲夫は後悔した。

(千絵子が、自分の濃艶な魅力を利用して金次をたぶらかしたんだ……)

哲夫は腰をかがめて、床に散らばっている縄をひろった。

「美佐。両手を背中にまわしな」

その声音に、不穏を感じて美佐は、ぎくりと身をふるわせた。

「手を背中に？」

「おれを裏切って、こともあろうに、おれを殺そうとしやがった大五郎の女になったお前に、仕返しをしてやろうというんだよ」

「だから、それは、さっきから、いくどもいつているように、あたしは星島にだまされ、無理やりに——」

「うるせえ。たとえどんな目に遭ったって、日が経ちやあいくらでも逃げる隙はあった筈だ。それを、おめおめと、そのまま大五郎の女房におさまっているなんて……」

「妻といっても、あたしは奴隷よ。籍が入ってるわけではないし、ただ囲われているだけのメカケよ。それも、この頃ではすっかり大五郎に飽きられて——」

「ふん」

哲夫は、冷酷に鼻さきで笑った。

しかし、彼の腹のなかでは、もう半分以上も、美佐をゆるしていた。三年前のあの場合、仕方がなかったのだ。女は弱いものだ。

哲夫の胸に、大五郎への憎悪が、より一層の炎となって燃えた。

いま、哲夫が美佐を縛りあげようとするのは、千絵子に逃げられた以上、あらたなるオトリとして、ここに彼女を監禁しておかねばならないからである。

美佐の両手が、たちまちうしろへねじあげられた。重ね合された手首に、キリキリと縄がからんだ。

「あッ、痛ッ！……」

着物の上から、二重三重と縄がまわされ、ひきしぼられた。ウールの布地に縄が喰いこみ、きゅっ、きゅっと鳴った。

「あ、あたしを、どうしようというの！」

美佐は、少しの抵抗もみせず、哲夫に縛られた。

「これも大五郎へ復讐するためさ。あきらめなよ」

ついさっきまで千絵子を縛っておいた椅子へ、こんどは美佐を座らせた。容赦のない力で、びしびしと、くくりつけるのだ。

「む、胸が、苦しい！」

美佐は、はじめて悶えた。胸にかかった縄が、椅子の背にまわされ、そこでひきしぼられたのだ。足袋をはいた足首までも、椅子の脚に縛りつけられた。もう身うごきがでなかった。

生贄の写真

「——社長。この娘を、このまま哲夫のやつに返してやるのは、ちっとばかり、惜しいような気がしますね」

「千絵子と交換だ。惜しいことはなかるう」

「そりや、ま、そうですかね」

西銀座裏のキヤバレー「ダスカ」の地下室である。話しているの

は、星島大五郎と、その子分でこのキャバレーの支配人をやっている鶴田鶴松。通称、ズル松だ。

二人の足もとに、スリッパ一枚で縛られている娘は、真紀子であった。幾本もの縄が、半裸の肌に巻きつき、猿ぐつわまで噛まされていた。

哲夫に捕えられた、娘の千絵子の身代金が一千万円。いまの大五郎には、そんな大金はとても都合できない。そこで、哲夫の妹の真紀子を、上野のジャズ喫茶から誘拐してきたのだ。この真紀子を一千万円の代りにしようというのだ。

千絵子が、哲夫のもとから、うまく脱出したことを、大五郎もズル松も、まだ知らないのである。「ねえ、社長。こうしたらどうです」

ズル松が、唇をなめながらいった。

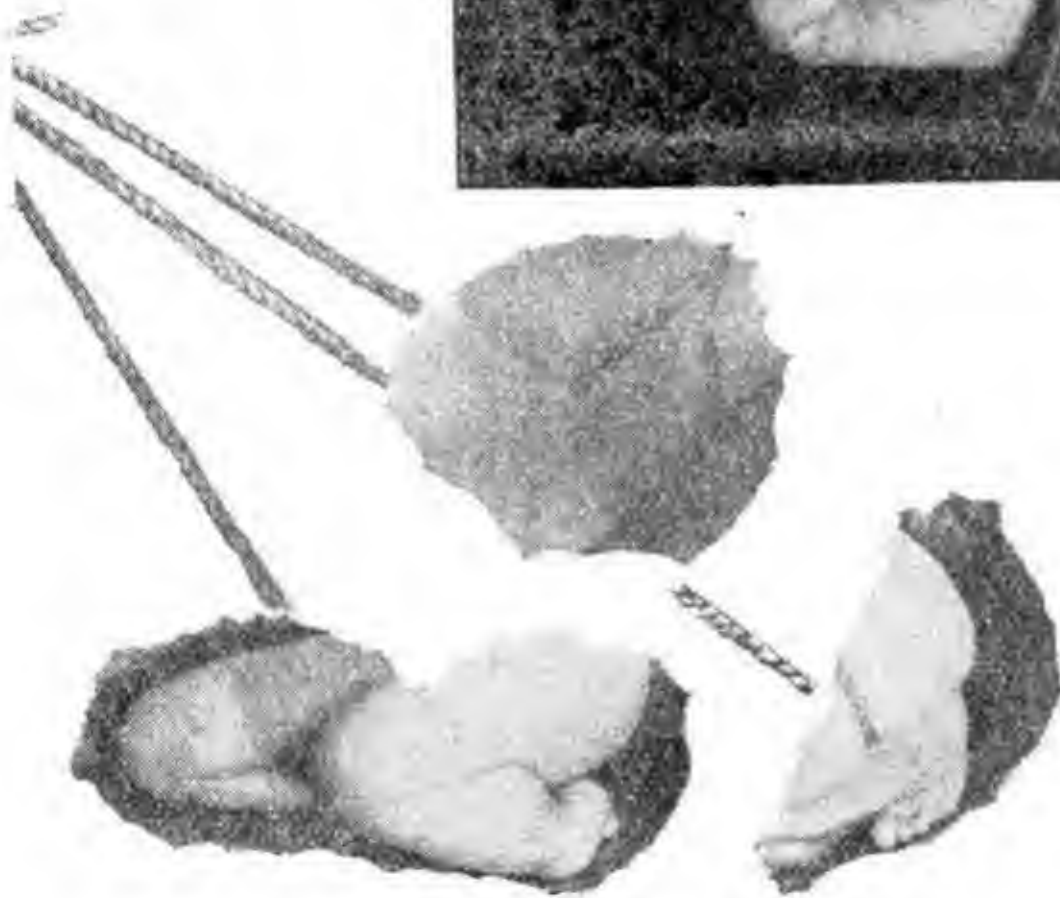
「なんだ？」

「この真紀子の、写真を撮っておくんです」

「写真？」

「といっても、ただの写真じゃねえ。いろいろと、変ったポーズをさせたやつ——。へへへ……。売れますぜ」

「ふん。星島組も落ちぶれたものだ」



大五郎は、にが笑いだ。

「しかし、手間も元手もたいしてかかるわけじゃなし、第一、モデルがこのとおりの、とびきり上等だ。ちっぽけな仕事のようにみえますが、儲けの率がぐんといいい悪い商売ではなさそうです」
「待てよ。売ることは、二の次ぎとして、そんなものを撮っておけば、哲夫のやつを、あとで脅かすネタになるな」
大五郎、腕組みをして考えた。

「そうですとも」

ズル松が意気こんで、あいづちをうった。

「兄さんが生きています？ 哲夫兄さんは、やっぱり生きていたんだわ！」

真紀子は、ハッとして眼をあけた。二人の会話から、哲夫の生きていくことがわかったのだ。自分が、いきなり、この男たちに捕えられたのも、やはり、哲夫に関係のあることなのだ。

「むむむ……」

猿ぐつわの下で、真紀子はうめいた。兄の生存をよるこびたい気持だった。

「——交換は明日の晩、十二時。場所は芝浦でしたっけね。それじゃ写真撮るひまは今夜しかねえ。さっそくやりましょう」とズル松は、どうしても真紀

子の写真を撮るつもりだ。

「ここでやるのか？」

「ええ。玄太郎がカメラきちがいです。きちがいだけに、腕もいいらしい。やつにやらせましょう」

野呂玄太郎——このキャバレーのサブ・マネージャーだ。そしてこの男も、哲夫を襲った三人組の一人であった。

「なにか用かい、マネージャー」

すぐ姿を現わした野呂玄に、ズル松は説明し、命令した。

「——いいか、わかったな。うんと変ったやつを撮るんだ。このお嬢さんは、どんなポーズでも、いやがらずにとってくれるからな。うつつふつつふ」

屈辱のポーズ

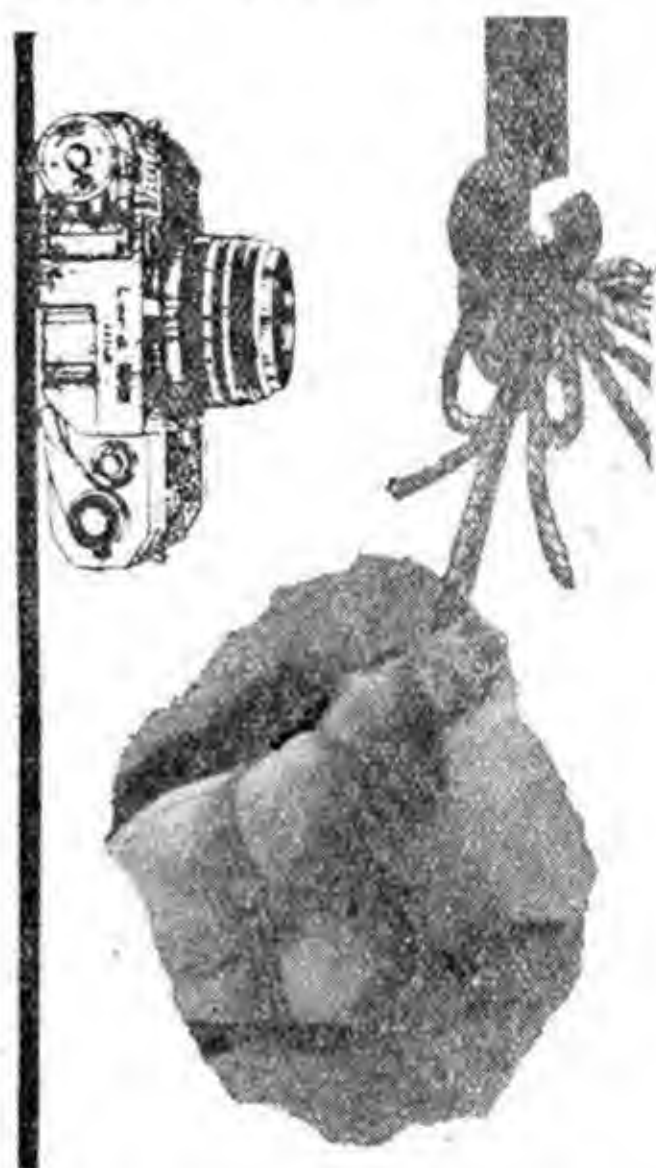
やがて、このキャバレーのフロア・ショウに使うスポット・ライトが、つぎつぎに地下室へ運びおろされた。真紀子を誘拐してきたチビ唇の啓介も、この撮影の手伝いを命令されてやってくる。

この興味ある臨時の仕事に、野呂玄は、もう夢中だった。部屋の壁、天井の至るところに照明をとりつけ配合し、三脚を据え、フアインダーをのぞきながら、しきりに構図を練りはじめる。

「あまり凝らないで、さっさとはじめろよ。だから野呂玄だとか、グズ玄だとかいわれるんだ。チエッ」

ズル松が、じりじりしていった。

これから、あられもなく悶えるであろう、真紀子の苦悶の肢体を早くみたいのだ。早く虐げたいのだ。



「なるほど。八ミリ映画でいきないうところですね」

「まあ、いい。今回はスチールだけで、がまんしよう」

「なにするんです！ もうゆるして！」

唾を吸いとったハンカチを、口から吐きだすや、真紀子は必死の哀願をした。男たちは、その唇に残忍なうす笑いをうかべて、真紀子の美肢をながめた。

「どうして、あたしをこんなひどい目にあわせるんです！」

コンクリート壁にかこまれた地下室。ドアを閉ざせば、いかなる悲鳴も、外に洩れる気づかいはない。ズル松は、床に這った真紀子の身体を、靴で仰むけに、ひっくりかえした。

「ああッ！」

十九才の、ういういしい乙女の肌が、野卑な男たちの、狼のよみな眼にさらされた。その視線をさえぎろうにも、両手はうしろに縛りあげられている。はげしい羞恥に、真紀子は眼がくらんだ。

「そうせかせるなよ、兄貴。いい作品をつくるには、まず下準備がかんじんなんだ」

野呂玄は、あわてない。ゆうゆうと三脚の高さをきめている。まもなく、深夜の密室における、残酷な撮影は開始された。真紀子は、肌にとまった衣類を乱暴にひき剥がされた。

「猿ぐつわをはずしてやれ。無声映画じゃ、どうも面白くねえ」いまは、大五郎もこのショウに乗り気である。

「立て。立つんだよ」

ズル松が、縄尻をつかんで、上にひいた。

「ううッ！」

のけぞる胸。ゆたかにふくらんだ乳房が、苦痛におびえて、ぶるんとふるえた。

チビ啓が、別の縄束を持ってきた。ふとい綿ロープである。そのロープの端を、真紀子を縛ったうしろ手の縄尻に、しっかりと結びつけるのだ。縄尻は、十二、三メートルほども長くなった。何をはじめようというのだ。

と——チビ啓が、その縄尻をつかんだままテーブルの上にのぼった。それから背のびをすると、天井のコンクリートにぶちこんである鋼鉄製の鉤の輪に、その縄尻を通した。

この地下室は、倉庫を事務室に改造したものである。天井壁には、荷物を扱うための、そのようなフックが、まだ五、六本はめこんであった。フックの輪にくぐらせた縄を、そのまま下へ垂らす。

「さあ、ひこうぜ。この娘は、ちよっとした肉体美だから、二人がかりじゃないと、とても持ちあがらねえぞ」

チビ啓が、テーブルからとびおりながらいった。

「よし。おれもひっぱってやる」

ズル松が縄に手をかけた。二人は、天井から垂れさがった縄を、力を合せてひきはじめた。

真紀子を、吊り責めにしようというのである。

「ぐうッ！……」

咽喉が、ひきつけるような声で真紀子は、うめいた。縄をひかれて、うつむいていた彼女の身体が、ぐぐっと上向きになった。胸の縄が、やわらかい豊胸に、キュッと喰いこむ。

「なるほど。こいつは重たいな」

ズル松が、その重みをたのしむように、ニヤリとしていった。

代理部案内

最新作女体緊縛写真

凌辱 略号(れん)

愛川悦子、辻村 隆

連続12枚1組 八〇〇円

浴室股間縛

愛川悦子 略号(よく)

3枚1組 二五〇円

悦慮雨ざらし

愛川悦子 略号(あめ)

3枚1組 二五〇円

剥れた腰巻

花坂道子 略号(まき)

3枚1組 二五〇円

全裸強烈股間縛

花坂道子 略号(きよう)

5枚1組 四〇〇円

ヌード縛り五態

益田房子 略号(ふさこ)

5枚1組 四〇〇円

寝室の苦悶

益田房子 略号(くもん)

3枚1組 二五〇円

腰元拷問

村井知可子 略号(もん)

5枚1組 四〇〇円

湯上りの折檻

大塚啓子 略号(せつ)

3枚1組 二五〇円

行燈(アンドン)

愛川悦子 略号(あん)

3枚1組 二五〇円

いたぶり 略号(いた)

春日ルミ、愛川悦子

3枚1組 三〇〇円

妖艶園の縛しめ

田中芳代 略号(ねや)

5枚1組 四〇〇円

太股縛り三態

大塚啓子 略号(ふと)

3枚1組 二五〇円

ずるずる……。ずるずる……。

縄がひかれるたびに、真紀子の身体は、五センチ、十センチと天井へひきあげられる。中腰になり、膝立ちになり、ついに足さきが床をはなれた。

「ううッ。むむむッ！……」

苦痛のうめきが、真紀子の口からほとばしった。すこやかな肉づきの白い美身は、完全に、ずっしりと天井からぶらさがったのである。スンナリと伸びた脚の線が、痛々しくも美しかった。

苦悶の肌

野呂玄は、熱っぽい眼で、しきりにシャッターを押しつつける。真紀子の苦悶の表情、そのポーズを、あますところなくとらえ、残虐百パーセントの、決定的瞬間を狙っているのだ。

ライトの直射を浴びた肌が、むごたらしい縄目とは逆に、美しく光って照り映える。なめらかな輝き、まるやかなスロープ。

「やめて！ やめてください！」

無駄とは知りつつ、真紀子は、きれぎれにうめく。このむざんな姿を、写真に撮られて記録されることは、耐えがたい羞恥である。

「オーケー。つぎのポーズにうつりましょうかね」

野呂玄が、一息ついて合図した。

ずるずるとおろされる真紀子。床の上にぐったり横倒しになる。

「こんどは、さかさまに吊り上げてやろう。それも、片足だけを縛って、天井にひっぱりあげるんだ。どんな格好になるかな。ふふふ……」

ズル松が、ポーズの指定をした。

うしろ手の縄はそのまま、ぎゅぐゅとくっついておいて、こんどは右の足首にギリギリと縄を巻きつける。

「よし。ひけ！」

腰元全裸折檻

村井知可子 略号(せつかん)

3枚1組 二五〇円

振袖哀歓

花坂道子 略号(ふり)

3枚1組 二五〇円

股間縛り三態

大塚啓子 略号(こか)

3枚1組 二五〇円

股間縛り五態

益田房子 略号(ます)

5枚1組 四〇〇円

全裸高手小手

愛川悦子 略号(たか)

3枚1組 二五〇円

女学生凌辱図絵

川辺砂登子 略号(りよ)

5枚1組 四〇〇円

賭 機 (カケニエ)

愛川悦子 略号(かけ)

3枚1組 二五〇円

◎印画紙の大きさは、大手札型(9×13㎝)です。

お申込は 天星社代理部へ

ズル松とチビ啓は、手に唾をして、ふたたび、天井からさがった縄に手をかける。

ひどい……。その縄をひけば、こんどは、天井からさかさに、片足だけで吊られることになるのだ。

「ひいッ！」

右足だけが、ぐぐぐと上にあがって真紀子は、すさまじい悲鳴をあげた。胴体が床に寝たまま、片足だけが天井にむかってひきあげられるのだ。

耐えがたい屈辱。ひき裂かれるかと思うばかりの苦痛。

「おもしろいな。ふふ、ふふふ……」

タバコの煙とともに、笑いを吐きだすのは、隅のソファにゆった



りと腰をおろしている大五郎だ。残忍な男である。この苦悶のショウを、眼をはそめて楽しみながら眺めているのだ。

リリリリリ……。

卓上電話のベルが、低い音で鳴った。大五郎は、腕をのばして受話器をとる。

「ああ、わしだ。——なんだ！ 千絵子、お前か。なに、逃げた？ ほんとか？ 哲夫のところから逃げたのか。よし、よく逃げた。えらいぞ。それでいま、どこにいるんだ。うむ、そうか……」

大五郎の顔に、喜色があふれた。彼は電話をおくと、こぼれるような笑みをうかべていった。

「鶴松。千絵子は無事だ。うまく逃げたらしい。こうなれば、もうこっちのものだ」

「さすがは社長のお嬢さんだ。すばしっこいや。哲夫のやつ、さぞかし泡喰ってやがるだろうな。ざまアみる」

ズル松が小気味よげに、あいづちをうつ。

「こんどこそこの真紀子をオトリにして、まちがいなく、あいつの息の根をとめてやるぞ」

立ちあがった大五郎が、真紀子のあえぐ胸元へタバコの火をぎゅッと押しつけて揉み消した。

「ああッ！」

真紀子は、海老のようにのけぞった。キメの細かい皮膚に、小さなヤケドが残る。右足だけが縄にひっぱられて、まっすぐ上にのびていた。

さらに、ずるッ、ずるッと、まるい腰が床をはなれる。足首だけで全身の重みをささえる苦しみ。頭の頂天が床からはなれたときには、真紀子の右足首の骨は、脱臼してしまうだろう。

「ううッ、ううッ、もう、もう、かんにんして！ ゆるして！」

硬直した臀部の肉が苦痛を耐えておりおりとけいれんした。

カチリ。カチリ。カチリ……。

野呂玄のツヤッターは、獲物をとらえて快調の音をたてる。十九才の苦悶絶叫の姿態は、すでに幾本かのフィルムにおさめられていた。

悪鬼の嘲笑

そのとき、またテーブルの電話が鳴った。大五郎がとって、耳にあてる。

「ああ、そうだ。わしだ。なに！きさま、哲夫か！」

一瞬、頬の肉が緊張したが、すぐ、もとにもどった。いま、千絵子が、うまく逃げだしたという電話をよこしたばかりだ。

「おい、哲夫。せっかくだが、明日の約束はやめにしたよ。ふふふ……。それどころか、こんどはわしが逆に、一千万円もraitたいんだがね」

大五郎は、余裕たっぷりにいった。

「社長。笑うのは、まだちよつと早くはありませんか。たしかに、お嬢さんにはうまく逃げられましたかね、かわりに、こんどは美佐をこっちに頂きましたよ」

「なに？ 美佐を！」

大五郎は、眉をしかめた。

杉並の自宅には、子分たちを泊まらせて、美佐を守らせておいたはずだ。それなのに、どうして、哲夫の手に捕えられたのだ。

まさか、自分からノコノコ出かけていったわけでもあるまいに——と、大五郎は舌うちした。

（くそ！ 哲の野郎め——）

なんという、すばやい男だ。大五郎は、うす気味わるくなった。「フフフ……。いや、おどろきましたよ。美佐のやつ、すっかりきれいになっちゃってね。あんたが、だいぶ可愛がってくれたそうで

……。礼をいいたいくらいのもですがね。さっきまで千絵子を縛りつけておいた椅子に、代りにおとなしく縛られて、あんたの助けにくるのを待っていますよ」

哲夫の声が、地底からの、ささやきのように静かにひびく。

「美佐を捕えて、どうしようというんだ」

「一千万……といたいところだが、五百万にまけときましょう。どうですか？」

「ふふふ……。哲夫、残念だが、こっちは引き値なしに一千万のしろものがおさえてあるんだ。差引き五百万円、こっちにもらい分があるわけだな」

「……………」

哲夫は黙った。大五郎が何をいいだすのかと、警戒したのだ。

「おどろくなよ。お前の妹の真紀子が、いまここでおもしろいサーカスをやっているんだ。片足を天井に吊られて悲鳴をあげてるぜ。きこえないか、あのヒイヒイいう声が——」

「真紀子が？」

こんどは、哲夫が息をのむ番だった。大五郎がズル松をふりかえって顔をしかけた。

「おい、その娘を鞭でひっぱたいて、少し泣かせてやれ。電話にいられて、哲夫にきかせてやるんだ」

「へい」

ズル松は、室内を見まわして、なにか鞭になるようなものをさがした。手頃なものはないもなかった。ビールの木箱に眼をつけた。細長い板をぶつけただけの、かんたんな木箱が、部屋の隅に置いてある。その板きれの一枚を、手でベリベリとひきはがした。

「これでいい。泣き声ばかりでなく、これなら殴る音も派手にむこうへびきますぜ」

ズル松は、板きれで、いきなり真紀子の尻っぺたをなぐった。

ペタリッ!

肉をうつ、奇妙な音がした。

「うむ。おもしろい音だ。もっと鳴らせ」

大五郎が、にやりと笑ってうなずいた。

「へへへ……。じゃ、電話をもっとこっちへ近づけてー」

ズル松は、得意になって、また板きれの鞭をふりあげた。

「いくぞ!」

こんどは太腿をめがけて、

ペタリッ!

「あ、ああッ!」

真紀子の悲鳴。だが、ズル松の鞭は容赦なかった。

ペタリッ!

白い肌に、すぐ赤い痕が走った。ズル松は、この遊戯が気に入ったらしかった。調子にのって叩き続けた。

ペタリッ!

「ああッ!」

吊られた片足を中心に、真紀子の裸身が、ぐるぐると回転した。

ペタリッ!

◎絹川文代嬢緊縛姿態新作写真集!

全裸緊縛集 略号(きぬ)

三枚一組 二五〇円

全裸高手小手 略号(きた)

三枚一組 二五〇円

股間縛三態 略号(きこ)

三枚一組 二五〇円

緊縛全裸立姿 略号(きり)

三枚一組 二五〇円

◎浣腸連続フォト◎ 略号(ちよ)

(9×13センチ) 印画紙焼付 十二枚一組 九百円

モデル 愛川悦子嬢

女体 『浣腸風景十二態』 (9×31Cm) 印画紙焼付 十二枚一組 九百円

モデル 大塚啓子嬢 略号(ちふ)

「ひいッ!……」

悲鳴はもう途切れ、咽喉のかすれ声に変わった。

「うん、いいぞ。もっと!」

叫んだのは、カメラをいじっている野呂玄だった。

「ふっふっふ。どうだ、哲夫。五百万円よこせ。そうしたら、この

サーカスは中止してやる。なに、美佐? ははは……。そんな女は

もう、いらん。欲しかったら、お前にくれてやる。わしはもう飽き

てしまった。お前の妹のほうが、よっぽどいいぞ。うわっはっは……」

大五郎はうそぶき、ふてぶてしく哄笑した。真吾の挑戦に、みこ

とな逆襲をしたのだ。大五郎の笑いが、いつまでもとまらないのも、

無理ではなかった。

(くそッ!)

哲夫は、その哄笑に圧倒され電話口に無念の歯を喰いしばった。

「どうだ、おそれいったか、青二才めが。わっはっはっは……」

哲夫の耳に、悪鬼のような大五郎の嘲笑が、いつまでも、にくにくしげに鳴りひびくのであった。

(未完)

＜特集号＞

グラビヤ写真百十四葉

- | | |
|----------|--------|
| ○妖精（ニンフ） | ○競花 |
| ○三ツ葉葵の | ○首縄 |
| プロフィール | ○シユミーズ |
| ○誘拐 | ○放心 |
| ○羅致 | ○間諜成敗 |
| ○プレイ | ○三処責め |
| ○木洩れ陽 | ○黒タイツ |
| ○夢路 | ○観念 |

口繪

（四馬孝画集）

- 白魚の悶え
- 苦悶の前奏
- 鉄鎖のきしみ
- 籠の白鳥
- 宙に踊る
- アクロバット
- 濡れる朱唇
- 土蔵の花

△悦虞小説傑作集▽

- 雌獸の手記
- 妻は縛らず
- 夕の朝顔
- 続・囚衣
- 私の主題
- 色狼
- 女奴隸の手記
- 受難記
- 怪奇曼陀羅教

- 呪縛（一・二）
 - 悦虐の旅役者
 - 長期刑
 - 私の想い出
 - 片耳伝奇
 - 縛られた妻以前
 - 燐 光
 - 地獄絵行脚
 - 鉄格子の中にて
- 定価三百円（送共）
- 略号【悦特】

定価三百円 (送共)

略号【悦特】

臨時増刊号 『青い廃院』

只今発売中 定価 二百円 (送料共)

青い廃院

弓沢俊二郎作、四馬孝画

美貌の踊子に執拗につきまとう無気味な男。婦女誘拐団の魔手に陥ったレビュースター。蒼白き灯影に照り映えて痺れるような甘美な悦虐の妖氣が全巻を蔽い、淫虐な責めは頁を追う毎に愈々酸鼻をきわめ、息もつかせず一気に最後まで読了させずにはおかない弓沢俊二郎氏の才筆は、ここにサド文学の金字塔を打ち建てた。

与那国奇谈

永山久美雄作、杉原虹児画

南支那海に浮かぶ与那国は世に云う女護
ケ島。女ばかり住むこの孤島に展開される
男性共有の風習、漁船が難破して、この孤
島に漂着した一日日本人漁師の経験した世に
も不可思議な体験記。巻頭から結末に至る
まで緊縛と処刑シーンの連続。諸君を夢の
国女護ケ島パラダイスへ案内して暫しの粹
夢に浮世を忘れさせる一大ドラマ。

四馬孝画「青い廃院」画廊

○美貌の人	○美女誘拐
○苦悶する美貌	○屈辱の責め
○踊り責め	○廃院の中
○モデル責め	○救出

△△変ったレツスン
△△受 纏

(表紙裏)
(目次裏)

本文内容主な項目

青い廃院
(弓沢俊二郎)

一、三人の男
二、地の底にあるもの
三、美貌の人
四、劇場に居た二人の男
五、忠告
六、美女誘拐
七、苦悶する美貌
八、屈辱の責め
九、踊り責め
十、探索行
十一、魔院の中
十二、モデル責め
十三、手繰りの網
十四、救出
十五、勝者の心

与那国奇談（永山久美雄）

女護ヶ島与那国
女百人に男一人
股裂きになる女
孤島の殺人
股裂きと火焙り
人肉の炙り焼
筏流しの刑罰

第一回読者座談会

『女体緊縛美について』語る

△出席者▽

(本誌側)

箕田 京二、絹川 文代
辻村 隆、愛川 悦子
杉原 虹児、大塚 啓子

(読者側)

A、北 広治 (二九) 兵庫
B、出雲 隆二 (三六) 奈良
C、西山 敏郎 (四八) 大阪
D、古賀 松三 (四一) 滋賀

E、山田 晋策 (三八) 大阪
F、小川 貞子 (三〇) 三重

日時 三月二十七日 (金) 午後五時
場所 大阪千日前 喜楽別館

― (文責) 辻村 隆 ―

△註▽本稿はテープレコーダーにて録音したものを辻村氏によってアレンジしたもので、多少の前後或は省略のありましたことをお断りいたします。

緊縛八ミリ映面上映並に緊縛フォト展示、
本誌写真部作成並に辻村隆作成

モノクロ八ミリ緊縛映画サイレント

「緊縛女体の悶え」「緊縛写真撮影風景」

「女体縛り方教室」「緊縛モデル競艶」

天然色八ミリ緊縛映画サイレント

「落花狼藉」(一五〇呎)

本誌写真部撮影 傑作写真展示会

四切緊縛フォト 十二葉 八切緊縛フォト

二十六葉、大中判緊縛フォト 二百四十葉、

本誌四月号に「読者座談会」の出席希望者を募りました処、全国各地より多数の希望者が応募されましたが、開催場所、日時其の他

の都合上、特に以上の六名の方々に御出席をお願いしました。遠隔の地の諸賢、及び締切後にお申込を頂きました方々には、誠に申し訳なく存じますが、若し好評のようでありましたならば、引続き第二回の読者座談会を企画したいと思っておりますので、何卒あしからず御諒承おき下さい。

読者側出席者の略歴紹介

北 広治氏

昨年二回投稿された小文が本誌に掲載されたのでペンネームを書くと、あああの人かとすぐ判るが、特に氏の懇望によってペンネームは秘す。御両親健在、神戸市内栄町にて家業の鐘詰卸を手伝っておられる。四年前結婚一男あり。

出雲隆二氏

本誌の大判時代よりの愛読者。奈良県大和郡山市在住、二男二女の子きパパ、御本人は家業の農業を嫌って金魚の増殖に専心。

西山敏郎氏

河内長野市の産、再三従軍せられ、カメラは芸人はだしの腕前、現在八ミリ映画に熱中して傑作を相当ストックされている由、子供なき為、現在夫人と二人暮らしなるも、本年は養子をもたれるとか、私立大学講師。

古賀松三氏

江洲商人の本場近江八幡に住わる。自称織

維ブローカー、昨年夏頃より数度の読者通信を寄せられる。頭髪を真中から綺麗に分けて縁無眼鏡をかけて一見温厚な好紳士。

山田晋策氏

大阪の衛生都市布施市に在住、現在市内の某病院勤務なるも、四年前までは産婦人科医院を開業、伊藤晴雨氏の作品の蒐集並に江戸時代の刑罰についての研究で有名。

小川貞子氏

本日読者側出席者中の紅一点、松阪市に住む家庭主婦、色白の小柄で一見二十五・六才に見える。一女のママ、御主人はサド趣味の由、本日は御主人の代理にて出席、御主人の職業は某石油販売会社の課長。

× × ×

彼岸も過ぎて、各地でチラホラと早咲き桜の便りもある三月下旬、陽気はすっかり春めいてもう合オーバーも脱ぎたくなる様な暖かさで定刻の午後五時の十分前には全員、喜楽別館に打ち揃った。

箕田氏の簡単な挨拶のあと、辻村隆の司会で本誌側並に読者側の個人紹介に移る。(別項の出席者の略歴は、出席希望の際に申出られたものを御本人の承諾の下に一部掲載)

紹介が終って直ちに、四切写真の壁に押ピンにて貼り、SADO特集号第2集を各人に配り八切以下大中判の写真の回覧をする。和気霽々裡に感嘆の声、批評の声など交々入り

混って暫し、時間の経つのも忘れる位であった。

引き続いて、八ミリ映画全五巻を上映。

映画は試作品の域を出ないが、八ミリ映画としての、初めての観賞だけに、相当の反響があちこちで囁やかれていた。

× × ×

辻「如何ですか——、本日のものは試作品程度ですので、充分の御満足は得られないと存じますが、何しろ私も、箕田さんも映画の方は未だシロウトですし、これで仲々に大変だったんですよ。」

北「凄いつ！まったく素晴らしいですよ。今晚来て本当によかった。映画は見せて貰えるし、四切の写真は見せて貰えるし(笑)」

西「『緊縛女体の悶え』は大塚さんですね。あの縛られて行く過程と云い、大塚さんのものがく姿と云い、堂に入ったもんですよ。ところで縛る人は手足だけで顔が写らなかったけど、あれ辻村さん？」

(辻村隆、笑って応えず……)

古「らしいねー。そうでしょう」

辻「御想像に任しときましょう」

古「女体縛り方教室」の縛り手も辻村さんらしいね。いいから白状しなさいよ」

辻「……………」

西「『縛り方教室』は愛川さんですね。ああして順序を追っていくと、縄のぐっと締る

緊縛感が又違うね。オッパイが盛り上って来て、ぞくぞくとして来ますね……」

山「君たち（モデル嬢達に向って）自分のあおした縛られて行くシーンを見ている、何とも感じない？」

大「私、今夜見せて戴くの始めてですけど、矢張り体中がカーツとして来て妙な氣持よ。

それに、今眼の前で皆さん、私をジロジロ眺めると、何だか服を透して、体見られてる見たいで……」

辻「どう、こうしてモデル嬢をじかに見られて、フオトの感じと大分違っている様に思われますか、皆さん」

古「しとやかですね。それに全然すれていない。しかし、大塚さんはもっと背の高い人だと思っていた」（大笑）

（アラ、失礼しちゃうわ、と大塚嬢すねる）

出「この人達、モデルが本職なの……」

箕「アルバイトですよ、みんなちゃんとした仕事もっていますよ——」

出「それにしてもよく仕込んだものですね（笑）君達、あんなに縛られて痛くないの？何ともないの……」

西「本誌にのってる事しっているの——」

絹「私、しらなかったわ。うすうすは何かに使う為だとは感付いていたけど……」

大「私、お友達に教えられて、書店でソツと開いて見たら……」

出「どんな氣持だった？」

大「本屋の中の人達が、みんな私の顔見て

いる様な氣がして、夢中で飛びだしたけど、もしお兄さんが知つたら、何と言訳したらいいかと、四五日、夜も碌々眠れなかったわ」

北「こんな事、つまり何ですね。その、縛られたりすること、初めて……」

大「ええ、箕田さんが、アクセサリーだつて云うもんだから、妙なことするんだと……」

古「でも初めは、こわかったでしょ。何されるかと思つて……」

大「ええ、ドキドキして……。でも二三回頃から馴れちゃった、写真部の方はみんな紳士だから……」（笑）

辻「小川さん、同性の緊縛フオトについてどう思われます？」

小「さあ、何と申し上げてよいやら……」

私、こんな席始めてで御座いますから……、始めて主人に見せられた時は、もう胸がドキドキして、よう見ませんでしたわ。まさか主人が、私にこれと同じ事をするなんて、その時夢にも思いませんし……」

辻「始めて奥さんが縛られた時、それを一寸聞かせて欲しいなあ」（賛成賛成の声）

小「翌朝、さとへ逃げて帰る決心で御座いました。こんな主人とは今が今まで知らなかったものでんから……」（笑）それが、翌朝、平謝りに謝るんですの。（笑）謝るのなら、

初めから、そんな事しなきゃいいのと思つて」

杉「一体どんな事をしたと云うの——」

小「杉原先生の絵の様にされたら、私、命がいくつあっても足りませんわ（爆笑）」

杉「だからさ、どんな程度なの——」

小「……」

小「両手を縛つたんでしょ。着物を着て？それとも裸で……」

小「いやですわ。そんな事、云えませんか皆さんの前で……。それじやまるで、私達の夫婦の秘密、洗いざらい喋べる様なもんでしょ」

箕「さあ、もう一杯、大きいのでぐつと——奥さん、いけるんですな。お酒の元氣でぐつと喋べっちゃまいなさいよ——」（そうだそうだ、の声）

小「本当にこんなことなら、くるんじやなかったわ。主人に叱られないかしら……」

私の申し上げる事、本にのるんでしょ」

辻「叱られたら、私が弁解して上げますよ。御主人とは知らぬ仲でなし」

小「辻村さんに弁解して頂いたら、尚更あとかこわいですよ。お二人よったら、何をしでかすか分らない人達なんですもの」（大笑）

辻「じゃあ、私から云いましうか——。もっと、全部——知ってる事のすべて……」

小「いやよッ。貴方が仰有る位なら、私が

白状した方がましですわ。ある事、ない事云われた日には、主人から、それこそ逆吊りにされて、ひどいお仕置ですわ——」

西「そら出た！逆吊り……」

古「ウン、こりや面白い。是非、奥さん——」

小「この方達、卑怯ですわ。自分の事はちっとも仰有らない癖に、私一人に云え云えと仰有って……」

杉「ぼつぼつ出ますよ。もっと凄いやがね。奥さんの出る幕がなくなりますよ、そうなりやあ。」

小「でも……、モデルの女の方だっているし、聞かせてもよろしいの？」

箕「ねえ、君達も聞きたいだろう？——」

大「聞きたくなかないわよ。ねえ、皆な」

辻「こらッ、そんな事を云うと、今度の撮影の時間がこわいぞ——」

(大塚嬢、ペロリと舌を出して、首をすくめる)

小「こちらの愛川さんて方、おとなしい方ね。さっきから、一言も仰有らないわ——」

出「話をそらさないで——謹聴謹聴」

小「松阪ってところは、牛肉の本場なんです。

主人の出里は肉屋。こんな商売の事云うと、変に素姓をとられたりするから厭なんですよ、本当は——。私が嫁いだのが二十六才の秋で、婚期は家庭のちよつとした事情で遅かったんです。肉屋を主人が嫌ったもんですか

ら私達別居しましたが、旧誌の頃の喜多玲子さんの女屠殺場だったか、そんな挿画があったのを覚えてますけど、主人がそれを見て、ムラムラと妙な気になったんでしようけど、丁度あれは四月頃の事で里へ帰った晩でした。年老った両親は二階でぐっすり寝ています。店の人も通いで帰ってしまつて、すべて好都合だったんでしようね。床に就く前に、主人が、妙に真剣な顔で一寸と店から呼ぶんです。寝巻の儘で、店へ参りますと、いきなり私の寝巻を剥いで……」

(一同シーンと静聴。小川さん、言葉をきって云い難くそう)

辻「それから……、皆さん固唾をのんで待ってますよ——」

小「バタバタ(自動三輪車)で肉を運ぶ時使う、シートを上から縛る太い縄があるんですが。私の指指ぐらいもあるかしら。それでいきなり滅茶苦茶に縛り始めたんです。私本当に主人が気でも狂ったのかと思ひましたわ。吃驚するのを通りこして、夢中でもがいていました。頑丈な主人の力には到底かなう筈もなく。私は、犂々と後手に縛られて、コンクリートの床に転がされていました。この私をどうなさるの、どうするのと泣き叫びましたが、主人は血走った眼で、無言で、私の体を横抱きに抱き上げると、牛肉を引っ掛ける太い鉄鉤に、犂々と引っ掛けたのです。

肉の生臭い匂いにやっとなれて来た私も、両側にだらりと垂れ下った、血のしたたる大きい肉片と肉片の間に挟まれて、足が辛うじて地につく位に吊り下げられて、その時はもう生きた心地もなかったのです。主人は本をパラパラと開いて、これだと叫ぶ、よく見るとあの旧号に載っていた屠殺場の絵を突きつけたのです。

私は体中から血の気の引くのを覚えて、ブルブルと震え、やめて——、やめて——と叫んでいました。」

杉「凄いいシーンだ。僕のイメージにぴったりのだよ、こいつは——」

小「よして下さいよ。その時、うぶな私は、それどころじゃなかったんだから……。主人がシャリンシャリンと、鋼棒の金砥で、肉切庖丁をこすり合せ、私の胸に、庖丁をつきつけて、胸から腹へ一文字にスーッと裂いて、皮を剥いで、並べて吊っておいたら、誰も人間の肉とは知らないで。なんて、聞いただけでも、身の毛のよだつ様な事を云うんです。お前の肉をこま切れにして、百匁一二〇円の肉に混ぜて売れば、誰も知らないで、買っていくぜ。ここはロースだ、と私のお臀を庖丁の腹でペタペタ叩き、鉄鉤のギシギシ云う音をきませ乍ら、私の体を、あちこち突いては、グルグルと廻して、ジロジロ眺め廻すんです。その気味の悪い事と云ったら……」

絹「よしてよ。聞いているだけで、胸がむかついて来たわ——」

北「凄い、いやまったく凄いですな。」

大「よしよしそうですね。お酒が不味くなるわ」

北「で……、近頃でも矢張り……」

小「牛肉扱いよ。四馬先生の挿絵が、主人にとってもアピールするんですって。こんな莫迦げた事、さとの親が知ったら、一大事よ。でもね『狂い咲くカンナ』てのあったでしょ。たしか……あれは……」

辻「羽村京子さん」

小「そうそう、羽村さん。あの人なら、きっと、うちの主人なんかとウマが合うと思いますわ」

北「私だって、ウマが合いそうです。いやうしが合いそうかな。一度紹介して下さいよ。近いうちに……」

小「おやおや、又同病相憐むが一人殖えるんですね。ヤレヤレ（笑）」

杉「北さんも、僕の画に対して、酷評もあるが、大いに肩をもってくれている方だけど、矢張り、そんな方面ですか？」

北「私もサドの方でしょうね。しかし又ねとやま・かずひこ式にも興味ありますね、と云って分らないければ、かぐわしい旨酒、例のあれをね。あれを心行く迄、美人の膝下に脆いて味わって見たい——」

山「本当に飲めるもんかなあ——。僕は想

像上の事と置いていたんだが……。毒にならないだろうか——」

北「辻村さんも、『話の屑籠』で書いておられた様に、使い様では薬にだってなる位ですもの。たで喰う虫も好きずきでね。只、とやまかつひこ式のものに実際出くわしたと云う話で、これに興味もあります。矢張り何と云っても、昭和二十五、六年頃の、ヤク（麻薬）に耽溺していた頃の、思いっきりサド根性を発揮したあの時分の方が面白かったですね。たった一つまみのモヒで、女が自由自在でしたからね。」

西「今なら一ぺんに豚箱行きだな——」

北「それをいっちゃいけませんよ。ヤク欲しさにどんな事でもする女って、貴方達おそろく想像出来ないでしょね。そうそうこんな事があった。『リルリルって唄が流行していた頃で、こちらは二十才過ぎの血気盛り。僕等の眼をかすめてね、ヤクの包みを盗んだ女を捕えた時の事です。大の男が三、四人掛りで、袋叩きにした拳句、焼けピルの中へ連れ込んで、ドンゴロスの袋に押し込んで、袋の口を縄で縛って吊しておいた。ヤクがきれて喚くと、ボクシングのサンドバッグよろしく、パンチを喰わすんです。どこを擲っているか分らない。声が途絶えたので、降して見ると、女は鼻を殴られて気絶していたんです。おろして水をじやあじやあ、ぶっ掛けて

息を吹つかえさせて、また責めたんです」

出「小説以上だね、これは……」

北「こんなのは序の口、我々を甘く見やがって、なめたアマだと、ハリケンのチャン（常）と云う三國人でしたが、もしばらしたところで俺が責任をもつからと、僕ら仲間に女の手足をしっかり押さえさせて、コンクリの床に打俯せにさせ、軍隊のあの太い帯革で、力任せに女の尻を擲ち始めたんです。皮がやぶれ血が飛んで、二、三十回も打つと、女の両腎は真紅な花の様にはぜわれて、赤黒い条痕がみみずの様にのたうって、僕らが手足をはなしても伸び切って、半殺しだった。大の男が力任せにやるとなると、凄いもんですよ。」

西「それで、その女は……」

北「結局、チャンが売り飛ばしてしまった」

出「悪い奴だな君は……」

北「今は真面目ですよ。そう、いついつ迄もこんな事をしては通れない。二度程、カマ（留置）されて、僕もこれは不可んと、駐留軍の譴詰をブローカーで流すうち、運よく今の家に這入れたんです」

辻「奥さんを縛ったりする？」

北「結婚後一二年は遠慮していたけれど、最近はやれる様になりました。家内も始めは何をされるのかと怖がっていましたが、縛るだけなら馴れて来ましたよ。」

箕「若気のあやまちですね。程々に頼みま

すよ。ところで、西山さん。貴方は八ミリのベテランと云うことですが、先程の映画どうでした。」

西「結構ですね。まあ難を云うなら、もう少しインサーカットが欲しいですね。それに『緊縛の写真撮影風景』でしたか、あれなどシーンの転換にオーバーラップを使うと面白いんじゃないかな」

辻「あれが写真部の処女作なんです。タイトルはついてるけど、唯なんとなーく、撮るかなあーと思ってとったやつだ——」

西「道理で……。しかしモデルは見かけぬ人ですね。誰ですか？」

箕「あの時は、何しろ八ミリカメラの買い立てでしょう、だから八ミリ専門でやったんですけど、いいモデルだ。これはいけるぞと使う気でいたら、二度目はスッポカされた。映画を最初からとったので、おそれをなしたか、厭だったのか、残念でしたよあの娘は……」

辻「箕田さん、あの娘でしたね美山光子と云う娘は……。私はとうとう知らすじまいだった」

箕「『落花狼籍』はどうです。カラーの五〇呎もので、多少は見応えあるでしょう」

西「あれが野外ならね。カラーはフジカラーの様ですが、どんなにライトを使っても、室内では無理ですね。まあ併し、いい方です

ね」

北「僕は素晴らしいと思うけど。絹川さんのあの黄八丈と云う着物に、赤い腰巻は断然色っぽいですよ。それに部屋自体も御殿風で感じが出ていますよ。特集号の第二号のこれですね（SADO特集第二号の頁をめくって、仇姿黄八丈を示す）。これで髪が日本髪なら満点だけどな」

山「ここで僕も一寸云わして下さい。この絹川さん、髪を染めて赤くしておられるでしょ。だから折角これ程の八ミリをとり乍ら、ちっとも時代風が出ないんですよ。僕がとるのなら、乱れ髪だな。折角、こんないい部屋でこんないいモデルを使い乍ら、何故カツラを使わなかったんです。残念だなあ——」

辻「私もそう云ったんですよ」

箕「いやね、カラーで撮れるかなと、それ自体が不安だったんですよ。この程度にうつるのが判っていたら、もう少し準備するんですけど、私が、残念の点なら皆さんに云われる迄もなく、一番残念に思っているんですから、まあ、そう云わないで下さい。自信がついたら、ドシドシやるつもりですから……」

山「絹川さんは現代風の顔立ちだけど、化粧のし様によつては、ボリュームもあるし、いいだろうね。伊藤晴雨に見せてやりたいよ」

西「絹川さんはいくつ？」

（絹川嬢、笑って応えず）

箕「年はきくもんじやありませんよ。もし云ったって嘘にきまってるんだから。西山さんが二十五才位とすれば、二十五才でいいんだし、十九才と考へたら十九才にしとく。そんな事でもよ」

絹「年なんかきいたって仕方ないでしょう」

山「併し綺麗だ——。若し中絶なんて必要が起った時は是非、僕をたずねて下さい。絹川さんならタダで始末してあげる」（笑）

絹「アホラシイわ。云わんといて下さいよ、そんな失礼なこと。」

山「冗談だよ。ところで箕田さん、近頃は伊藤晴雨さんのものがないね。どうしてなの」

箕「お年なんでしょう。私からは時々催促したりするんですが、まあ、考えようによつては、伊藤式の時代は過ぎたとも云えますね」

山「そんなことはありませんよ。伊藤さんのものは益々市価が騰ってますよ。少なくともいるんだから。何と云っても縛りの元祖だからね」

古「緊縛なんて言葉は、恐らく奇クの創造語とも云えましょうね。いつかの辻村さんの『話の屑籠』に出ていた様に、今東光の『悪太郎』にも緊縛と云う言葉使われていたけど、たしかにこの言葉は大分普及したね」

山「そうなんです。この間、面白いことがあった。ガソリンが値上げになるでしょう。僕のゆきつけのガソリンスタンドの案内状がケ

ッ作だった。——事情が緊縛して己むを得ず値上云々と書いてあるんだ。これは緊縛の縛りの字じやなくて、迫ると云う字を書く、緊迫なんだ。この親爺、縛りが好きなんだなあとその時思ったよ——」

山「アブニストなんて言葉もうまく云ったね。あれは確か鬼山絢策と云う人が作った新造語だと思うけど、アブノーマルな人間、つまりすべてを含めて、アブノーマリストをつづめて、アブニストとは、うまく云ったもんだよ」

箕「西山さんは従軍当時は十六ミリだったでしょう」

西「そう、重いアイモと云う奴をかついで、二人がかりで撮ったもんです。八ミリが普及して便利になったね。僕は初めヤシカ8だったけど、シネマックスの新型に買い変えました。映写機はセコニックの安物です」

辻「緊縛を撮るとなると、又動きがあって面白いものですわね」

西「今日はひよっとして撮せないかなとあのつもりで、実は携えて来たのですが、捲戻ネバリッパしのきくこれなら、少し変ったものもいけますよ。フエードイン、フエードアウトに変えて、場面転換をダブらすと、又一寸乙なものです。」

箕「もしも撮るとすればどんなものを——」
西「動きが伴わないと八ミリの面白さはあ

りませんからね。縛って行く過程、責める過程、すべてINGの進行形でなければなりません。その点、箕田さんは始めてにしてはッポを心得ておられるようですね。今の処二、三のコンテは考えたのですが——例えば、本妻と妾の争い。これは女斗美から順次を追って責めになるし、愛川さんと絹川さんとならボリユームもあって、いいものが撮れると思います。それから、憲兵と姑娘——これなら拷問が主題のテーマとして、不自然でないし、魔都香港に売られ行く哀れな女——こうしたテーマでしたら、女の体に烙印を押して、首に奴隷第何号と云う様に札を下げて、思い切った緊縛の連続プレーがとれると思います。題材は古いですが、パンパンの争い——、姐御が新入りにヤキを入れる。鞭を使い、責めて、結構、筋になる筈です。」

箕「面白そうですね。私はサンキョウ8でしたが、最近ではエルモの8Vも使っています。常焦点の二本ターレット・オーバーラップフエードイン・アウト自由です。辻村君は——」

辻「わたしはヤシカ8、出始めのものだよ」
西「『緊縛モデルの競艶』はそれでとったの——」

辻「大したことないでしょう。ところが、構成をする段になると、カメラが留守になり、私があれこれ、モデルの構成をしていては、肝心の私がとれないしネ」

出「西山さんのお話なら、縛り専門の八ミリですが、時には看護婦と患者の浣腸シーンや、西山さんの先程のお話の様なものも如何ですか。ねえ山田先生——」

山「さあ、どうでしょうか。僕の商売柄、そりや浣腸もあるし、手術で腸をとり出す事もあるし、搔爬だって、お産だってあるけれど、学術映画としてなら許されても、アブの世界のテーマとしてなら、これはエロになるだろうね——僕は西山さんの方のテーマが無難だと思うね。何なら大川さんの宅をお借りして、血なまぐさい獣血にまみれた、非情なテーマもいいと考えますね」

西「山田先生も八ミリをおやりですか——」
山「大してうまくもないけど、去年の末、ボレックスの三本ターレットを買いました。未だ二、三巻程度ホームムービーを撮しましたが、少し上まくなれば、古いはずらでも手に入れて伊藤晴雨式の乱れ髪ミヅナギの刑罰の様なものを、うんと念を入れてとりたいたいと思っています。」

北「奥さんを御相手に——」

山「いやあ——女房では出来上っても、そうそう友人達にも試写出来ないじやないですか。病院に何でも僕の云うなりになる娘がおりますから、それでも頼んで思っています。大塚さんなんか、こうした刑罰や責めのモデルになつてくれれば理想的なんですがねえ。」

いい都合に髪も長いし、背が低いから、吊るにしても、はりつけにしても、ラクだからね」
大「あらッ、又背の低い話が出るのね。いやになるわ」

山「以前、愛川さんの写真で蠟涙を乳房の間へ垂したのあったでしょ。あれなんか本当に垂したの」

愛「ええ本当です」

山「あつくない？」

愛「瞬間にはピリッと熱いけど、反ってポトポトと連続してたらすと、我慢出来ます」

山「ポリウムは貴方が一番だけど、どちらかと云って今風の顔だけだから、昔式のものには似合わないね」

愛「似合わない方が結構ですわ」

西「絹川さんも昔風に不似合だな」

北「この人は、又背が高過ぎますね。それに髪も赤いし、眼鼻立ちが大きく判っきりし過ぎていますね。」

出「ポリウムの点なら、私は絹川さんをとりますね。」

西「辻村さん。箕田さんと計画して一度、八ミリ緊縛コンテストを開催したらどうです」

辻「女同志のもの？」

西「そう。男役のなら手がないでしょう。

男は案外心臓が弱くて、顔をうつされるのを厭がりますからね」

山「手枷、足枷、首枷で、木馬責め——足

首には、分銅を吊り下げてある。そんな式のもの出来ませんか」

箕「出来ないでしょうな。実際問題として」

山「このフォト特集号を見ても思うんですが、僕自身の考えなんです。緊縛写真もこのあたりで何か道具立をしたらどうでしょうか。モデル嬢のフェイスも容姿も満点なのだから、色々の制約もあるでしょうが、せめて特集号の四馬孝の絵の半分、いや三分の一でもアクセサリがあれば面白いんだが——四馬孝の挿絵は又、不必要とも思われる位に小道具と云うか、責めのアクセサリが充溢していて、同じ縛り絵一枚見るにしても、滝れい子さんのものより、遙かに変化があって、面白いと思うんです。」

古「同感——」

山「機械的なものの緊縛が多い様で、さし当り、病院の手術室辺り、借りきってモデルさんを使うと、色々と辺りに医具を置いて、あれに近いものが出来ると思ってるんですよ」

辻「やって見たらどうですか——」

山「それが仲々、云うは易くして、病院の手術室を借りるのが辿も大変です。たやすく借りられるのであれば、誰に云われなくても、私がとうの昔に、先程申し上げた、何でもやると云う、例の看護婦を使って、うつしてますよ。」

箕「御説御もつともです。努力して見ましょう」

古「岸さん式にソツのない返事と云う処」

(笑)

箕「話の出たついでに、皆さん方で、何かモデル嬢への希望と云ったものはありませんか」

出「春日ルミさんが活躍された当時の様な女性同志のものが殆んど影を潜めたのは淋しい事です。私は大判時代からの愛読者ですが、先程、山田先生が申された様に、マンネリズムと云うか、緊縛ポーズの壁に突き当たって、新しい意欲に缺けた、何か安易なものの上に、あぐらをかいているようです。」

特集号第2号の白頭巾生が書いている川端多奈子のあの時代の、創造的な強烈な縛り、伊吹真佐子の被虐に悶々とする風情、中富綾子のズボンの上からの強い股縛りに、凌辱を画面一杯にただよわせていたあの頃を思うと、何かぬるま湯につかっている様な物足りなさを感じます。春日ルミさんなんか、その後お使いになる予定はないんですか——」

箕「最近の四月号で、愛川君、相手の緊縛プレイを掲載しましたが、彼女も以前の様な新鮮さはないようですし、それに仕事の方が忙しくて、本腰でサジスチンとしての本領を発揮する時間もないので残念です。春日ルミに代る、素晴らしいサド女性を物色中です」

仲々いいのが見つからぬ状態です。」

山「僕も春日ルミファンでしたが、彼女が昔のように活躍しなくなったのは淋しいですね。四月号にのった春日嬢を見て、懐しく思いました。何の本職か知りませんが、もう一度姿を現してくれませんか。」

辻「今、大阪市内のバーのマダムをしているとかで中々忙しいそうです。時々特写のことで逢いますが、大分、肥えて貫録がついています。ほってりと色も白くなって」

古「はつきり申上げて、私の趣味はサド一辺倒です。勿論アブの趣味にもピンからキリまでいろいろとあるでしょうが、八方美人的な本誌をサド一辺倒にして戴きたいと思うんです。似て非なるもの許りです。浣腸も、女装も、褌も、何か私にとっては隔靴掻痒の感です。そのものズバリのものを期待しています。」

辻「ゲイボーイは、概してマゾ的な性格の者が多いね。箕田さん、あの話どう——、一寸ここで話してみたら……」

箕「Rの事?……」

辻「そう、幻滅だけだね」

古「是非、聞かして下さいよ——」

箕「西成区の人ですがね。うるさい程、度々手紙を寄越しましてね。うちのモデルさんの奴隷になりたいって云ってくるんですよ。『おかま』なんです、年も三十は過ぎてい

る様な、ギス／＼した男性でね。どうしても興味がのらないが持参金つきだから、川辺君（川辺砂登子）に頼んで一度縛って貰った。川辺君はモデルの中でも、幾分サド傾向の方だったからね。二度とやかましく云ってこない様、遠慮会釈なく、うんときつく縛ってやれとけしかけておいたら彼女、真に受けてね。新しい麻縄のシャコ／＼した縄で、後手縛りにして、馬乗りになり、その男の哀願していた通り、革鞭でビシ／＼お尻を擽ったら、一通で悲鳴をあげちゃって、あとは気抜けしたように、トボンとして、すぐ縄を解いてくれたと云う。拍子抜けしましたが、男はこんなものです。そそくさと帰ってしまいましたよ——」

辻「そのくせ、四五日したら、その時の感激が忘れられない。又一次……そうじゃない?」

箕「その通り、あんな嬉しい日は一生を通じて始めてだ。又たのみます」(笑)

古「手数のかかるマゾ男だな——」

山「そうしたもんでしようね、案外——」

マゾの男性は、いろいろと被虐の妄想を逞ましくしては、ああして欲しい、こんなにして貰いたいと、さまざまに想像をめぐらして、それが一種のエクスタシーの境地なんです。だから実際行動となると案外、飽気ない——」

辻「その点、女性も辛抱づよい」
西「最近の八ミリの雑誌を見ますと、悦虐的なシネフィルムが分譲される様になりましたね——」

山「それ本当?——」

西「ああ、小型映画って雑誌の四月号に出ていたよ。一寸ここにメモして来たが、キャッチフレーズは『サディズムとマゾヒズム。鳴る鞭音に、妖しい欲望は、うねる波のごとく奴隷化された女のうごめき』とあるんです。題名がどうも意味不明なんですけど『X——28』としてあった。」

山「発売先は何処なんです。分っていますか——」

西「東京ですね。たしか、文映社とかいうところですよ。何れ大したこともないと思いますが、一三〇フィートで二五〇〇円らしいです。十円でカタログを送るらしいですから、何なら一度取寄せて見てはどうです」

北「おもしろそうだね。いかすね。僕も八ミリが欲しくなってきた——」

西「内容はどうあれ、この式のもののが市販される様になった事は、私達の世界の一大革命ですよ。まだ、こんなものもありますよ。『尼僧の抵抗』聞える、うら若い尼僧が僧衣をかなぐりすてて……。これは倒錯した変型ヌードでしょうけど」

山「縛り程度だけでしたら、大威張りで現

像は出せそうですね——」

西「勿論、大丈夫と思います。」

辻「ありやインチキですよ。私が早速とり寄せて見て、がっかりどころか、腹が立った。参考にもってここにもって来ましたが、例の『X-28』なるものを撮して見ましようか」

西「流石に辻村さんは早い。もう知っていたんですか——、つまりぬと聞いても見ないと話にならない。面倒でしょうが映して下さいよ。ねえ皆さん」

辻「じゃあ、やりましょう」

(辻村隆、註——。サド映画と云うので逸早く取り寄せて見たが巻頭、女の爪先立ちの足で撮る。これは吊りを表現したもので、カメラが上体にパンして、ヌードの女が両手首に縄をまきつけて立っている。体の縄は牛蒡程もある太い縄を唯ぐるぐると、しかも、ぐさぐさに巻きつけてあるのみ。女の体の動きと共に縄に外れたり、ゆるんだりしている。ヌードも大したことない上、縄はヌードのほんのアクセサリーに過ぎず、縛りや緊縛からは凡そ縁遠いシロモノだ。況して手足の縛りは愚か、鞭打ちなるものも、皮バンドをひらくさせるシーンを撮して表現しているだけ。女が鞭打されるシーンにバンドはうつらず、時々女が体をゆする程度、つまりぬヌード写真と思えば間違いない。羊頭狗肉の典型的なるもので、諸賢が広告文に吊られてお求めにな

らぬ様御忠告申し上げます)

辻「どうでした——御感想は西山さん(苦笑する)」

西「いやはや——。慌てて買わなくてよかった。(爆笑) 辻村さんには悪いけど……」

山「鳴る鞭音に妖しい欲望はうねる……」

ようもまあ、厚かましく書いたもんですね

辻「どうせ間に合せて急ごしらえたものらしいですね。両手を自由にしてお体だけ太い縄でユルユルに縛ったあたりは、見よう見真似でやったんでしょうがね。全くツボを心得ていませんね。こんなシロモノを撮まされては二度と買うバカはいませんからね」

箕「君もバカのうち——」(笑)

西「その点、本誌の映画はホンモノですよ。どうですか、箕田さんで、フオトから一歩進んだ、緊縛のこうした分譲フィルムをやる気はないんですか——」

箕「八ミリ時代ですから、その事も考えているんですが、現像もそれなら反転現像じゃなく、ネガで現像して、ポジを作らねばならないし、どれ程の注文があるかも疑問だしね。実の所、採算がとれるか、どうか思案中です。それに先程のお話の様に、男性のモデルが仲々にいませんのでネ」

西「箕田さんがおやりになるなら、僕が男のモデルになりますよ。愛川さんなんかを縛って、いろ／＼にコンテを考えてやれば面白

いですよ。月光仮面じゃないが、黒の三角頭巾をスポツと敲って、ドクロなんかをひたいに描いたりしてね——」

辻「それなら顔も何も見えないから、私でもやれそうだ」

古「こんなのも面白いですよ。女呪術師か、催眠術師でね。モデルが催眠術にかかって、犬になって這い廻ったり、自縄自縛したり」

箕「八ミリとなるとカメラと感覚が違うから、又全然異った面白さがあるでしょ」

杉「西山さんは、それでその式のを撮ったことある？」

西「試作品が二三巻あります——。幸い女房と二人暮らしで、色々やって見ました」

杉「是非、拝見したいものですな」

西「それが駄目、女房なんでね、モデルは……女房モデルでは門外不出ですよ(笑) これは僕だけの愉しみだ。ハハハ」

辻「女房をとってどうして現像したの——」

西「それは又それぞれ術があるんです。一万二、三千円出すと、反転現像液一式そろった、プラスチックの自家現像器があるんです。殆んど失敗はないですね——」

北「おたのしみですね……」

西「レリーズを使用すると、カメラマン兼出演者となるんでね。これで色々やりました。」

出「失礼ですが奥さんおいくつ……」

西「私と九ツ違いだから三十九才です。もうおばあちゃんですけれどね。子供をうんでいないので比較的若く見える。僕の云うが儘になつて素直でね。誰に迷惑かけるでなし、結構楽しいんですな。潤一郎の『鍵』自家製版つてとこです」

出「それで、学校では模範先生——」(大笑)

西「学校の先生ってものは案外、内攻的なものですよ。外では道徳を口に唱えても一枚皮をめくれば同じ人間ですからね。むしろ、貴方がたの様に、気易く発散出来ないだけに窮屈です。ジェキル博士とハイド氏が案外、先生、医者、坊主に多いものですよ」

辻「よく分る様な気がしますよ」

西「去年の秋だったか、河内の観心寺から、天野山の方へ散策した時の事です。観心寺と云うと、楠正成で有名な寺ですが、日曜でないとひっそりしています。この野外で家内を立木に縛ったシーンをカラーでとりました。リリースを長く伸ばして足でふんでいるんです。もがく家内の胸から胴、脛、足首まで、ぐるぐると縄を巻いてゆく、というわけですが……。夫婦でやっているんだから、文句はない。(哄笑)」

出「もし、人が来たらどうします——」
西「どうしますで、その人が来ちゃった」(笑)

出「えっ、それで……」

西「弱っちやっただね。今更縛った家内をかくし様もないし、相手は女の中学生二人——仕方ないから、ぐっとにらみ返してやった。向うが驚いてね。そりやそうでしょう。飛び上って四、五歩後退すると、そのまま逃げだした(大笑)。さあ今のうち、ぐずぐずすると、大勢人がやってくると思つて、大急ぎで家内の縄を解きましたが、慌てると仲々ほどけない(爆笑)。カーッととなりますね。顔に血が昇るのが分りますわ。やっとの事で元通りにしたが、道を戻ると正面から出くわしそうな予感がして、観心寺のお寺に飛び込んで、暗い本堂で、二人神妙に並んで、お経を上げてもらつていた(大笑)」

辻「大学の先生が一週に首になる。わかつたらね——」

西「それから懲りて、野外でとらない事にした。この話に未だオチがあるんですよ。苦心してとったフィルムがカラーのASA10だから、どうやら現像仕上げて、映写機にかけたら、見事失敗、暗い中で、なにかうごめいている程度、もう本当にサッパリで、こんな失敗が数度あって、やっと近頃ではカラーでも満足にうつる様になりました」

杉「大川さんが牛肉の間に吊られた悦虐の図なんかをカラーでとると生々しくて、凄いだらうね」

大「いい工合に、宅の主人はカメラの方はさっぱりですの——。写真でも撮るので長い間、吊られていた日にや、本当に参ってしまっていますわ」

箕「山田先生は婦人科の方で、沢山の女性に接しられますが、サドとかマゾと云った傾向の人には出会いませんか」

山「さあね。腸浣は大体プレ(看護婦)が殆んどやりますしね。浣腸なんてものにはだから全然、僕は興味ありませんね。それに一人一人に妙な感情をもつてするとシンが疲れるだけですからね。」

辻「だから、その方は全然興味がない——我々と反対だね(笑)」

山「そうも云えます。併し、縛りには興味があります。古典的なもの更によしです。ああ、そうそうこんなクランケがありました。三十過ぎの可成り上流の婦人で、両股のにおいの生々しい跡があるんです。灸点のツギでない処だし、不審に思いましたが、注射をする為、腕をまくり上げたら、数カ所にひどい咬跡があり、その上、あちこちに黒いあざが点々とありまして、愛咬によるものにして、少しひどいので、それとなく身体を見たい気になり、その要もなかったが、聴診器をあてて見たら、乳房から、肩、胸、背中、一面の咬跡と、打撃の傷痕があります。聞くのも悪いと思つたが、恥かしがらぬようききただし

ますと、これが小口末吉の妻の軽度症状ですな。御主人に強要して、自分の体を咬ませ、鞭当てさせ、ぎりぎりの極限の疼痛を味わわらしいのです。一種のヒステリー症状で、アトラキシン系統の薬で大分ましになりましたが、特に月経時にひどいそうで、これなど、所謂本当のマゾヒストなんですね。この人が後家さんなんかなら、僕のサドのよき対象として、いじめつけて見たい気にもなったのですが、御主人持ちではねえ——」

小「あの、流腸などなさる看護婦さんは、別段、何ともないんでしょうか——」

山「職業ですからね。サッサと事務的に片付けている様ですよ——」

小「私、辻村さんの『猥らな虫』に出てきた主人公の看護婦の様に、やはり、アーヌストになるんではと思ったんですけど——」

山「云うか、云わぬかで、そんな人も居ましようけど、忙がしいと、そんな事を考えるひまもない——」

辻「『小人閑居して不善をなす』ですな——」

山「そうですね。僕だって人間だし、血が通っているんだから、いいすばらしい型に出くわすと、フラフラと意馬心猿の情なんだけど、理性ですね。」

箕「出雲さんはちっとも自分の事仰有らないが、こちらで一つ」

出「私は大体読む方で、皆さん程の実行力はありませんよ。その代り、大判時代から本誌に奉公しています」

辻「読む方には好きなんですよ——」

出「好きなんですよ。でも、金魚を相手にしているからね。女房と子供四人で、狭い家に居ると皆さん程の自由がないんです。しかも田舎で外から見える。八ミリなんて高嶺の花だしね。」

辻「ずっと古くから愛読されている。本誌の古い読者層の貴方ですが、そう云った感情の持主の貴方が、この種の本をお読みになって興味あるんですか——」

出「奇クも始めは今の様じゃなかったですよ。悪く云えばカストリ雑誌的存在でしたからね。『猫奇』や『千一夜』『りべらる』『風俗草紙』『あまとりあ』と云ったこんな本も皆残してあります。奇クだけが今もこうして生き残った感じで、すっかり眼を通さなくとも、何かないと淋しい様な、偶には、我が意を得た文もあって、未だに止められないのです」

箕「愛読者賞ものですね（笑）」

出「ところで杉原先生の絵のアイデアは、どこから生れるんですか——」

杉「或る親切的読者と友人によって、海外のこの種の写真が手に入るんですが、女の絵は僕の想像上のイメージです」

出「それぞれ。その想像上のイメージでは、僕だって、皆さんに負けぬ位凄うことを考えているんですよ」

辻「もっとも安全且つ、たのもしき読者層ですね」

出「SADO特集の第2号なんか、古い友達に出逢った様で、懐かしき極みです。辻村さんの『緊縛モデルの素顔』なんか面白くて一層たのしみにして、これからと云うところでブツリと切れちゃった」

辻「いろいろとあの頃は事情がありましたね。私も遂に二年間、筆を離さざるを得なかったんです。病気の方もあったしね。まあ、今あの頃の本をとり出して見たら、何か奇クの頂点と云う感じがしますね。二年経って『真実は誰も知らない』から又書き始めたんです」

出「あの頃は作家も充実していたですね。辻村さん始め、松井頼子、吾妻新、伊藤晴雨、沼正三、緑猛比古、羽村京子、古川裕子、白金紅次、三根耕二、それに森本愛造や、笠置俊郎の織田信長もの、飛田良二やもっと古いところでは二俣志津子、岡田咲子、片矢薫なんかのも面白かったですよ。」

辻「よく覚えてますね——奇クの生字引見たいですよ」

出「絵の方でもですよ。喜多玲子から始まって、滝麗子、畔亭数久、ペテランの伊藤晴雨それに四馬孝、杉原先生——、よく次から

次へと着想が湧くものですね」

箕「それじゃ皆さんを代表して、何か本誌への希望と云ったものを仰有って下さい」

出「色々あるんですが、内容の充実ですね。市販されてないから無理もあるでしょうけど、せめて臨時増刊号位は旧誌程度の三五〇頁もある様な立派なものが欲しいですね。それがあの当時百四十円でしたからね……」

辻村さんへのお願いは、『モデルの素顔』の続稿を書いて戴けたらと思います。慾を云えばキリがないけれど……」

辻「じゃ、書くとしますか——。僕に精々サービスしておかないと君達（モデル嬢をさして）の事、みんな素ッ破ぬいて、書いてしまふぞ——何でも知っているんだから……」

大「サービスするから、美人で背を高く書いてね。」（爆笑）

西「どんなサービスをするの大塚さんよ——」

大「辻村さんなら、ギウギウに縛られて、我慢して、どんな縛りでもさせればいいのよ。大体がこの人きついんだからカナわんのやけど……」（笑）

（愛川、絹川両嬢、顔見合せて苦笑下をむく）

山「この様なこと辻村さんに聞いてどうかと思います。いや、箕田さんの方がよく御存知かな。以前のモデル、皆んなその後どうしていますか？」

西「僕もそれが知りたかった」

辻「いいっていい？箕田さん……」

箕「そうだね。お互のプライベートの事だから云わない方がいいと思うんだけど、まあ差支えのない程度ならね」

山「川端多奈子は本当に四国で結婚しているの——、一寸疑問だけだなあ……」

辻「この間、編集部に手紙来てね。主人と別れて今岡山で洋裁の下縫かなんかしているそうです。又一度撮って欲しい様に云って来てね。本当は縛りたいんだと思うんです。私の考えですがね。しかしもう撮っても掲載出来ないでしょう。恐らく体の線が崩れて……」

西「伊吹真佐子は……」

箕「神戸のアルサロに居るそうです。外人相手にマゾの世界に没入しているんじゃないかな——。その後音沙汰なしですがね」

出「杉美美さんなんかどうです」

辻「あの頃『千一夜』の雑誌にも彼女出ていましたがね。今は知りません。」

出「坂口利子は……」

箕「私達ではサルグツワ美人と云ってましたかね。あの事、辻村君書いてたね。出歯が難だね。猿ぐつわをすると思える様になるモデルでしたが、今は大阪で絵のモデルをしているそうですよ」

辻「萩千恵子は何でもトルコ嬢をして居たと云う噂だが、今はどうなっているかな。村田

那美子は結婚して、去年年賀状をくれました」

箕「雲井久子は結婚になったらしいね」

辻「あの娘は以前のモデルの中で一度しかしらなかった人だ。遂に口をきくこともなく、大して何も知らなかったが、評判は一番よかったですね」

箕「大体、話も出尽した様で、モデル諸君も、私達の趣好のラインアップは大体、理解出来たと思うんですが、何か一言云うことある？」

絹「何だかこわい見たいけど、これからもお手柔らかに、それから、何か喋べると、すぐ書かれちゃうから、これからは余りお喋べりしない事にしますわ」

愛「私も……」

大「私で出来ることなら……。その代り、もっとモデル料はり込んで頂戴ね——」（爆笑）

辻「じゃあこれで座談会を打ち終わると思います。主題の『女体緊縛美について』とは少し程遠い話になりましたが、反って、話題にバラエティがあって愉快でした。又どうぞ——」

（午後十時散会）

（追而）有志相集い、五名許りにて、二次会に出掛けたるも、筆者既に酩酊、話は脱線又脱線、遂に某所に陥落、到底記事になる能わざる露悪けてもの振りにて茲に筆を止む。

△辻村 隆▽



五月号入手「魔教園」の完結を知って愕然と致しました。いよいよ物語は佳境に入るかと思われたのに、この中途半端な完結は、何としても納得出来かねます。「後記」の中で云っておられる様にマンネリズムをさけるための、ほんの一時の中断ならば、まだ我慢しますが、どうもあの文面では永久的な気がしてなりません。何れにしても残念至極です。又、今月号では蒼野礼氏の「白い霧」に魅かれました。たよやかな女の白い股態が、荒々しい文体の中に、実に生々しく悶えているのです。ふっ切った様な描写の中に作者の心情がよく現われていると感心致しました。「乳房に火をつけるな」第二回は、まだストーリーを追うのが中心で責めの描写に腰が据らない様です。これは責の小説として苦しい処で、小説らしく筋を構成していくと、責めの描写に大きな紙

数をさけなくなり、責めの描写に力を入れると、ストーリーがお苗守になるのです。この小説や「総入歯の女」は、本誌では珍しくストーリーの面白さを中心にしようとした作品と思うのですが、本誌にとっては物足りない思いをさせられるのは、ストーリー中心の物語として、あまり成功していないためかと思えます。松井女史の告白は、物語でないながら、あの麗筆で往年の名作の数々を回想させられました。女史の作品の発表されん事を切に望みます。先だって「SADO特集号」第二集を入手しました。画集と写真頁は、今までのどれにも見られない様な素晴らしい出来栄でした。本文の方は小生にとって興味の外にあることなので評は避けますが、出来れば第一集の様に欲しかったと思えます。写真頁の良さはモデル諸嬢の表情の良さにあると思えます。四馬氏の画も一段のさえを見せて

いる様です。というのは、衣服をつけていない方が私の好みに合うという事なのかも知れません。以上、思いつくままに筆をとりました。貴誌の一層の発展を祈ります。

(千草忠夫)

サド特集号第二集及び五月号について感じたことを書きます。今回は第一集にくらべ、画、写真共に一段と秀れているように思います。四馬氏の画は、以前の極端に手足を細長くしたものから、写実的になり非常に見易くなりました。又、四馬氏一人に限ったことも成功しています。「新品第一号」「アクロの訓練」「鼻責テスト」「大の訓練」「晴美の受難」の四枚目など、特に気に入りました。写真も非常によく出ています。どれ一つ取っても十分観察に耐えます。「魔囚」の左の頁の三枚の鼻責の写実は、面白いと思えます。今後何枚か入れて下さい。あまり今度の写真が素晴らしいので欲が深くなり、せめて小さな写真でも頁の四半分ぐらいだったらと残念に思っております。個々の写真について優秀は、つけがたいので止めます。次に読物ですが「責めの美人と皮革について」は、私

は画が趣味なので大変、興味深く読みました。ここまでは、この特集号はついて何も云うことがないほど結構でしたが、この後が気に入らせませんでした。比較的、新しい読者にとっては、まだ読んだことのない面白い読物でしょうが、大部分が旧号の複写か説明なので鼻につき途中で読むのをやめてしまいました。この点、つまり読物に関する限り第一集の方がよかったです。又、五月号についてですが、何といっても最大のニースは「魔教園NO8」の中断ですが、まだ一年でも二年でも連載されるものと思っていたので、これは非常なショックでした。土路氏は、マンネリズムになりかけてきた」と云っておられますが、今の処、そのようなことはないと思います。でも、このまま押し進めば、そうなりそうなのは、いとは云えません。これは作者があまりにも読者に忠実すぎるためではないかと思うのです。これだけ多数の人物が登場するスケールの大きい作品では、毎度、責めの場面を作るといことは、むづかしいのではないかと思います。ですから時々、筋を追ったり骨組したりするのに費したらよいと思

ます。その他、同じ傾向の作品が同時に掲載されているので、書きずらいだろうと、お察しいたします。何んにしても「魔教園」が抜けたことは、本誌の格が一段と落ちたような感じを受けるのは私だけでしょうか。出来るだけ近い将来、続篇の掲載を願って筆をおきます。

(千葉 S)

小生は永年、W誌を愛読していましたが、最近、本誌を拝見してこんな素晴らしい本があったのかと痛感させられました。緊縛されたモデルの美しさ。他誌には見られない責場がよく現われている。悦特集号の中のモデル浜本喜美、三木敬子嬢の女性が女性を責める場面。又、間諜成敗等、あのような場面が小生は好きで、男性が責められる場面は余り好みません、今後益々貴誌の持ち味を生かし、読者を得難い雰囲気誘い込んで頂くようお願い致します。(辻生)

東京は文化の中心と云いながら少くとも御誌の分野では完全にKOされていますね。ベレスと同じように王者も、たじたと云う処ですか。最近、店頭には種々雑多な雑誌の氾濫で、その点でも御誌

はビクビクする必要はないと思います。K誌よ、自信を持って！小生は自分から云うのもオコガマシイ話ですが一月号の東京K・Mさんの云われるような人間の端くれの一人に入れて貰える男だと自惚れています。目下、スケートと神宮の室内プールに一週間に一度ずつ暇をみつけては行っていますがつた一度しかない青春、大いにドライに、うじうじせず、バアイツと日々を暮すのをモットーとしています。K・Mさん、若しよかつたら一緒に水しぶきでもあげて冬將軍を退陣させませんか。大いに趣味を満喫しましょう。小生他の人の生活を踏みじめる様なことはしないつもりです。小生、身長一米七六センチ体重六十四キロ(タバコのみすぎで目下六十二・六十三の処をアップアップしています)胸囲九十八センチ(かけねなしの男らしさに自信を持ちはじめた人間です。お便りお待ちしております。

(東京 O・Y生)

一鼻マニアとして本誌を愛読しています。「女性の鼻」なくして夜も日も明けぬ奇癖のため、そのモデルを求めてアルサロ、バーを

徘徊し、専ら女給の鼻を酔いにまかせて摘み上げていた私でしたが昨年の秋、二つ違いの姉が仕事の都合と私の浪費を監督するため来神し、現在二人で下宿生活しているのですが、姉が偉そうに姉づらをするので、以前の様に私の性癖を発散できず、鼻責め等の記事を書いたに、その妄思に悶々としていました。夜、床についてから目の前に姉の小じんまりした可愛い鼻があるのに気づき、ちよつと摘んでみたのが病みつきとなつて近頃は夜毎、姉の鼻を弄んでおります。一昨日は初めて姉の鼻を借りて「鼻いじめ」を満喫したのです。プロパリンを入れたシチュークリームを与えて鼻をかいで熟睡した姉の鼻を容赦なく摘んだり、指で突き上げて哀れな豚鼻にしたりして弄んだのです。軟い鼻がギューと精一杯のび切り、グイと鼻腔が上向き、大きな鼻を腔から発する鼻、足の裏でギューと押しひしやげた鼻、拳の果てはセロチーブで完全に豚鼻になった鼻、日頃偉そうにするので、その様な哀れな姉の顔が愉快でなりません。鼻マニアとして、こんな身近な処に立派な鼻があることを喜び、今夜からも又、姉の鼻を摘み上げてや

ろうと思います。最後に鼻マニアの熱望ですが、本誌上を飾るモデル嬢は皆、美しい女性です。素晴らしい鼻の持主です。一つ、その美しい鼻を狙って企画して頂きたく鼻責めに喘ぐ美貌のモデル嬢の登場を期待しています。

(神戸 U・U生)

私は南村俊平氏のファンであります。投書欄では氏の評判は相当よくないように見られますが、実際は氏のファンは多いのではないのでしょうか。私の知る範囲では最も評判がよいように思います。画の主題としては、種々の獣や虫類による女の子狩のようなものはどうでしょう。色々のシチュエーションも考えられます。又、狩犬や獲物運搬者として前に捕えておいた女の子を使うのも面白いでしょう。そして捕えられた女の子の色々な運命も主題として価値があります。市場で売られたり殺されたり、拷問にかけられたり訓練させられるのもよいでしょう。犠牲として又、男の子を登場させることも考えて見てはどうでしょうか。有名なシャパンヌの肉屋の漫画は御存知でしょう。南村氏は幼い女の子に集中しているようですが、

多くの男性が得たいと欲するよう
な美しい体の女性を獣共と与える
ことも、やってみる価値がありま
す。グイバリジエ、に一連のこの
種の画がありました。南村氏な
らロマン的な発展をさせる十分の
力があると思われれます。例えば男
の眼前で獣共にいじめられる美女
と云うようなものもありましよう
水島氏の漫画に植木にされた女の
子があったことを思い出します。
枝振りも直し手を切りつめられた
女性も面白いし、獣共の一時の興
味につかれ消費される女性も考

えられましよう。土路氏の「魔教
園NO8」は現実離れがしている
と云う声が多いようです。しかし
私は、これは思い違いの結果では
ないかと云う気がします。氏はサ
ジスト的に書こうとしておられる
ようですが、サジスト的読者は必
ずしも心よく思わないでしよう。
それは一般に読者は、文中の誰か
に自分をおいて考え楽しむものだ
からです。LS商會の再掲載
を望む声の多いのも、このような
理由からでしょう。又、マゾの女
性も、この文章では余り楽しまな

いと思えます。何故なら、この文
章に出てくる女性には皆、ノーマル
な人達だからです。せいぜい、サ
ジ的女性の少数だけが、或は心か
ら喜んでゐるに過ぎないのではな
いでしょうか。着想は素晴らしいの
ですから工夫して下さることを願
います。四馬氏の画については述
べる必要はないでしようが、ただ
男がみな力んでいるのは単純過ぎ
ます。冷徹な氷のような顔、女を
いじめるのを如何にも喜んでい
る顔、皮肉な或は嘲笑的な顔を工
夫する必要があると思えます。ル

ーカス・クラナツハの画が何故こ
わいか。ブリュニゲルの画が何故
人を引きつけるかは検討して見る
必要があります。御誌に先年出て
いた、女の子に馬車を引かせてい
る画では、皆が明るく笑っていた
ではありませんか。この種の趣味
では勿論、著しい個人差がありま
すので、御誌としては統計的に考
えられるのは当然ですが、投書し
ない多くの読者のことも考えて下
さるようお願いいたします。読物とし
て興味があるのは真実の体験記で
あることは、どなたも異論のない

奇譚クラブ旧号の在庫案内

★復刊号の分

復刊第1号 (昭和30年10月号) △売切▽
復刊第2号 (昭和30年11月号) △売切▽
復刊第3号 (昭和31年4月号) △売切▽
復刊第4号 (昭和31年5月号) 定価二百円
復刊第5号 (昭和31年6月号) 定価二百円
復刊第6号 (昭和31年7月号) △売切▽
復刊第7号 (昭和31年8月号) △売切▽
復刊第8号 (昭和31年9月号) 定価二百円
復刊第9号 (昭和31年10月号) 定価二百円
復刊第10号 (昭和31年12月号) 定価二百円
復刊第11号 (昭和32年1月号) 定価二百円
復刊第12号 (昭和32年2月号) △売切▽

復刊第13号 (昭和32年3月号) 定価二百円
復刊第14号 (昭和32年4月号) 定価二百円
復刊第15号 (昭和32年6月号) 定価二百円
復刊第16号 (昭和32年7月号) 定価二百円
復刊第17号 (昭和32年8月号) 定価二百円
復刊第18号 (昭和32年9月号) 定価二百円
復刊第19号 (昭和32年10月号) 定価二百円
復刊第20号 (昭和32年11月号) 定価二百円
復刊第21号 (昭和32年12月号) 定価二百円
復刊第22号 (昭和33年1月号) 定価二百円
復刊第23号 (臨時増刊号) △売切▽
復刊第24号 (昭和33年2月号) 定価二百円
復刊第25号 (昭和33年3月号) 定価二百円
復刊第26号 (昭和33年4月号) 定価二百円
復刊第27号 (昭和33年5月号) 定価二百円

復刊第28号 (昭和33年6月号) 定価二百円
復刊第29号 (昭和33年7月号) 定価二百円
復刊第30号 (サド特集号) △売切▽
復刊第31号 (昭和33年8月号) 定価二百円
復刊第32号 (昭和33年9月号) 定価二百円
復刊第33号 (昭和33年10月号) 定価二百円
復刊第34号 (昭和33年11月号) 定価二百円
復刊第35号 (増刊号青い魔院) 定価二百円
復刊第36号 (昭和33年12月号) 定価二百円
復刊第37号 (昭和34年1月号) 定価二百円
復刊第38号 (悦唐小説と緊縛写真) 三百円
復刊第39号 (昭和34年2月号) 定価二百円
復刊第40号 (昭和34年3月号) 定価二百円
復刊第41号 (昭和34年4月号) 定価二百円
復刊第42号 (サド特集第二集) 三百五十円
復刊第43号 (昭和34年5月号) 定価二百円

懸賞原稿募集

☆規定☆ ☆賞金☆

告白と手記と体験記

優作 一篇に付 一万円 若干篇
秀作 一篇に付 五千元 若干篇
佳作 一篇に付 二千元 若干篇

- 一、必ず未発表の自作であること。
- 一、枚数に制限はありません。
- 一、原稿の第一頁に「懸賞告白」と朱記して下さい。
- 一、原稿の返却は勝手ながら致しかねます。
- 一、締切は別に定めません。入選作は順次最近号誌上に発表いたします。
- 一、賞金は発表と同時に送りいたします。

如でしょう。古川氏が、あんなに人氣があつたのも文の中に真実があつたからだと思ひます。彼女の種々の体験の中には又、面白いものが多くありました。たとえ如何に大げさに書いても、真に自分の心の中に出て来た感情である限りは真実であります。この種の記事の多いことを切望します。

(一読者)

三月号のグラビヤ写真中の愛川悦子嬢の縛り姿は、よく撮れております。特に白いブローズが見え、黒との線は対照的で画面をよく引

きしめています。猿ぐつわもギツシリと噛ましてあり、悦子嬢ならでは……の感は十分です。一体、女の美は小生はむしろ半裸の方が素晴らしいと思ひます。それには、やはり白いブローズを必ず見せる様な姿、猿ぐつわの「本噛し」みだれ姿、黒い瞳「など裸にならなくても、女は美しい。美」があるもので、それだけに縛り写真も半裸がよいと思ひています。今回の悦子嬢しほり写真は誠に結構でした。今後も白いブローズ姿を、そして猿ぐつわは必ず噛まして頂きたいと思ひます。さて、映画「

花太郎呪文」近藤恵美の哀れな姿は小生も二回ほど見ただけに面白く、大いに満足です。横に転り縛られた身を必死になつて苦しみ悶える女。猿ぐつわがないだけに少々残念でしたが反面、猿ぐつわを噛ましていない女の苦しみの表情が「ピカー」でした。又、最近、東映の「魔境の秘密」と云う映画がございまして。この映画では二人の美女がアイヌ人達に捕まり私刑を受ける場面があつて頂けました。御参考までにお知らせします。第一景。二人の美女が背中合わせに太縄で、しつかり縛られています。そして横坐り、二人の髪の毛を太縄でしばりつけていました。第二景。二人の女を縛つたまま横に転して足元を太縄で縛り、そして木の棒に更に巻きつける。第三景。縛られた女二人が、苦しうに横に転がったまま、何をされるのか身悶えている中に、牛馬二頭にそれだれ足の縄を縛られ、いよいよ牛馬が走ろうとします。美女二人、苦しむ姿は全く素晴らしい、あわや！と思ふ時、武士(治太郎が来て助ける)第四景。年若き女が再び捕まり、今度は大きな板を背にして太い縄でぐるぐる巻き、美しい顔をしかめて、やはり身悶

えています。以上ですが第四景では縛り方が不十分のように見受けられました。第三景までは映写時問も長く、とにかく素晴らしい。女の苦しみ、がよく出ていました。今後とも貴社の発展をお祈りすると共に、我々サド者をなぐさめて下さる様おねがい致します。

(名古屋 岩谷生)

旧号では写真、口絵に女性切腹が多くございまして、近頃は殆んどなく全く淋しい。血紅使用の写真や血まみれの腸が露出した血潮に染り乍ら死んで行く美女の絵を載せて下さい。切腹は、やはり何と申しまして白装束に限りません。高島田の女性が、白衣や白足袋を真赤に染めながら苦痛と戦いながら、キリキリと一文字に腹を切つて行く有様を、お願いしたいと存じます。それから和装縛りの赤い投帯や腰元折檻等も好きでした。五枚コハゼの白足袋をはいた女性の足に魅力を感じるのです。切腹物で、藤山秀緒様の御活躍嬉しく存じます。藤山様のは男装、乗馬ズボン姿での切腹物ですがあの刀を突き刺してから絶命するまでの描写は全く素晴らしい。今後益々秀筆を期待致して居ります。

(桜恵之介)